

新科學的
解的
定互先
石先
一間夾正法

特260

562

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



持 260
562

七段野澤竹朝著

野澤竹
朝全集
二第

科學的新解

互先
定石

一間夾正法



東京大阪屋號發行
斯文館

科學的 互先 一間夾正法

目次

緒言.....一
 ▲碁は何處が一番宜いか、定石應用の心得、定石を擲つ時機、定石と配石の區別.....四
 一間夾の目的と打つべき機會.....六
 第一圖.....九
 白五の新發見、白一の新發見、白十五は筋違ひの無理手、白二と押したのはイの下りと口の綽ねとの兩睨みの佳着.....一七
 第三圖.....一七
 黒十八の佳着.....一九
 第四圖.....一九
 第五圖.....二二
 黒軍の外勢厚壯.....二二
 第六圖.....二七
 白が二五と綽ねたのも旨いが二七と下つたのも旨い手、白三三此れはこの攻合の勝敗の岐るゝ一着で最も肝要、白七は良手.....二七

第七圖.....三五
 黒の作戦、鴟の嘴.....三五
 第八圖.....三六
 ◎印の黒は大事な戦ひのモト石.....三六
 第九圖.....三七
 第十圖.....四一
 白八は良手、十と曲つたのは誠に良手である.....四一
 第十一圖.....四四
 三に突出して、さうして九に截つて行くと云ふ着眼、◎のクサビ石が腐つて了ふから五に綽ねるのは筋違ひ、黒りと置くのが妙手.....四四
 第十二圖.....五四
 白六は鬼手、十九以下二三と白を團子にして置いて二五と曲る妙手、白四は窮策、黒四八の截り好し、四と粘がれては鴟の嘴.....五四
 第十三圖.....六四
 白いに粘がすして二九に下ると云ふ妙手、◎印に約へた黒手は白の無理を咎めやうとした質問 蝟集.....六四
 白二一の押しは悪い、イに約ゆる方が宜い、黒から一と附越されたからは白は二と遮断する外.....六六

●黒十四變化之部第一圖	八二
一歩を譲つて十四と伸びる手	八二
第二圖	八二
黒二十のツギを含んで十八とツケルのが手筋	八二
第三圖	八三
第四、五圖	八三
第六、七圖	八四
第八圖	八五
●黒十四の外綽	八六
第一圖	八六
モウ一着二十と押すのが秘訣	八六
第二圖	八八
八と引く手を推奨する	八八
第三、四圖	九〇
第五圖	九一
第六、七圖	九二
黒三對白の策戦、圍中の白一子を棄て、大勢を制する手段	九二
第八圖	九四
黒十四の變化	九四
第一圖	九五
白十七は退嬰手段	九五
第二、三圖	九六
第四圖	九七
四と伸びるのが本手	九七
第五圖	九八
第六圖	九八
●白七ハネ返しの新案	九九
第八圖	九九
第九圖	一〇一
黒四の一着で一目を取切つて居る利益は莫大	一〇一
第十圖	一〇三
第十一圖	一〇四
第十二圖	一〇五
第十三圖	一〇六
第十四圖	一〇七
黒十四の新案、鈴木氏の型に由つて殆んど一間夾綽返し为解决が着いた、七とハネル手段は正にある	一〇七
○白二の高がかり	一〇八
第一圖	一〇八

白は敵の謀の裏を掻いて圍の如く四と約へて打つ	一一〇
第二、三圖	一一〇
白八と行びて黒の活力を一つ殺ぐ手が肝要	一一一
第四、五圖	一一一
第六圖	一一三
九の手で十に曲つて隅の白を取るのが本手	一一三
第七圖	一一三
一と押してから三と弱石を活用したのは良手	一一四
第八圖	一一四
黒に外部に發展されては白の計畫が根抵から崩れる	一一五
第九圖	一一五

○附録著者實戦

第一局	野澤竹朝	一六
五子九目勝	仙石貢	一六
第二局	野澤竹朝	一八
中押勝	野澤竹朝	一八
三子	芳川寛治	一八
第三局	野澤竹朝	二〇
中押勝六子	野澤竹朝	二〇
鶴飼有聲	野澤竹朝	二〇

第四局	野澤竹朝	二三
勝	野澤竹朝	二三
三子	城田精之	二三
第五局	野澤竹朝	二四
一目勝七子	城戸新石	二四
第六局	野澤竹朝	二六
持碁	野澤竹朝	二六
先番	野澤竹朝	二六
互先	野澤竹朝	二六
第七局	野澤竹朝	二八
中押勝先番	野澤竹朝	二八
互先	野澤竹朝	二八
第八局	野澤竹朝	三〇
先番互先	野澤竹朝	三〇
中押勝	野澤竹朝	三〇
第九局	野澤竹朝	三二
中押勝三子	野澤竹朝	三二
第十局	野澤竹朝	三四
中押勝三子	野澤竹朝	三四
橋本生	野澤竹朝	三四

互先 一問夾正法 定石

七段 野澤竹朝著

緒言

▲先師の一言 先師名人秀榮、嘗て客の間に對へて曰く「定石ですか、左様、當座間に合ふものを五六十も知つて居ますかな、ナニそんな筈はないですて、エイ本を出版せとの仰ですか、夫は以ての外です、鳥渡でも自分の器量が解る者には是れが定石で御座ると銘打つて出せるものではありませぬ若し本當に定石本出版の御希望なれば某君位が宜いでせう、アスコらならば遣りませう」と自分は當時「ナニ師匠の手で定石の出來ぬ事があるものか、ホンの朝飯前の仕事を、又例の一癖で六ヶ敷い事を言つて居られるな」と而已思つて居た。其後定石に就て大分疑問が起つて來たが、今度愈よ自分が定石に手を着ける事に成つて、その幾多に岐れる萬化の手段の餘りに多様であるのと、錯綜を極むる六ヶ敷さに閉口した結果、是は到底自分共の腕前なぞで完全な定石の仕上がるものでないわいと、茲に先師の言を思ひ浮べて、一種の感に打たれたが、同時に定石なるものに大なる二ツの缺陷があるのと是を研究される側に非常に間違つた考へを持つて居られることを悟つた。

▲定石の正體 一體定石には經驗で成つたのと、各人が工夫して擲出したのとあつて、俱に二三百擲ちされたものであるが、要するに單なる一隅のみに就て其手段其利害が限られて、而して是は無理だ、是は打過ぎだ、

是では解らなくなるからと云つた様な調子で、出来上つて居る。からして時に或は大金を懐に、山道を辿つて、横合から泥棒にフン奪られて餘りと云へば、無茶な事をする奴だと、ペンを掻いても、通る方が間違つて居る小言位が落ちて、飛だ憂目を見るやうな滑稽事を演ずることが往々ある、定石中毒に罹つて居る人が——定石は前述の如く極めて普通、極めて平穩のものを基礎として而して、勢ひ事の困難なるものは力めて避けてある。斯うした結果、多くは其定石なるものは、トコトン迄盡されて居ないし、又その定石以外に定石の着手と同一効力ある手とか、或はヨリ以上効力ある手段が、存在して居るのを看過してあつたり、甚しいのは定石通り遣れば直に形勢が悪くなるのもあり、更に酷いのに成ると忽ち潰れて了ふなぞの危険極まる定石なども混つて居る。

▲定石中毒の原因 定石の正體を露骨に言へば先づコンナ物であるにも拘らず、世間一般では、定石と云へば極めて神聖視し、此場合では此定石、此の形勢では此定石と、一々其場合に當符めて打たねばならぬものを、是も定石、彼も定石と許り、コケの一ツ覺えと同様、何處でも場所構はず遣るから、腕のある者に掛かると、何目も置いて、散々に打碎かれて、終に定石倒れになつて了ふのである。是は餘り定石を尊重し過ぎる弊で、定石が何時の間にか、死物になつて居るからの失敗であるが、而かも一般棋客を此誤解に導いたのは、職として從來の定石の不完全であるのと、定石の生命である可き、目的、性質、變化、手割等苟くも其定石に就て會得を與へねば成らぬ事を、一ツも解釋を與へられて居ないのに因を爲すのである。

▲本定石の特質 本書は是等從來の定石の弊を矯正して餘蘊なきを期し、更に各大家の發見に成つた新定石を紹介して、而して一ツの定石に就て前述以外、固性定石、形勢定石の別は元より、自分の研究し、究極した範

圍の一切を悉く掲げて是を簡明に理論的に説明し、如何なる初心者にも充分會得がついて、攻防自在に斯定石を擲つ事が出来るやうに勉める積りで、大言を拂ふ様であるが、自分の抱負では定石としては此右に出づる物は、何人と雖も成し得させぬ覺悟で、書籍に依つて定石を覺えやうとか、研究されやうと云ふ諸彦の理想的定石を以て任ずるものである。

▲定石の目的 終りに臨んで讀者諸君に是非申さねばならぬ事がある、昔から碁を早く上達するには定石を覺えよとの諺がある（現に定石許りを教授して相當の成績を擧げて居る某々君がある）その定石の性質、目的も辨えず、鵜呑みに吞込むで、只並べ方だけと云ふ、丸切の骨抜覺えを遣つても、相當の効果が有るのを見ると、手前味噌許りでなく理論上、其定石を充分會得したならば、更に優つた成績が顯はれるものとせねばならぬ、底で自分の目的とする所は眞の定石又は新發見の定石を紹介する許りでなく、自分の説明した理由其他を能く咀嚼して、之を實戰に應用して戴きたい、即ち手筋とは斯ふ云ふものか、振變りの骨子は爰に在るのか、と云ふ工合に感取つて戴きたい、實を言へば其目的とする所は前述の如き定石其物に在るに非ずして、全くは是に依つて諸彦の碁の上達を期することを主眼とするので、斯くてこそ始めて眞の定石を諸彦に紹介するものと云へるであらう。幸に讀者諸君の中に其積りで研究して下さる御方が一人でもあれば自分は満足を感じ得ないのである。

▲碁は何處が一番宜いか
 本書の前提として碁の打着點に就て一言する要がある。理論的に詳細に述べるのは本書の目的でないから梗概だけ申すが、先づ盤中で一番宜い處は隅側で、次が中側、其次が中腹面及び中原と斯う云ふ順序である。隅の中でも一の點即ち「下目」は最も正しい打着點であるから、之を第一位の一點點と定め、イの目外しの處は稍々中側に偏して居るから第一位の二點點、更に口の高目となると著者が中腹面に片寄るから、同じく隅に據つた手であるが、是は第一位中の三位點と、斯う心得て居れば獨り定石と云はず、大體の打着點を誤ることはないのである。

▲碁は何處が一番宜いか
 ソコデ實戰に當つて黒が第一圖の如く一と擲ち白が直に二と懸つたとすれば、直に定石を打出して宜いかと云ふと、サウは不可ぬ。是に對して先づ三と左隅に據り二の白と三の黒と同姿勢である處へ一と先鞭を附したと同様の形勢にするが宜い。一體配置は碁全盤の懸引で定石は如何に複雑なものでも、畢竟部分の接衝に止まるので、詰り定石は陣立、配石の附隨物であるから、先づ陣形を整えるのが專一で、是れが進行して

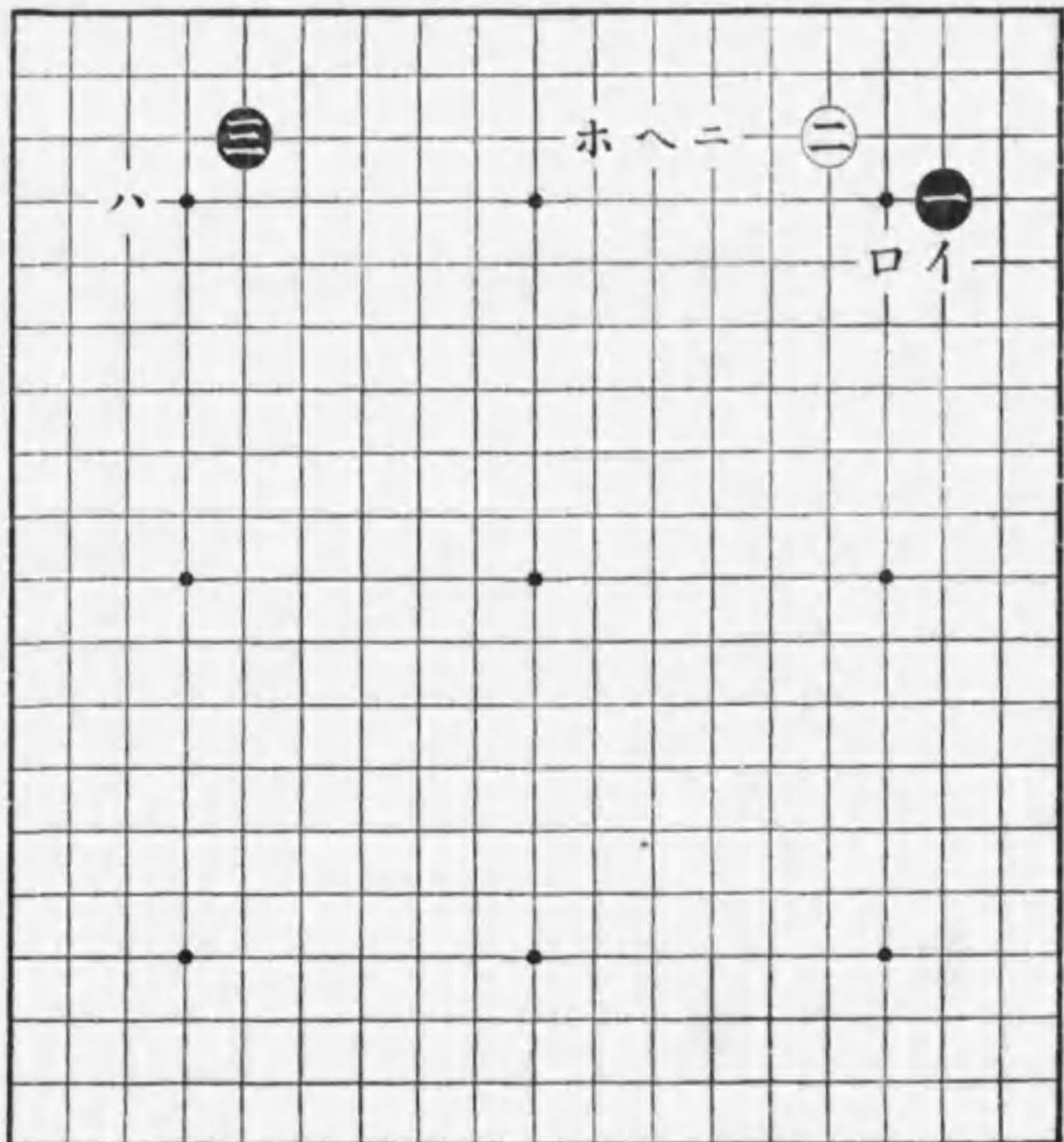
所謂時分は宜しと云ふ場合に始めて定石に移る順序に遣らねばならぬ。

▲定石を擲つ時機
 例へば第一圖で白が四の手を他隅に打ち黒が五と八印に結び、白が又手抜して他隅に打つた時、而して黒が此側面に打着する場合、始めて一、二、三間挟みの何れに據るか云ふ定石撰定の必要が生ずる段取になるのである。

▲定石と配石の區別
 更に此關係を具體的に詳言すれば黒が一と打ち白が直に二と掛つた時、黒は三の手で二、ホ、への三者其一に據るとする。とすれば其著者は中側即ち第二位中の一位點に據つたものであるから穩當でない。白二の著者より更に妥當を缺く事になる。抑も白二の著者は「數」の上から言ふも(數の事に就ては後に述べる)亦た前述の位點の關係から云つても正しい著者とは云ひない。何故なれば肝腎な布置を措いて、接仗——定石に訴へる嫌があるからである。但し大家の打碁にも往々斯う打たれた事があるが、夫れは萬事心得て居て。而して何等かの注文があつての仕事であるので、其人として遣るのは一向差支ないが、決して模範とすべき手ではない。夫に對して黒が

直ちに二、ホ、へ等に挟む著者は既に著手の位等に於て白二に讓つて居る而已ならず、敵に此隙を衝かれて、色々の細工を施されて、而して大切な隅側にも恰好に先鞭を附せられ、ヨシ部分に於て少勝形を得ても、大勢に於て致される虞れがある。からして實戰に斯圖が現れたとしても何も好で三と危険を冒す必要がない。矢張り第一圖の如く三と左上隅に據るが宜いのである。

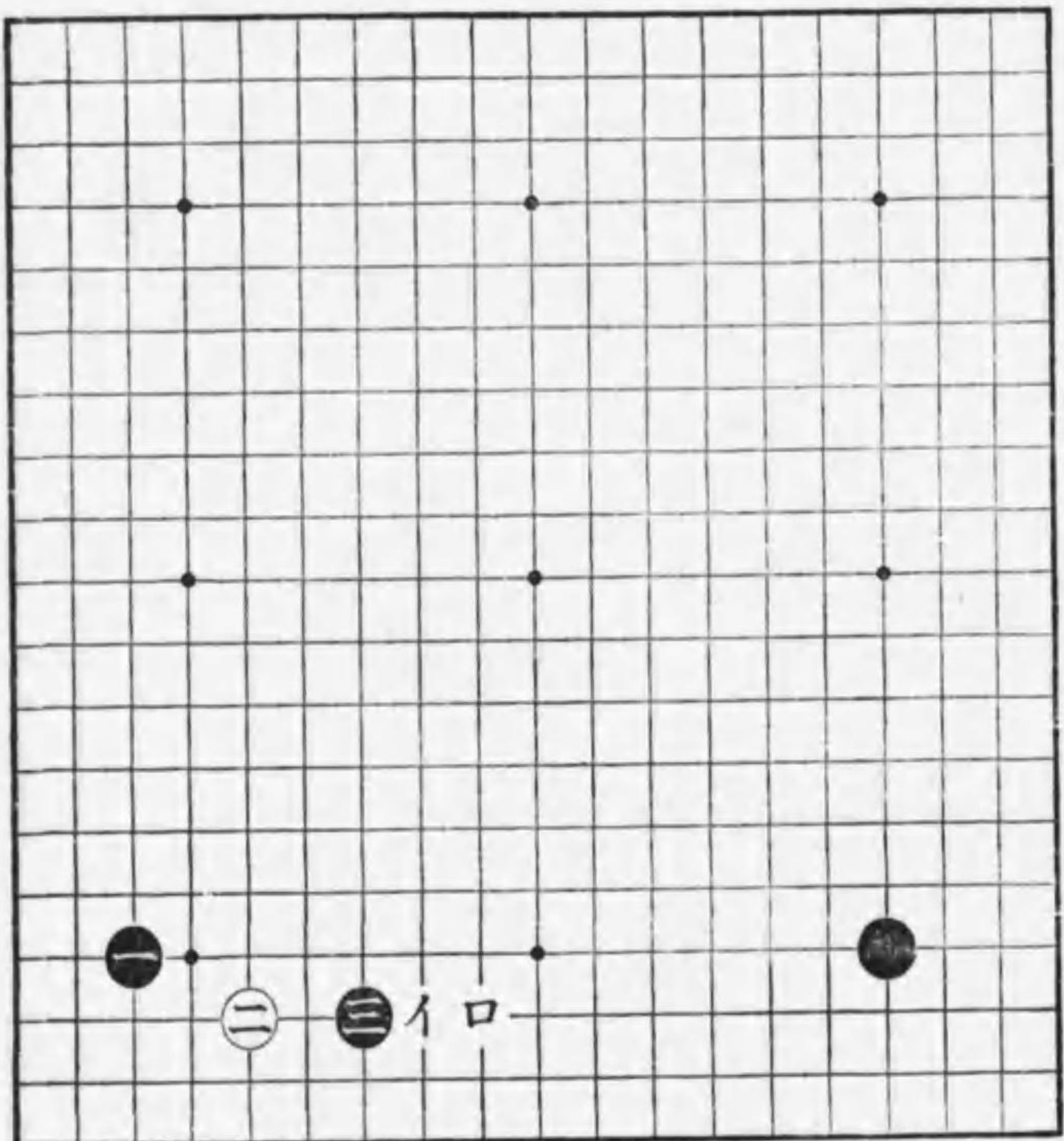
引例第一圖



▲一間夾の目的と打つべき機會

(引例)第二圖扱て挟みの中にも三と打つ一間夾、イの二間夾、口の三間夾等種々あるが、其内で一番厳しい手は此一間夾である。夫は二間三間の扱に較べて最も敵に接近して迫つて居るからである。即ち此一間夾の部分的目的は敵を厳しく撃つに在る。然らば如何なる機會に此一間夾みを用ふるが最も威力を發揮するかと聞かれると一寸返答に困るが、要するに自家の勢力範圍を出来るだけ擴大して、而して劇しく敵に當るの場合に適して居る形勢の際、此れに據るのが最も有効で、本圖の場合など先づは此條件に叶ふ機會であらう。以上述べる所が本篇一間夾定石の説明に就ての基礎——前提である。

引例第二圖

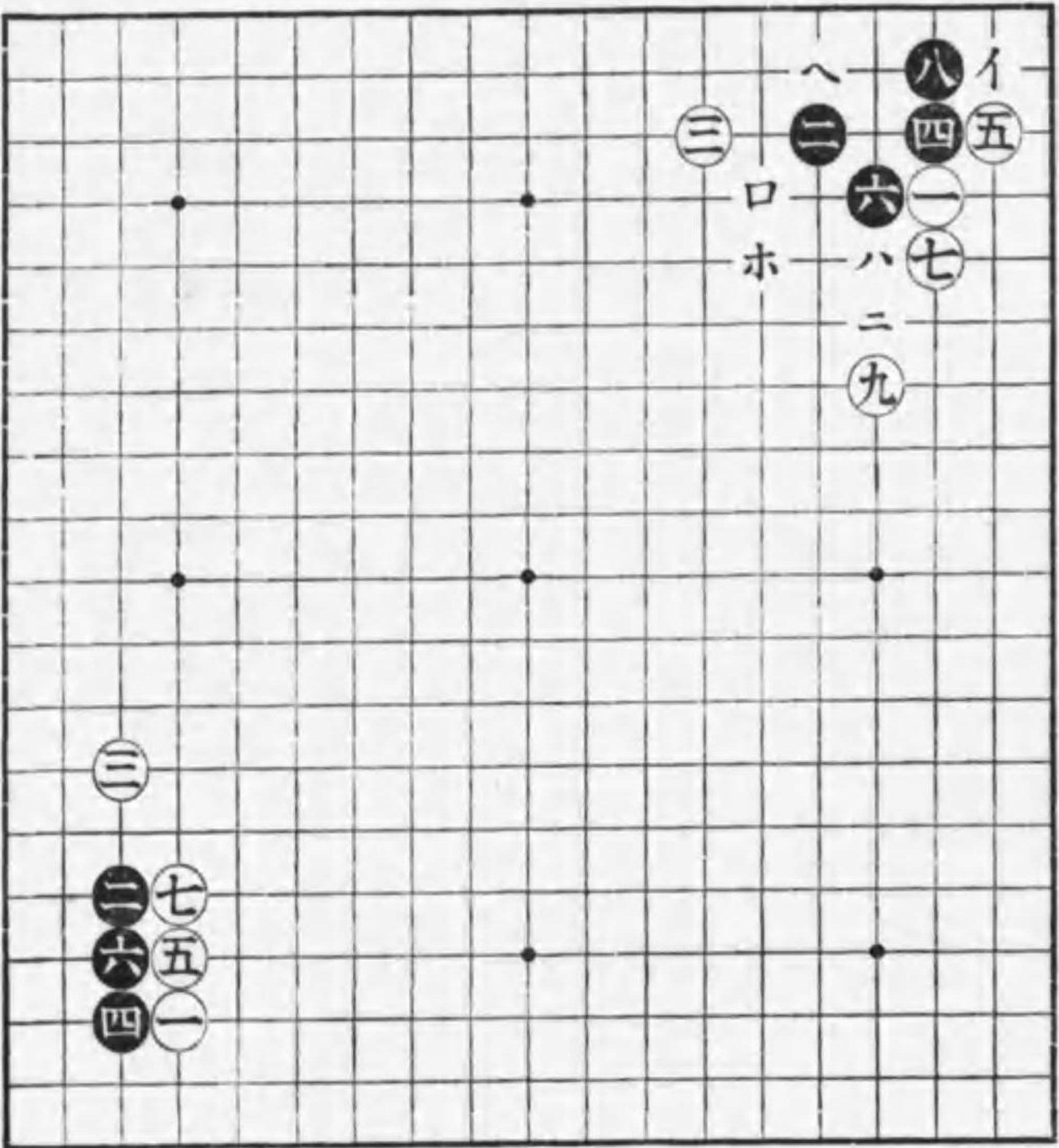


◎一間夾三々頂の部

▲第一圖 甲

普通定石斯種頂手は本來宜くない。即ち黒四、斯う頂ける手は直ちに一對二で、打撃を啖ふ著子だから手段としても感心せぬが(注意、頂手も「數」の倍用即ち一以て左右に適切に相當り得る場合とか、又は是に依つて三方四方に響くと云ふやうな時には斯種頂手が偉功を奏するのである)併し爰では第一に白が透さず五と綽ねても夫は二ノ筋からの攻撃であるのと(二ノ筋とは碁盤の端から勘定して二ツ目の線を指すので、特種の場合か、必要に迫られた時の外、漫に打つては成らぬ地點である。其理由は三ノ筋に較べて地域根據を得ることが少ないのと發展に乏しいとの二ツの缺陷があるからである)第二には四の頂手は直接右方の敵を攻撃し乍ら、自己の防備が完全に出来て、傍ら自然的に左方三の黒に影響を與へた勘定で、而かも白が先着の優勢な場所、第一圖(乙)新型の如く確實な活姿を得られた上に、先手まで取れるのであるか

第一圖 甲



第一圖乙新型

ら、一寸整伏の観はあるが、實際は可なり働いて居るのである。

▲本定石の總評

本定石は黒四の頂手が大体に於て善い手段でない爲め、前述の働きがあるにも拘らず、全體の姿勢が稍々愚集重複の態に陥つて居る。随つて白九迄の現在に於ては黒は全く受動的の姿で、些の發展をも遂げて居ない。因つて本定石は黒として、白からの攻撃を禦ぐ目的で遣るのは宜いが、白として本定石に據るは消極策で大に緩いと心得べきである。

▲爾後の處置

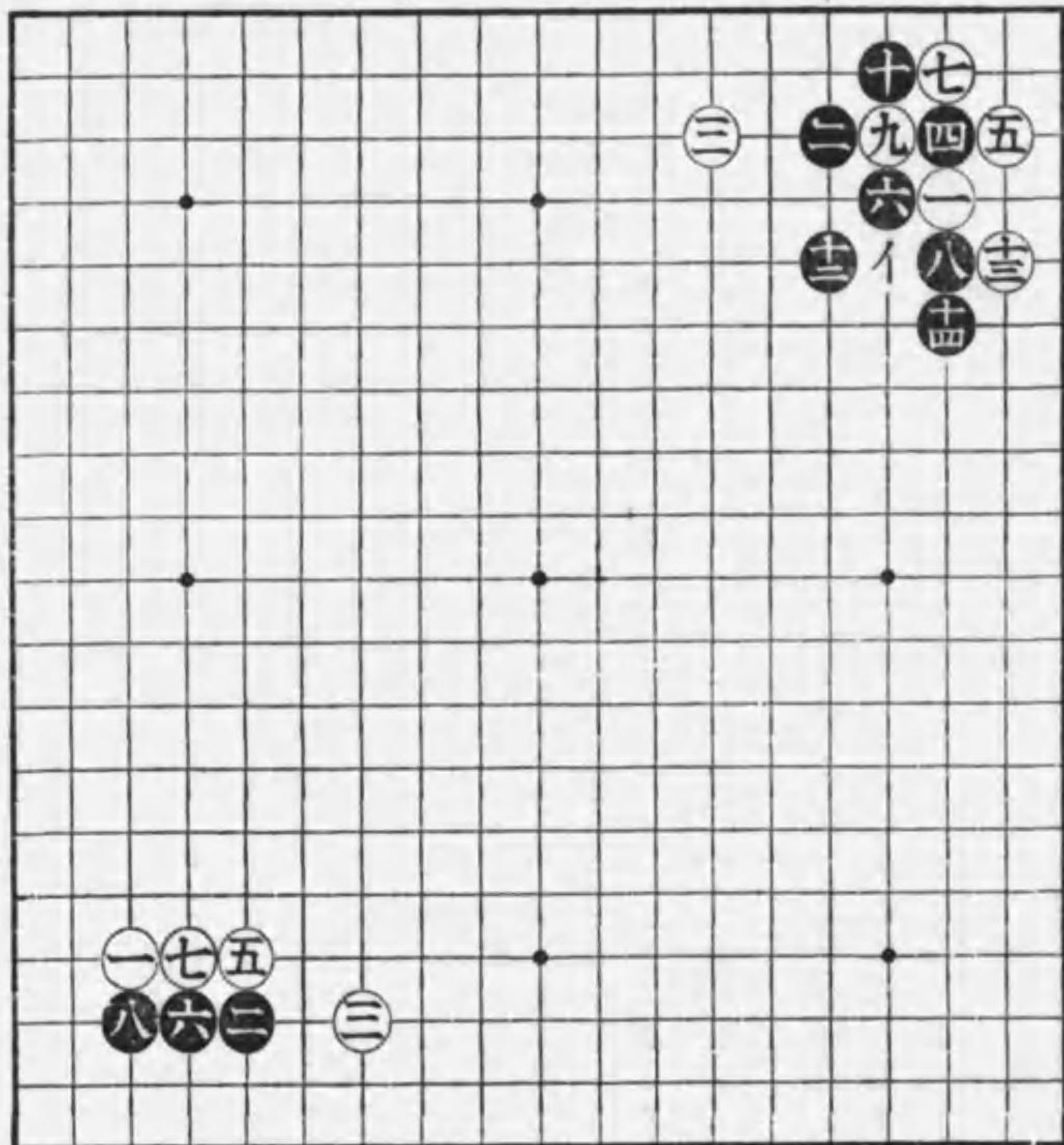
白九と桂馬したのは宜い手で、一方黒の發展面を壓しつゝ三の味方と脈絡を通じ、且つ此黒を攻撃するに便なるやう構えた著子である。爰で普通定石本には黒がイに曲付けて受てあるが、是は一隅定石としては通るが、實戦に當つては緩い。成程斯う打ば十目以上の實益を占めて活を完全にし、且つ白の隅での活の部分奪つて居るから、後に此白を打立てやうと云ふのには適して居るが、如何せん現在が退守一方の著手であるのと、コンなどところで悠々後手を引居る譯では大勢に遅れて了ふ。扱て黒が手扱した場合白の攻撃にいと

打つと口と尖むとの二途ある。後者ならばハに押し白ニの時イに曲込むで宜く、又前者ならばホと中腹に發展して打つべきである。斯うなると白はへに頂ける手筋を狙つて此黒を攻めやうとするであらうが、夫は棋家の謂ふ遠い手で、若かく心配する事はないのである。

▲第二圖(甲)新型

白五の新發見——黒の恐慌白五、斯著は近來發見された新手中、黒が前圖の型を注文した時分に、斯う意外に出ると、對手は九で思感の外れて、全配置に動搖を起させる大なる利益がある。而かも白五の著は獨り黒の意匠を破る丈に奏功する手ではない黒が今手を着けたのを、白が後手であり乍ら有利な情況の下に先着を下して白を攻撃した其儘の姿になるので取も直さず優先權の相違となるから策戦上大なる利益である。即ち新型の形は參照圖に示す如く黒が四の手で他に打ち、白五と頂けて以下、八迄に成つた定石と同じ者になり、加ふるに黒六は、七に刎込ねばならぬのを、「征」の不可ぬ時に遣る不利な斯型に出たのだから、手段に著手に兩ツながら白の爲に致された勘定になる。因つて敵に、五と打つ恐ろしい手が有るのを承知の上で、四と頂ける定石を打つは宜いが、第一圖(甲)の如く有來りの定石になると計り思つて居る場合で之れに出逢へば、黒確に失敗である。本定石は後頁にも出るから、茲では單に以上に説明を止めて置く。

第二圖甲新型 (±)ツグ



參照圖

▲第二圖 甲

圖七の爆彈——定石の壓制黒四と三ノ三に頂ける手には前述のよりモット／＼酷い怖い手が白にある。夫は第二圖(甲)の如く八に引く手で七に縛ねて擲つ手である定石には本圖の如く出て居て、其講釋に白七の列ねは無理である黒に八と頭を押へられて結局黒十四となるから白が不利と書いてある。成程白七は無理の手かも知れぬ。又圖の如く成つては黒が確に有利である。何故なれば白が一目打抜いた威力が如何に大なりと云へ、敵の一子を打抜くは同時に二著打つて而してコミを一目取る勘定になるので、棋諺にも打抜は三十目の得と稱さえる位であるが、白全體が一隅に小さく疊込まれた上に、敵には充分に外勢を張られ、且つ三の一著は全然懸離れ物となるのだから、斯う成つては白が溜らぬ譯である。

以上の次第だから本圖定石の得失は仰せ通りで宜しいが、爰に不思議なのは單に本圖計りを掲げて本圖の變化とも見る可き、白の十一と粘ぐ手でイに截つて打つ手を併せ示して無い事である。「講釋に簡單に十一と切る手は更に無理としてあるだけで」白の斯くも酷く成つたのは悪口を言へば、定石の權威を振つて白に十一と粘ぐ可らざる所を粘がせて、最初に七と劬ねた著意を全然滅却せしめたからである。然らば白が十一の手でイに截つたならば何とケリが着くのであらう、果

して定石が勝つてあらうか、將た非定石の方が勝利を占めるか。夫は次に述べるとして、爰には本圖に就いて更に説明しませう。

▲白七と黒八の著意

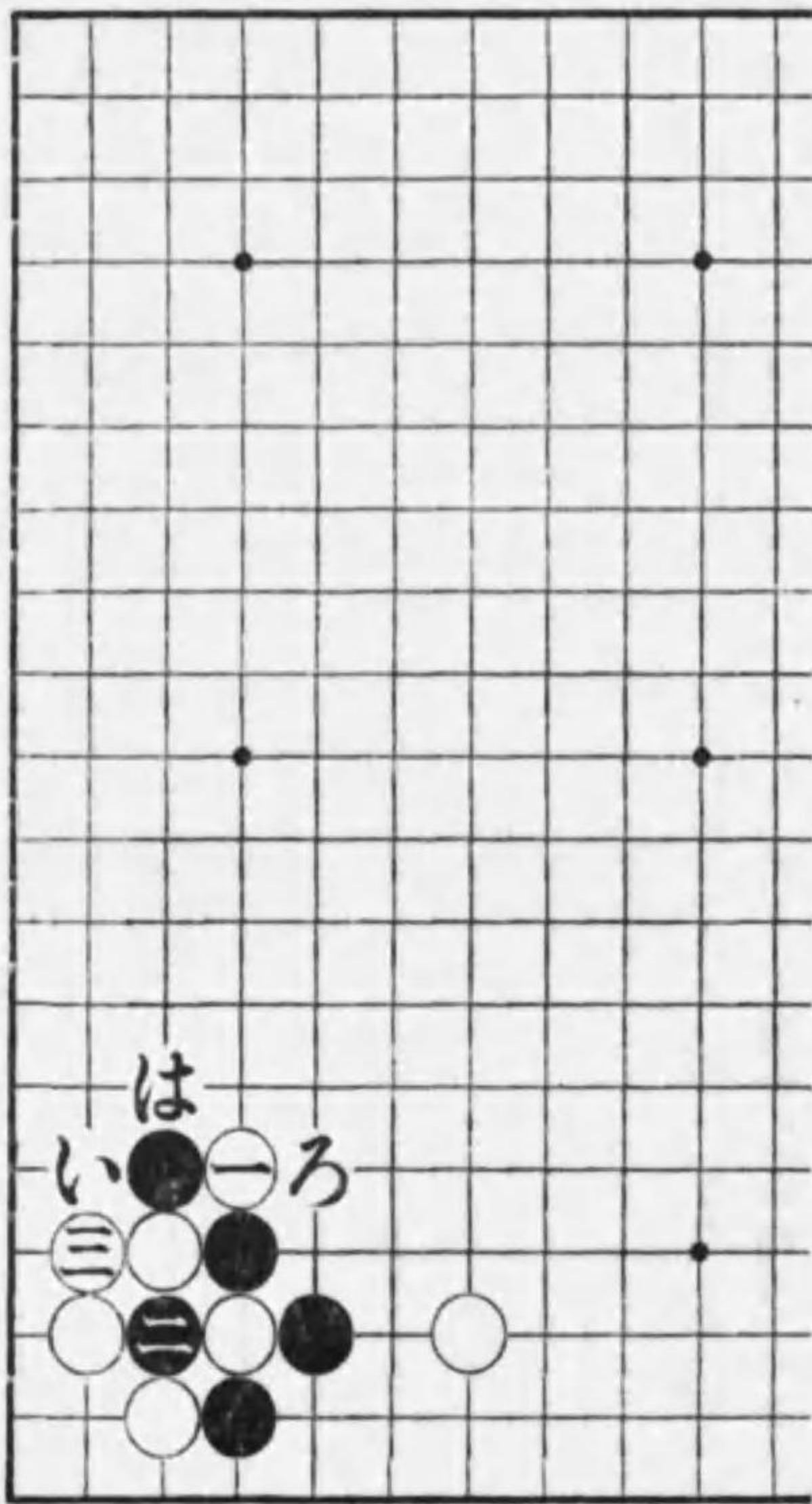
本圖白七の著意は黒に第一圖(甲)の如く喰下つて根據を獲させぬ様、而して敵を接仗に訴へて混亂に陥れやうと云ふ策戦に出た者である。所で凡そ定石には大抵打ち所が二ツあつて、黒の打場を白が取れば、黒亦た白の打ち所に據る者と斯うマア相場が極つて居る。ソコデ圖にも黒は、八と白の頭を叩付けて擲つたのであるが、扱て實戦に臨んで愈よ擲つとなると斯著に就て大なる問題か持上る。一體棋は「數」と「勢力」が主であるから此二者を加へ敵に及ばぬ個處では、一步譲らねば成らず、第二に自家の不備を衝かれた際には敵を逆撃し得る所が、或は自己の陣形を整へる事を專一に遣らねば成らぬ處か此二ツが根本であるから若し敵の襲撃が無理な手であつたなら手強く當らねば不可ぬ。ソコデ腰を抜かすと向ふの無理が通つて散々な始末になる。

以上の判斷が確實に付て居ないと實戦に於て本圖の如き遭遇戦の場合に容易に黒を持つて八と劬ねる譯に行かぬが、併し定石には白七が無理と斷定されてあるからソコデ黒に此無理を咎む可く強硬に八と打たせ、次に十と積極的に強く敵を隔て、擲たせたのである。因つて順序として先づ定石に隨つて八、十と打つ圖の型を本形の劈頭に掲げたのであるが其理非は逐次に説明する。

▲第二圖(乙)新型

白一の新發見 扱黒に八、十と打れては白たる者、始め七と劬ねた著意が既に決を戦に探るのが主眼であるから、實戦の場合決してオメノ、定石の如く一目粘いで閉口たればせぬ。必ず本圖の如く一と切付け黒二白三と打つに相違ない。ソコデ斯うした場合に探るべき大體方針が三途ある。第一は直に戦つて埒を着ける急激な方法、第二は一方を放棄して他に代償を獲やうと云ふ穩當な遣方、第三は即かず離れずで所謂、捌いて打つ手段と此三策よりない。圖で言へばいと押ゆるのが第一に該當し、ろと打のが第二、はと引くのが第三に當符まる。處で定石には白七が無理と認めてあるので既に前圖に於ける如く黒に手厳しく八と打せてある一體無理な手に對しては、何處迄も咎めを打たねば不可ぬので、夫が一寸でも緩むだり少しでも其無理を通す氣味があると、無理直に變じて道理となるのである。左すれば定石の意味から觀るとドウしても此際第一策を探るのが黒の最良法とせね

ばならぬ。左様した曉き果して在來の定石が正しきや否やは本定石に就ての定石側と非定石側との大劇戦の序幕である。「但し此定石に就て自分の調べた範圍の重なる物は順次に悉く掲載して尊覽に供するが、何分今迄の定石には影もない六ヶ敷い戦ひで、黒白共に攻防變化殆ど究まりのない有様であるから、觀者の煩を避ける可く、説明は力めて圖に代へる事にして、而して肝要な圖、即ち是ならば實戦に遣つて差支へぬと認めた物の外は、其説明も簡略を旨とする考へであるから、説明の足らぬ所は圖に由つて補つて頂きたい。



第二圖乙新型

▲第二圖(丙)新型

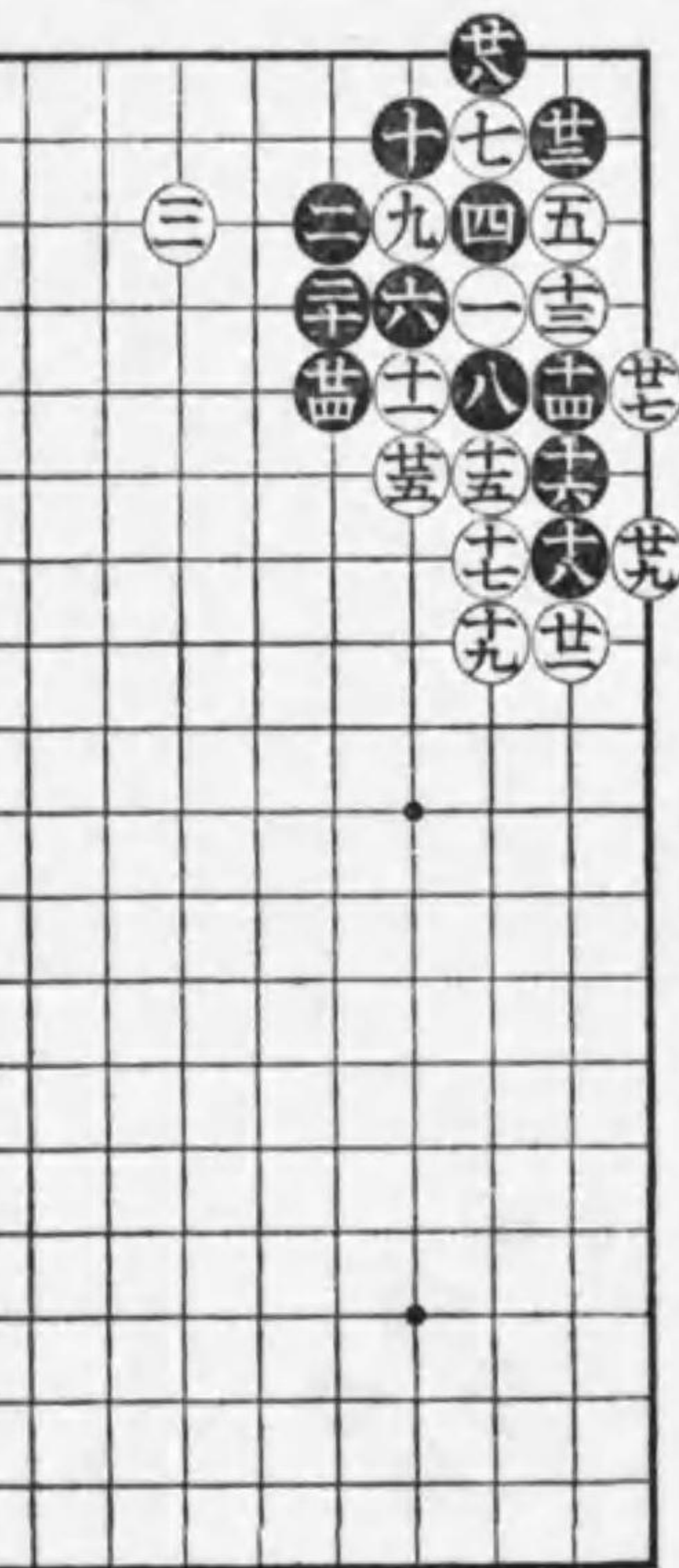
白十五は筋違の無理手、白十五は黒が急激に十四と約え着けたから、我れ又勢力の旺盛なるに任せて、急激に黒をワグネ付けやうと云ふのであるが、是れは無理手である。併し黒十六は宜いが更に一本十八と押したの悪い(後圖参照)試に白二五までの結果を解剖して見れば黒二四、白二五とある時黒十六に曲つたとすれば則ち白は直に十八に約えなくてはならぬ。然るに本圖は十八に約えずして十七に行びたと同様の形違ひになつて居る。是れならば黒はドウとも凌げる。併し何分白の一勢力多い場所、直に白兵戦が開始されたのであるから、其結果はドウなるか、自分は只第三者として之を調べた儘の圖を掲げて、其利害如何は讀者諸君の判断にお任せする方が却て有益であらうと思ふ。

▲本隅の利害

扱て白二七と緯ねたからは黒は普通二八と取るよりなく、白亦二九と取る外はない。ソコで黒白の利害を較べるに、黒は九の一子を

第二圖丙新型

●劫トル ○同 ◎同

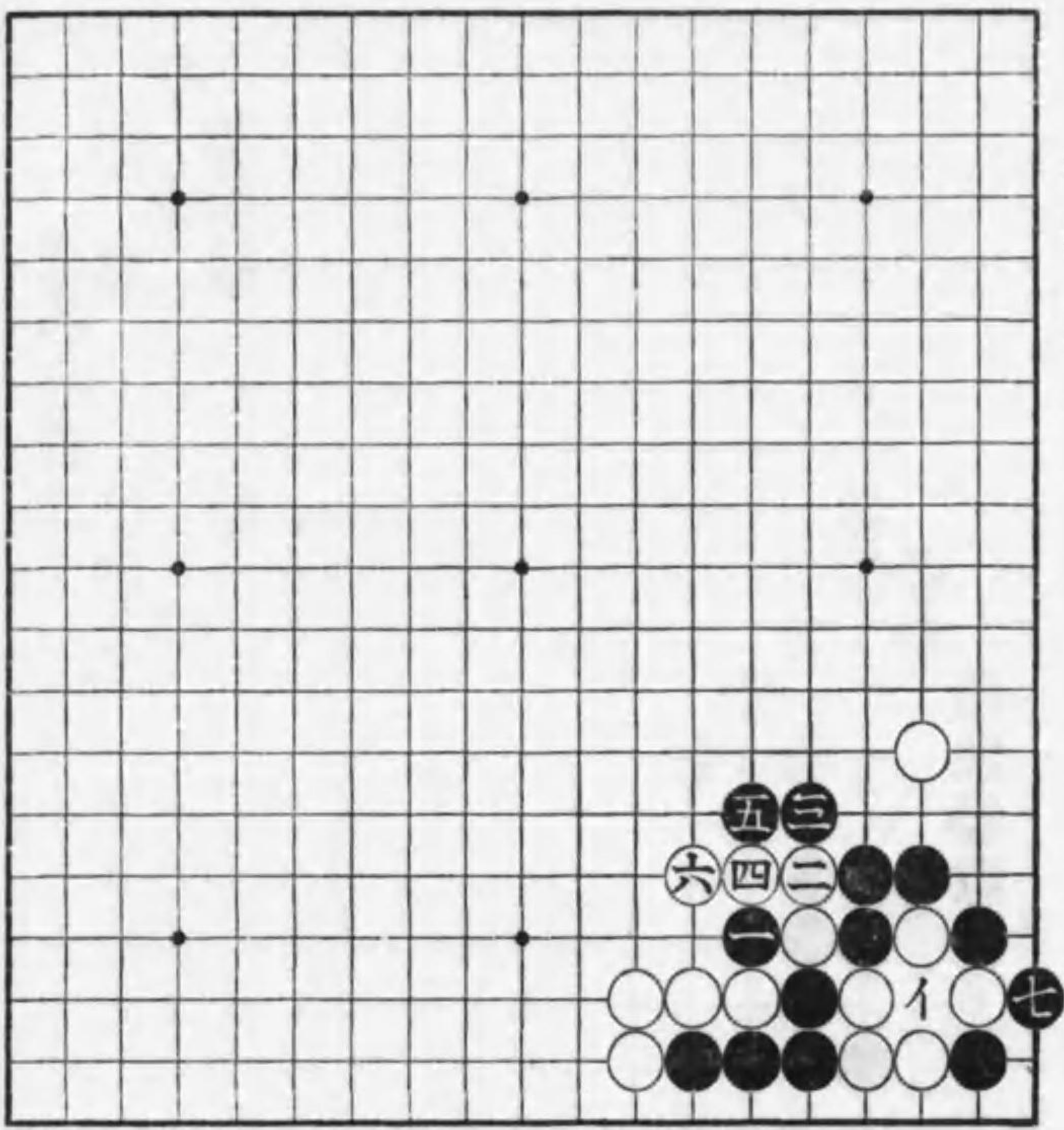


取つたとは云ふもの、前に一目取られて居るから、是は五分である。只七の白と二八の打抜きに代りが幾分黒の利であるが、併し黒二の贅瘤と白三の交換は確に黒の啖ひで、此點甚だ不利ではあるが、譲つて白側を觀察するに、黒八以下の四子を倒すに、十五、十七、二十一、二十七、二十九の五著を要して居る上に、始め白が先著で戦ひを起した斯隅で、而も後手を引いて居ると云ふのは非常の不利である。而已ならず外勢とても、左して黒軍に優つて居るではなし、又地域も殆ど伯仲して居るから此隅の戦ひは白の不利と断定して差支へない。白軍が斯の如き不利を來たしたのは要するに二一の約えが悪かつた結果である。(後圖参照)

▲参考圖(一)

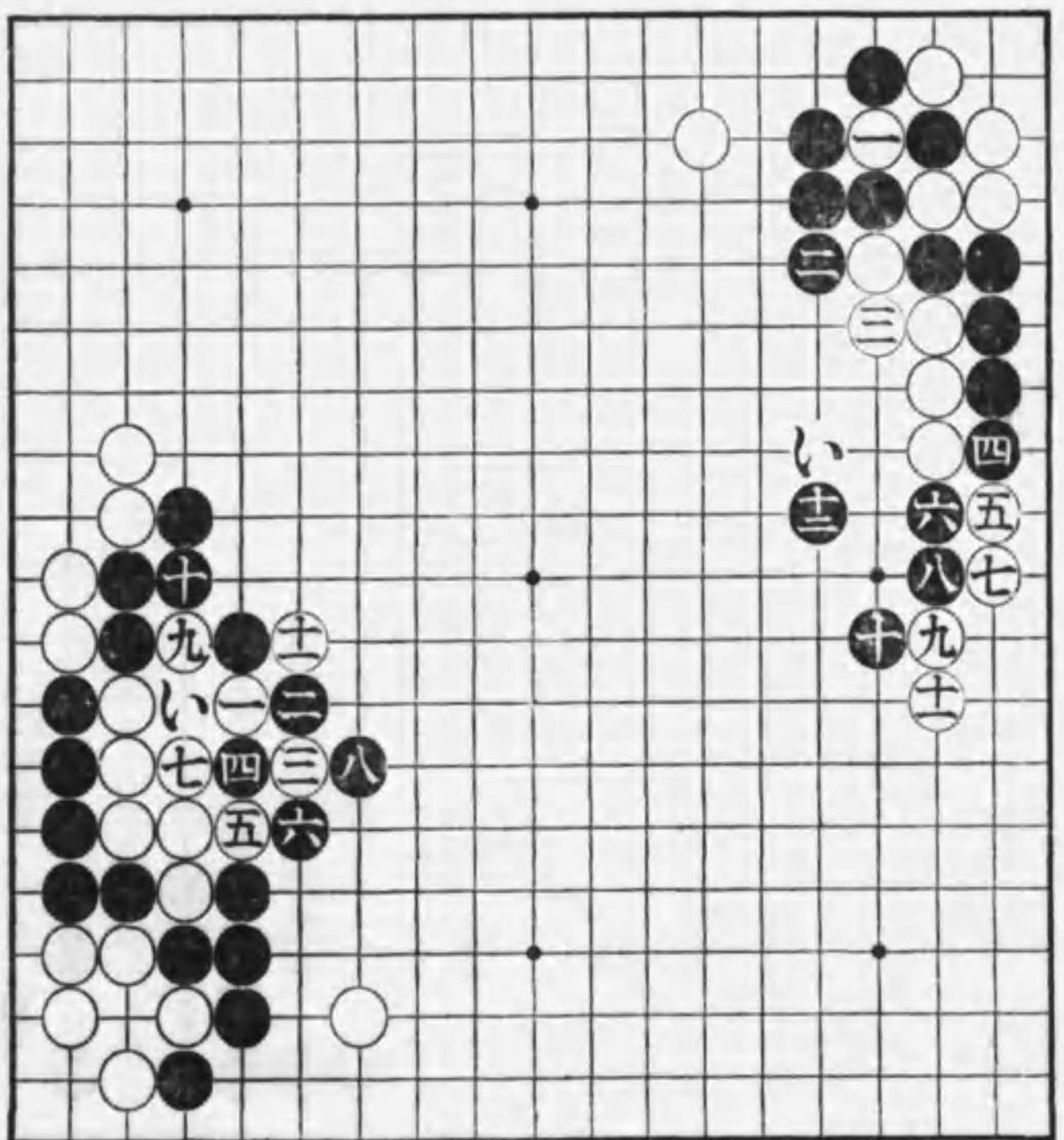
前圖の如き別れになれば黒の方が有利であると断案を下したが、實を言へば黒二四の一著は餘りに平凡である。器用に立廻れば本圖のやうに一と截り以下白六の時七に互る手段もないではない。夫れから黒五の押しを打たずして、單にイに劫を取る手なぞもある。併しさうすると或は白に隅を棄てられる方針に出られるかも知れぬ。夫れでは面白くないと云ふ理由で、前圖の如く穩に二四と中てたのであるが、働きと云ふ側から云へば黒一の截り若くは二のアテ或は三の尖み等を睨んで單に七に互る方が宜いのであるけれども、便宜上第二圖(丙)を以て正しい圖とする。

参考圖一



▲参考 圖(二及三)

白五無理 白軍の壊滅 白五の約えは如何にも無理で、圖の如くなつては白潰れである。念の爲め注意し置かんに、白若し無謀にもいに頂けて逃去さうと企つるならば参考圖(三)の如く白十一の時黒十二の手で四、いドチラに打つても押潰ぶして生擒することが出来る。夫れから白一の手で四に尖めば黒三、又白二なれば黒一に頂越して生擒するのである。



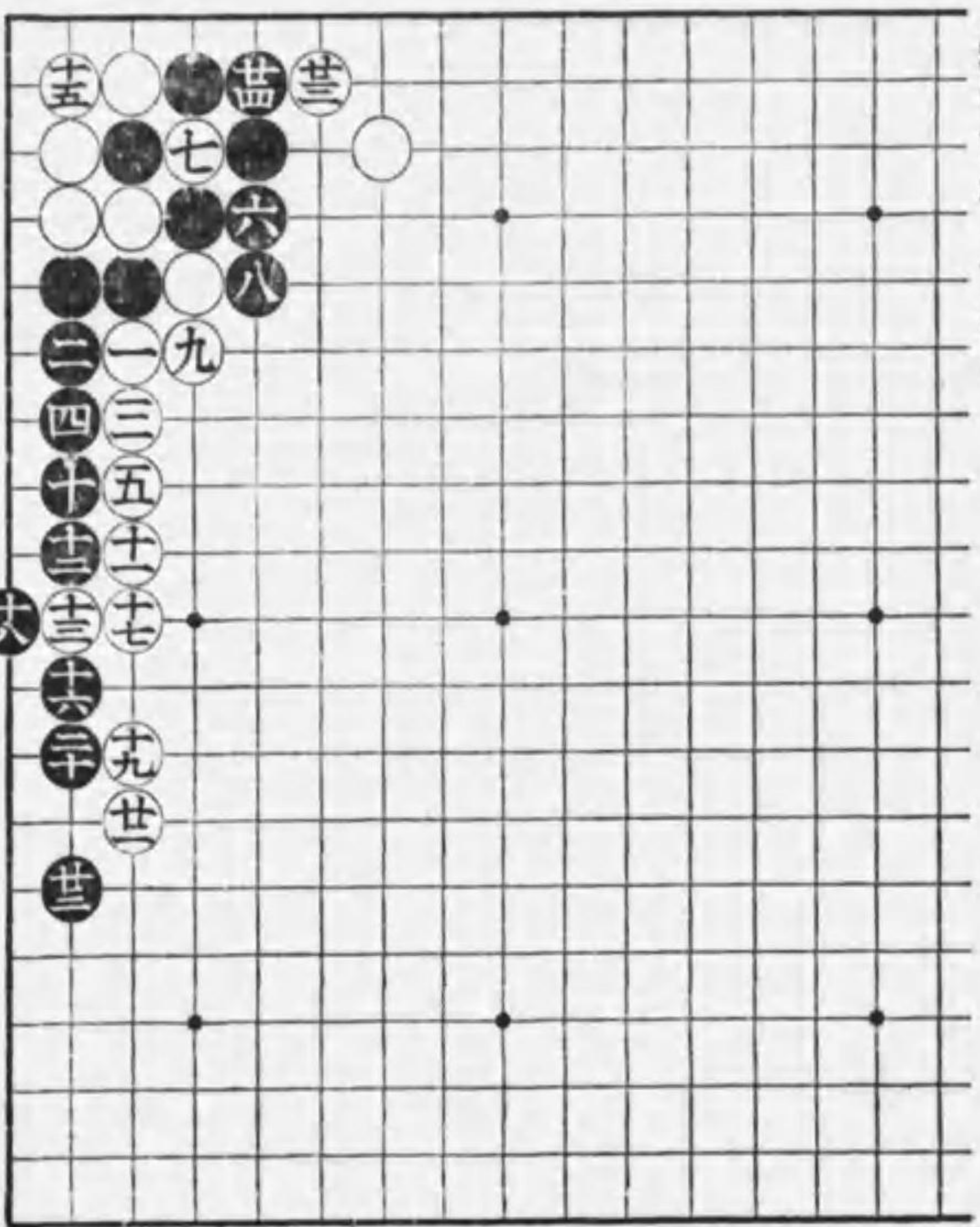
参考圖二

参考圖三

▲第二 圖(丁)

白十一の佳着 前圖に於ては白五が無理だから崩れたけれども、本圖のやうに白十一とモウ一本緩めて而して十三と約ゆなど却て黒が困るのである。なぜかと云ふに白の勢力の多い處で戦はぬければならぬからである。此場合では黒は十四と劫を取込んで十六と頂けるよりない。さうすると十七以下二一と壓迫を啖つて、キウ々々云ふ目に遇はなければならぬ。ドウやらカウやら活はあるけれども、何しろ二筋を幾本も這うのだから堪らない。夫れから六、八方面の黒はドウかと云ふと、是れは外に出て居るからして、封鎖だけは免かれやうけれども、餘り感心した姿ではない。形の善悪は兎も角も、白が此儘アマして呉れば黒萬歳であるが、ドウカして封鎖されるやうな符目に陥つて、隅の白を攻めて取らぬならぬことになれば黒は一遍に潰れて了ふし、又夫れを旨く凌ぎ得て、隅の白を工合好く取切れれば無論黒の方が有利である。又白の側から云へば、形勢斯の如くなつては決して

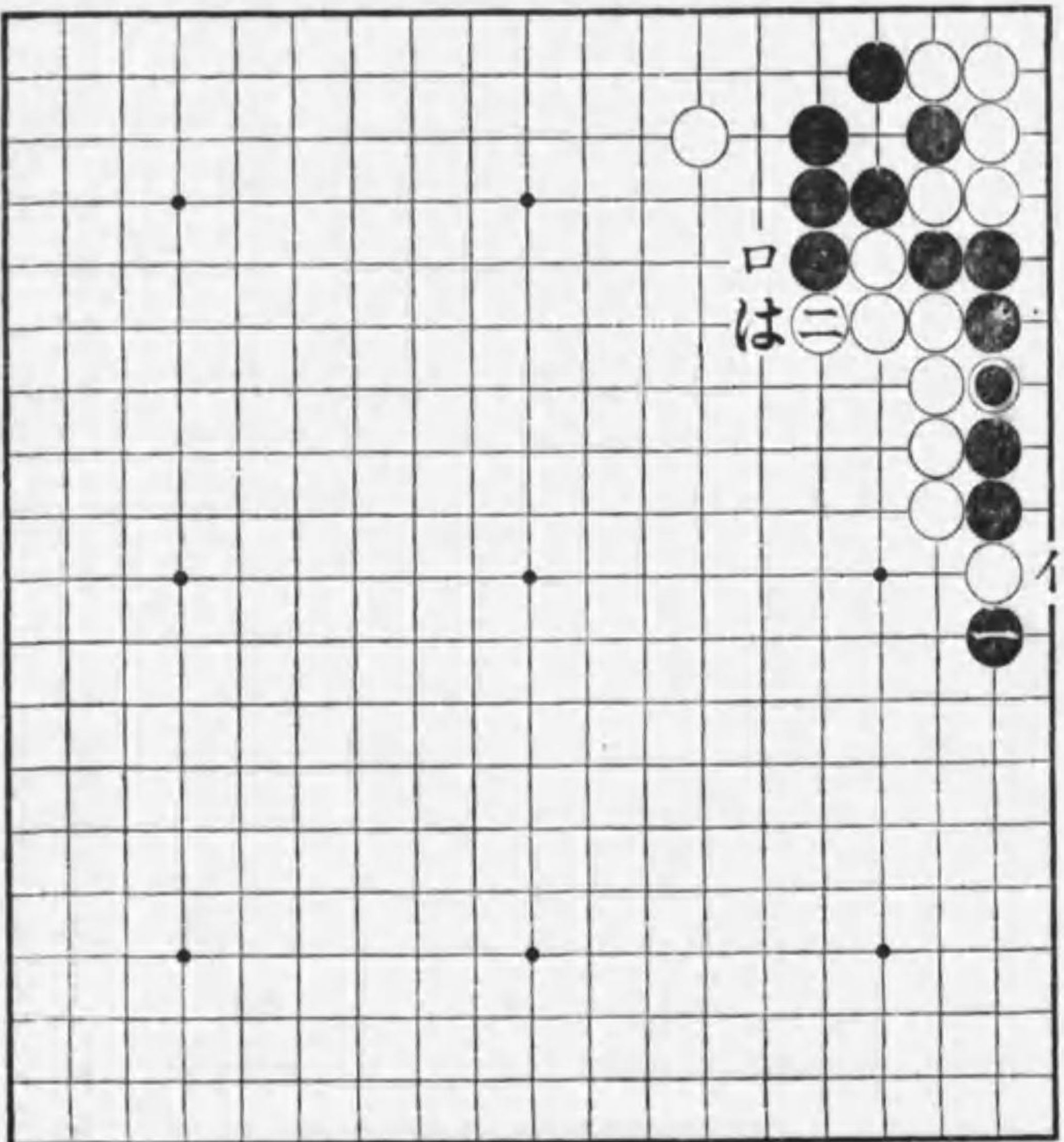
樂觀は出来ない。旨く隅の白を利用して纏めることが出来れば善し、左もなくして隅の白が犬死になつては堪らない。要するに斯の如く不安の形勢になつたのは黒が十六と頂けた時白が十七と粘いだからである。



第二圖 丁 劫トル

▲第二圖(戊)

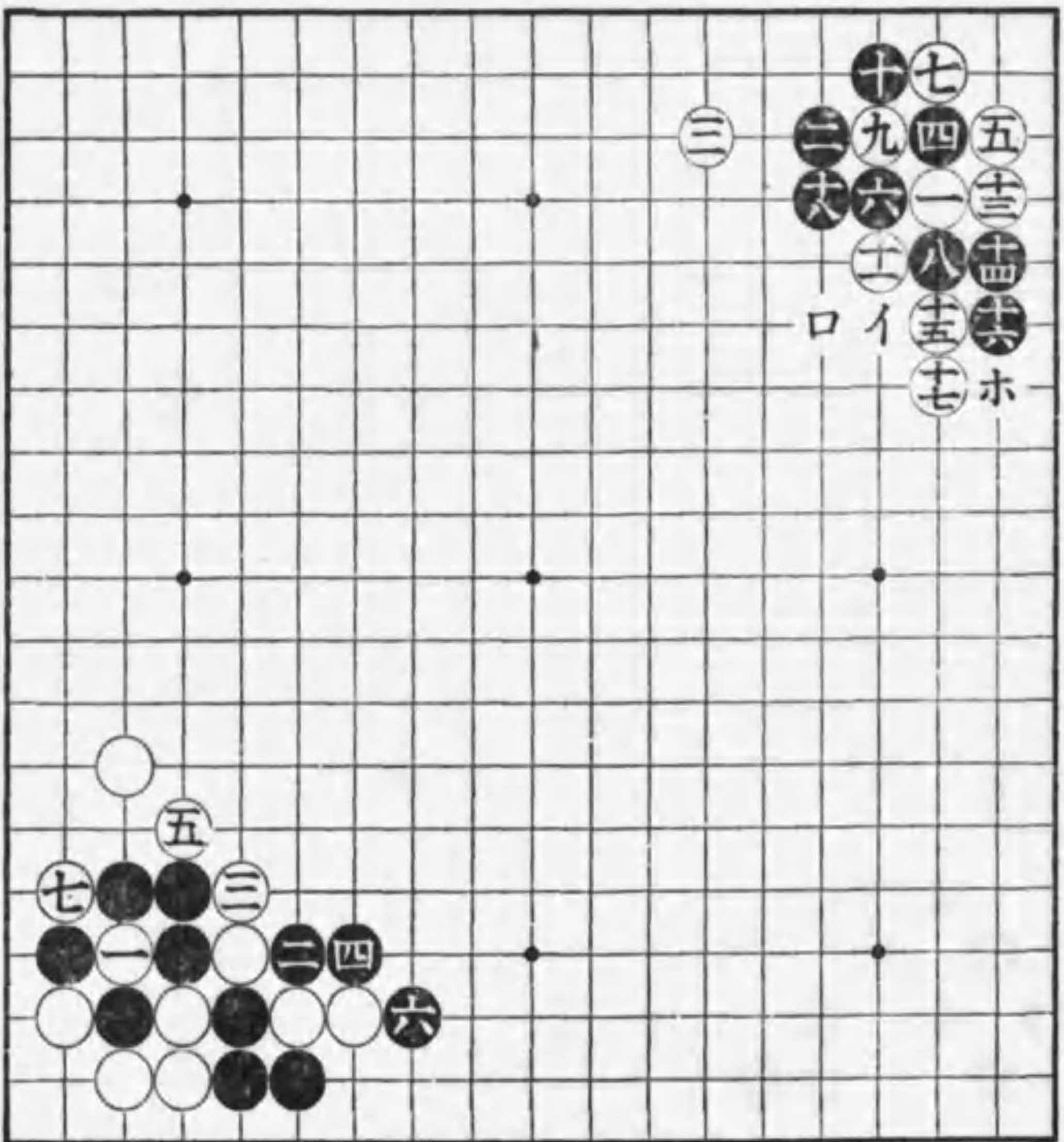
白二住着、白二と押したのは、イの下りと、口の綽ねとの兩睨みの住着である、斯う打たれては黒は殆ど應手に窮せざるを得ない。假に黒はに綽ねるとせんか、兩方を凌ぐ爲めに、然らば白口に截らば如何。茲に於て黒、上方を凌げば左方、左方を凌げば上方を攻められる結果になるから甚だ危険である。扱てコンナ結果になつた原因は何處に在るかと云へば前に注意した通り本圖●印即ち第二圖(丙)に於て黒が十八と三本泳いだ一着が悪かつたからである。



第二圖 戊

▲第三圖(甲乙)新型

黒十八の住着 黒十八は頗る佳著である。抑も此一着は(1)隅の白を攻める意味(2)自家の凌ぎと發展とを兼ね(3)而して敵のイの缺陷を狙つた手である。此種の著子は種々の意味を含んで居る手で、接戦の際には如何なる場所、如何なる場合でも適用し得られる。即ち振變るにも好し、活きるにも好し、自由自在に働ける佳著である。之に對する白の打方も三様ある(1)圖の如く劫を取る手(2)口に掛粘ぐ手(3)水に打つ手である。先づ劫を取つたのを示す。黒二十の打方も亦種々ある。場合に由つては第三圖(乙)の如く振變ることも出来るけれども、是れは普通黒が損である。ナゼかと云ふに邊隅と中腹との交換であるからである。



第三圖 甲 ●劫トル(○)同

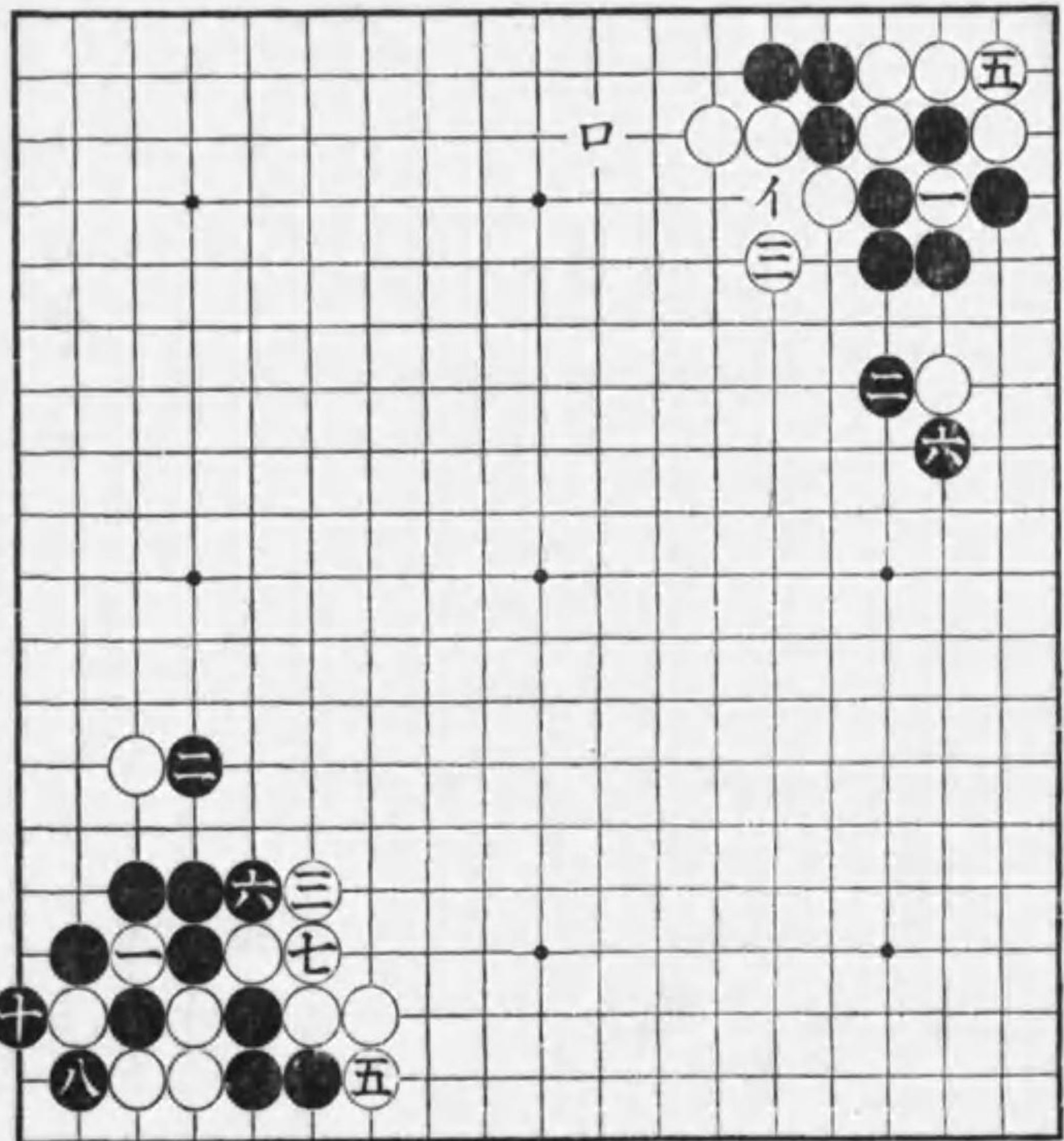
第三圖 乙

▲第三圖(丙)

本圖振變り白損普通の場合には本圖の如く振變る方が宜い。即ち黒から二と頂けられては白はイの缺陷を癒さずに置いては爾後の行動が自由ならぬから、圖のやうに三と掛粘ぐのが普通である。其結果黒六の振變りとなる。斯くては白は下の黒三目を取る爲めに尙一着口邊に備へなければならぬ形勢で、白が先手で戦を始めた處で後手になつて居る。凡そ自家の優勢なる處で、接仗に訴へるからは、勢力と地域と双つながら贏ち得るに非ずんば、交戦の目的を達したとは謂はれない。然るに單に地域丈の價値より一著子の利益が残つたに過ぎないと云ふことになると、初め持つて居つた勢力が消えた丈け、白が不利である。斯う云ふ結論になる。からして此振變りには白は餘り有がたくなないのである。

▲第三圖(丁)

白五不可、白五、是れは早晚茲に一手掛かると云ふので、斯う打つたのであるが、圖のやうに八と截られ、十と亘つて二目を打抜かれ、且つ黒には活きは出來るし、非常に丈夫になつて居るから少しも之を攻立つることが出來ない。斯うなつては白がイカヌ。第三圖(丙)の如く隅に於ける眼を取つて置く方が優しである。

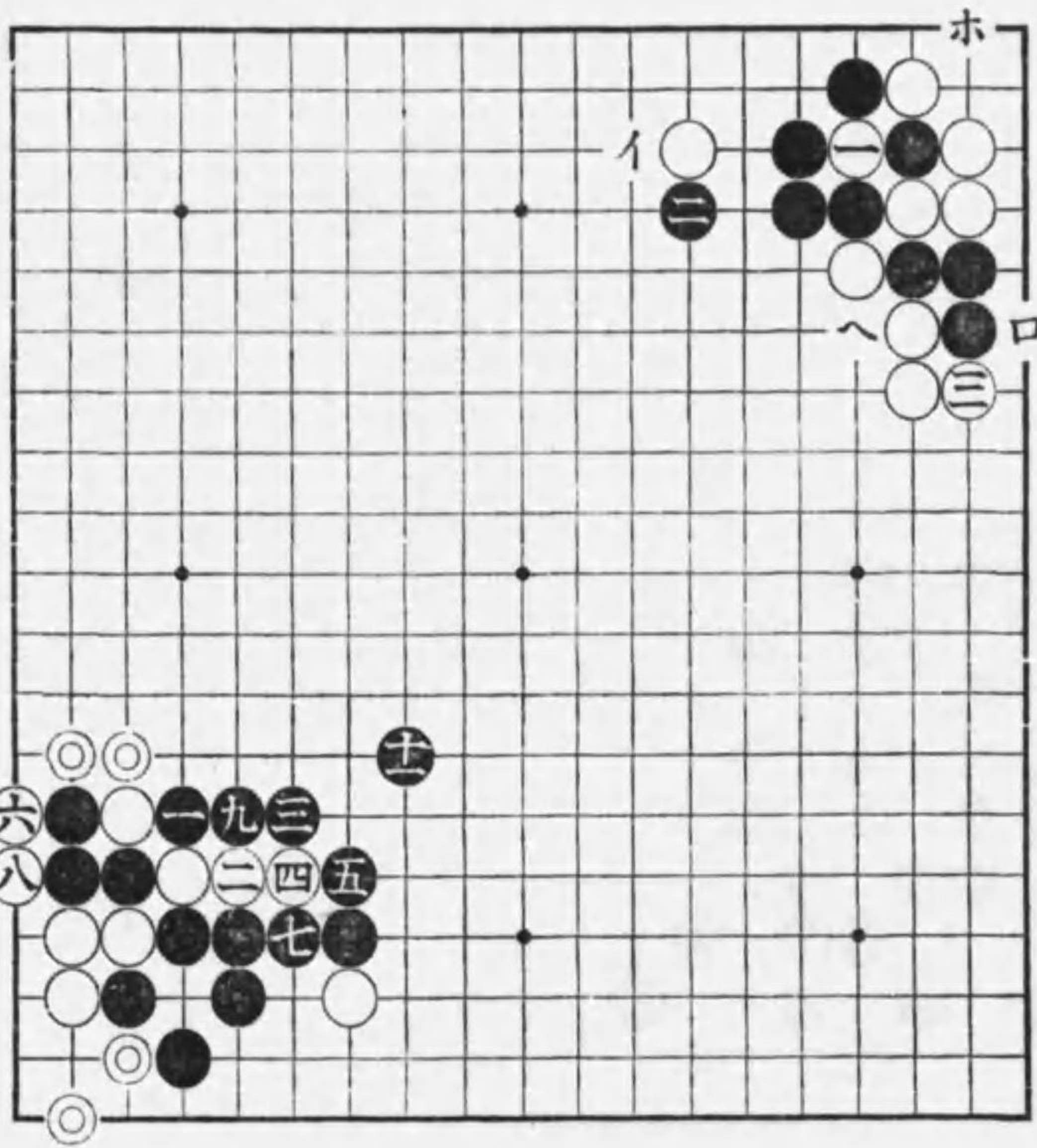


第三圖 丙 劫トル

第三圖 丁 劫トル 同

▲第四圖(甲乙)

白五不可、第三圖(丁)に於ては黒が劫を取つた時五(本圖三の處)と約えなければ、本圖の如く直ぐに三と約えたらドウカ一三と約ゆる理由は前に言つた通りである。然らば黒は直にイに約え込でも宜いけれども、先づ普通から言ふと、一旦劫を取つて而して白口に掉ねた時黒イに約え込でも宜い。夫から又黒が劫を取込んだ時分に白ホに掛粘ぐとすれば則ち乙圖のやうになつて了ふ。さうなつては颯ぱりイカヌ。其理由は白は三目を擒にする爲めに◎印四着を費やして居る割合で、一著無駄が出て居るからである。或は黒劫を取込ますにへの截味を含んで單にイ印に約えられてもイカヌ。要するに本圖に限らず、敵に劫を取込まれて粘がねばならぬと云ふのは即ち先手で一ツ回まされる譯だからドウしてもイカヌのである。但し黒には劫を取込まず、又イにも掉ねずして乙圖の如く直に一と截り三と引ッ掛けて絞る手段あることを承知して居て貰ひたい。



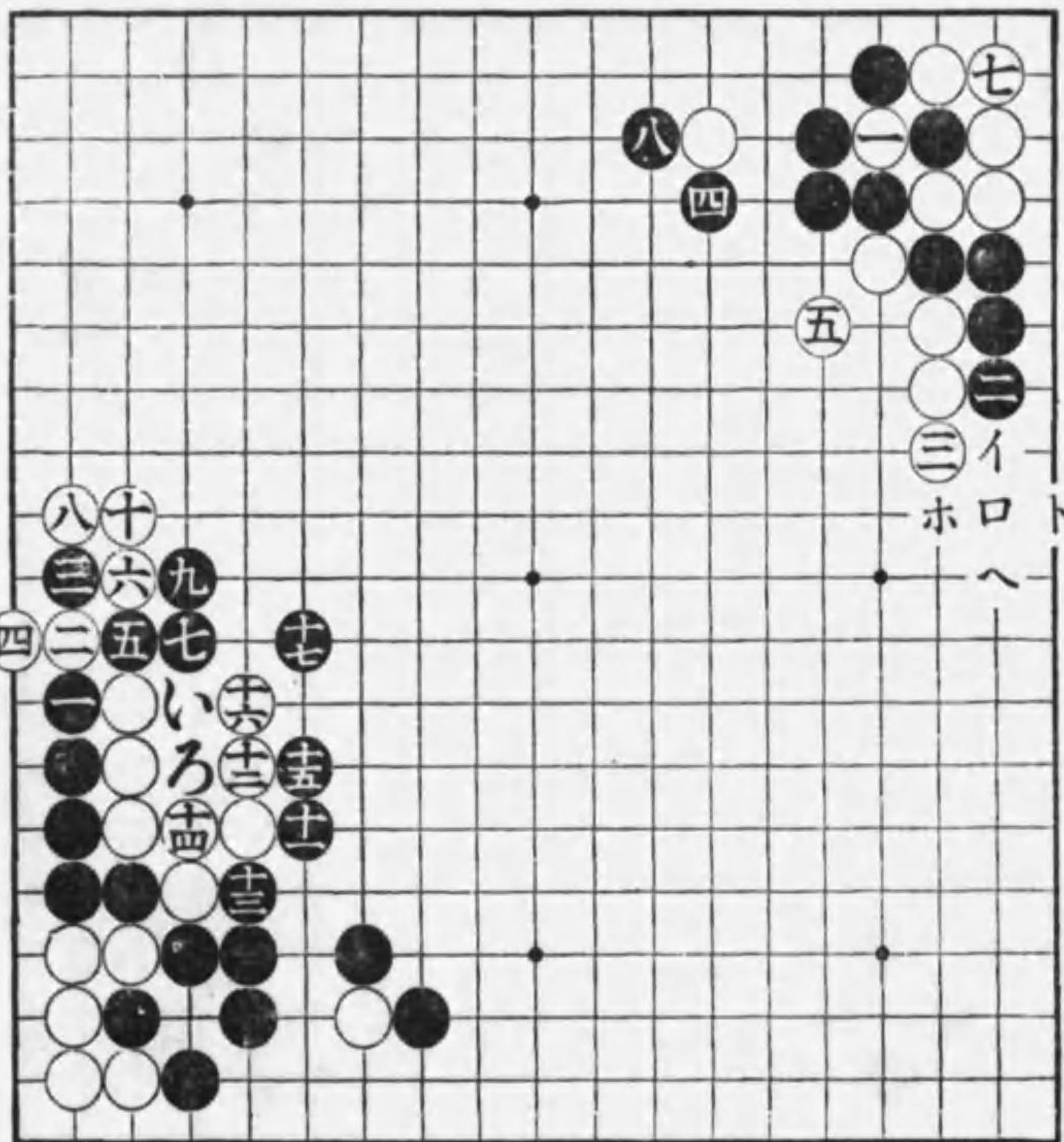
第四圖 甲

第四圖 乙 三目トル

▲第四圖(丙)

黒二は棄石、此形に於て黒二と泳いだ手段は敢て之を逃出さうと云ふのではない。前圖の如く打つと、他に急場がある時白に手を抜かれる虞れがあるから尙一ツ二と匂つたので、損害は損害であるけれども白は一寸此處は手を抜くことが出来ない。ナゼ斯う一本匂つて置けば、白が手を抜くことが出来ぬかと云ふに、假に白が手を抜いたとすれば黒尙ほイに泳ぐべく、白に約ゆるより外ない。其時黒ホに截る手もあるが先づ以てへに挟み而して白トに下つたとせよ。其結果は参考圖の如く四目を犠牲にして外勢を張られて了ふ。右の手順中、黒十一の時白十二に行びずして十六に飛ぶと黒十四に投り込む手もあるけれども、極く平凡に、に出て白十二の時黒十四、白ろ、黒十三と中で、劫にすることが出来る。故に白は圖の如く十二と行びる外はないのである。夫れから初めに戻り黒三に預けた時白五に粘ぐとすれば四に亘られて了ふ。勿論此儘ならば白十に掛けてドウなり、カウなり攻付けることが出来るけれども、附近の模様によつては凌がれて了つて白が悪いことにならぬ。故に本圖の如く二と更に一着泳がれた以上は多くの場合白は手を抜くことが出来ぬのである。因つて急場があれば黒は二と更に一ツ棄石を打つて他に先鞭を着ける心得が肝要である。

第四圖 丙 劫トル

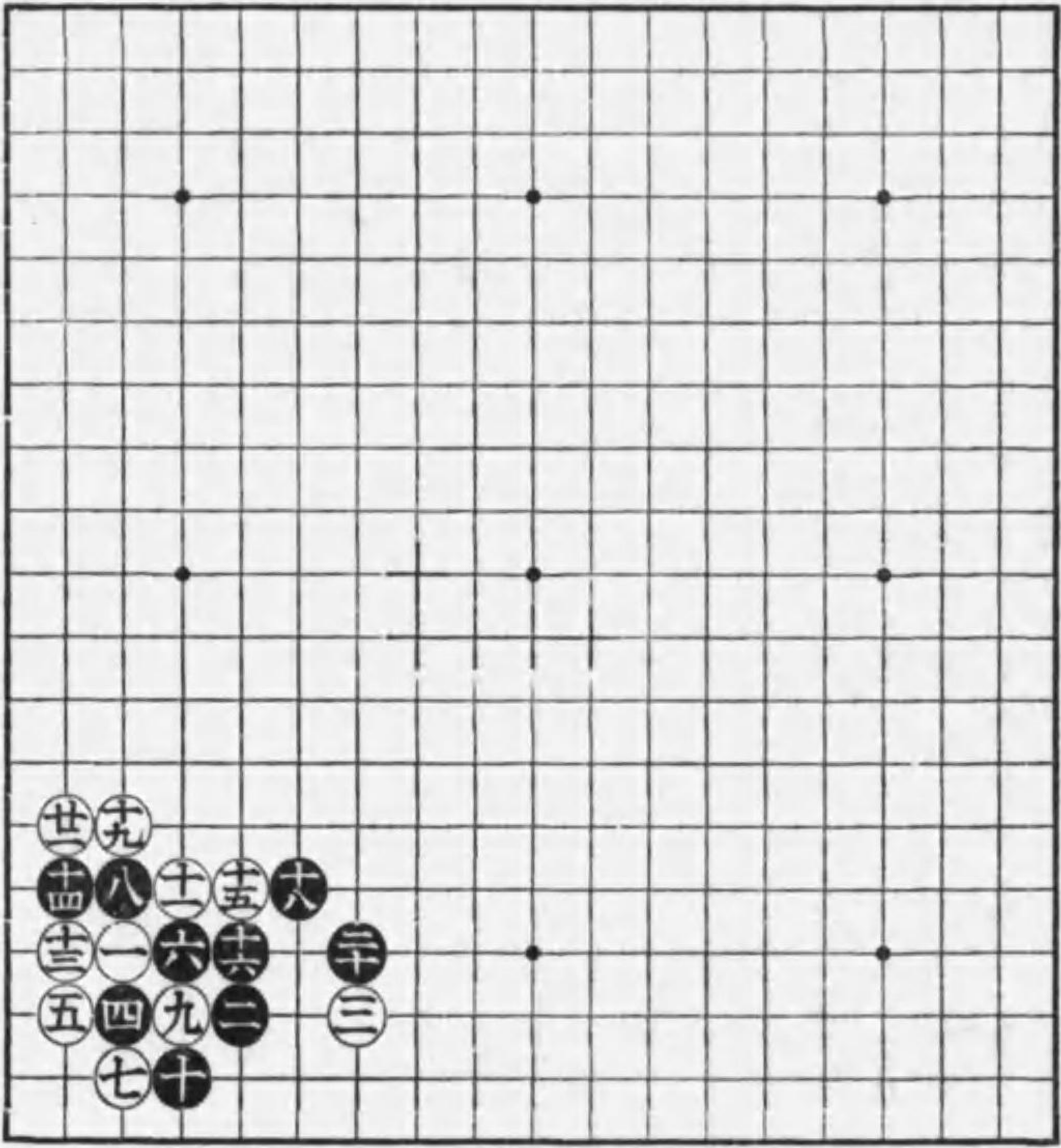


参考圖

▲第五圖(甲)

黒二十悪し、白十五の手で十九に縛ねるのは筋違ひであるからイカヌと云つた。今度は第二策即ち十五と行びる手段を示す。黒二十は悪い。八、十四の二目を棄てる積りならば、能ふ限り棄石を働くやうにして棄てるのが原則である。然るに我不關焉と二十と打つて二一とビシリと一手で取られて了つては堪らぬ。棄石に二ツの理由がある。第一は成べく棄石の威力を多くして棄てる手段である。即ち棄石の手数が多くなればなる丈け、敵は自己を用心しなければならぬ弱點を生ずるのである。因つて其弱點に乗じて棄石の効果を収めるやうしなくてはならぬ。第二は割合上の棄石である。夫れは直ぐ取られても構はぬ。敵が直ぐ取つた爲めに、其處に其石を取つた以上の無駄石が出来る場合であれば棄てゝも宜い。然るに圖の如く二十と打つて二一と味も何もなく取られて了つてはドチラから見ても理屈が立たぬ。直ぐ棄てるならば次圖の如く打つべきである。

第五圖 甲 劫トル同



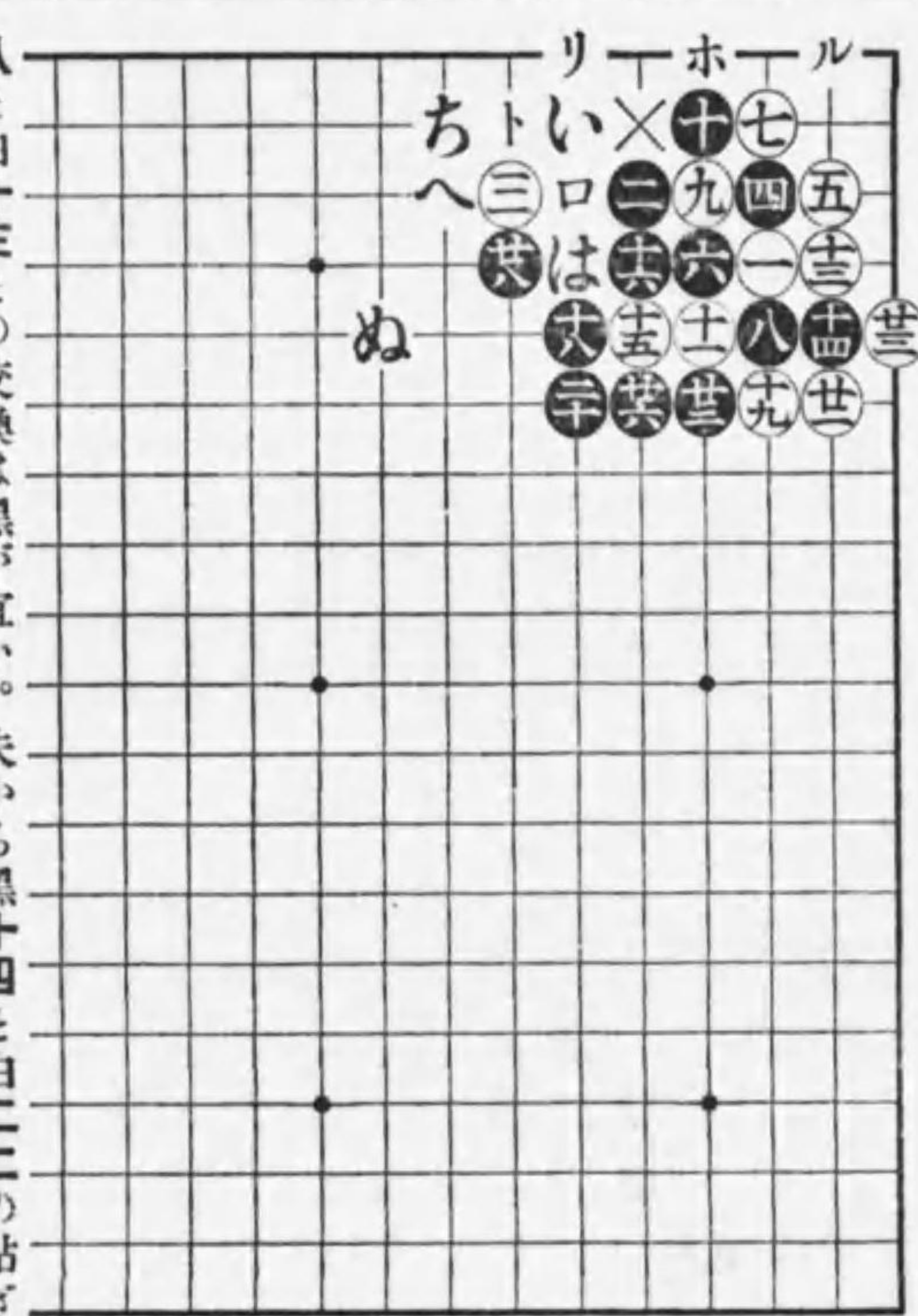
▲第五圖(乙)

黒軍の外勢厚壯。前圖に於て注意した通り八、十四の二目を棄てる積りならば則ち本圖の如く二十と行びるが宜い。ソコで白が二一に約ふれば結局黒二八の掛粘となる。斯くて白若し×印を載る結果は黒い、白口、黒は、白ホ、黒へ、白ト、黒ち、白リ、黒ぬとなる。斯うなると白は隅の實利を得たとは云ふもの、其地は僅々十七目に過ぎざるに反し黒は實利を白に與へた代りに厚壯なる外勢を張ることが出来るから此れは黒の方が宜しい。蘇つて黒二八までの碁勢に就て一言すると、白は八、十四及二四の三目を取つて居るけれども夫が爲に十九、二十一、二十三、二五の四着を要して、一手無駄になつて居る。夫れがモウ既にイカヌのである。要するに黒に三、二四、二六と絞られたのが、白の失策である。因つて白二一の手で二二に粘ぐとすれば黒四に劫を取込み、白ルに掛粘いた時黒二八に掛粘ぐのである。是又黒が悪くない姿勢である。と云ふのは例に依つて割合勘定から云ふと、黒

▲第五圖(丙)

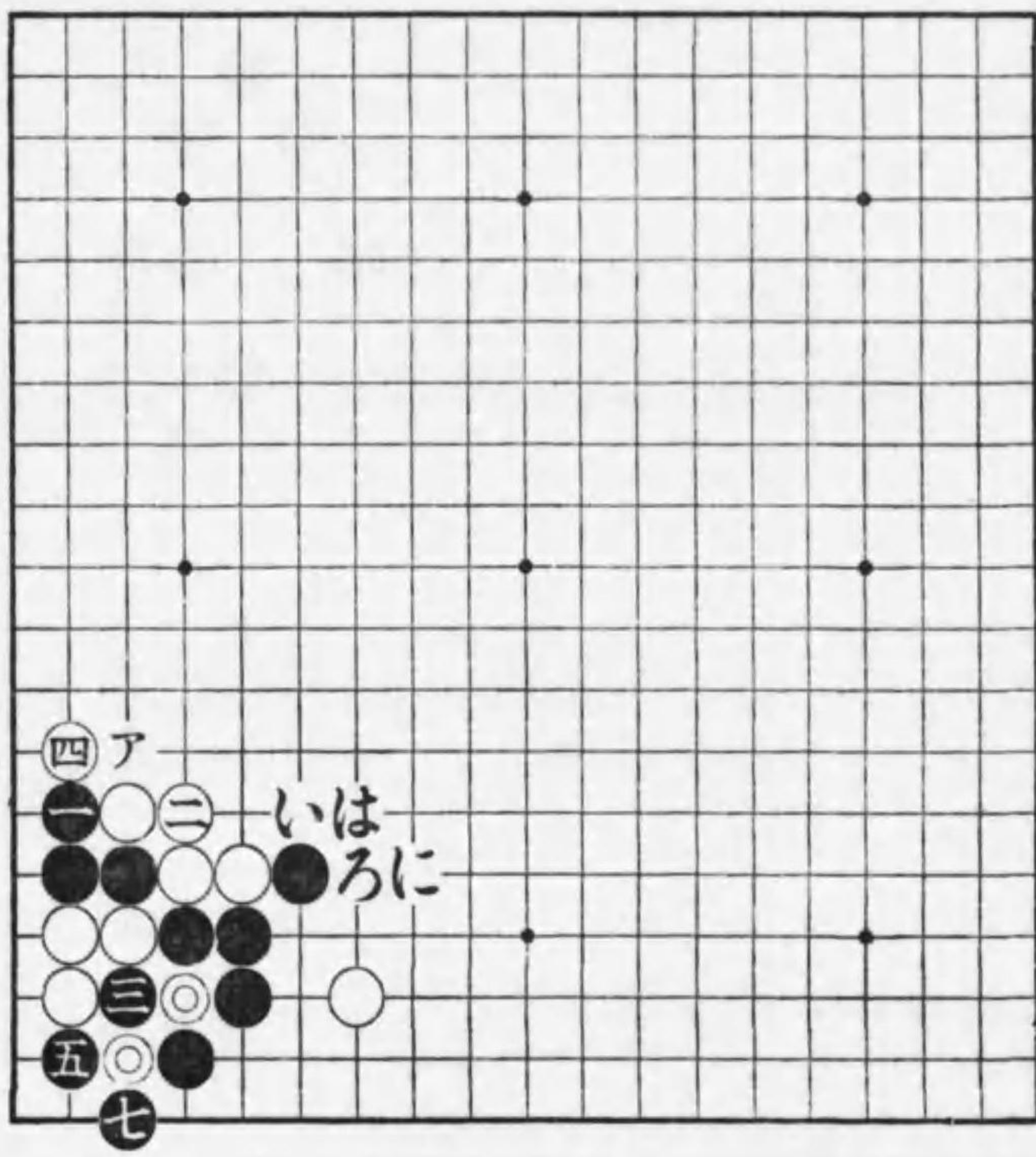
黒一棄石の利、本圖黒一は前圖に於ける二十の變化である。是れは前に説明した通り、棄石の活力を殖やし、而して敵をして之を取るに多大の手数に掛ける其間に儲けやうと云ふ手段、即ち前圖に於て二十と行び切つたのは所謂利算、即ち割合で打たうと云ふのであるが、此れは味で打たうと云ふのである。白二の手で初學者は能くアに行びたがるが、夫は非常に悪い。何故かと云ふに假に白が後に二に粘がんならぬ箱目になつたとせよ。左すれば直に四に締めて三目を取るべき筈であるのに、殊更にアに曲つた形になるからである。乃ち白アに行びるは形の如くして形に非ず、圖の如く二と粘ぐのが形に非ざる如くして却て形である。扱て黒七までの結果は白から必ずいに締ねられ、黒ろ、白は、黒にとなるものと見做さぬならぬ、之を單純なる割合勘定から云へば、白は◎印二目を打抜かれる上に右邊の白一着が殆ど役をせぬ形になつて居るから、一寸黒が宜いやうであるが、併し白は中原に大規模の勝形を得て侮る可らざる勢力を有つて居るに反し、黒は僅に一部の側面に於て勢力を得たに過ぎないから、是れ

第五圖乙



八と白十三との交換は黒が宜い。夫から黒十四と白二二の粘ぎとの交換は無論黒が悪い。さうした曉白十五と突出して十八と約えられた姿と夫から白三とヒドイ處を覗いて、二八と姿勢好く掛粘られた此二ツの交換に於て白が非常に割を喰つた勘定だから此役黒の利であることは明白である。

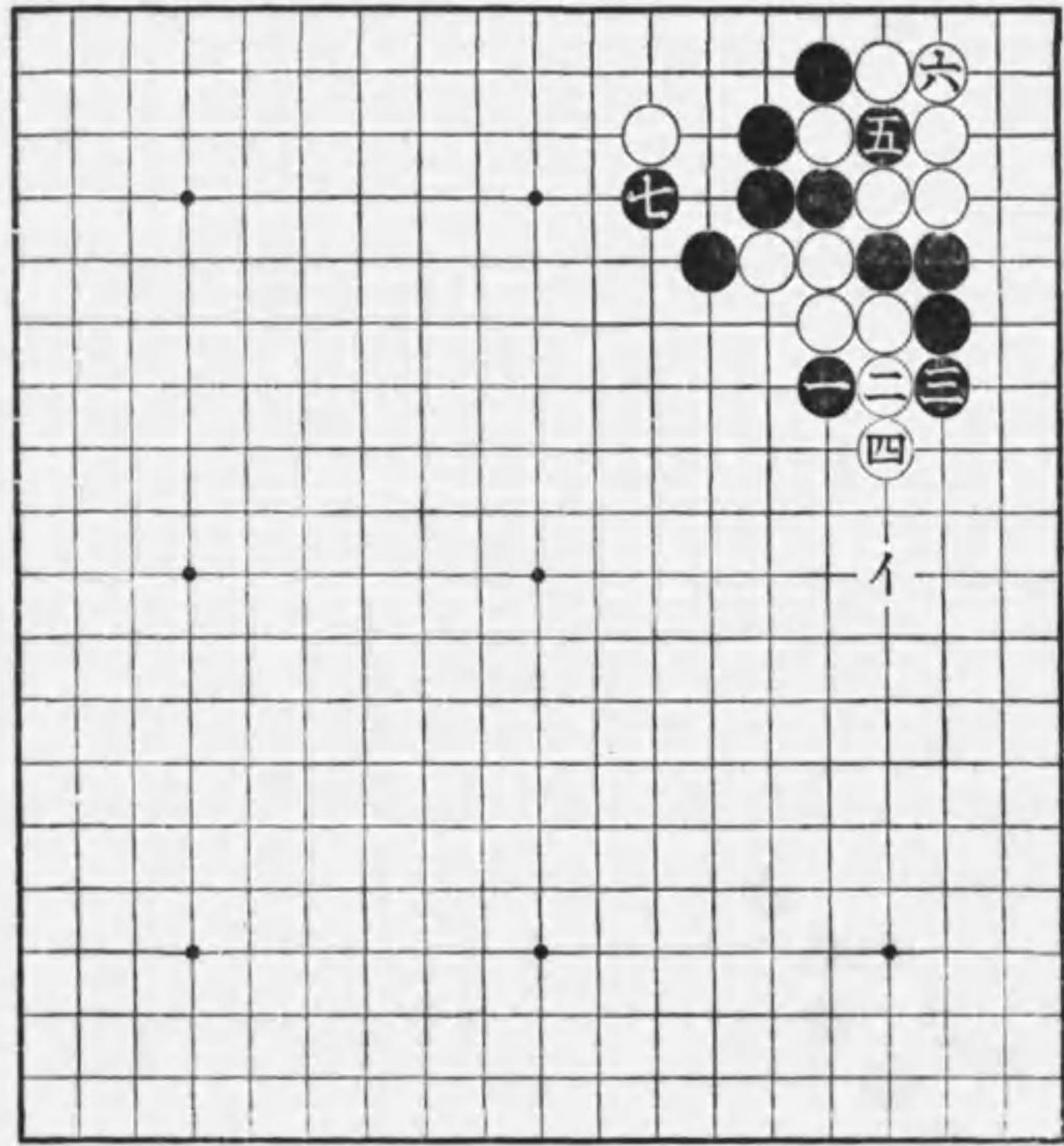
第五圖丙



は餘り宜いとは謂はれぬ。左りとて悪いとも謂へぬ。要するに第五圖(乙)白十五の行びに對する黒の打方は乙丙丁チラが宜いかと云へば乙の方が宜いと謂はねばならぬ。何故ならば乙圖に於ける黒二十の手は即ち截つて絞つて凝らして打つぞ、夫がイヤなら丙圖の如く白の姿を悪化して、さうして三目を棄て、打つぞと斯う云ふ兩睨みになつて居る。然るに本圖黒一は只石を殖やして棄てるぞと云ふ一着眼たるに過ぎぬからである。随つて乙圖の方が着眼も高く、手段も亦廣いから如何なる場合にも應用して差支ないが丙圖の如きは餘程場合を選定せぬと到底乙圖以上の効果を收めることは出来ない。からして乙圖の如く打つを普通と心得て貰ひたい。

▲参考圖

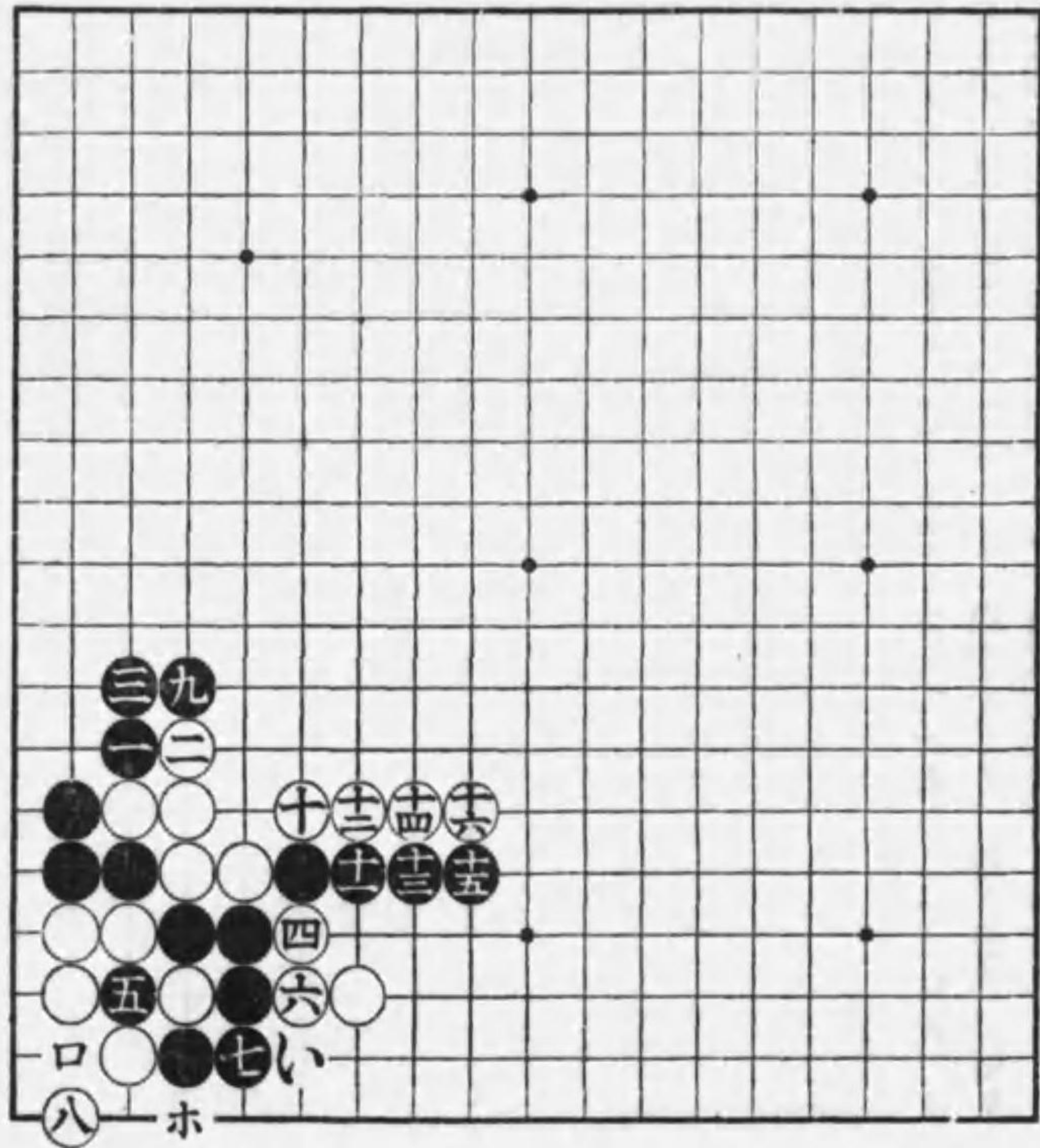
黒一は姿の如くして實は悪い。却て白の姿勢を好くして遣るやうなものだ。加ふるに二、四、と一と三との間を縦貫されたのは無残である。一と頂けて三と更に手数を殖やしたと云ふ丈けで、矢張り取られて了ふのだから黒一の頂けはサツパリ意義を成さぬ。黒七の時假にイに飛ばれてもイカヌ。



参考圖

▲第五圖(丁)

黒一無謀、黒一は無理である。以下黒五までは必然の手で、白六は良手である。若し單に八或は其他の弛み手を打つと、此黒の活力が多い丈けに、色々に働いて來られるから、斯かる白兵戦の場合には、圖の如く嚴しく追つて打つに限る。黒はいに掉ねる手もあるが、白に劫を取込まれると、黒の方には劫がないから七に粘ぐより外ない。ソコデ八に掛粘がれて了ふから七と堅く粘ぐ方が宜い。白八の手で口に粘ぐも同じやうに見えるけれども、斯う云ふ場合には八と掛粘いで置く方が宜い。何故ならば後に攻合の時にホに掉ねて兩劫の形でビシ／＼攻合ふことが出来るからである。扱て白が八とアマツタ時分に黒は九と曲つて此白を攻め且つ自家の形勢を占める手段に出る外はないが、其結果十以下十六と劇しく捲くし立てられては黒は殆ど仕様がな



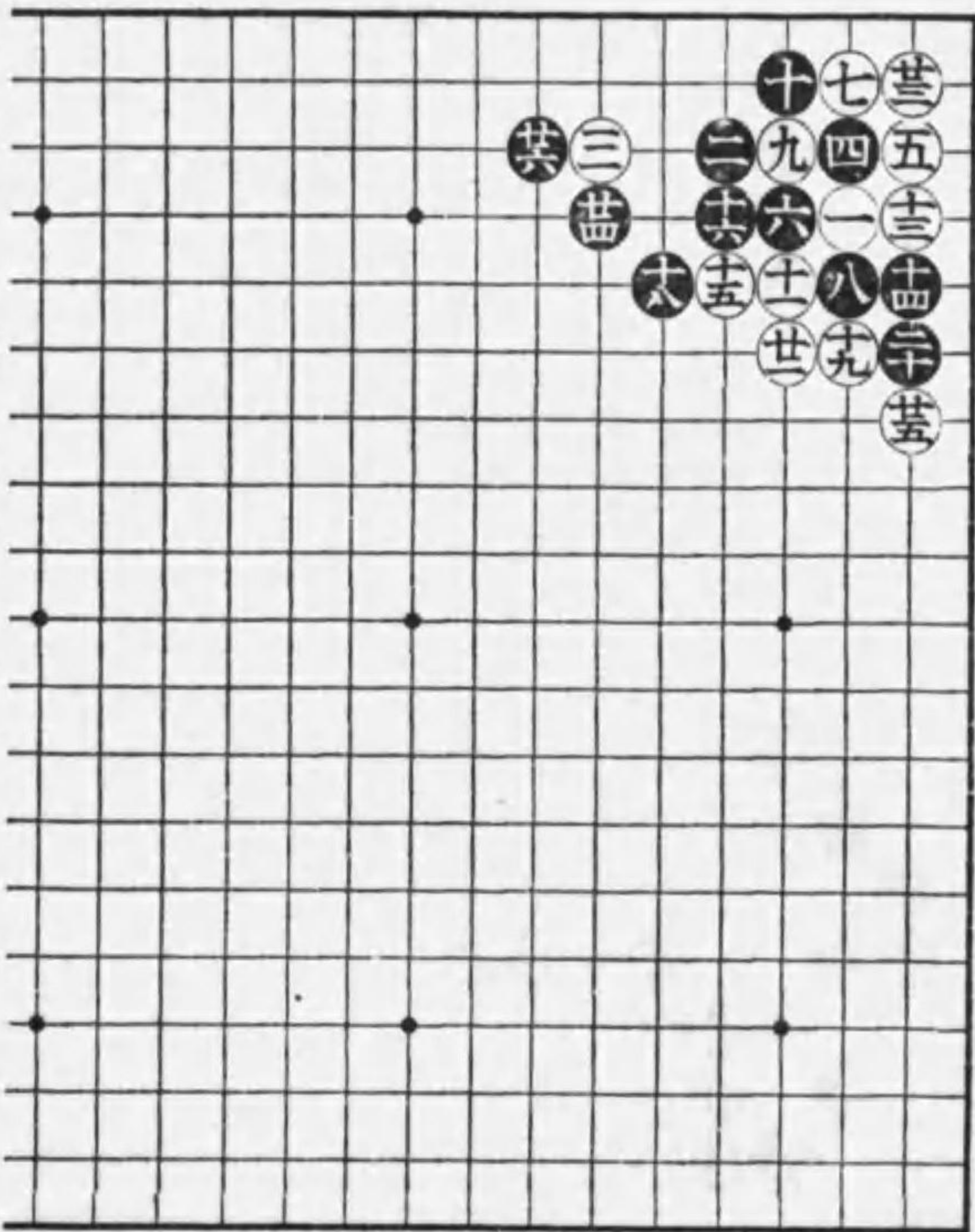
第五圖丁

▲第五圖(戊)

白十五、惡因、本圖の如く二二の手で劫を取込む結果は黒二六の振廻りとなる。此利害如何と云ふに白十九までは黒白一利一害として、黒二十と白二五の交換は申す迄もなく、黒が悪い。けれども白三と打つて二六と抱えられた損害は大變なもので、只持込た姿である。況や二二と劫まで取込まれて二三とアマツて居るから此れは白がサツバリいかぬ。ドウして白がコンナに悪くなつたかと、本へ立戻つて詮義して見ると、抑も十五と行びた手が悪いからで、爲めに二二の粘ぎを餘儀なくされた譯である。此場合二二の粘ぎは良手であるが、本来から云ふと二二は愚集の手で、姿を成して居らぬ。扱て何故に十五の手が悪いかと云ふに、假に白十五、黒十八を無いものとして見よ。此れならば無論白の方が宜い。けれども十五とダメを曲つてボンと十八と縛ねられた姿はヒドイではないか。詰り此ダメ曲りが祟つたのである。斯う云ふ無駄石が出るやうでは決して良果を得られる筈がない。

第五圖 戊

●劫トル ○同 ●同



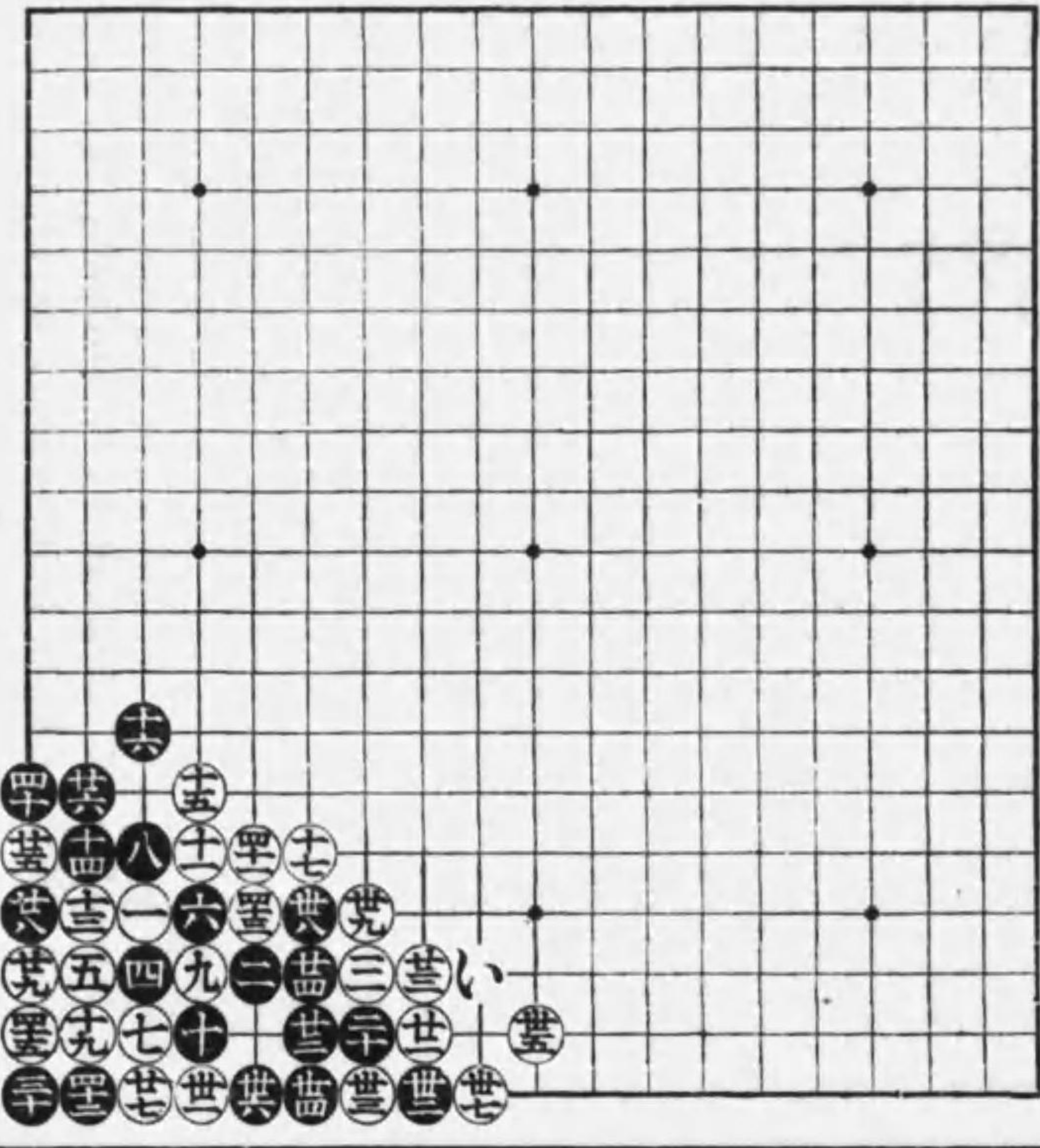
い。要するに白十五の悪手が累を爲して此場合二二は良着ではあるが、只其場凌ぎの良着たるに過ぎずして、詰り愚集の結果になつた丈け、白が不利であると断定して差支ない。

▲第六圖(甲)

元來白七と縛ねるのが無理手であるから、ドウ敵が變化を試みても、黒が成功を贏ち得なければならぬと云ふ所から、十一と截られた時に、先づ十二と劫を取込み、夫から短兵急に十四と約え込たのである。ソコで白も亦急に應ずるに急を以てするの筆鋒で第一策い縛ねの手段は元來筋違ひであるから不成功に終つた。夫から第二策四一の處へ行びる手段も亦前述の如く悪手と化して失敗に終つた。因つて第三策即ち十五と行びる手段如何と云ふに、黒十六、白十七までは普通である。茲で黒には色々打つ手がある。抑も黒が十四と短兵急に約へた旨意は固より戦ふに在る。故に圖の如く包圍されたかは第一着に此隅の白と攻合うと云ふ處に着眼せなくてはならぬ道理であるから、先づ十八の手で九に粘ぐ成行を示す。白十九は二七に下る方が、活が残る丈け宜いけれども、攻合の時には後の活より眼前の手数を延ばす方が緊急である。先づ十九と粘ぐ方を示すのが順序であらう。白二三

第六圖 甲

●劫トル ○三日ツグ ○劫トル



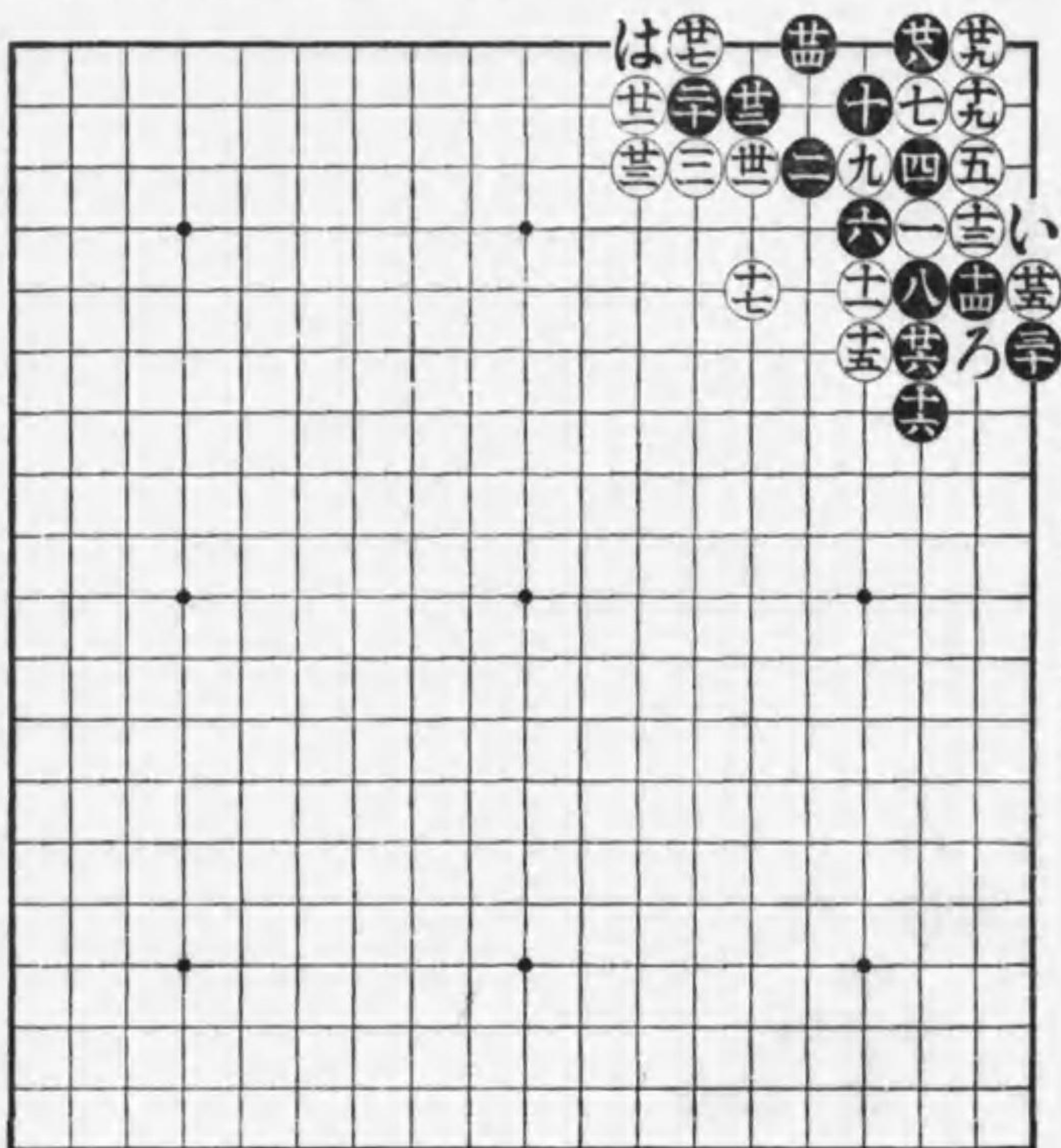
はいに掛粘ぐ方が動くけれども三、十七の聯瑣が手薄であるから此處では堅く二三と粘ぐ方が宜い。ソコデ黒二四、此れは手数を延ばす上に於て一番必要である。白から此處に打たれると大分手数が詰まる。白が二五と縛ねたのも旨いが二七と下つたのも旨い手である。若し白二七の手で三六に置くと黒三一、白二七、黒二八と打缺かれて白が負けになる。黒に先きへ三一に下らせてはドウやつても攻合は白がイカヌ。即ち白は二七黒は三一此處は此攻合の天王山である。ソテデ白二七と下つて夫から三一と曲り込だのは好い手順である。黒三二の手で直ちに三六に約ふると、白三三、黒四十、白三二、黒四三、白三四となつて兩劫で黒が生捕られて了ふ。因つて三二と縛ねる外はないのである。白三三此れはこの攻合の勝敗の岐る、一着で最も肝要である。若し此打缺を怠つて單に三五に應ずると黒三六に約へる。ソコデ三五に打缺けば同じ事のやうに思ふか知らぬが、決してさうではない。其時黒が三四に取つて自分の手数を一手縮めて呉れれば同じことになるが。黒は三四に取つて呉れない。知らぬ振りして四十と詰めて来る。さうすると白は三七に取つても更に三二に粘いでからでなくては三四に中てることが出来

ない。即ち茲に這入れぬ手が一手生ずるから其豫防の爲め三二と縛ねた拍子に三三と打缺くのが肝要なんである。以下四五となつて黒が劫倒れになるのである。

▲第六圖(乙)

黒二四の變化、前圖に於ては黒は手を延ばさうとして、二四の手で本圖に於ける三一の處を粘いで失敗した。因つて今度其遣方を變へて二四と眼を持つた。夫れでも白は矢張り二五と縛ねんならぬ。此の縛ねが中々良手である。然るに此縛を閉却して、黒から先きへいに縛ねられると、或意味に於て白の方が一手不足を來たす虞れがあるからして、白は詰り優先權を占める意味で、此縛を先にするが肝要である。此時黒が二六の手で前圖のやうにろ印に曲るのは、取も直さず二五の手を只一手打ち得された勘定になるからして、圖の如く二六と粘いで十一、十五の二目を半身不隨にしたのである。以下黒三十までは當然の手で、白三一は肝要である。此處を黒に粘がれると手数を延ばされるから、白は此粘目へ中て、攻付けなければならぬ。初學者或は言はん、黒二六が悪い。此手でも印に曲つて居つたならば此攻合ひは黒が宜いであらう。夫れは一を知つて二を知らぬ者である。假令ひ

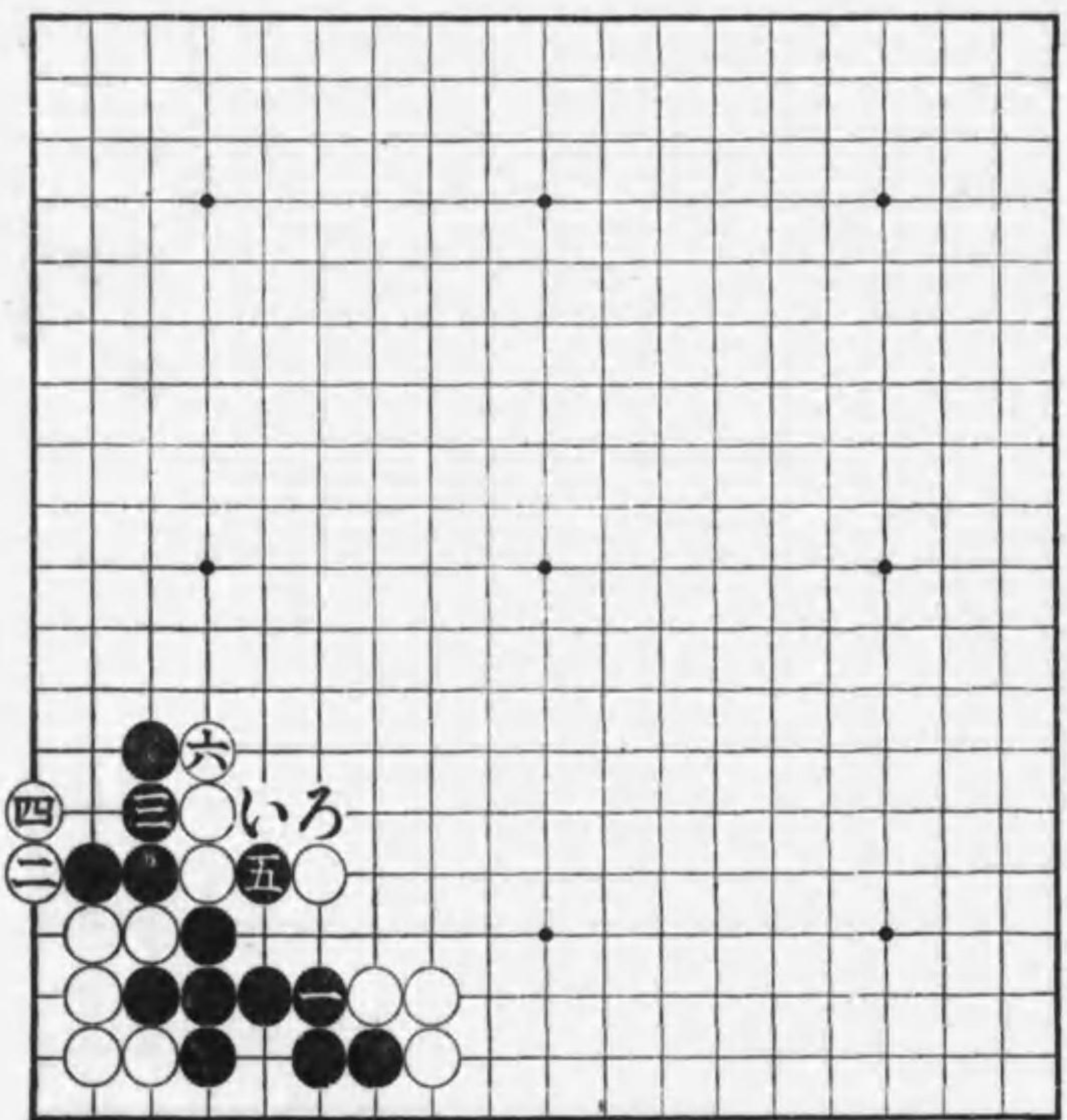
第六圖 乙 劫トル 劫ツグ



黒がろに曲つても白はヤハリ二七に綽ねる。ソコデ黒二八、白二九、黒三一に粘いだ時分に白はには粘が如何、ドウやつても黒がイカスではないか。扱て本に戻り事の順序上、白が三一に詰めたとする。さうすると五以下の白は一見四手よりないやうであるが、併し前に二五の綽ねがあつて黒の方から這入れぬ手が一手ある勘定だから實は五手であつて、此攻合ひは矢張り黒が負けだ。

▲第六圖(丙)

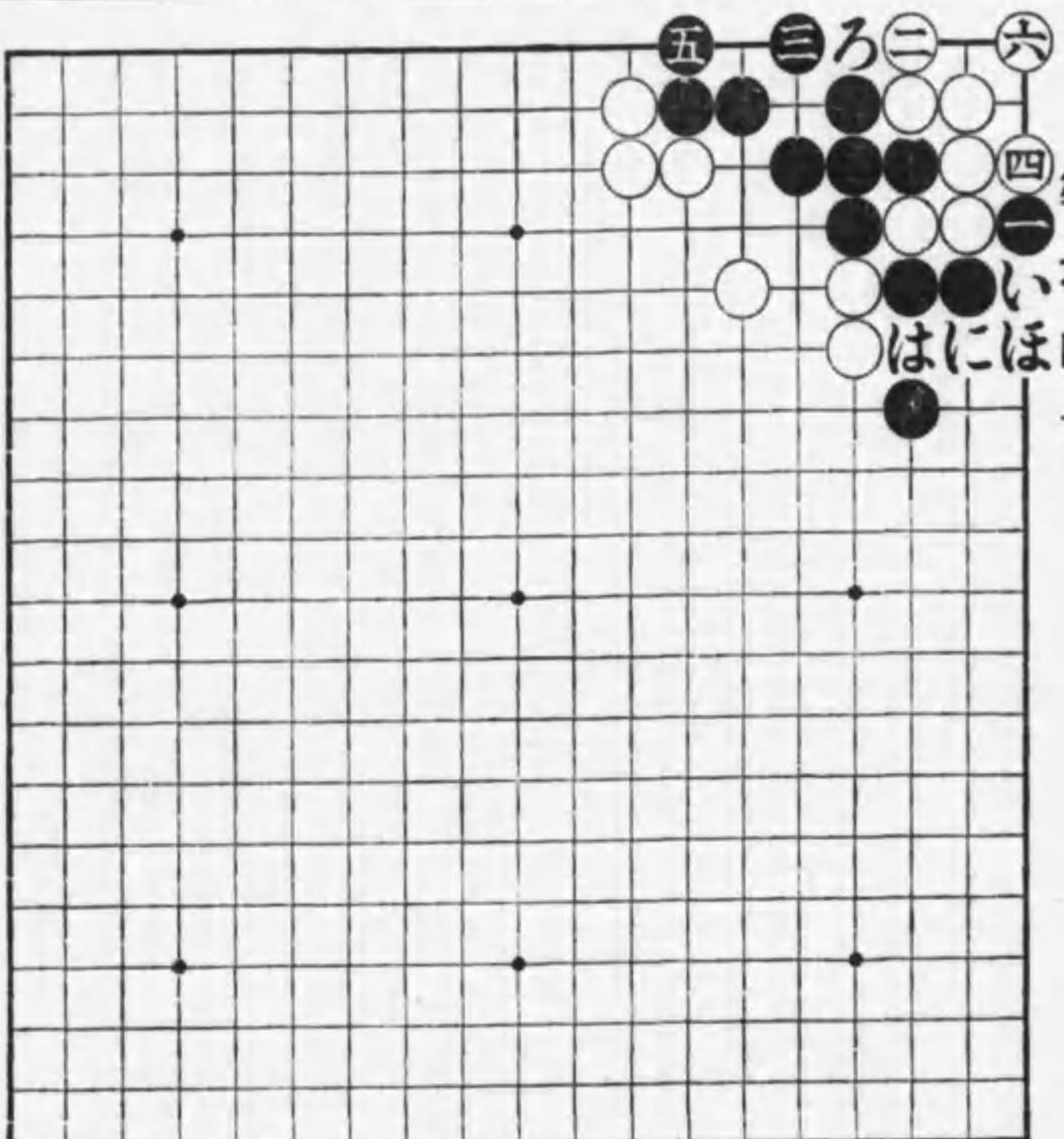
黒五の違算。本圖の如く黒一と粘ぎ而して白が二と綽ねた時分に三と粘ぐ手段もある。ソコデ白が手数を延ばすべく、四と出た時分に五と綽込まうと云ふのが眼目である。是れは白が若しもいに約えなならば黒ろに截つて術を施さうと云ふ手段で斯う遣つて見たのであるが、圖の如く六と押されては目算外づれで矢張り黒がイカス。



第六圖 丙

▲第六圖(丁)

黒一善し。前に示した通り、白からい印に綽ねられてはドウ攻め合つても黒がイカス。因つて敵に取つての要處は味方に取つても亦要處であると云ふ理屈で、黒一と綽ねて見たのである。斯う打たれると、白は大に面喰はざるを得ぬ。此時白の打つ手はマア二と曲るのが順當である。何でも斯う云ふ處は同じ手数でも、結局黒をして直接手数に關係のない「一ノ一」即ち六の處に置かせると云ふ趣向が第一である。「一ノ一」に置かせると第六圖(甲)の如く自然二目點になるからして劫の時分に、其二目を取るから劫立を一ツ助かることが出来る。夫れに由つて攻合ひに勝つことも出来る。而已ならず現在地域に於ても二目の利を占めることが出来るから極めて大事である。からして白は二と下つたのである。黒三も亦良手である。若し此三の手でイキナリろに約ふると、先づはに突出され黒にの時ドコからでも任意に攻めて來られるから黒が悪い。所が圖の如く三と眼を持つて居れば、白

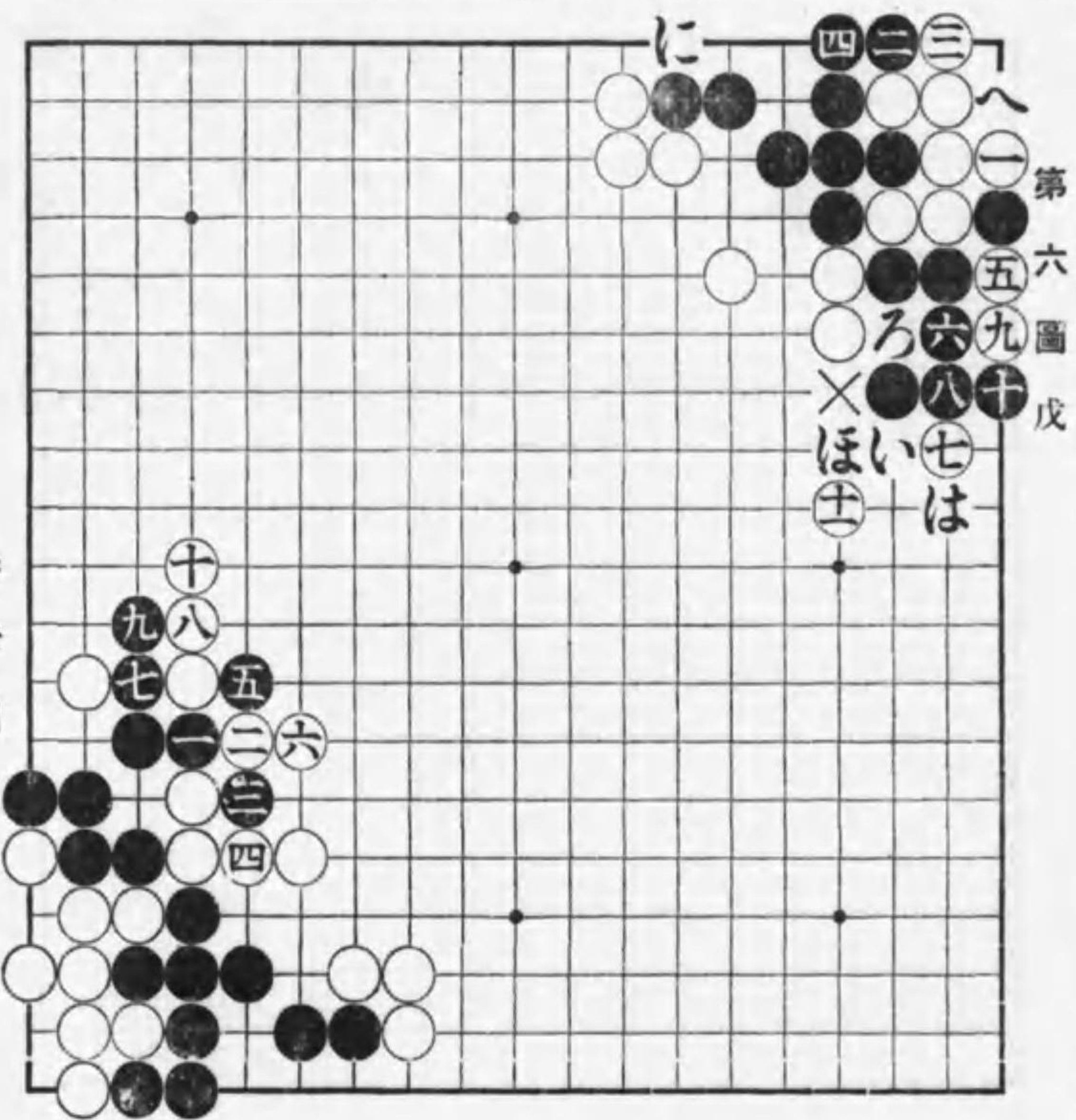


第六圖 丁

が此黒を攻めるには、此攻合ひに直接響きのない處、而かも一ノ筋の不利な處、即ち五の點から攻めるより外に仕様がなない。夫れだけ黒に取つて利益である。扱て白四の手で若しも五に縛ねて此黒を取らうとする、黒にはに粘がれて了ふ。此結果は白四、黒六、白五に縛ねずして先づ四と約えたのである。然るに黒若し五の手で六の處に點して取らうとすると白いに一目を取つて後ろ印に突込んで攻めて行くから是れは黒が負けになる。因つて黒五、白六の活々となる外ないのである。斯うなつては形勢は白に在る。其理由を云へば黒一、白四の交換——實は此交換は白が得であるが——を除いて、白は七手で活きて居るに反し、黒は九手掛けて二目しか眼がない。即ち二手餘計掛けて居る勘定だから、此活々は黒の損たることは明白である、ソナナラ二手餘計掛けて居る丈けの効果が外部に顯はれて居るか云ふと、右邊には今にも死にさうな弱石三ツに對し、白は六ツの同勢で、其勢力は逆も比較にならぬ。

▲第六圖(戊)

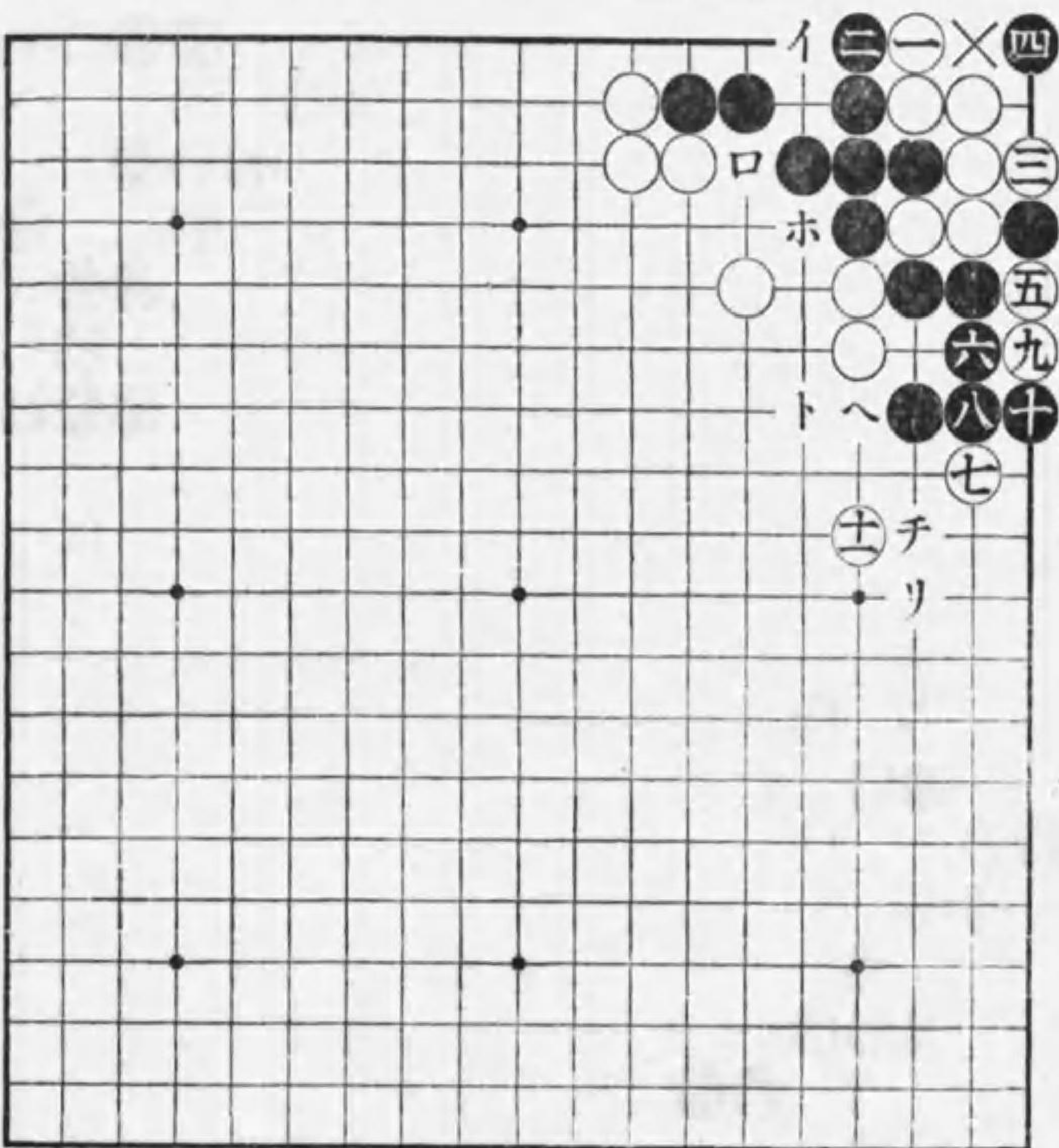
白一の策戦。白一は前圖の如く打てば活きた上に形勢をも占めることが出来る。(但しさうやつても黒の方に無理に取掛けに行く手がないでもないが、夫れは不利である。後圖に示す)が本圖は殊更に隅を棄て、外部で勢力を得やうと云ふ手段に出たのである。白七は良手である。此時黒若しに押せば白八、黒九、白九と互り而して黒はに約へた時白にへ縛ねて攻合ふので、此攻合ひは黒が負である。故に黒は隅の白を取るには圖の如く八と打つか、或は九に約ふる外ない。九に約ふるとほに掛ける。黒はへに打つて取掛らんとならぬ、さうすると白から八に突當られて先手で塗著けられる上に、劫残りとなるから堪らない。去りとて黒に印に突出して出路を求むれば則ち参考圖の如く益々外勢を張られ、て始末に行かぬ。其上隅は劫残りで惨々の態である。からして黒は本圖九の處に約ふる手は悪い。ドウしても八とグヅム外ない。ソコデ白九と行びて十と約えさせたのは縦んば黒が七の一子を取つても容易に活きの出来ぬやうにして十一と封鎖しやうと云ふ巧妙なる手段である。斯う遣られては黒は殆んど打ちやうに困る。



参考圖

▲第六圖(參考)

黒二無謀。白一、是れは前に示した通り、極く穏和に活々の手段を取らうと云ふのである。然るに黒は強情にドウしても此白を取らんならぬとあつて、イに眼を持たずして、二と約えたのである。其結果はツマリ劫争であるが、之を第六圖(戊)に較べると、黒四の點を二目にして取る手と現在地が二目殖えて居る丈け、有利の形勢である。尙ほ白には口、ホ等の攻めが利いて居るから、黒はへに逸出しやうとしても直ちにトに約え着けられて其目的を果たすことが出来ない。又黒子に頂越してもりに壓迫されて了ふと云ふ次第で惨々に窘められる。デ辛く手数を殖やして右方を凌いだとしても今度は左方の黒を攻めて來られる。左方は一手違ひの攻合で、而かも劫立の爲に×印へ一子の犠牲を投げ込むに非ずんば、此劫にさへ勝てぬと云ふ形勢であるから、斯う云ふ風になつては黒は惨々の態である。尙ほ白九の行び及び外部に於ける變化の様は前圖を参照して貰ひたい。



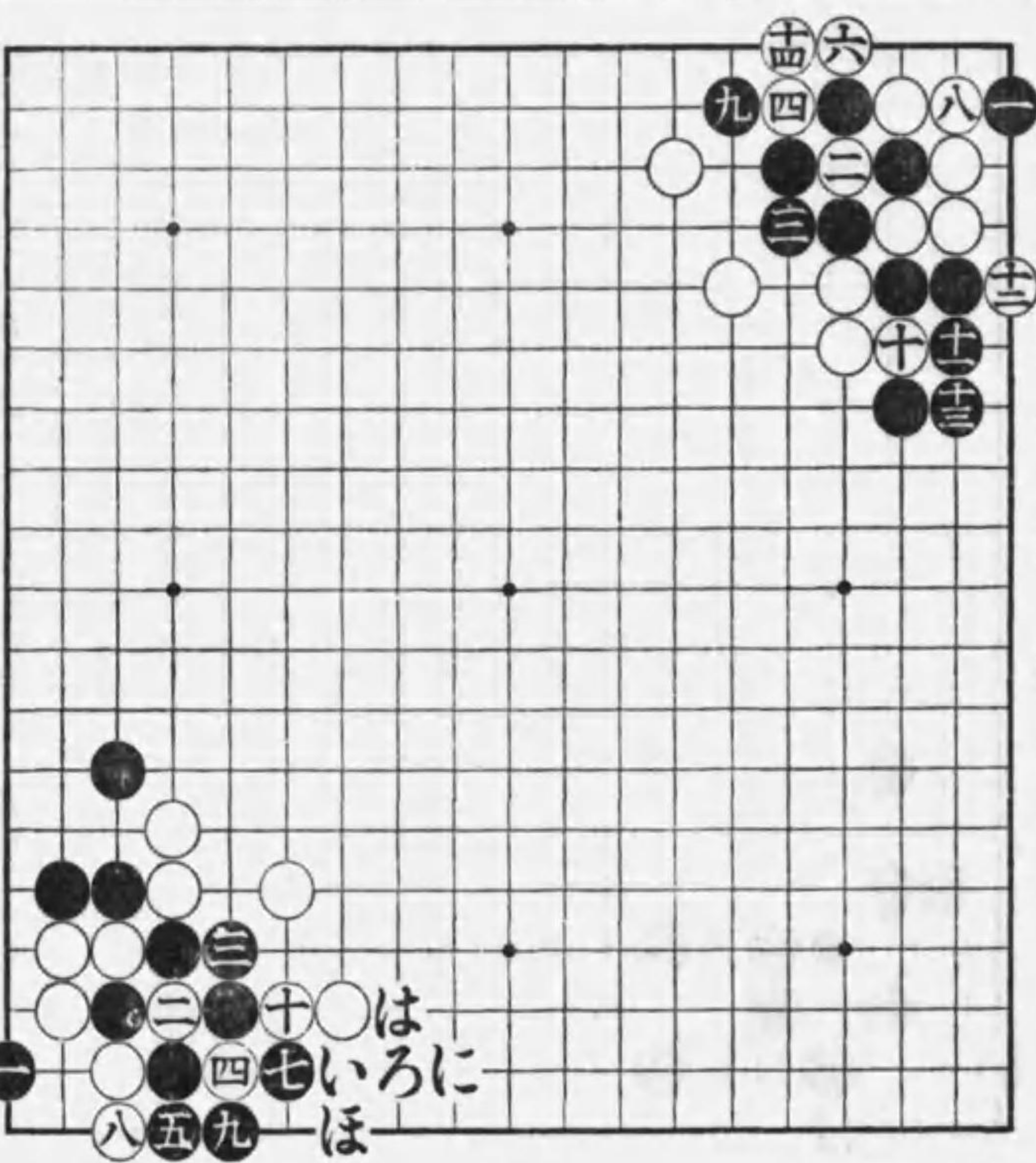
第六圖參考

▲第七圖(甲)參考

前掲各圖は黒一の手で二の處に粘いだるのであるが、夫れではドウやつてもイカヌ、ソコデ圖の如く一と置いたのである。是れも白から二以下八まで應じられ、黒九の時十、十二と打たれ、而して十四と粘がれると十二の一着がある爲めに黒の方に這入れぬ手が出来るから、是れ又黒がイカヌ。

▲第七圖(乙)

黒の作戦、鵜の嘴、本圖の如く黒五と下つたらドウカと云ふと、左すれば白は劫を粘ぐ外はない。さうして八と中て、隅の手数を延ばして置いて十と眼を缺きながら攻めるのが肝要である。斯う遣られてはドウしても黒がイカヌ。假令黒十一の手でイに行びてもろに約えられはの處を截ればに行びられるから何としても手が足らぬ。去りとして黒九の手で十の處を粘ぐとせんが、白からイに約えられ、黒九、白ほと下られて矢張りイカヌ。からして一と置く手のないことは明瞭である。

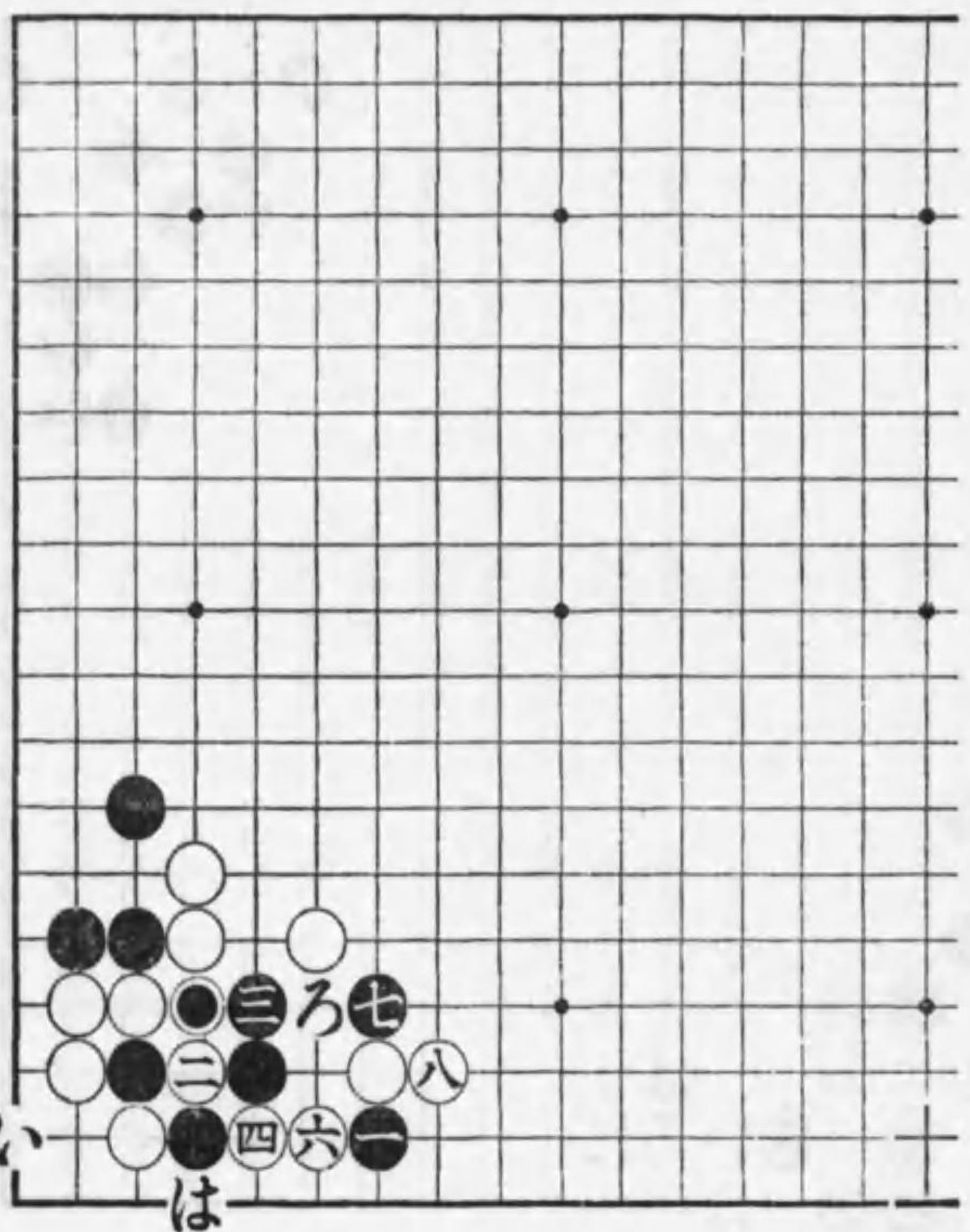


第七圖甲 五劫トルセツグ

第七圖乙 六ツグ

▲ 第 八 圖

黒一は落第。今迄は黒一の手で二の處を粘
 いたり、いの處に置いたりしたのであるが、
 ドウモ成功せぬ。因つて圖の如く一と頂けた
 らドウカと云ふに、是れは詰り茲に勢力を得
 て而して隅に向つて術を施さうと云ふ手段で
 あるが、併し是れは當面の争點をソツチ除け
 にして、一騎打ちで外に向つて戦ひを挑む譯
 であるから、敵に其手段を看破されて、夫れ
 に應答されずして、直ちに二と劫を取込まれ
 ては黒の作戦は鵠の嘴だ。サア斯う遣られて
 は今更ら黒一の行動を續ける譯には行かぬ。
 ●印の黒は大事な戦ひのモト石であるから、
 之を打抜かれては堪まらない。三と粘がざる
 を得ない。ソコデ四と厳しく截立てられた結
 果、白八の引きとなつた。茲で情けない哉黒
 に劫立がない。ドウモ仕方がないから、假に
 黒ろに粘ぐとすると、白は一旦二に劫を取込
 む。縦んば黒が此劫に勝つた所が、はに互ら
 れて了ふ。さうなつた曉、白には下の方で活
 と實利を占められるに反し、黒は實利も根據

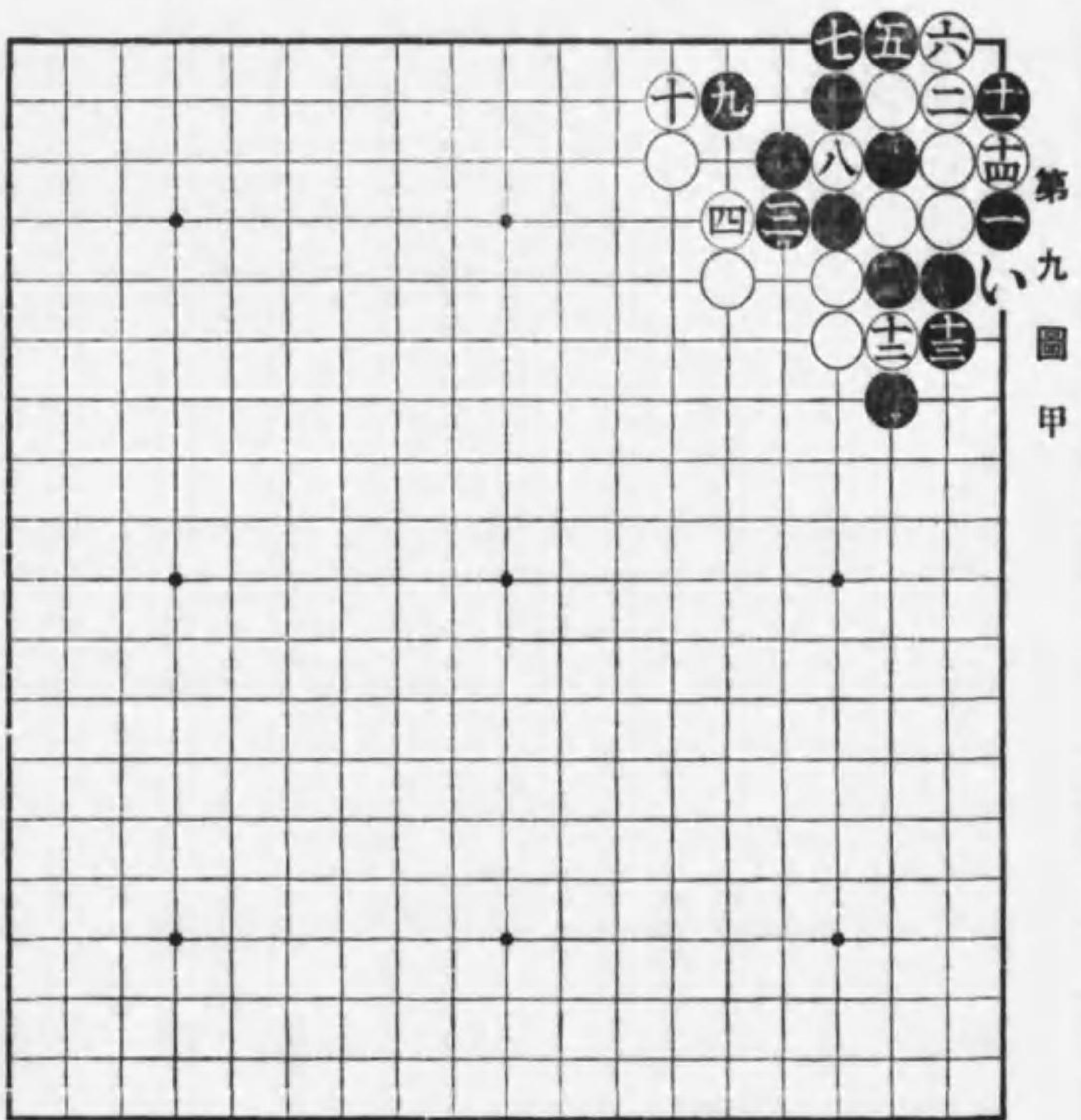


第 八 圖 五劫トル

も得る能はずして、一時に兩方を凌がんならぬ形勢である。所
 が白は只上の三目を凌ぎさへすれば宜い。是れでは颯ぱり黒が
 イカヌ。一と頂け行く手は落第だ。

▲ 第 九 圖 (甲)

前圖までは積極の攻合法に従つて、圍中の
 黒が活動したのであるが、ドウモ旨く行かぬ。
 ソコデ今度は消極的に圍中の黒を外から救
 援する意味に於て、黒が一と綽ねたのだ。夫
 に對して白が二と粘いだのは誠に良著である
 是れには種々の意味がある。第一、手数を殖
 やす手数、第二、黒から二の處を截られて劫
 争を企てられるのを避くる意味、第三には素
 人は兎角八の處の劫をイキナリ取りたがる癖
 がある。さうすると所謂先劫が後劫になる。
 其理由は圖の如く、只黙つて二と粘いで置け
 ば、白の方から先手に八に劫を取込んで行く
 權利がある。所が其權利を今使つて了ふと、
 黒から三に粘いでから後に、茲に劫を取込ん
 で來られる不利益がある。即ち先劫が後劫に
 なる譯である。尙ほ白が二の手で、直ちに八
 に劫を取込んで行くのは、幸便に三の處へ粘
 がして、敵の手数を殖やして遣るやうなもの
 である。更に具體的に言へば黒に三の處に粘
 ぐ手と劫を取返へす手と他の點に二手打つと



第 九 圖 甲

云ふ其の撰擇權を與へる結果になる。要するに此先劫後劫と云ふことは攻合ひに重大なる關係がある。一寸した一手ではあるが非常に複雑なる意味を含んで居る。尙ほ更に一つの理由がある。若夫れ黒が圍中の石の活動を開始したと云ふならば、其黒を攻める意味に於て八に劫を取込むことを急ぐ必要もあるが、黒が一と側面から攻撃を加へて來た場合には其の攻撃に對して、直接に應酬するのが正着である。白二と粘いだのは即ち夫れである。是れは能く記憶して貰ひたい。扱て黒一、三は誠に巧妙なる攻方である。前にも言ふた通り、迂濶な事をする、忽ち白からいの處へ掉ねられて、手数を延ばされるから、夫れを防ぎ且つ得をしながら、一と攻めたのは誠に機宜の良手である。夫れから白から三の急處へ中てられると、忽ち手数が少くなつて了ふから是れ又肝要の手だ。併し黒五、七の緯粘ぎは悪い筋である。次の二圖の如く打つ方が幾らか宜い。白八、玆でイキナリ外から攻めると、隅の方へ攻込まられて手数が足らなくなるから、八と劫を取込んで手数を殖やすに限る、以下白十四となつては即ち兩劫であるから黒がイカヌ。

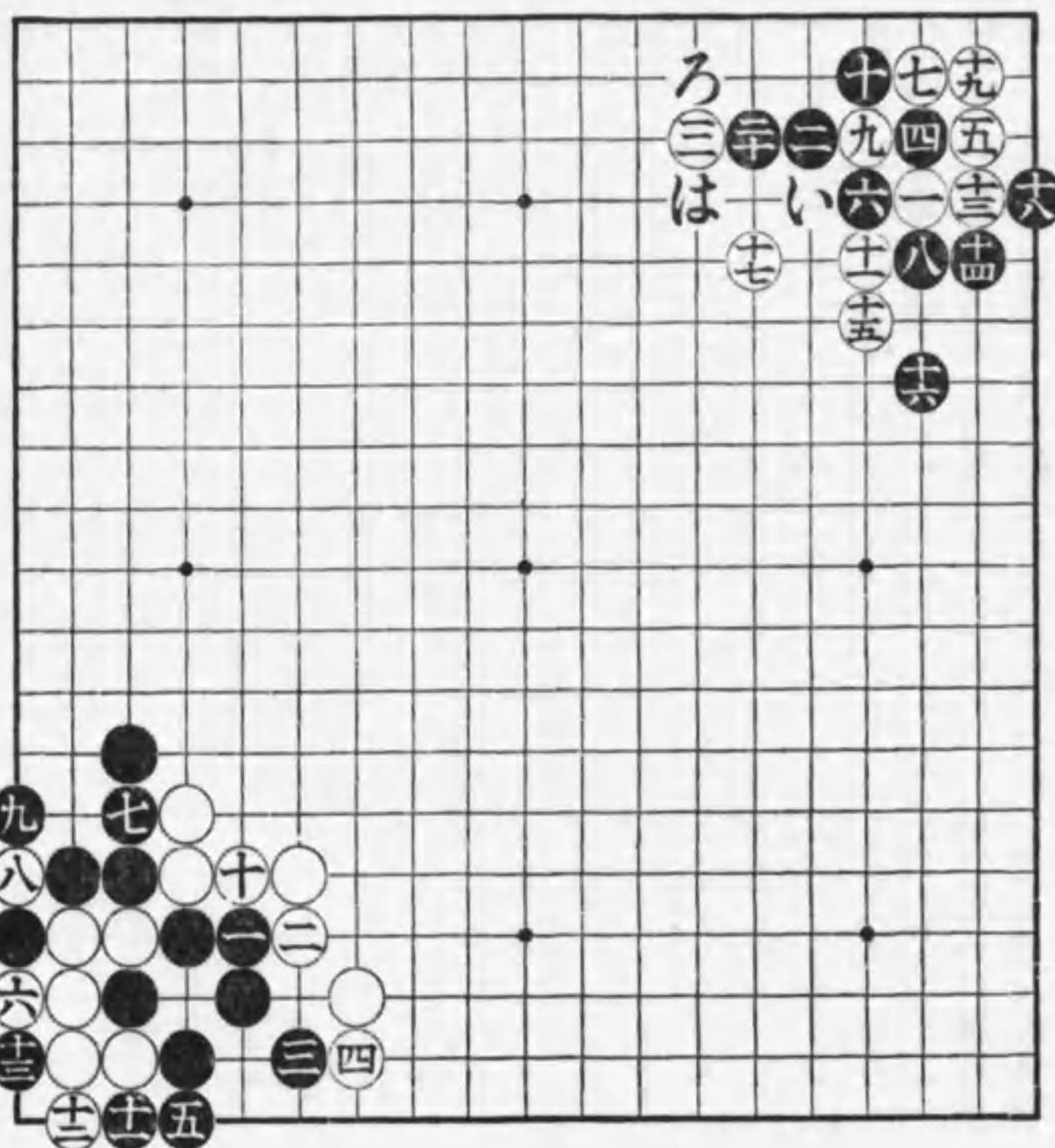
▲第九圖(乙)

黒二十利かず。白十九までは前圖と同様である。コ、で黒が二十と突當つたのは即ち手数を延ばす手であるけれども、白から二一と劫を取込まれると、黒の方で劫立がないから嵐ばりイカヌ。假にいに粘ぐとすれば、手厳しくろに下られて取られて了ふ。尙ほ白の手ではに引かれても矢張り工合ひが悪い。要するに二十と突張る手は隅の喧嘩に關係のない閑手で、自分をも援護しなければ敵をも攻めて居らぬから、是れではイカヌ。

▲第九圖(丙)

兩劫。黒五の下りは誠に良手であるけれども、圖の如く兩劫になつてはドウしても黒がイカヌ。尙ほ黒には遣方がある。即ち次圖の如く打つのである。

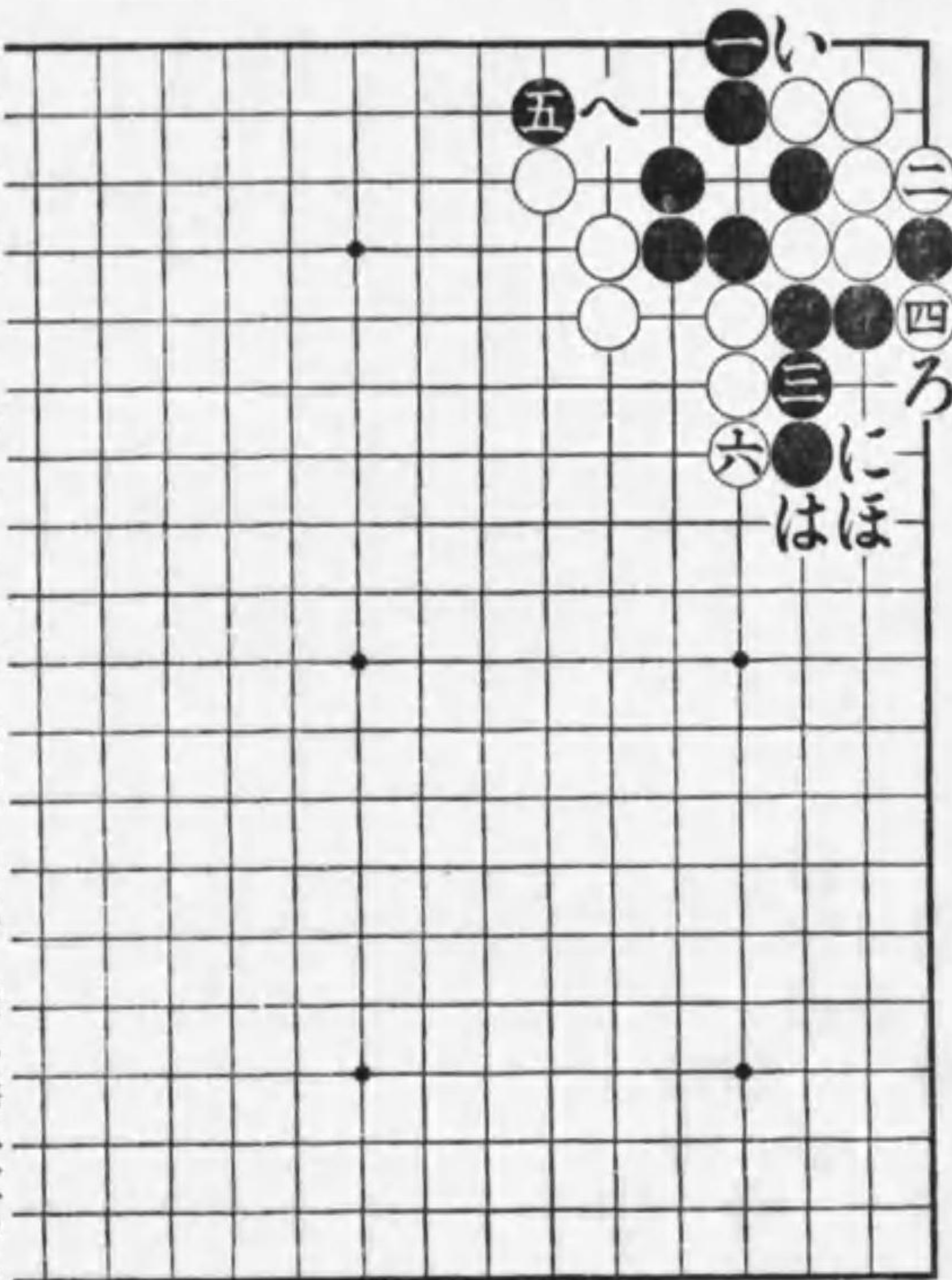
第九圖乙 劫トル(九)ノ處劫トル



第九圖丙

▲第九圖(丁)

白二善し。黒一、是は解釋のしやうに由つてはダマシ手にも當るけれども斯う云ふ手は第一自分の手数を詰めぬやう、第二敵の手数を縮めるやう第三アトで運轉の利くやう、此の三様の意味を含んで居る。既に一と下られては外から攻めてはドウ攻めてもイカヌ後ち規則に従つて之れに對應する手を打たにやアいかぬ。左りとてイキナリ印に押ふるのは敵の堅い處に當る譯でもあり、且つ自分の手を狭めるからはイカヌ。最も適切なる手は黒の弱い一目を二と押えて手数を殖やす外はないのだ。斯う云ふ攻合になつては始終八方に眼を配つて居なければイカヌと云ふのは敵が一方に勢力を集中して居る時は必ず他方が弱くなつて居るからである。即ち黒が一と下り而して五と頂けた方面は丈夫になつて居る。夫れに反して二と押えて四と取込まれた方面の黒は餘程弱つて居る。からして黒が五と頂けて來た此の機會に於て六と押すのが適宜の手段である。此の時黒若しろに押えやう



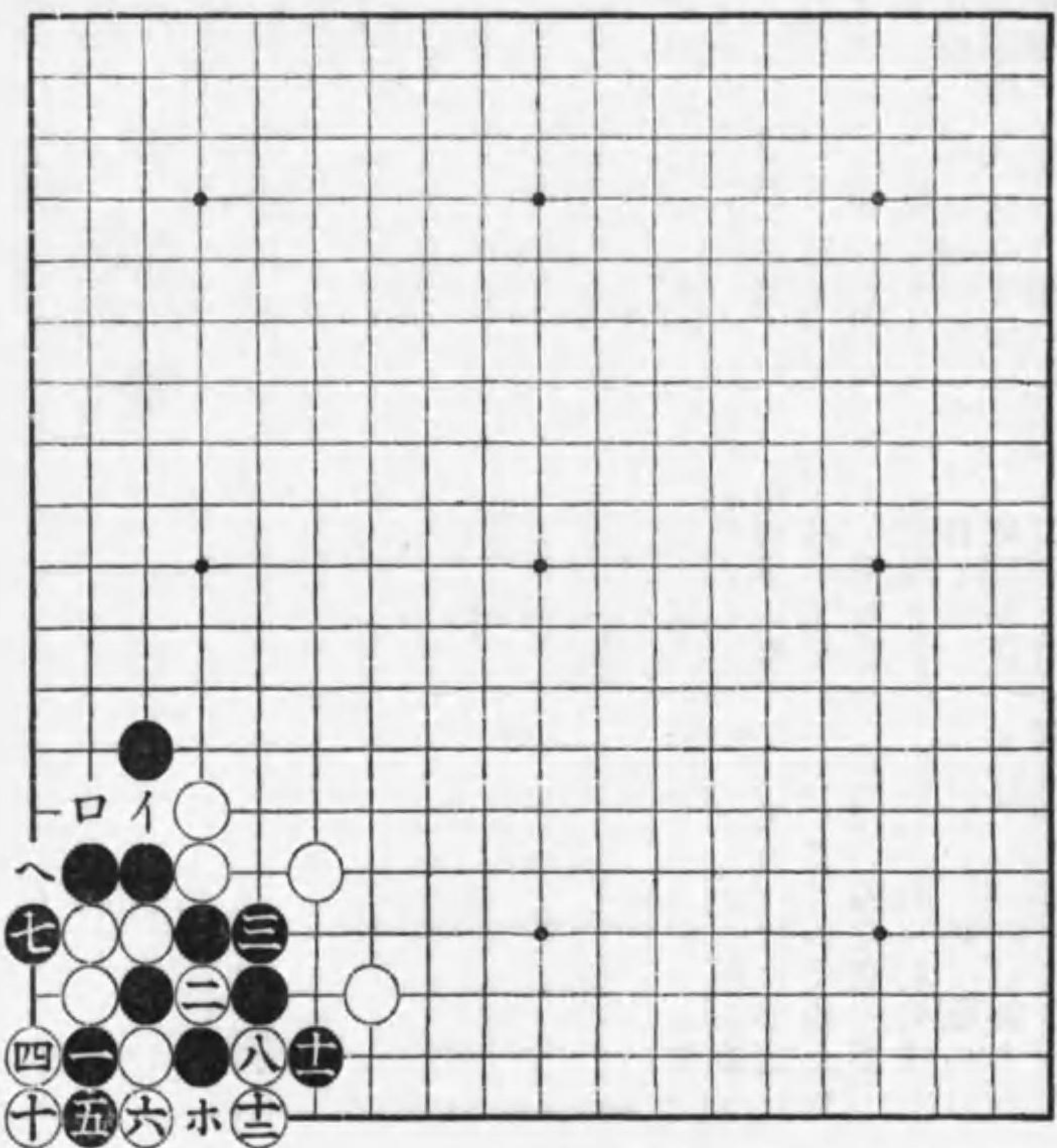
第九圖 丁

もなら、夫れこそはに約えられ、黒に、白ほと進二無二攻められて、結局兩劫で取られて了ふ。又白六の時黒ろに押えずして、はに延びれば白は茲に追撃の手を止めて、一轉してへに跳ね出して、攻合へば黒は之を防ぐに手なし。ドウしても是れは黒がイカヌのである。

▲第十圖(甲)

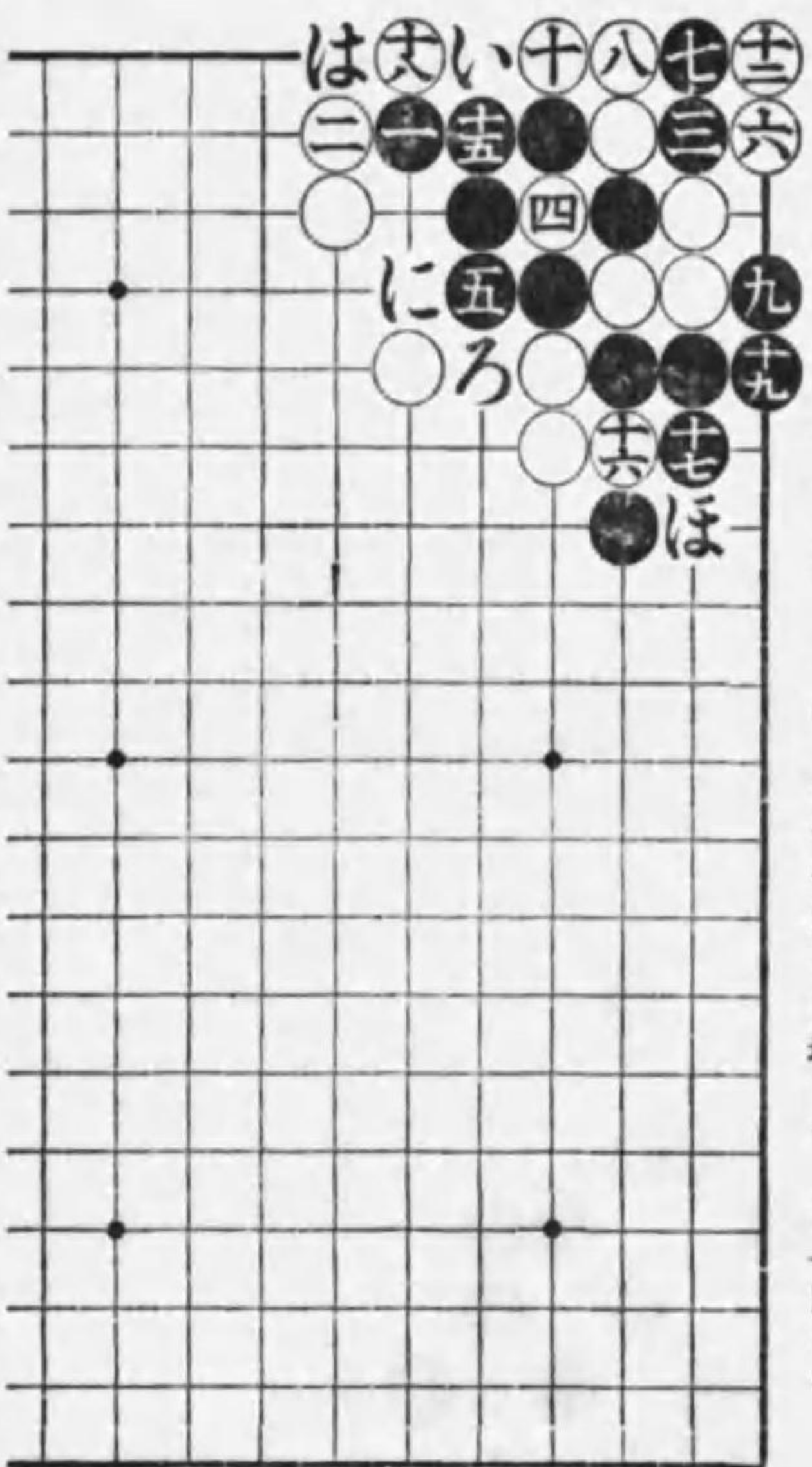
白八良手。前には黒一の手で七の處に縛ねて一の處に粘られた。コ、が白の手数の延びる處であるから、黒は先づ以て圖の如く一と截つて見たのである。以下黒七までは必然の成行で、白八は良手である。是れでドウしても黒がイカヌ。黒若し十三の手で一の處に投り込めば二の處に劫を取込んで來られるし、又黒一に投り込まずして、先づ二の處に劫を粘れば、白は先づイに突出し黒ロに約えたとし白ホに粘ぐから前圖同様になつて黒が取られて了ふ。然るに黒二に劫を粘いだ時、白若しウカとホに粘ぐと、夫れこそ黒一、白五、黒へと粘がれて、黒の目的通り追落として引ッ掛つて、上の三目を取られて、脱けられて了ふから白イに突出することを忘れてはならぬ。

第十圖 甲 九劫トル



▲第十圖(乙)

白十善し。本圖の如く黒先づ一と尖んだらドウカ。白二は單に黒一の相手になつたやうにのみ見えるけれども若しコ、で四の處に劫を取込んで行くと、一の備へある此の場合、先きに説明した通り、先劫が後劫になつて、取込んで行つた目的が立たない。併し第九圖(丁)のやうに一の黒が二の處に縁離れになつて居れば、夫れは四に劫を取込んで行つて、直ちに喧嘩しても勝てるけれども、圖のやうに一と尖まれて居ては最早や内輪から戦ひを仕掛けて行くことは出来ない。ソコで二と約えたのである。斯う云ふ處の關係を能く吞込んで置かねとイカヌ。ソコで黒が三と載つて以下九まで手順よく攻めて来た。コ、で白が一着手順を誤ると忽ち取られて了ふ。十と曲つたのは誠に良手である。此の一着以て黒の弱點を衝いて、其の手数を取込めつゝ攻めて、而して黒に十一と劫を取込ませて、茲に先劫を残したのは巧妙な手段である。黒も亦十三と三の處に投り込んだのは白十と同じやうな意味である。コ、で白が七の處に其の一目を取るのは黒から只ウチカヒを利かされた事になるから、かねて保留して置いた先劫即ち十四と劫を取込まざるを得ない。黒十五と粘り



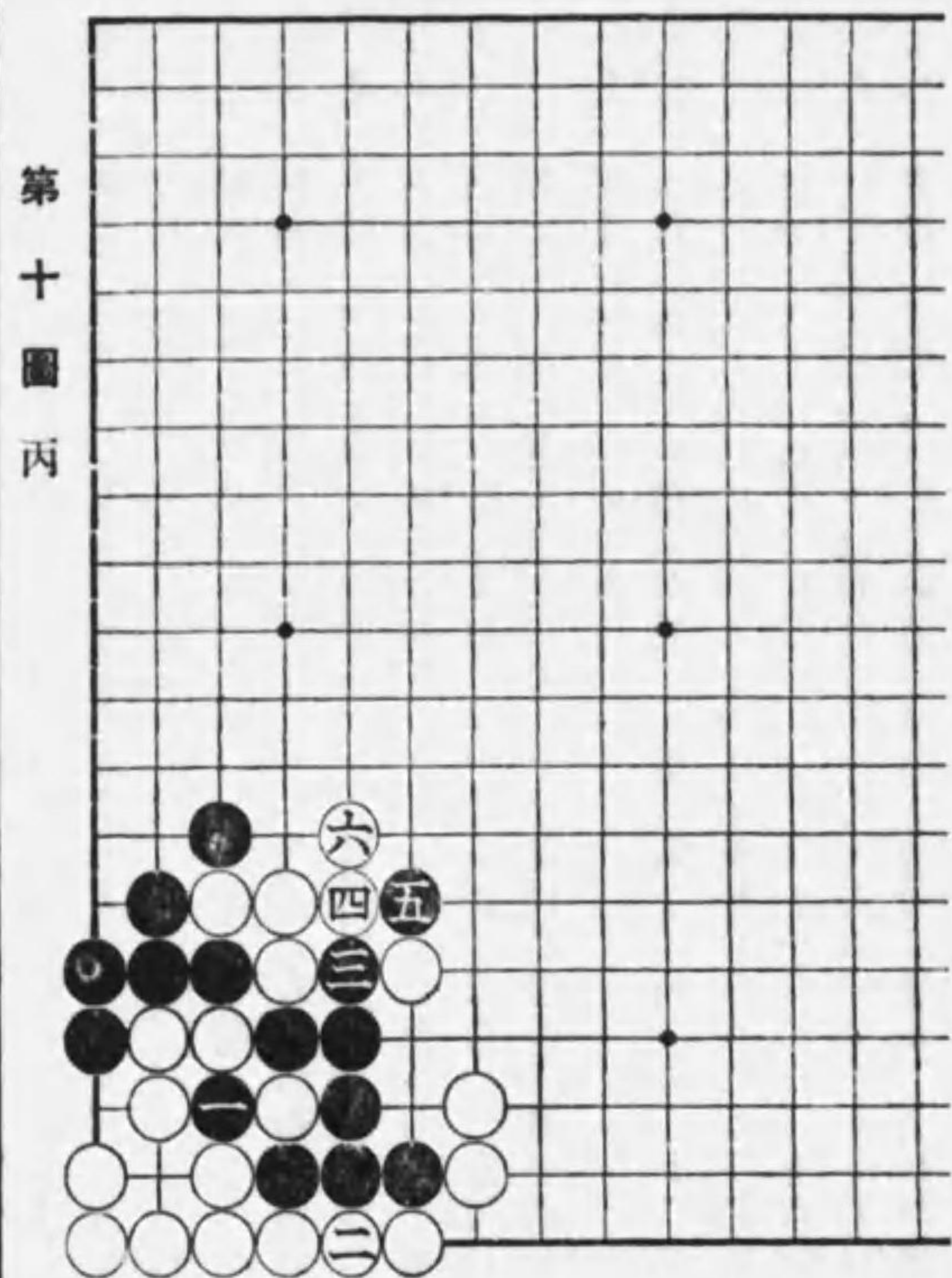
だ時に白十六に突出し而して茲に這入れぬ手を一ツ拵へて置いて十八と縛めたのは好い手順である。其時黒若しに約ふるならば白はろに詰めて行つて結局劫に勝てる。黒尚ほ續いては取れば白に詰めてドン／＼攻めて宜い。故に黒は白に約えずして、十九と粘いだのである。是れは白に印の損な截り即ち持込みを遣らせやうと云ふ手段である。ドッコイ白は其の手に乗らぬ。只黙つて二十と一目を取つたのは賢い。總て損の行く手即ち持込みと云ふことは絶體絶命の場合でなければ決して打つべきものでない要するに二十と劫を取られることになつては黒がイカヌ。

▲第十圖(丙)

黒一も晝併。扱て本圖の如く黒一と劫を取込んで来れば白は無論二と粘ぐ外はない。ソコで黒が三と突出して五と載つたのは即ち形である。斯う云ふ場合には都て劫立ての利かぬやうに手数を殖やしつゝ六と逃げるに限る。

以上の戦闘に由つて見ると、黒がドウしても不利に陥つて居る。シテ見ると第九圖(乙)に於て白が七と跳ねた無理手が却て善いのではないかと云ふ疑問が起つて来るであらうけれども、必ずしも白が善いとも断定は出来ない。成程今迄の戦ひでは黒が悪いから、古來無理手と云はれて居る七の手が善いやうにも見えるけれども、黒の方には未だ幾らでも打ち様がある。ドウしてもイカヌと云ふことになると、今度は第九圖(乙)の如く黒が十四と約えた手が悪いと云ふ事になるから、外の手を打たんならぬ。夫れでも尙ほ黒がイカヌと云ふことになると、昔しの定石は全然顛覆されて了ふ。孰れが是か非か、自分は茲に断定

第十圖 丙



はしないが、兎に角有らん限りの變化を示して讀者諸君の判斷に訴へる積りである。勿論順を追うて進む中には要所々々は此れは是、彼れは非と一々區切りは着けて行くが、讀者諸君の方でも成べく曲り角には、目標を打つて頂きたい。さうせぬと何が何やら混雜して分らぬやうになるから其の點は注意して欲しい。

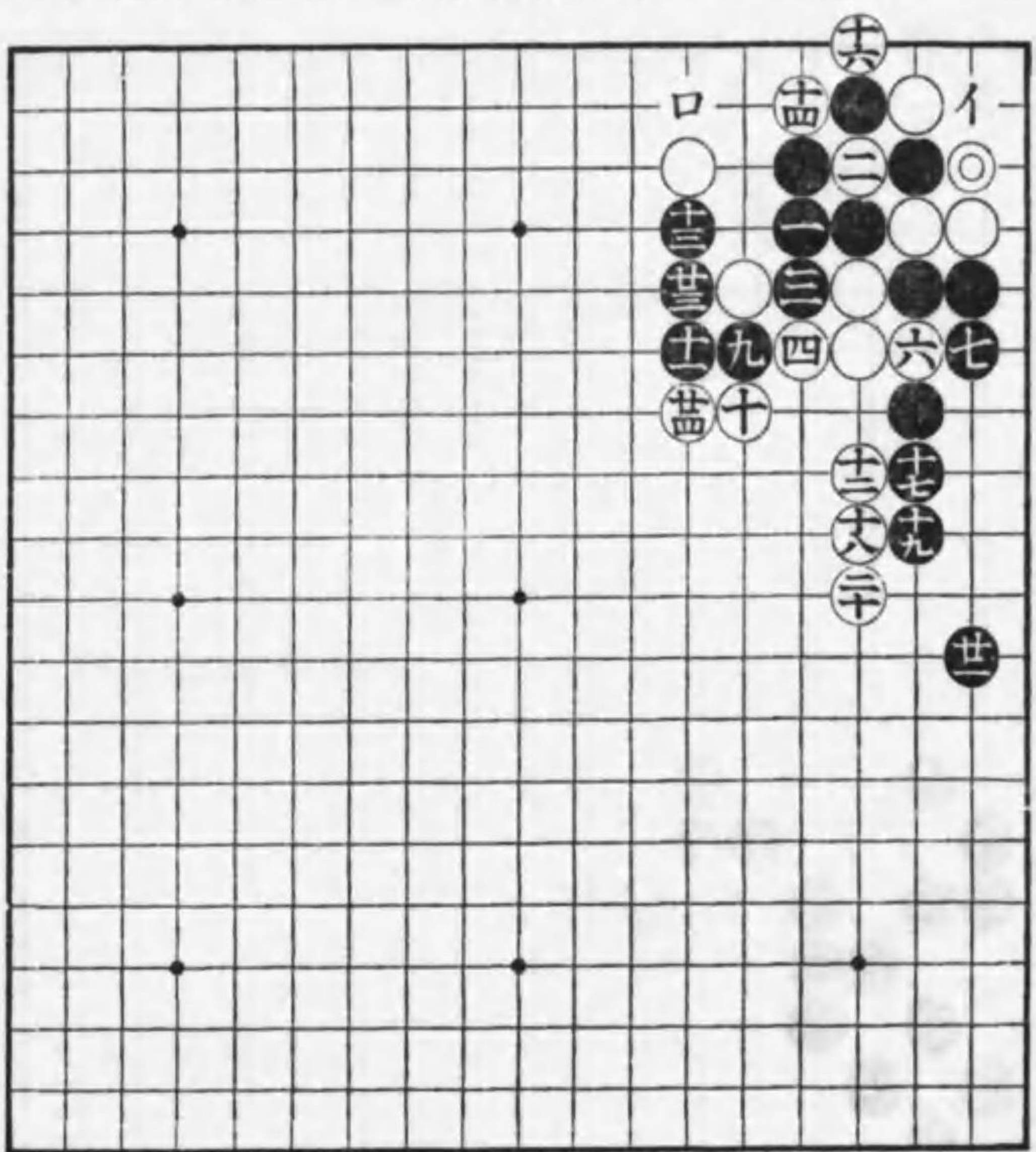
▲第十一圖(甲)

黒三、九の手段。以上の説明に依りドノ手もイカヌとすれば、本圖の如く黒一と粘ぐより外に仕方がない。今度のイの處を截られては堪らぬから白は二と劫を取らんらぬ。扱て黒はコ、で如何に打つべきか見渡す所、黒は(1)□に頂けるか(2)十三につけこすか(3)三に突出す外に手はない。□に頂けるのは所謂二筋へ打つ手で、敵に打撃を啖はすことが出来ぬからイカヌ。夫れよりは十三につけこす方が敵を中斷する意味に於て、手筋と稱する所であるけれども、其の結果は如何であらうか。理屈から言ふと三に突出して、さうして九に截つて行くと云ふ着眼が一番宜い。ナゼかと云ふと、コ、で九と敵を兩斷して戦ふのは取りも直さず右邊の黒三子と相協同して戦ふ意味になるからである。のみならず劫立としてもさうせにやアならぬのであるから、三と突出して五と劫を取つたのは好手順であると謂はなければならぬ。白六は即ち自分のダメを詰める手だから手筋としては宜くない、けれどもコ、では目的を達する爲めには手段を擇ばずで、黒が劫を争つて来たから白も亦劫立てに六と突出したのである。次に黒九と截つたのは言ふまでもなく、左右に二ツ弱い石

を控へて居る場合には、いつの場合でも敵を傷めるだけ傷めて、さうして止むを得ざれば一方を棄て、一方を有利に處置する手段に出るのは働きである。黒十三は理屈としては今迄劫を争つて居たのだから、劫を取つて行かんならぬ理屈であるけれども、先づ一方の活路を啓いて敵の動靜を窺つたのである。此の時白十七に約ふれば、右邊の三目は取れるけれども、さうすると黒から劫を取込まれて来る。随つて取り味が恐い許りでなく、左方に大分腐れ石が出て来る。夫れで殊更に右邊の三目を活かす手段を取つたのである。

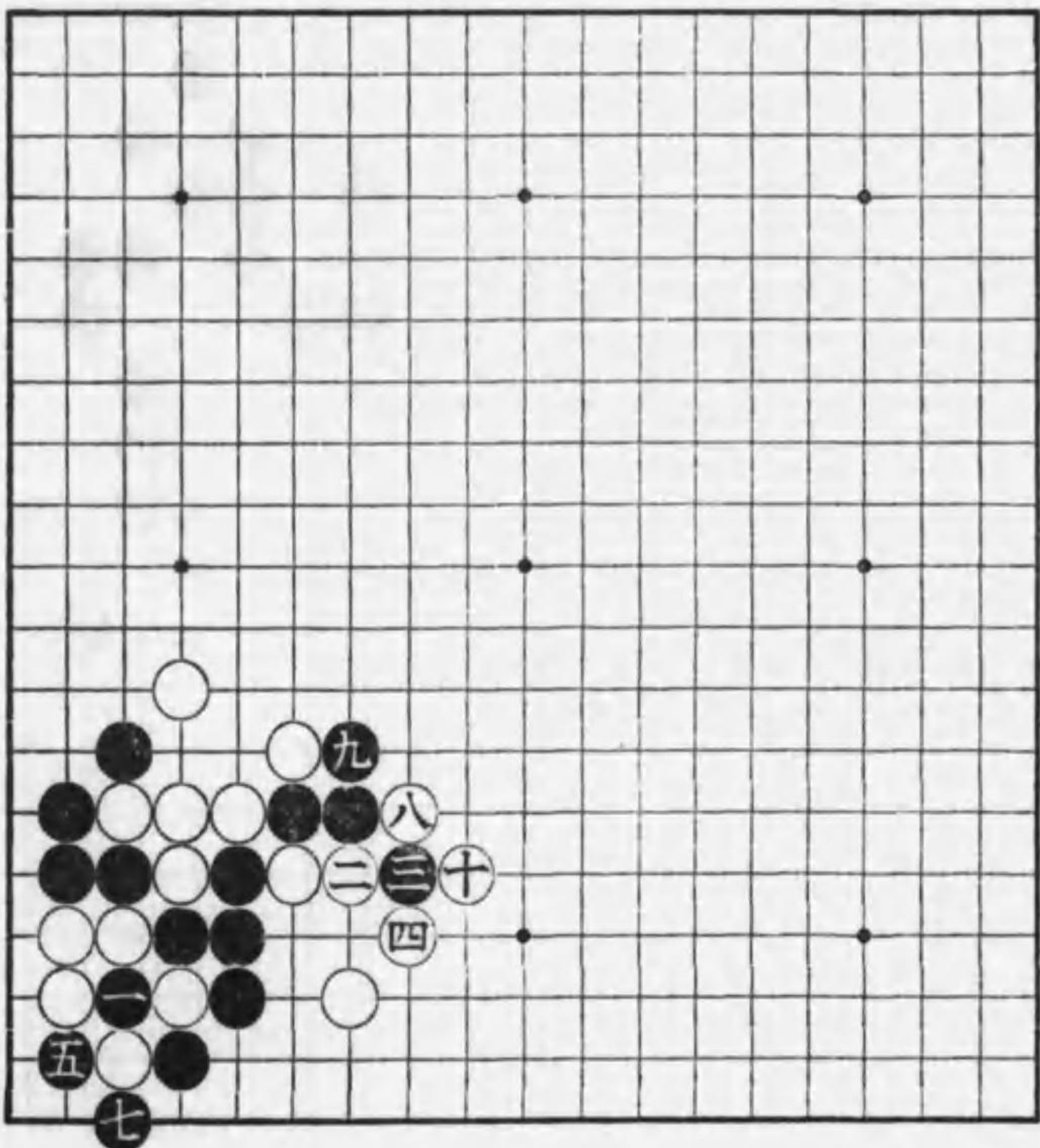
白二四までの結果を見ると黒は隅で二目を取られて居るけれども夫れは白◎と十六との交換になつて居る勘定だから大した損害ではない。試に◎と十六の二子を取除けて見よ、夫れが白自身本來の形である。夫れから黒は右邊に於て二一まで非常の壓迫を被つて居る。是れが黒の悪い處である。併し白が三と二三の間に一目を持込んで、眼を作られて居るのは中々の損害である。尙ほ其上に六とダメへ突出して七と約えられたのは大悪手である。要するに此の戦ひは附近の形勢次第でドウにも變化すべき姿であるが、此の一局部丈けでは黒がさして損になつて居らぬ。

第十一圖 甲 ⑤劫トル⑧同⑩同⑬二目トル



▲第十一圖(乙)

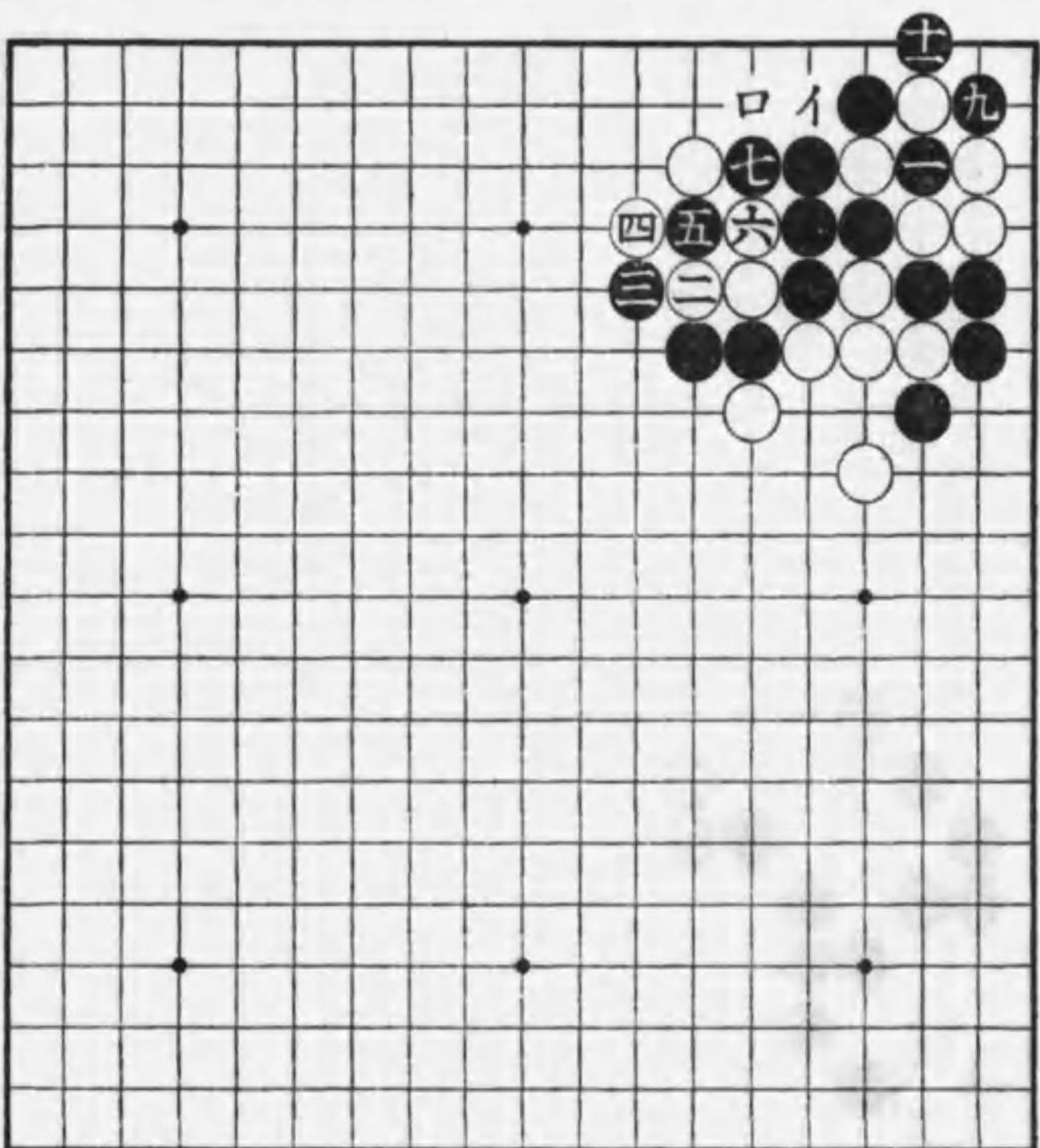
黒一亦不成功。黒一と取つたのは劫争であるから劫を取込んだに過ぎない。併し其の利害は何とも謂はれない。ナゼカと云ふと、第十一圖(甲)に於て折角九と截つて、攻勢を取つた其の目的が、ソツチ除けになつて、却て持込みの姿になるからである。詳しく言へば隅の方では黒が大變得をして居るけれども、外部では三の一目を四ツ目に打抜かれて、且つ敵を撃つ爲めに截つた石が、而かも三目、重い石になつて、反對に撃たれ姿と化して了つたから是れは感心せぬ、蓋し是れは黒の手順が悪い爲めである。次圖の如く遣るが宜い。



第十一圖 乙 (六劫トル)

▲第十一圖(丙)

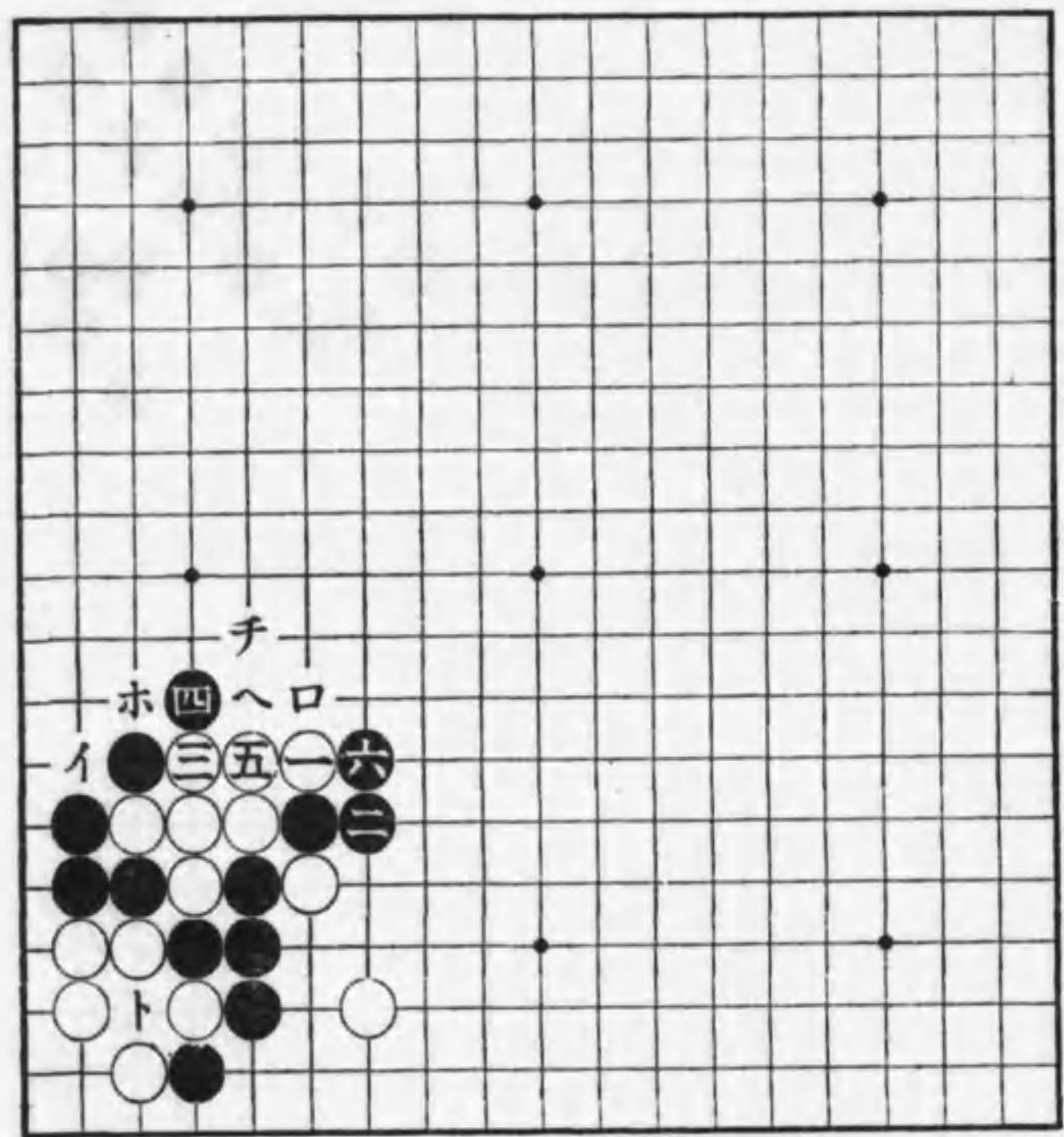
白イの截りは一利一害。前圖よりは本圖の如く白を團子にして置いて、九、十一と打つ方が宜い。斯うなると黒の疵は白イ、黒一に二目取り、白ロと絞られる手であるけれども、是れは白として容易に打てないと云ふのは一に二目を取られると、既に取られて居る三目のダメが一ツつむ丈け他日之を利用して、右邊の黒四目を攻める手数が掛かるからである。要するに前圖よりは餘程宜いけれども、第十一圖(甲)に比較してドウカと云はれると本圖の方が宜いと左袒する譯にイカヌ。此の上は外部の形勢に由つて取捨する外はない。



第十一圖 丙 (二目ツグ劫トル)

▲第十一圖(丁)

白三は悪手。本圖の如く白三と押す手は一見殿しいやうであるけれども、得て斯う云ふ手は假令ひ下の三目を取つても損である、六と曲られて殆ど打ちやうがない。假に白イに截れば黒口、白ホ、黒へ、白七目粘いた時に、トに取込まれて来る。コンナ風に白は葡萄生りに愚集しては三目や四目取つても、無駄石が澤山出来て居るから宜しくない。之に反して黒の方には無駄石なしで、下の方に只取りの石が残つて居るから、斯うなつては黒が悪くない。尙ほ又白イに截らずして口又は手に逃ぐれば黒は矢張りトに取込で行つて宜い。

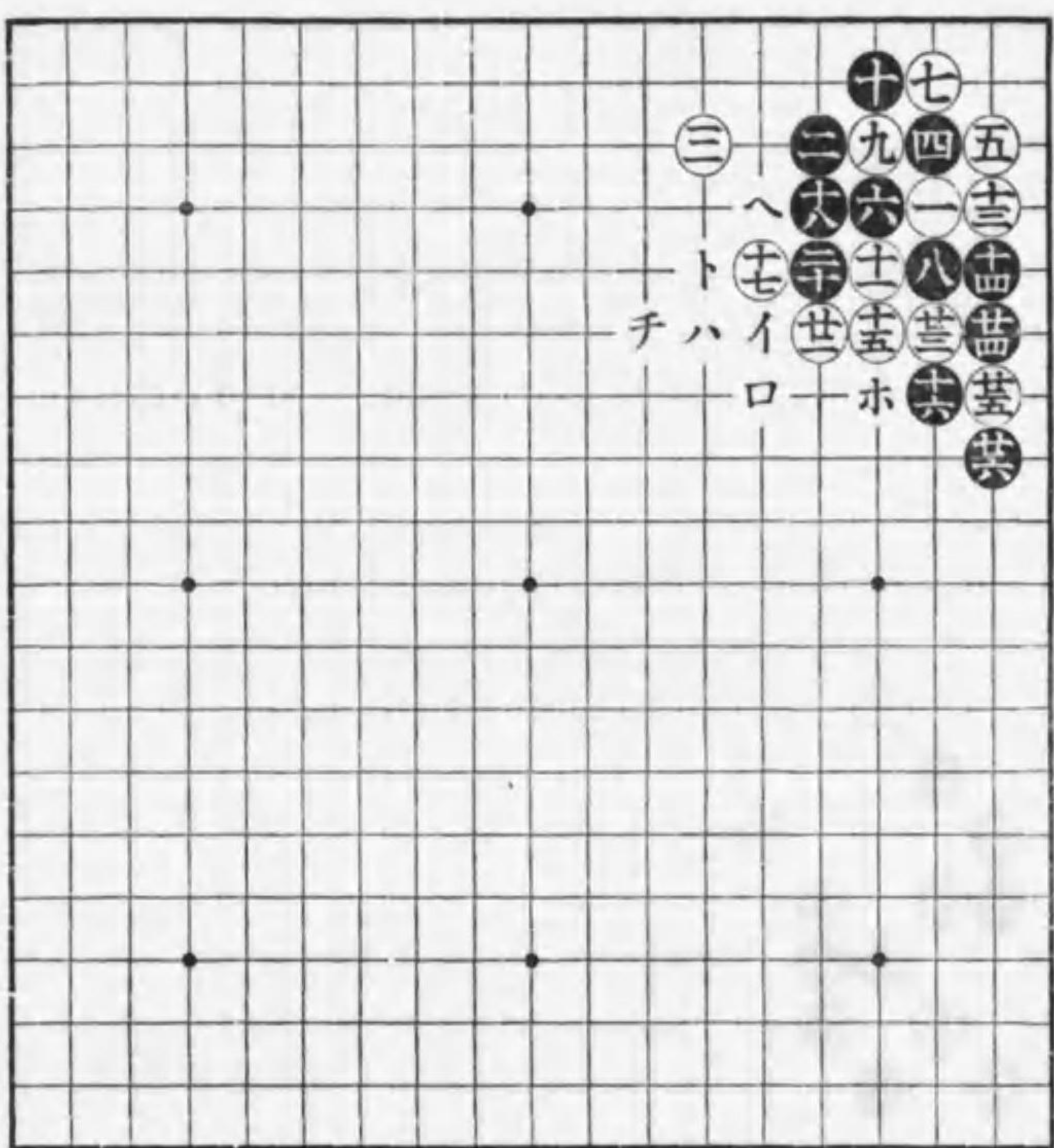


第十一圖 丁

▲参考 圖(其一)

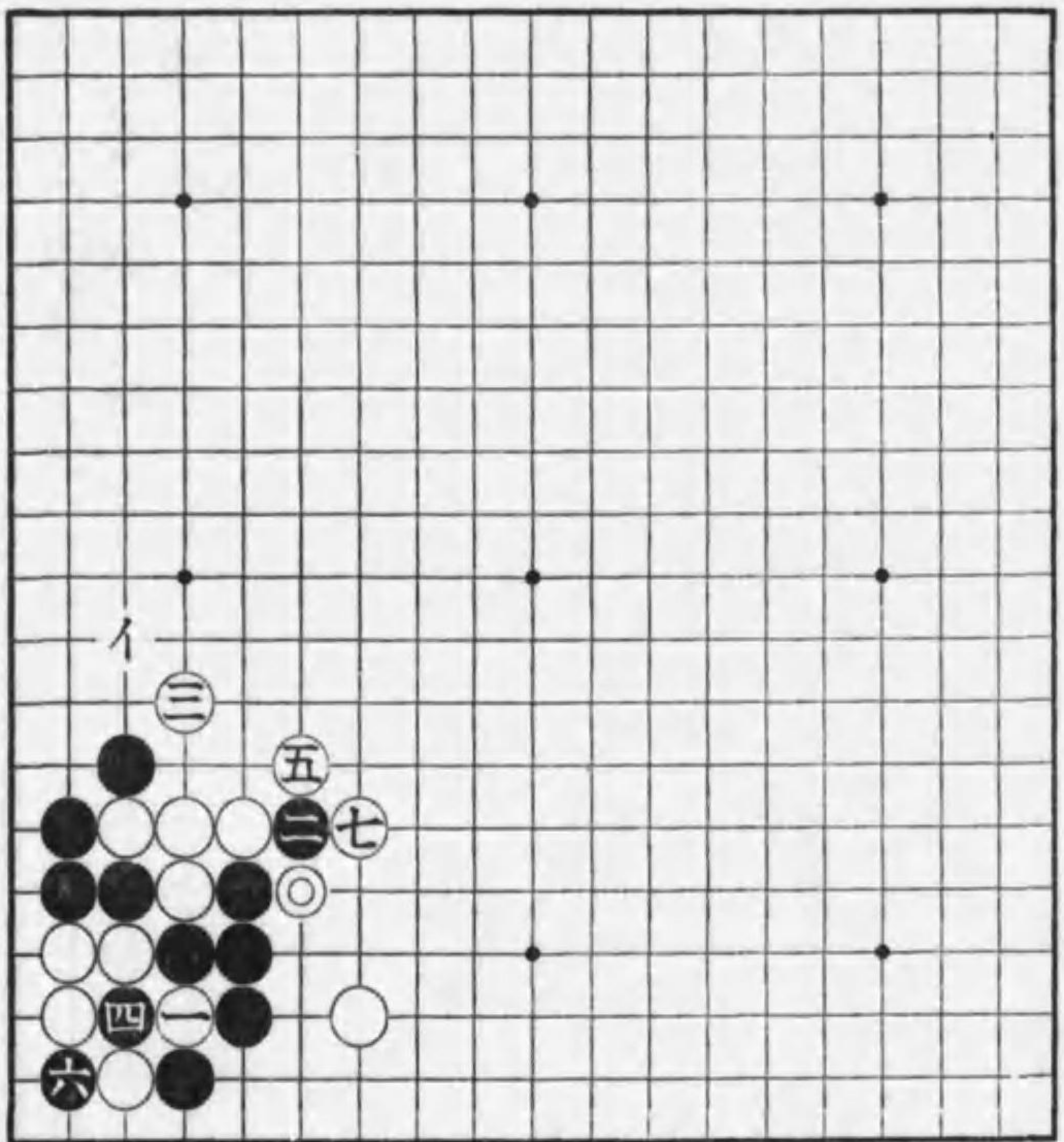
白二三、二五の犠牲本圖の如く二五と一本截りを入れてから二七と劫を取込んで行くとき黒が困つて了ふ。ナゼかと云ふに、其の時黒劫立にイと截ると白口とはね、黒ハの時白ホと「わうて」を喰ふからである。けれども是れは白が非常に資本を先きに二三、二五とおろして居ることを注意せなければならぬ。如何に劫立てとは謂ひながら、二三と我れ自ら吾がダメを詰めて、吾が命を縮めたのは非常に悪い。ソコへ持つて来て、二五と只一着敵地に資本を棄てたのだから、タトヒ劫に勝つても白が悪い。オマケに外に一寸した劫立でもあると白が颯ばりイカヌ。又コ、は征の意味もあるけれども、假に黒へに出で、白トと行びた時黒劫を取ると云ふ手もあるので、ドウやられても白がイカヌ。是れは参考として示すに過ぎぬ征の意味と云ふたのは、白から手に掉ねられて、イハの二目を取られることを言ふのである。之を征で取られるやうな場合に黒へに劫を立て、白をトに延ばすことは非常の場合でなくてはならぬ。故に「假に」と云つたのである。

参考 圖 其一 劫トルル同同同同



▲参考 圖(其二)

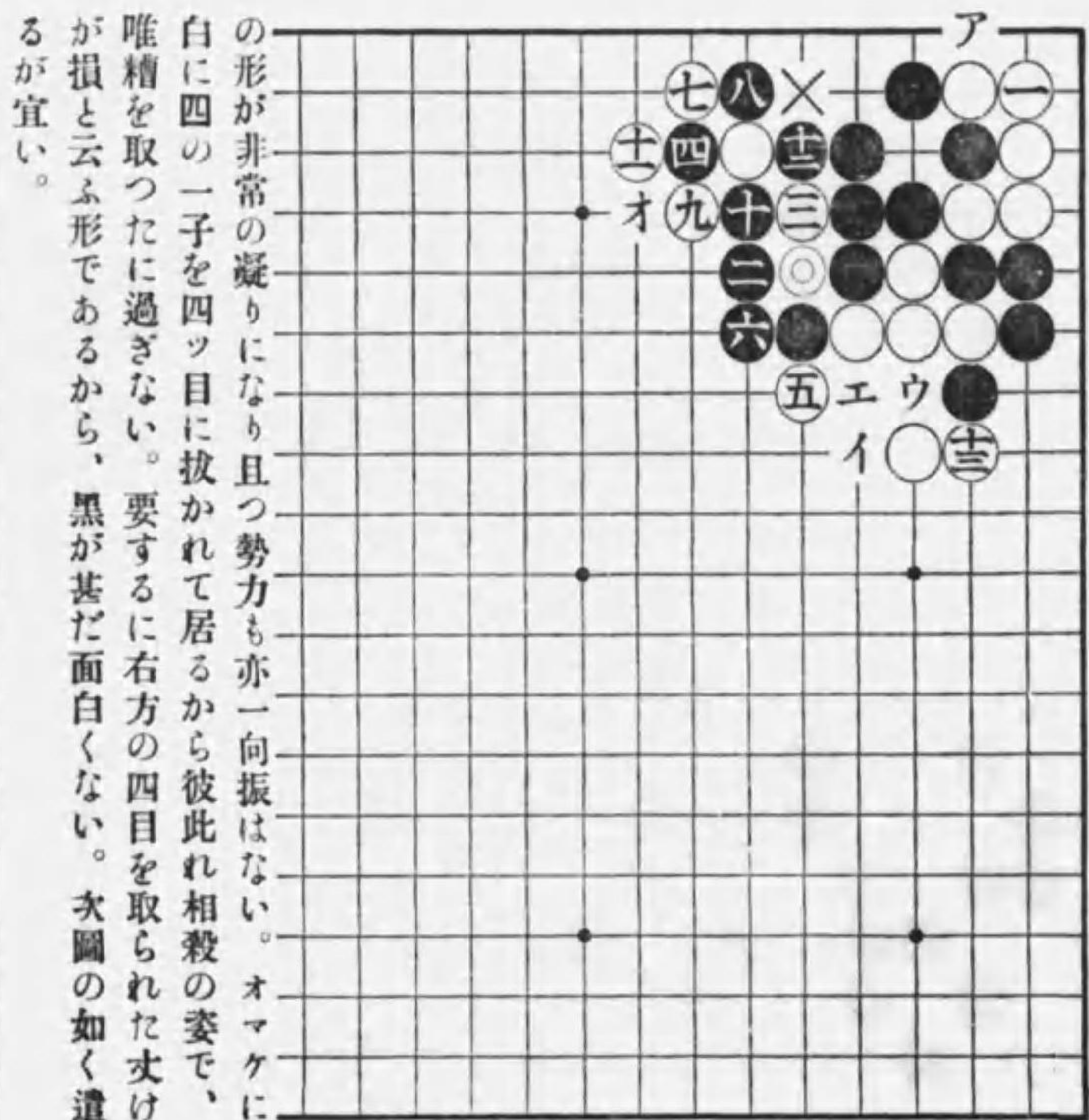
本圖は前圖白二五の變化で、一と劫を取つたのである。黒が二と截つた時分に、前圖までは白三の手で五にはねたのであるが、黒に七と行びられると、敵の聯絡を斷つて居る◎印のクサビ石が、腐つて了ふから、五に綽ねるのは筋違ひで、圖の如く三と飛ぶのが本手である。次に白が五とはねたのは甚だ悪い。七と四ツ目に打抜いた所は大變宜いやうであるが、何分にも隅の損害が大きい、のみならず三の手が馬鹿手になつて了ふから、是れは白が面白くない。更に言ふと白の利益と云ふものは、真中で一目ボンと取つた丈けで隅の白を取られて了つては何にもならぬ。



参考 圖 其二

▲参考 圖(其三)

本圖は前圖に於ける白五の變化で、即ち一と粘いのである。此の手でアに下る手段もあるが、先づ順序として一と粘り變化を示す。黒二は實は五に行び、白イの時二に綽ね、白三、黒四と運ぶ方が、餘程宜いのであるけれども、さうすると白から×印に尖まると云ふ妙手があつて其の防ぎがないから、止むを得ず、單に二とはね、四とつける手順に出たのである。茲で白五の手で今言ふ通り×印に尖むと黒は黙つて六の肩を粘ぐ。是れは上方では黒ウ、白エ、黒イと征に掛ける手と、又下の方では黒十二、白十、黒八、白九、黒オと征に掛けると云ふ此の兩天秤の手であるから、此の場合白は×印に尖むことは出来な。止を得ず◎三の二目はドウセ棄てぬならぬから、之を敵の糧に、ウンと利用すべく、先づ五とはねて、六と囲ませ、夫れから七とはねて、四の一子を打抜き、最後に十三と約えて四目を生擒つたのである。斯うなつて見ると、黒は唯二目を取つたと云ふ丈けで、其



参考 圖 其三

の形が非常の凝りになり且つ勢力も亦一向振はない。オマケに白に四の一子を四ツ目に抜かれて居るから彼此れ相殺の姿で、唯糟を取つたに過ぎない。要するに右方の四目を取られた丈けが損と云ふ形であるから、黒が甚だ面白くない。次圖の如く遣るが宜い。

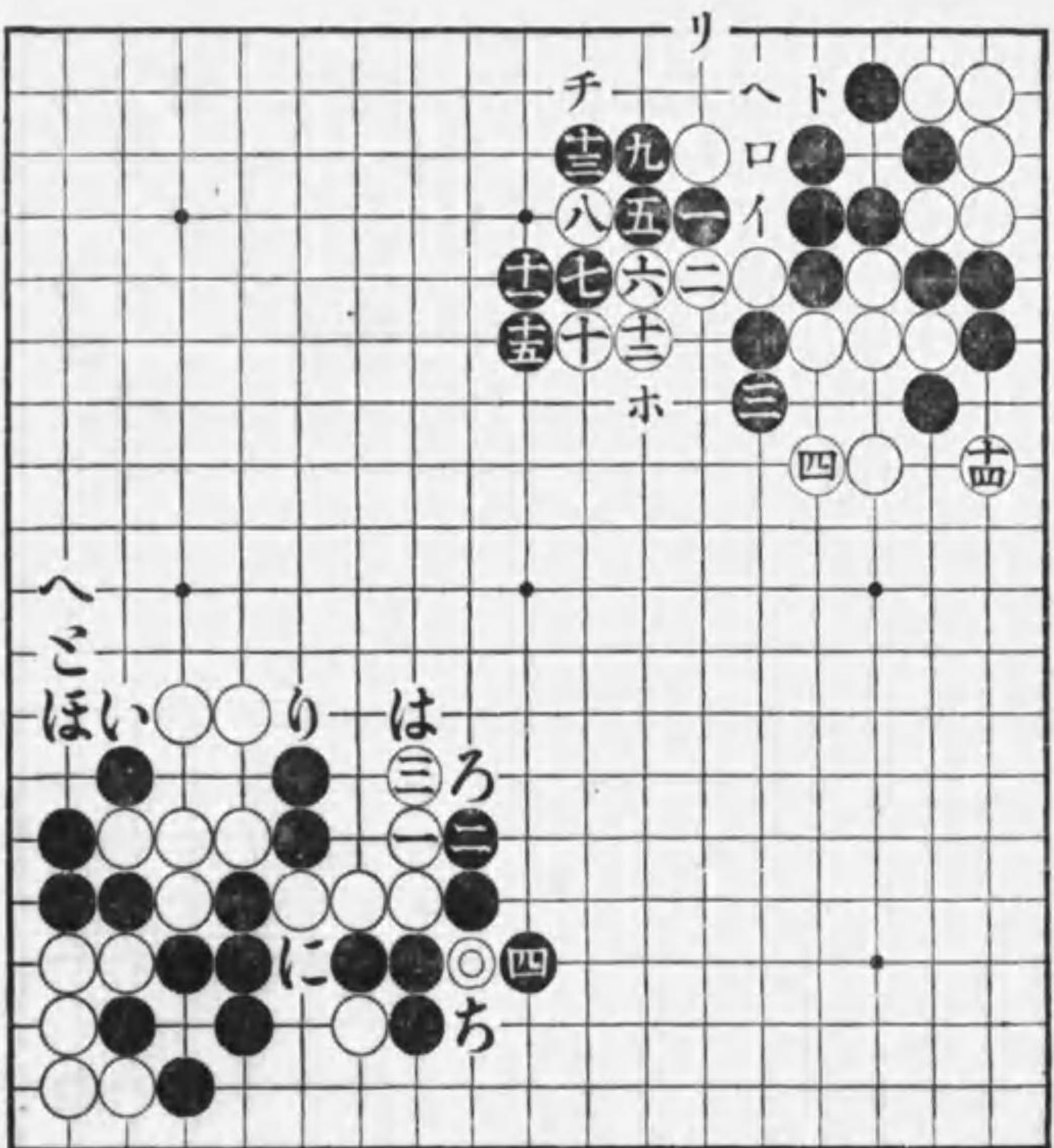
▲參考圖 (其四)

本圖は前圖に於ける黒二の變化で、一と附越したものである。黒十五までの結果を見ると、黒は左邊の四目を取られて居ると云ふ丈けで、右方に於ける黒の形の整然たるに反し、一見白は形勢を得て居るやうであるが、所在傷だらけで、是れから其の修繕に手数を要するから、斯うなつては白が面白くない。但し白十の手にイに突出し、黒ロ、白九、黒八、白十、二と曲る手もある。さうすれば黒は十に押し、白ホの時黒十三に曲るが宜い。ソコデ白へに緯ねたらば黒ト、白チ、黒リと置くのが妙手で、白は如何とも仕方がない。

▲參考圖 (其五)

本圖は前圖に於ける白八の變化で、單に一曲つたのである。然らば黒は二と押し、一子を抱ゆるが宜い。ソコデ白若しと約え、つけたらば黒は所謂中の浮石を利用して逃さぬやうに押し、白は右邊に於ける機を見かねて打つたのが要である。併し、挾む味を合はねては、白は併し、タラにほしはねては、白は併し、に約えず打たば、白は併し、前圖同様で黒の方が優勢であるが、白の缺陷は、本圖亦

參考圖 其四



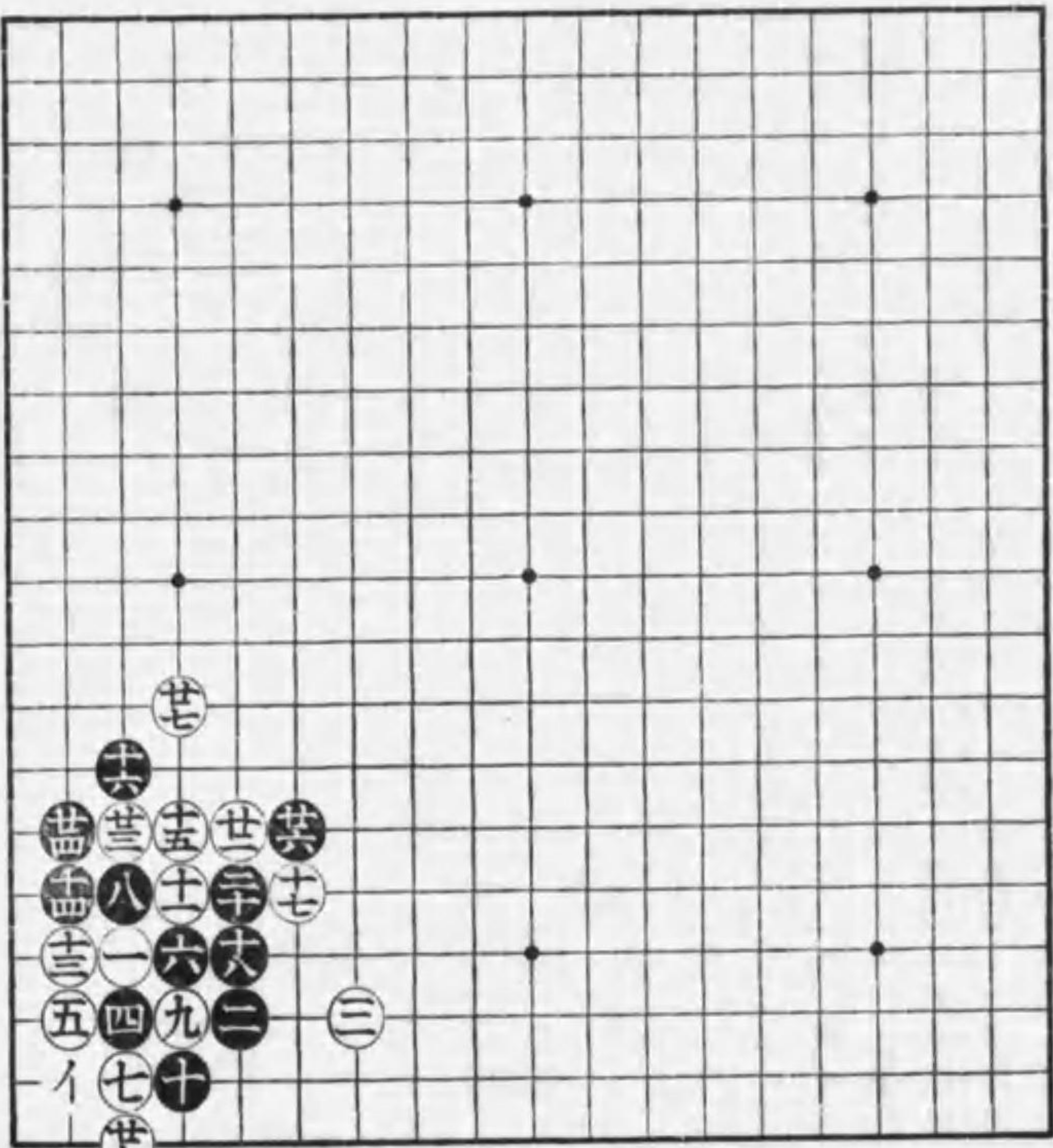
參考圖 其五

▲第十二圖

根本圖。前圖までは白二九の手でイに粘いだ手を示したが、其の結果は白が宜くないと云ふことは既に了解されたであらう。其際一寸注意して置いた通り二九と下る手段がある。斯う下られると、ドウモ駄目づまりの關係が生じて、黒の行動の不便な事は一ト通りではない。是れは根本圖として、第十二圖(甲)以下に就て其變化を示す。

第十二圖

●劫トル ○同 ◎同 △同 ○同



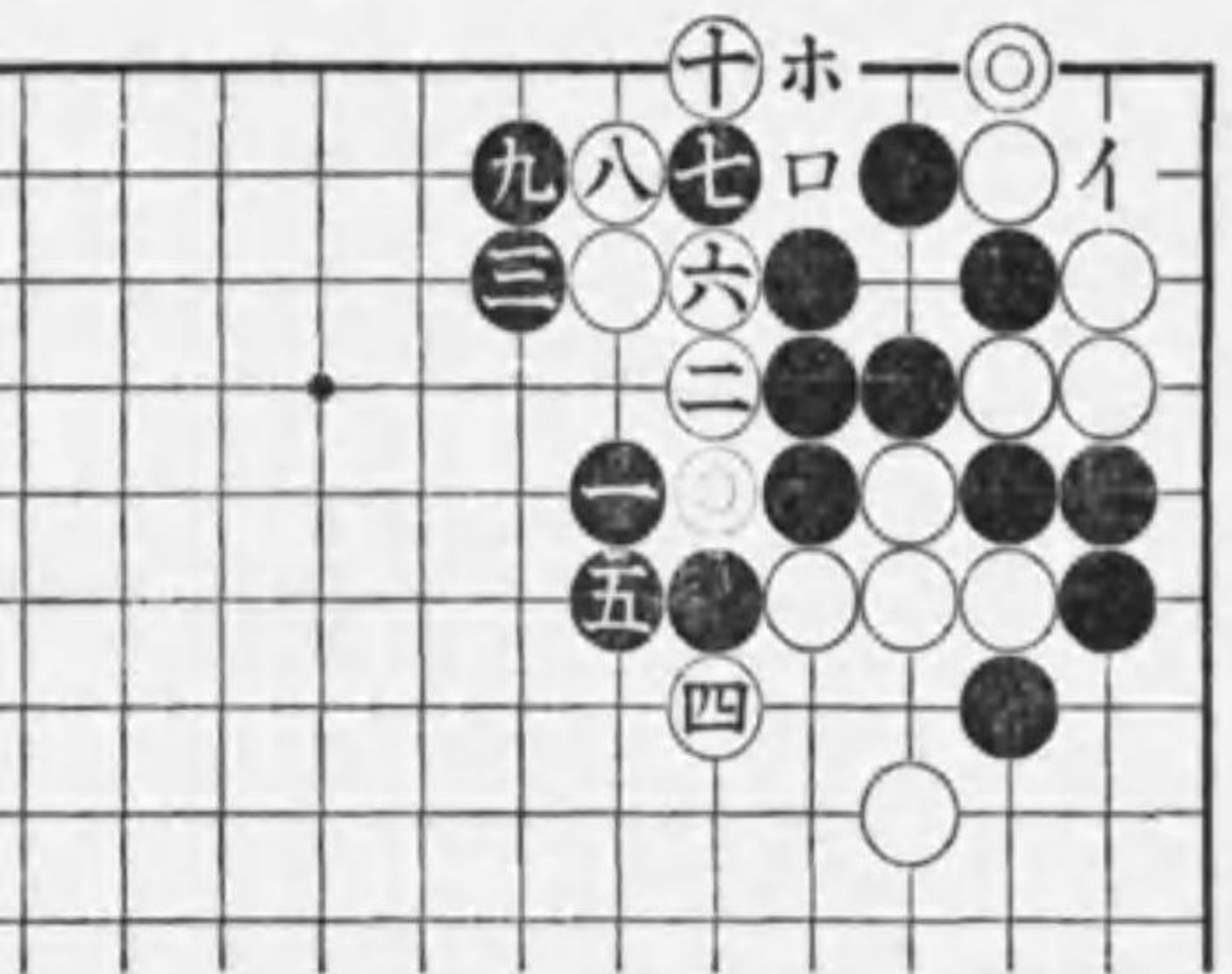
▲第十二圖(甲)

白六は鬼手。扱て本圖の如く黒一とはねて三と頂ければ普通◎二の二目を取ることが出来るのであるけれども、碁は恐ろしいもので、前にはイに粘りであつた白が◎印に下つて居るばかりに茲に六とグヅム手段を生じた。デ結局十と縛ねられて、ドウしても黒が負けである。黒若しロに粘ると白ホと互られて了ふ。又黒一の手で五の處に行びると。強情に一に添つて來られる。形としては宜さうに見えるけれども、アマリ形で、黒が颯ぱりイカヌ。外に何とか打ちやうがないか。

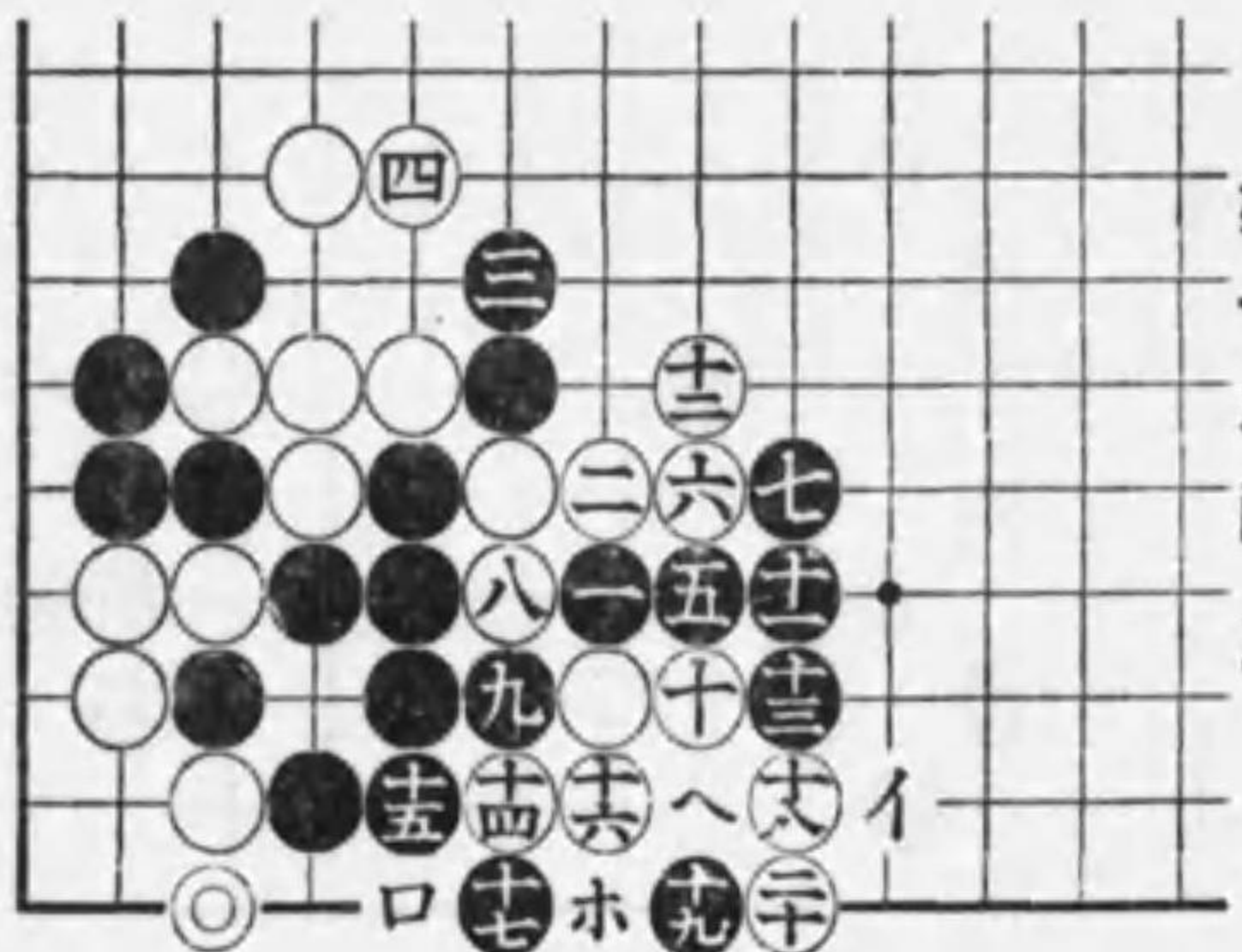
▲第十二圖(乙)

黒三敗因。前二圖の如く黒一とはねても行かず、又五の處に行びてもダメだとすれば、本圖の如く一と附越すより外に黒が成功しうな手筋を見出すことが出来ない。扱て其の結果はドウカと云ふと、白二十までの結果一寸黒が勝つやうに見えるけれども、何分にも◎印に下られて居る白の著子一着の爲めに妨げられて、此の攻合ひは矢張り黒の負けであ

第十二圖 甲



第十二圖 乙



る。尙ほ黒イに約ゆれば白ロに打缺いから劫を取るの論のな話である。夫れから黒十九の手でホにアテれば白へ、黒イの時白にロと打込まれて矢張りイカヌ。ドウしてもイカヌとすればドウすれば宜いか斯うドウモ黒が悪いと云ふ原因はドコに在るか。一と附越したのは宜いが白二と押えた時黒三と行びたのが悪いと云ふことに歸着せざるを得ぬのである。尙ほ黒には打方がある。請ふ次圖を看よ。

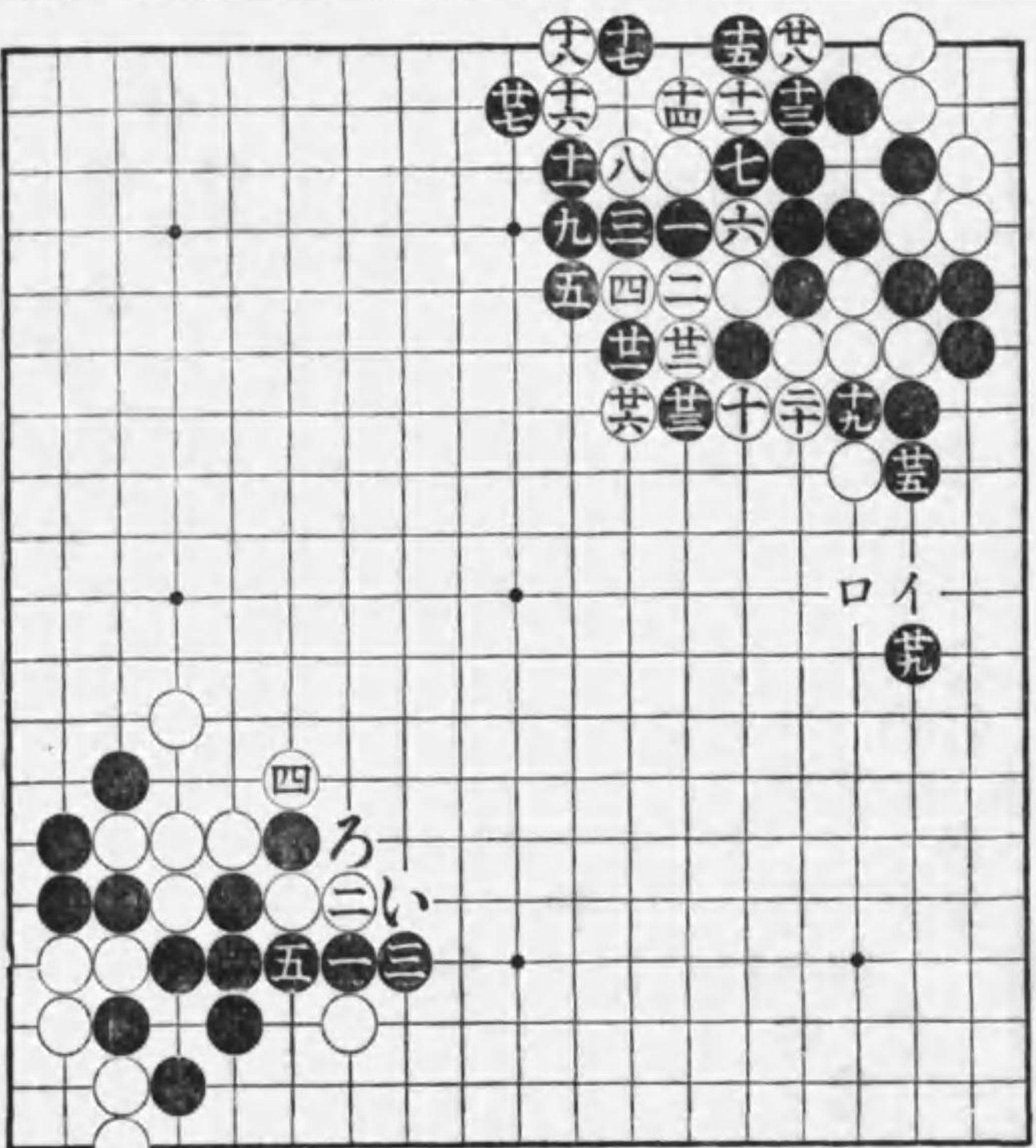
▲第十二圖(丙)

黒三の變化。本圖は前圖に於ける黒三の變化である。白四と押したのが悪い。斯うなると黒が調子附いて來る。即ち十九以下二三と白を團子にして置いて、二五と曲る妙手がある。斯くて二九までの結果、白はモウ一手掛けないければ完全に取切ることが出来ないから斯うなれば黒が甚だ宜しい。白若し二六の手で征を免かるべく、イに打つならば黒ロに頂けて拒ぐ手があるから何も仔細ない。けれども白の方にも亦た打方がある。即ち次圖の如く打つのである。

▲第十二圖(丁)

前圖に於ては白が四の手でイに押したから甚だ不結果を來たしたのであるが、本圖のやうに四と征に掛けられると、黒は甚だ困る。ドウモ茲で黒は五と粘ぐより外に仕様がなない。白六の手でろに打抜くは即ち戦さの種を取除くと同様に、自己の形を整ふる手であるから、手としては申分はない誰でも打抜きさうな事である。夫れで自分も亦此の方から先きに示すことにしたが是れは實は悪手であることは次圖以下に示す通りである。

第十二圖 丙 (論五目ツグ)



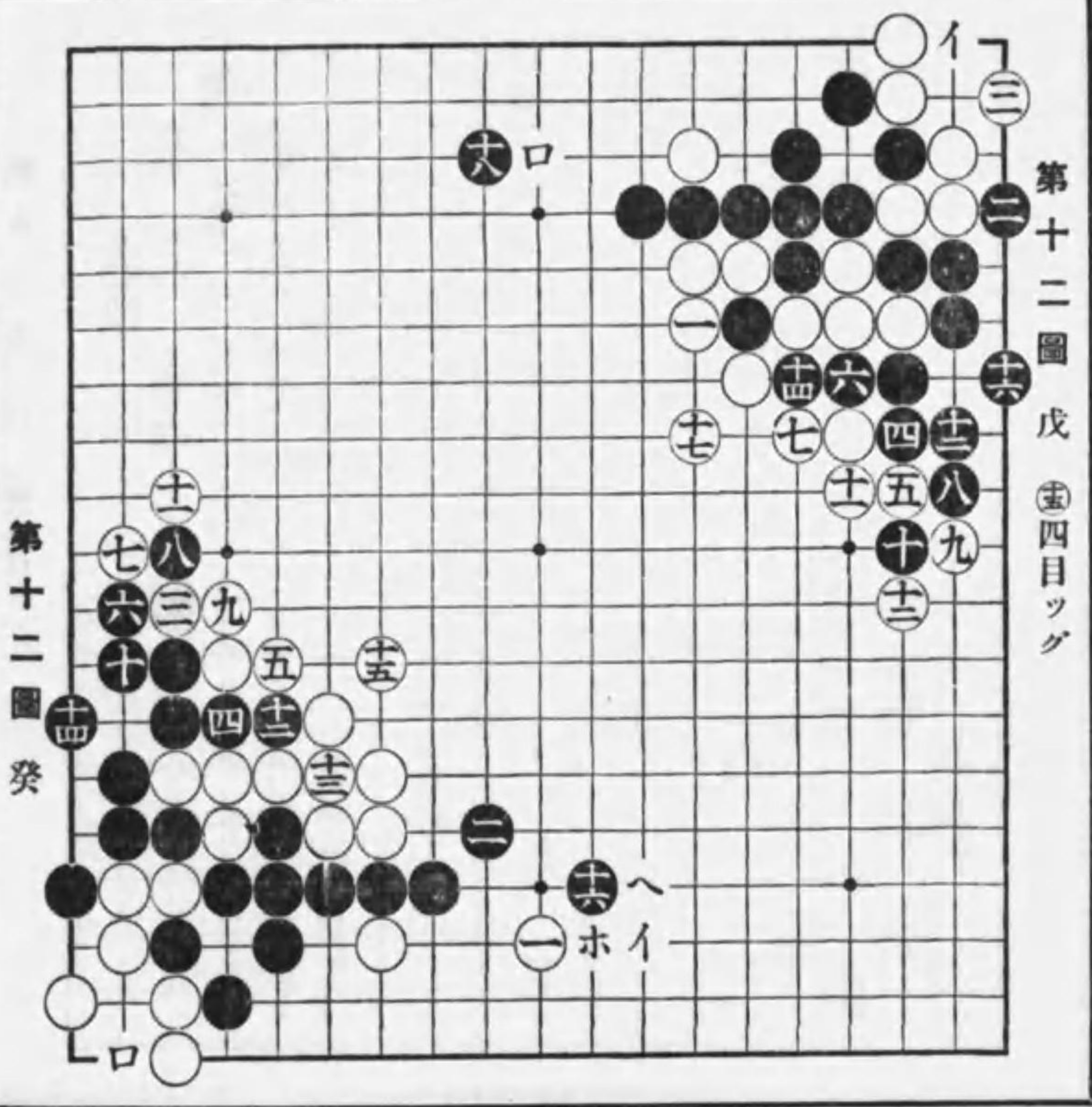
第十二圖 丁

▲第十二圖(戊)

黒六、八善し。前圖に於て言ふた通り、人情として白一と取る結果は則ち黒十八までとなる。此の振變りは白がイカヌと云ふのは黒から六と突出されて八と綽ねられたからである。黒十八は一寸考へるとイに打つて隅の白を取りたいやうであるけれども、さうすると白から口に迫られて来て、取つた隅の石が禍ひを爲す、故に之を活かして、寧ろ外勢を張るに若くはない。此の手段に出られては白の方が形勢が悪い。

▲第十二圖(癸)

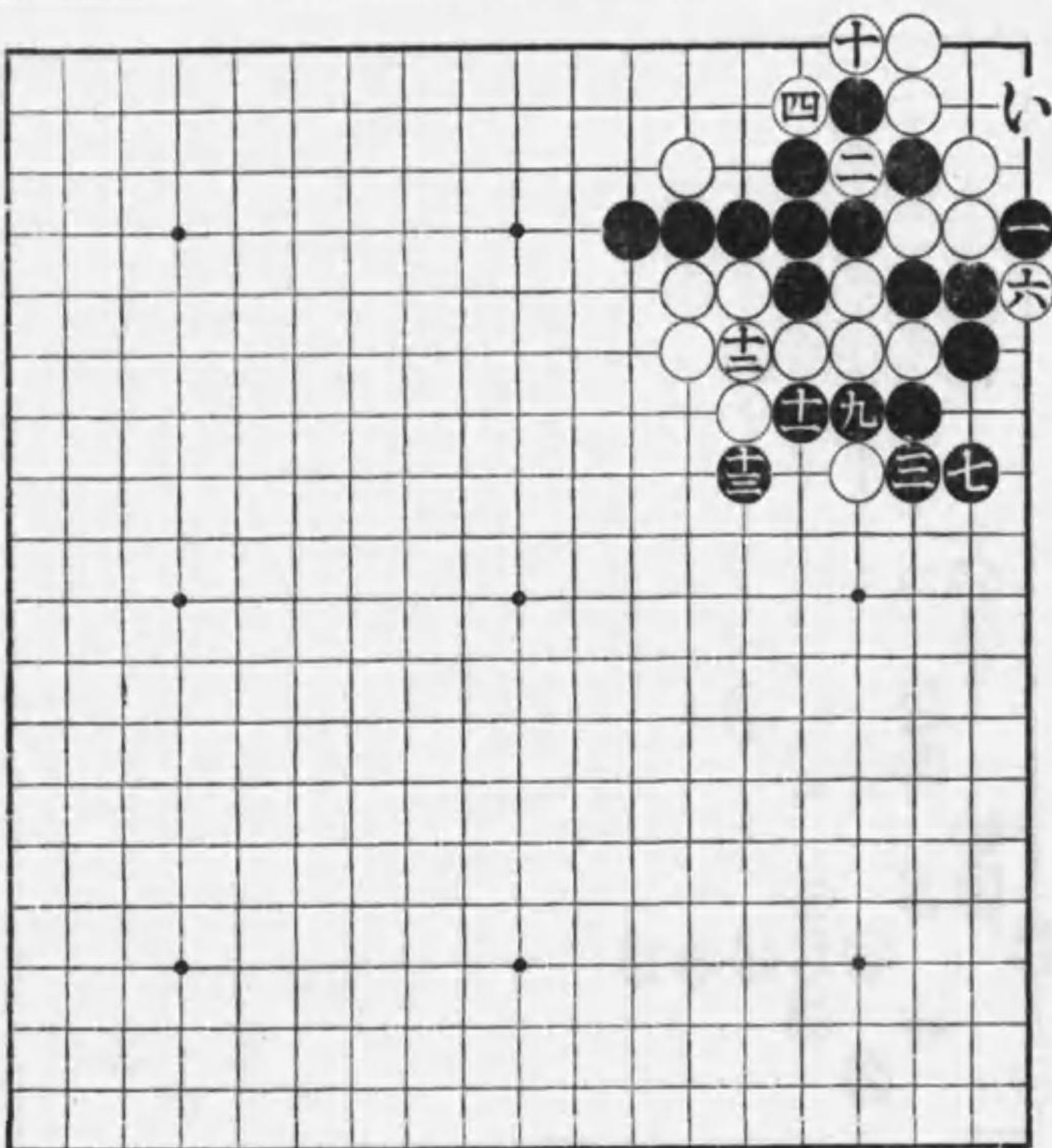
白一亦不成功。本圖は前圖に於ける白五の變化で、一と先きに攻め、黒二と尖んだ時に、前同様に三、七と約え着ける手段に出たのである。其の結果白十五までは必然の成行である、茲に於て黒は勢ひ十六と掛けざるを得ない若し白イに飛ぶとすれば黒口に置いて、隅の白を殺すべく、又白イに飛ばずしてホに押したらば黒はへに行び而して機を得て口に十々目を刺すから、前圖同様黒の方が充分の勢である。



第十二圖 戊 四目ツグ

▲第十二圖(其一)

白二是れ亦失敗。本圖は第十二圖(戊)に於ける白三の變化で、イに應せずして二と劫を取つて行つた。黒一のはねは實は打たぬでも宜い只白がいに凹んで呉れるならば、利かして置く方が宜いと云ふに過ぎない。所が二と劫を取られて聊かの外づれた然る上は三と押す外はない。黒九の劫立は極く善い。斯くて十三とはねて、此の白を攻めつゝ下方の黒に應援に與へたのは、是れ又良手である。斯うなつては白の形勢が甚だ悪い。無駄石が大分出て居る。黒の方には無駄石は一つもない。打抜かれて居る處は二ヶ處あるが、夫れが爲に白の方に無駄手が二手生じた勘定だから、彼此れ相殺の姿であつて、黒の外勢は大いに振つて居る。だから黒から一と綽ねられた場合に二と劫を取込んで行くのは宜くないのである。



第十二圖 其一 五劫トルル同

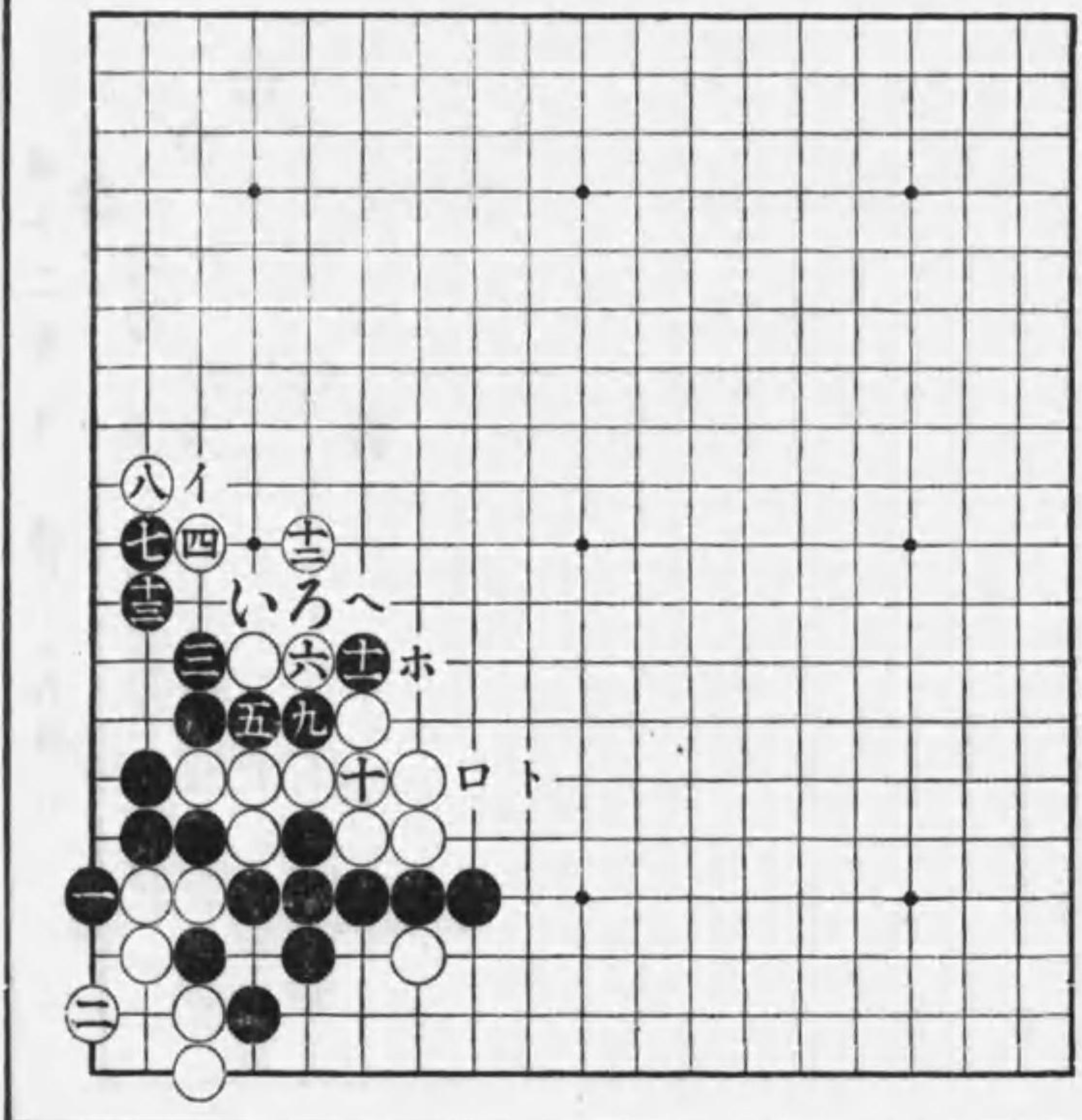
▲第十二圖(其二)

白四は窮策。本圖の如く白四と打つ變化もある。之に對し、黒いにはねて宜いやうに見えるが、さうすると白ろに約えると云ふ甘い手があるから、是れは存外黒が面白くない。因つて五と突出した。白は六に引くよりない。ソコデ七と頂けたのは甘い手順である。以下黒十三となる。白十四でイに粘れば黒口に頂くべく、白木に縛ぬれば黒へに行びて善し。又白イに粘ぐ手でトに飛ばば黒イに截つて宜い。本圖も亦黒の方が宜い。

▲第十二圖(其三)

黒四八の截り好し。本圖は前圖白十二即ち本圖の四七の變化である。是れは前の如く白いに飛ぶところに頂けられて團子にコネられるのを嫌つて、四七と飛んだのである。左すれば黒は圖のやうに四八と截れば宜い。白はに縛ぬれば黒に、白ほ、黒い、白へ、黒と、白ち、黒りとなつて宜い。又白はに縛ぬずして反對にちへ縛ねたらば黒りに截るべく、夫れから白はにも縛ぬず、ちにも縛ぬずしてりに

第十二圖 其二

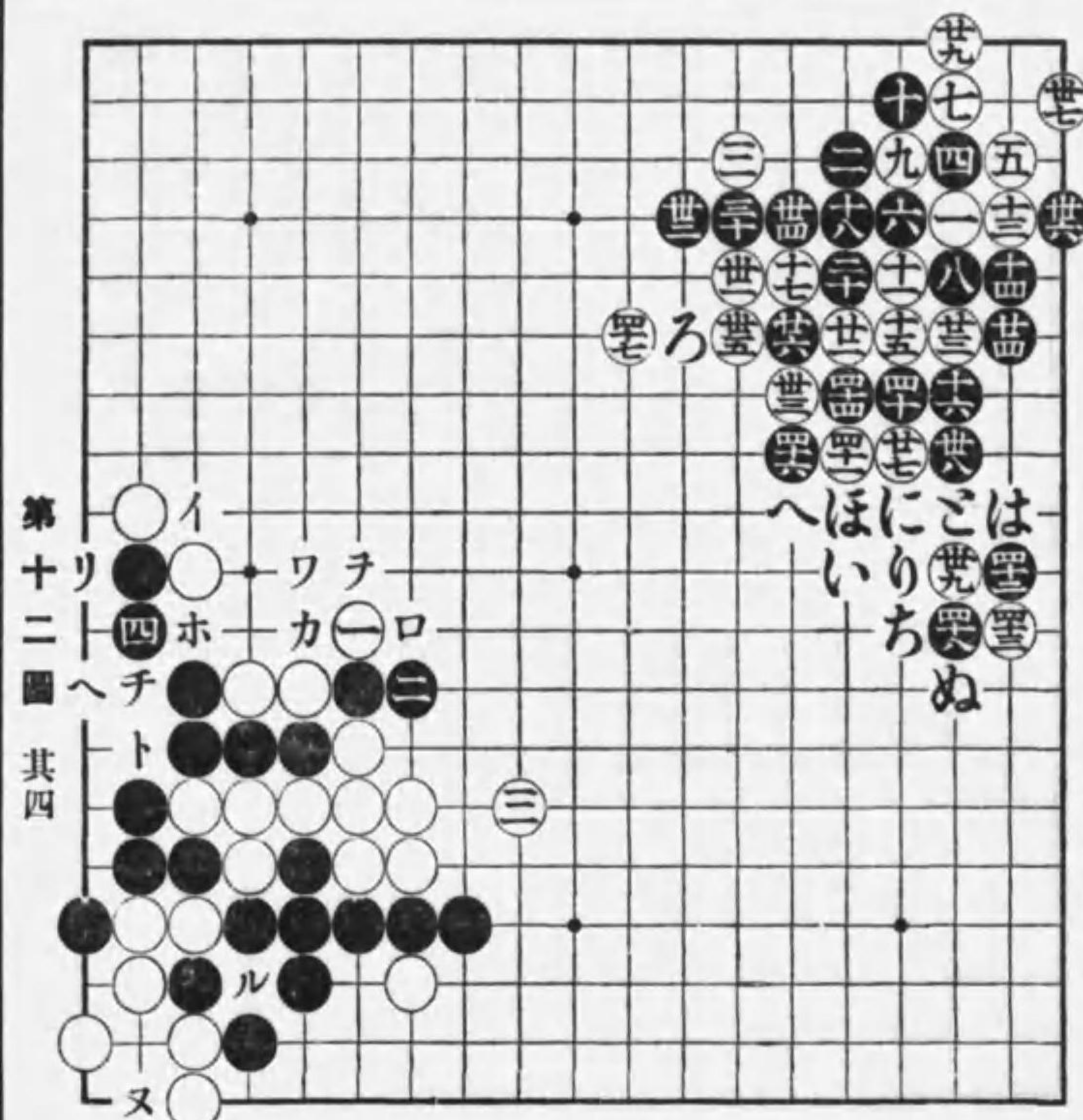


引かば黒にへ跳ね込み、白ほ、黒いと截るのが好着である。ソコデ白へに出れば黒ち、白と、黒はと中て、宜い、右手順の中白ほに出でずしてとに一目を取れば黒へにアテ、白に粘いだ時黒はに引いて「わう手」し、白ち、黒ぬと行びて是れ亦黒大いに善し。

▲第十二圖(其四)

劫争の結果は持。前圖までの如く外部の戦ひはドウヤツても白が不利であるからして、圖のやうに一と中て、上の方の防禦をしてから三と飛んだら如何と云ふに此の場合黒は四と引くよりない。白も亦たイと粘ぐ外ない。ソコデ黒口に曲るが宜い。デ白が木にアテ込む結果は黒へ、白ト、黒チ、白リ、黒又、白ル、黒ヲ、白ワ、黒劫取りとなる。ツマリは白力に粘ぎ、黒ルの劫粘ぎとなつて、隅は持であるが、さうなつても黒が悪くない。

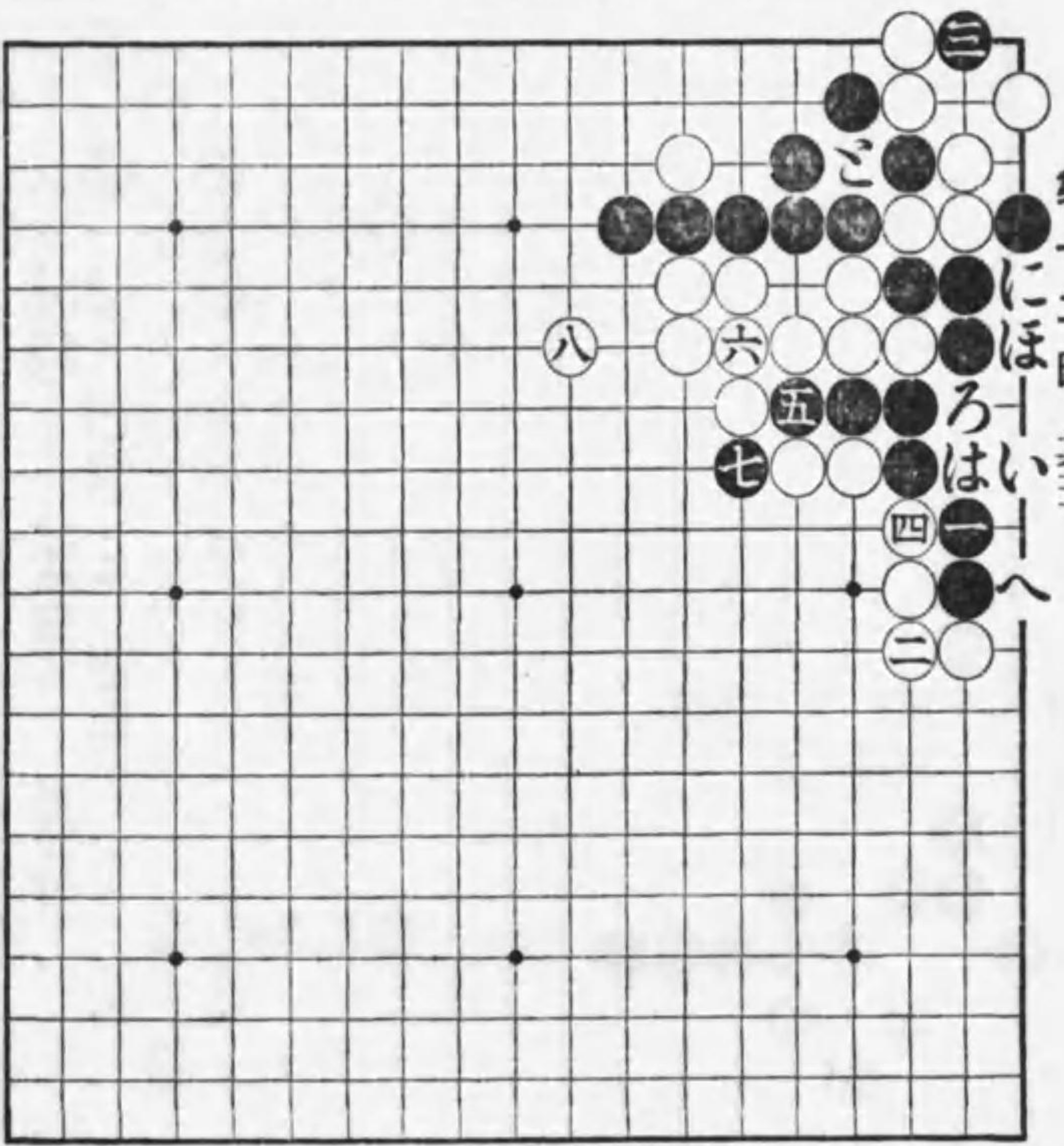
第十二圖其三 劫トル(同)同(同)同(同)同(同)四目ツグ



第十二圖 其四

▲第十二圖(其五)

黒一、三の著眼低し。本圖の如く黒一、三と取掛けに行くのは宜しくない。ナゼならば前のは黒七と截つた方面の白に色々缺陷があつたから宜いが、今度は白の形に無駄がない。デ四と中てられた結果、黒はいに掛粘がんならぬ。さうすると白ろ、黒は、白に、黒ほ、白へとなつて、黒はとに粘がんならぬ事になる。茲で黒が後手を引くやうではさッぱりイカヌ。前のは白が後手になつたから宜いけれども今度は白には後手を引く所がない。但し茲で聊か注意を加へて置きたいのは、白が四と中てた時分に五と突込む手でに印を粘れば隅の白はドウにか取れはするけれど、左すれば白は先づ以てとに劫を取込んで行く。此の劫を取込まれると、取るに非常の手数が掛かる。其の間に外部をビシ／＼とめ付けられて了ふ。さうして折角行び出して居る一の黒二目位は先手で取られて了ふから、縦しんば取るとしても味附きで、甚だ香ばしくない。だから斯う云ふ白兵戦に於て隅の白を取らうと著眼するのはイカヌのである。

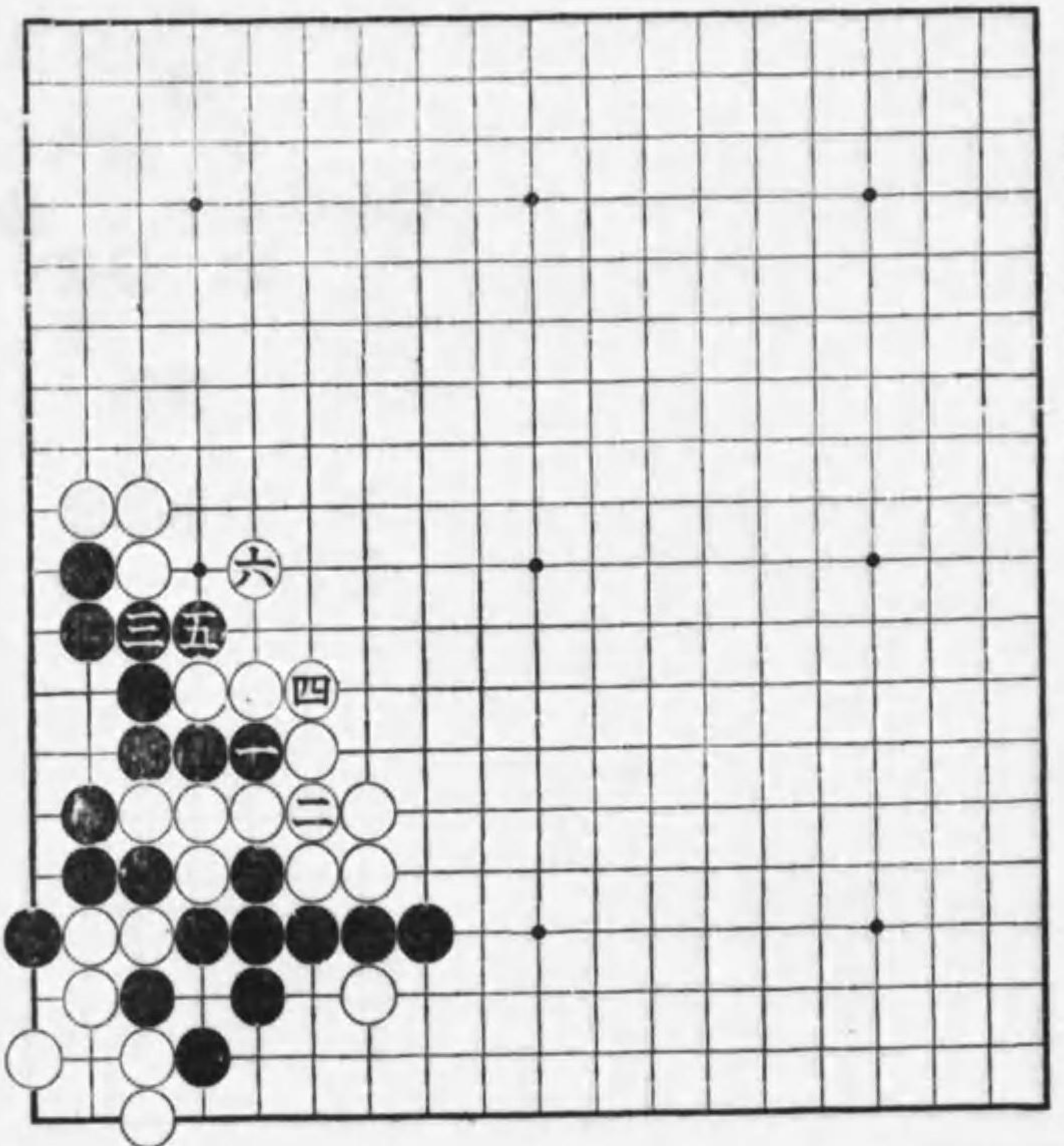


第十二圖 其五

▲第十二圖(其六)

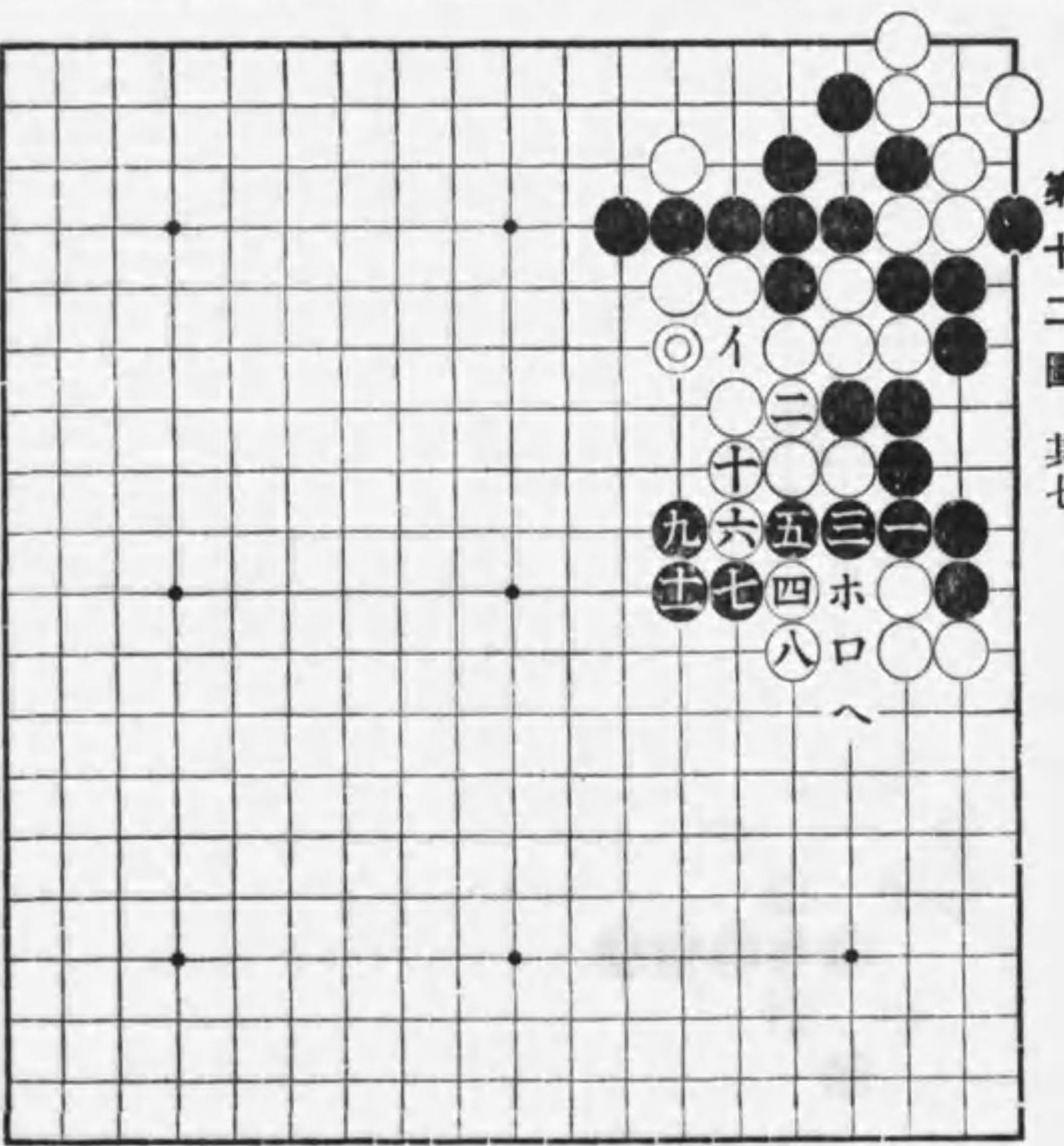
黒一、三悪し。本圖一と中て、三と打つたのは即ち三の處に白からキメられると、非常に攻合ひの手数が縮まり、且つ眼の工合も亦た違ふからである、デ三とグズンだ時に白が茲で何とか挨拶をしたら、黒は四の處を截らうと云ふモクロミだ。所が圖のやうに四と粘がれては、鵜の嘴で、黒がさつぱりイカヌ。隅の白は元來軽い石だから、之を取るのに、さう手数が掛かつては逆も勘定に合はぬ。おまけに此の白を取る爲めに外部をメチャ／＼に塗り著けられては、取つても取り甲斐がない。斯うなつては黒がイカヌ。

第十二圖 其六



▲第十二圖(其七)

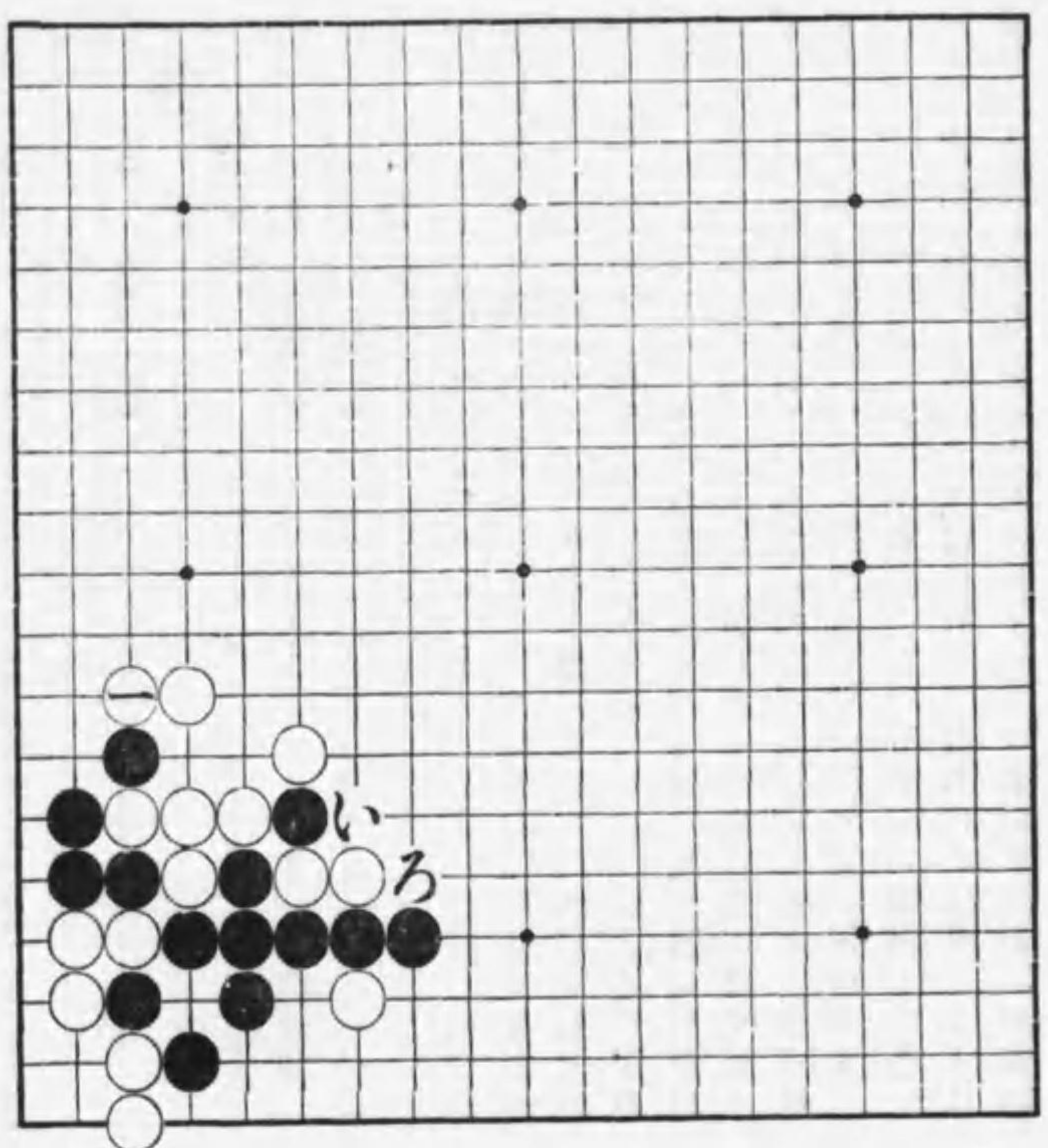
白失敗の原因。前には一とグズム前に二の
 處へ突込んだから悪かつた。因つて本圖のや
 うに單に一とフクレたらドウカと云ふに、白
 若し四と應じたらば其の時こそ黒二へ突込
 み、白イの時、黒十の處を截るが宜い。斯うな
 れば先きにも言つた通り、白から一の處にキ
 メられて居ないから眼の關係と手数都合が
 大變に違ふから黒が打てる。からして白は二
 と粘いだのである。以下黒十一となつては是
 れ亦黒が宜い。尙ほ白が四の手で緩く七の處
 へ掛けたらば黒は四へ尖みつけるが宜い。デ
 白八に約えたら黒口は綽込み白木、黒五と粘
 ぐべし。さうなれば黒はへに一目を行びるか
 又は六に押出すか、兩天秤になるから黒が宜
 い。其の手順の中黒口は綽込んだ時白木に截
 らずしてへに押えたらば黒は六の處へ跳ね出
 すから更に面白。之を要するにドウやつて
 も白がイカヌと云ふ原因は前にも述べた通り
 湖つて白が◎印に一目を取つたのが悪いの
 だ。一見形の如くであるけれども一目を取つ
 た爲めに肝心の喧嘩石に逃げ出されるやうに
 なつたから之を制御することが出来ぬやうに
 なつたのである。



第十二圖 其七

▲第十二圖(其八)

白一佳し。前述の如く白いに一目を打抜く
 のは善いやうで其實は悪いと云ふことが明瞭
 になつた。因つて喧嘩の相手に逃げ出されぬ
 やうに一と約えたらドウカ。斯う遣られては
 黒がイカヌ。縦しんば黒が茲でいに出で見た
 所がろと出られて何とも仕方がない。要する
 に此の戦ひは白一と約え付けるのが一番良
 手で、是れで黒の敗北と確定されるのであ
 る。其の原因は順を追うての説明で判然する
 であらう。

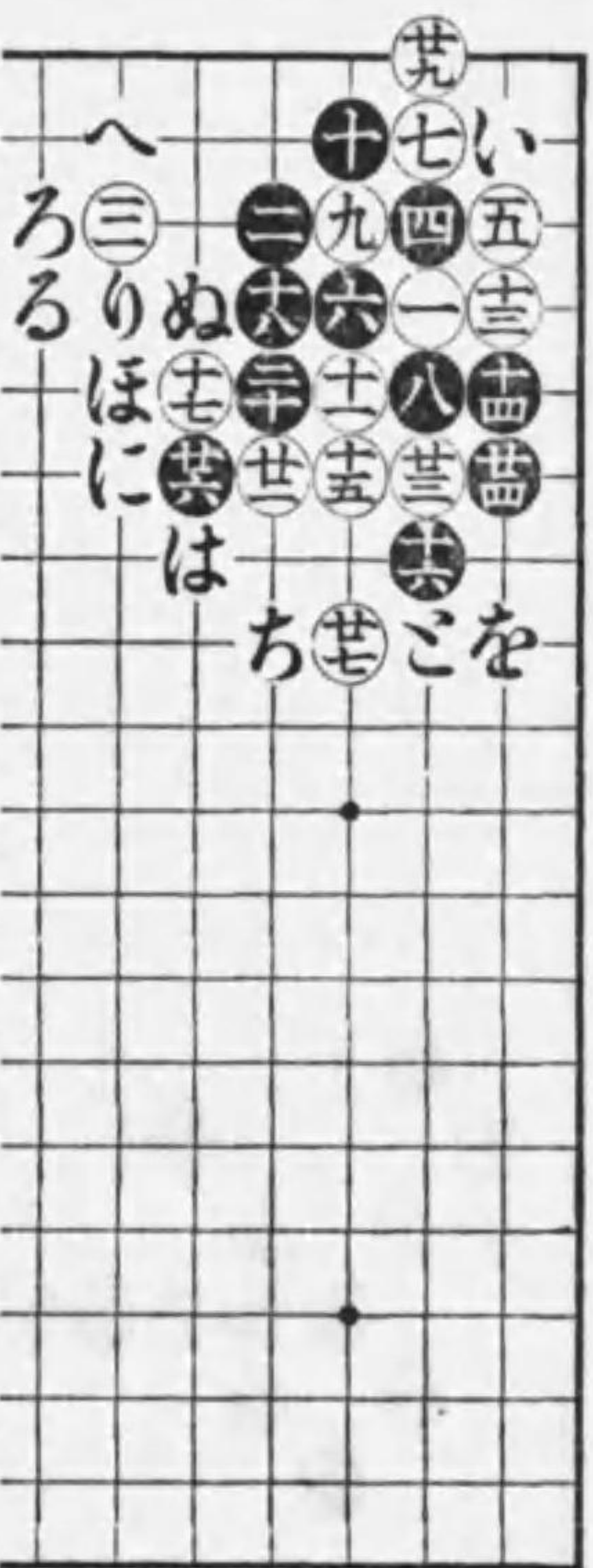


第十二圖 其八

▲第十三圖 結論(其二)

黒十四と強硬に約え込んで行つた手は果して善か悪かの結論を圖に由つて示す。前に言つた事と重複するかも知れぬが、念の爲め初めからの得失を述べる。元來白が七と縛ねたのは無理である。黒から八、十と咎められては白がイカヌと斯う昔しから定められて居つた。然るに茲で白が十一と截つたのは無理と言はれて居る七の意思を遂行しやうと云ふ極めて剛情な手だ本來を言へば此處は白が先手で黒が後手、白の方が一勢力多い處であるから、假令多少の無理があるにしても、白の方が善くなくては割に合はぬ筈である。けれども黒の側から言へば縦し一勢力多いにせよ白が無理を遂げやうと來たのだから縦ひ後とて棄てる迄も、飽くまで白の無理を咎めて行かうと云ふ作戦に出づるは當然の意氣地である。夫故に積極手段に訴へて強硬に十四に攻撃に行つたのである。が此の十四の手が善か悪かは疑問である。即ち一旦劫争の結果白(いに粘る手は既に解決を告げた)に粘がすして二九に下ると云ふ妙手があつて、之れが爲めに何とも黒に凌ぐ術がない。今迄掲げ盡した外の手筋としては黒は三十の手でろに附

第十三圖 其一 ●劫トル●同●同●同●同

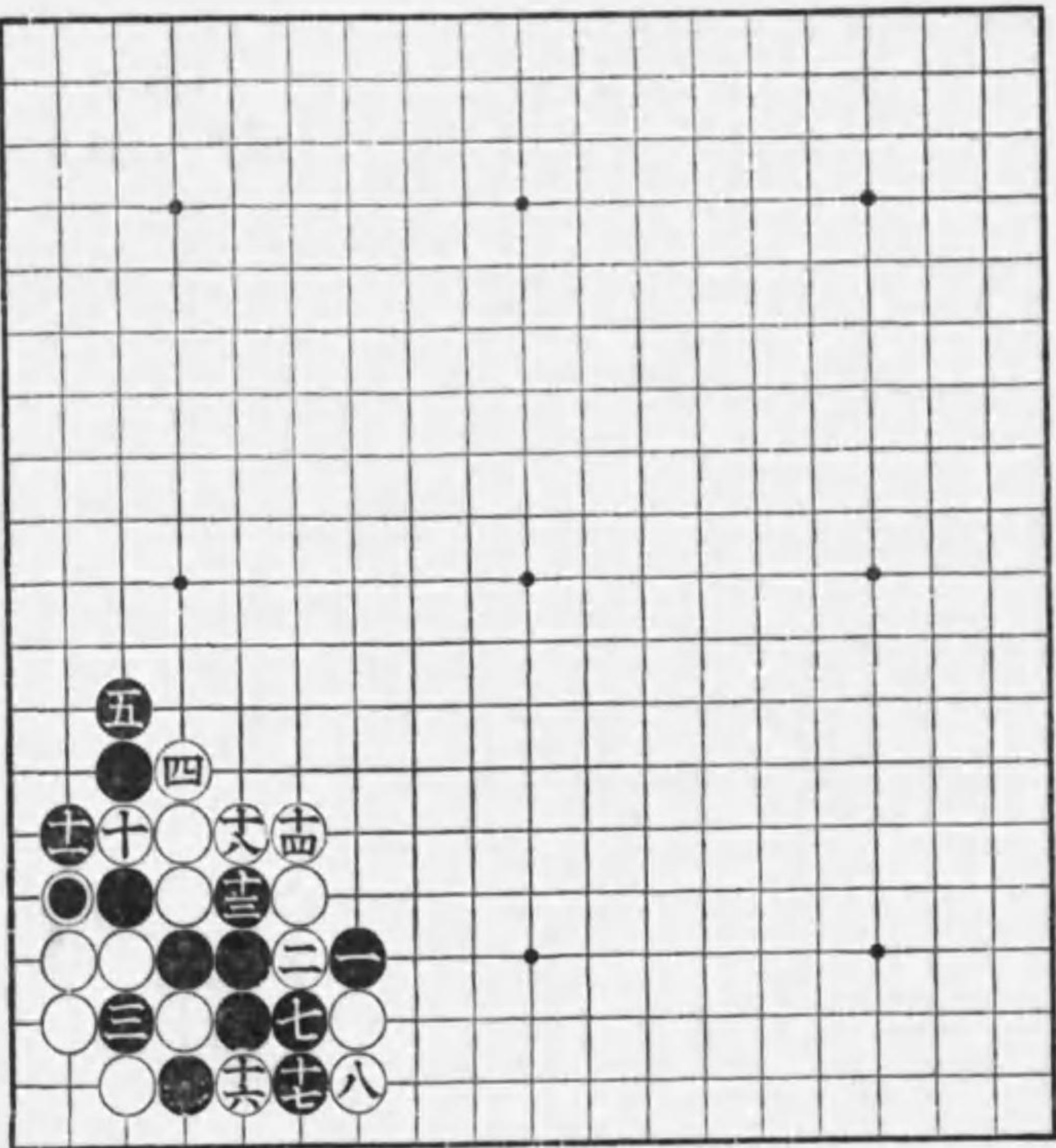


ける外はない。さうすると先づはに縛ねられる。黒にへ行びれば白ほに押すと云ふ好着があつて、ドウ變化を試みても黒が悪。或は白ほに縛ねずしてイキなりほに行びて黒へに縛ねた時白とに押えつけると假定しても白が不利でない。からして黒ろの頂けも成功しない。然らば黒ろに頂ける前に先づはに行び白ちの時黒ろに頂けたらドウかと云ふに然らば白は黒の註文通りほへ行びて黒へに縛ねた時白とに押えて宜いのである。又白ほの手でりに引き黒ほに中てた時白ぬに粘いでも宜いけれども、更に大いに譲つてるに出で黒ぬに一目を打抜いた時轉じてをに打つても白が宜い。だから黒ほに行びて白ちに並ばせるよりは未だしも單にろに頂ける方が手筋としては宜いのであるが夫れもダメだ。

▲第十三圖 結論(其一)

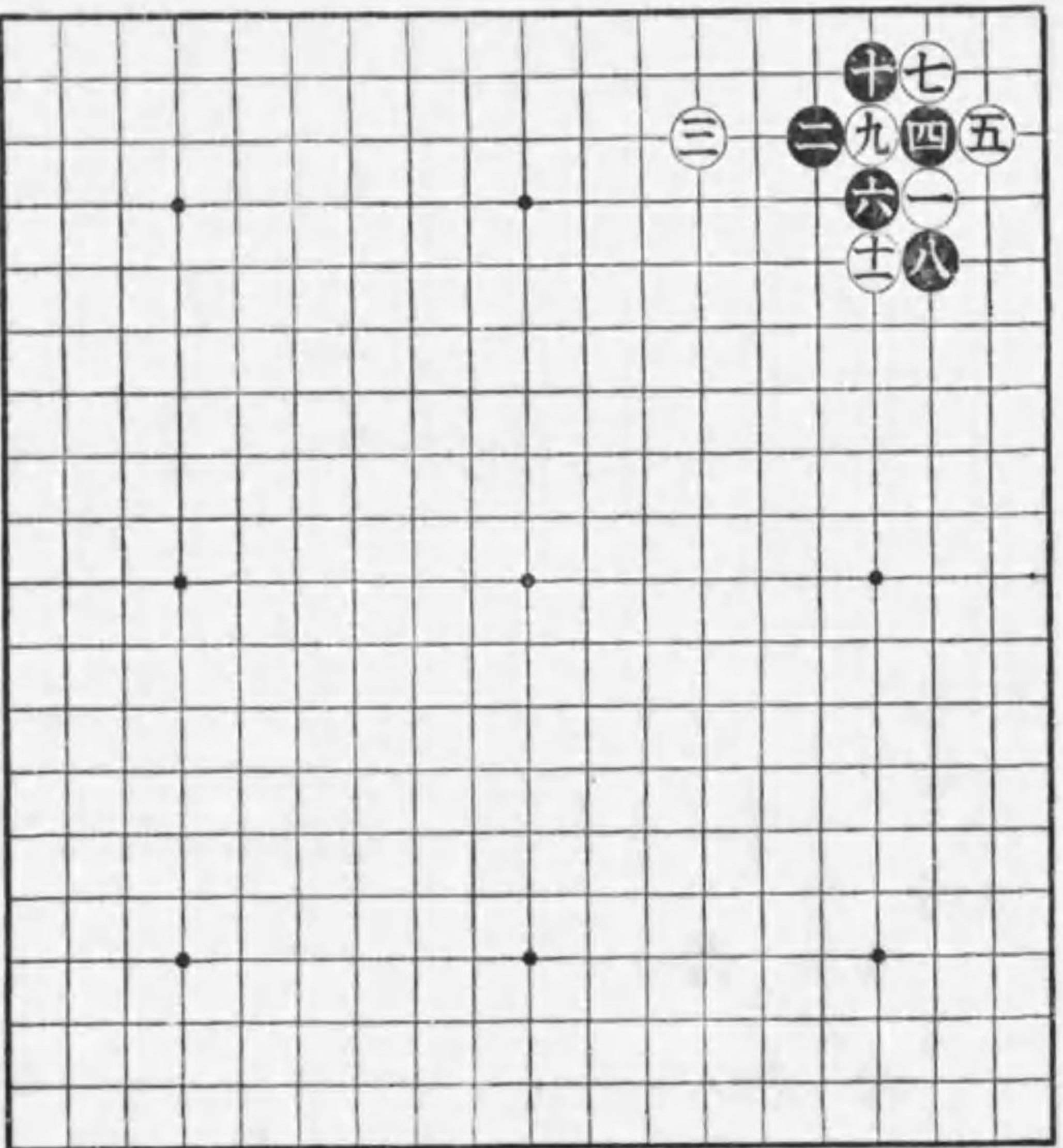
十六妙。黒一の手で十三に突出するのが悪いとすれば圖のやうに一に附越すか八に附けるかの二途しかない併し八に附ける手は戦ひの中心に關係のないソツボの手で、少しも白に打撃を與へぬ手だから、何と打たれても黒の宜い筈はない。シテ見ると結局一と附越す一途しかない。けれども劫争の結果、白から十六と打たれる妙手があつて十八と封じられてはアトは何となつても黒がイカヌ。要するに印に約えた黒手は白の無理を咎めやうとしたのであるが、何しろ白の一勢力多い處で、白兵戦が始まつたのであるから、白の手段が無理かも知れぬが、其の勢力に壓倒されたる。結局黒の不結果に陥らざるを得ぬのであ

第十三圖 其二 ●劫トル●同●同●同●同



●●●●●●
◎質問に答ふ
▲質問叢集。白七の手は八に行びる外はない。逆に七と縛ねる手は悪いと云ふ定説であるから、今迄左程氣にも止めて居なかつた。所が果して研究が届いて居るや否やは知らぬけれども、人は皆やたらに七と縛ねて來るとの質問

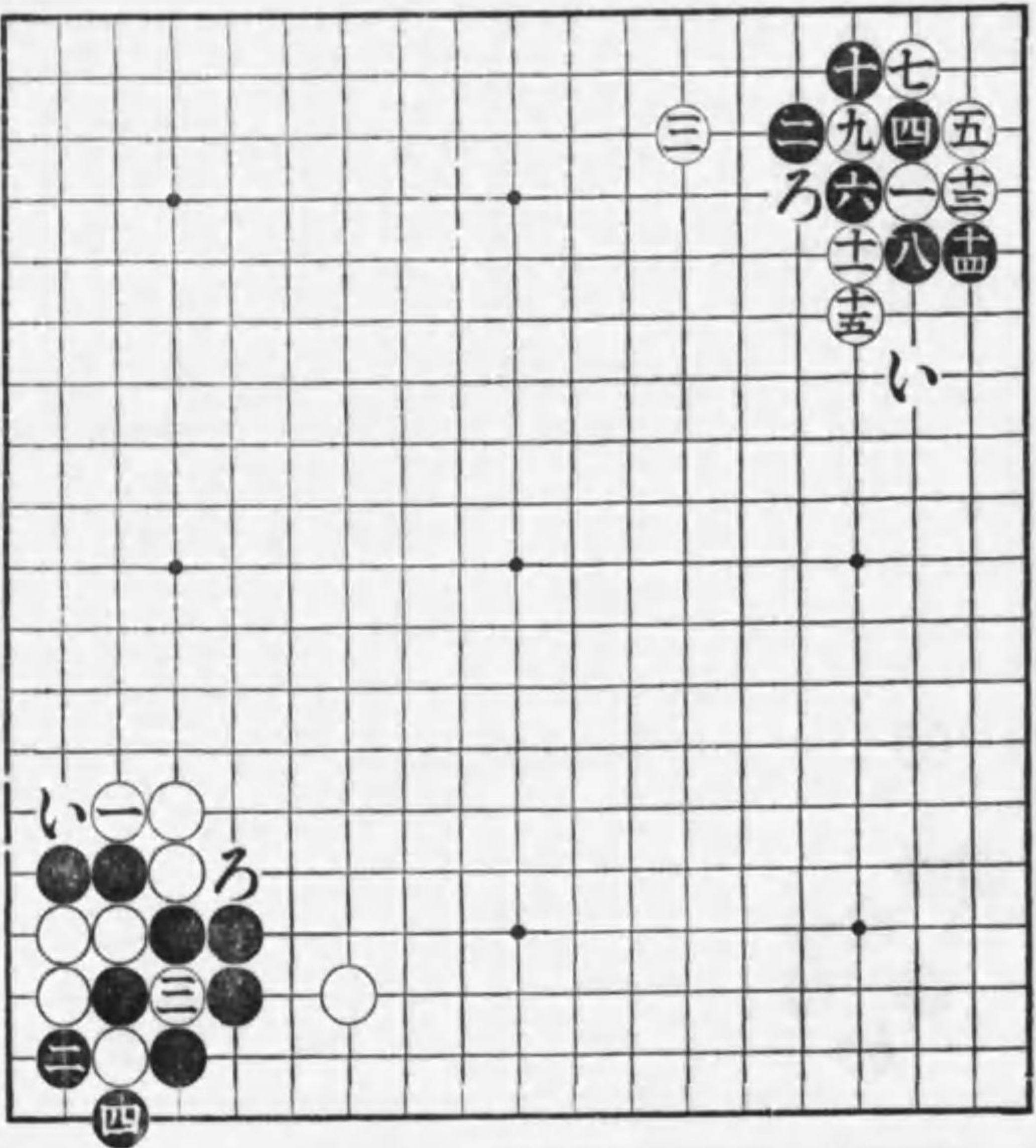
原圖 劫トル



▲質問(甲)

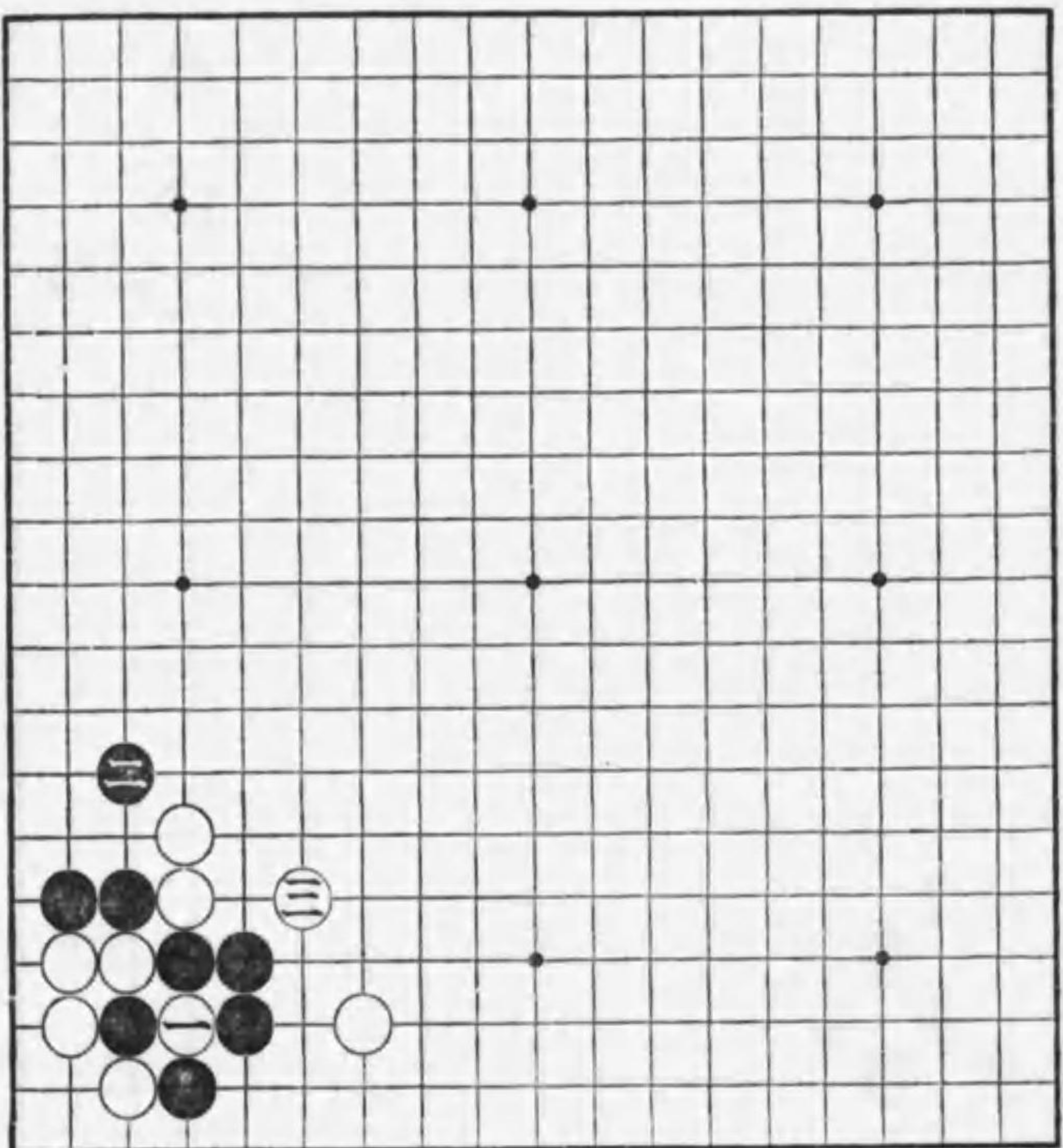
前掲載圖に依れば白十五の時黒いに飛んで居る。併し此手でろに粘いだらば白は如何に打つであらうか。黒いの飛びに比して、悠うやる方が宜いやうに思ふ。さうすると白の打ち様は二通りしかあるまい。第二圖のやうに白一と二目を抱えて取れば黒二に截り、白三の時、黒四に涉つて完全に隅で活きて了ふ。若し又白が第三圖のやうに一と劫を取込んだならば其時こそ黒二と飛び白三、黒四と劫を取込んで行く。斯う打てば前掲載圖に比して駄目を一手詰めずして、劫に克つことが出来るから後の打方が大變違ふ。斯うなれば自分の研究では黒の方が宜いやうに思ふがとの質問。

甲質問一



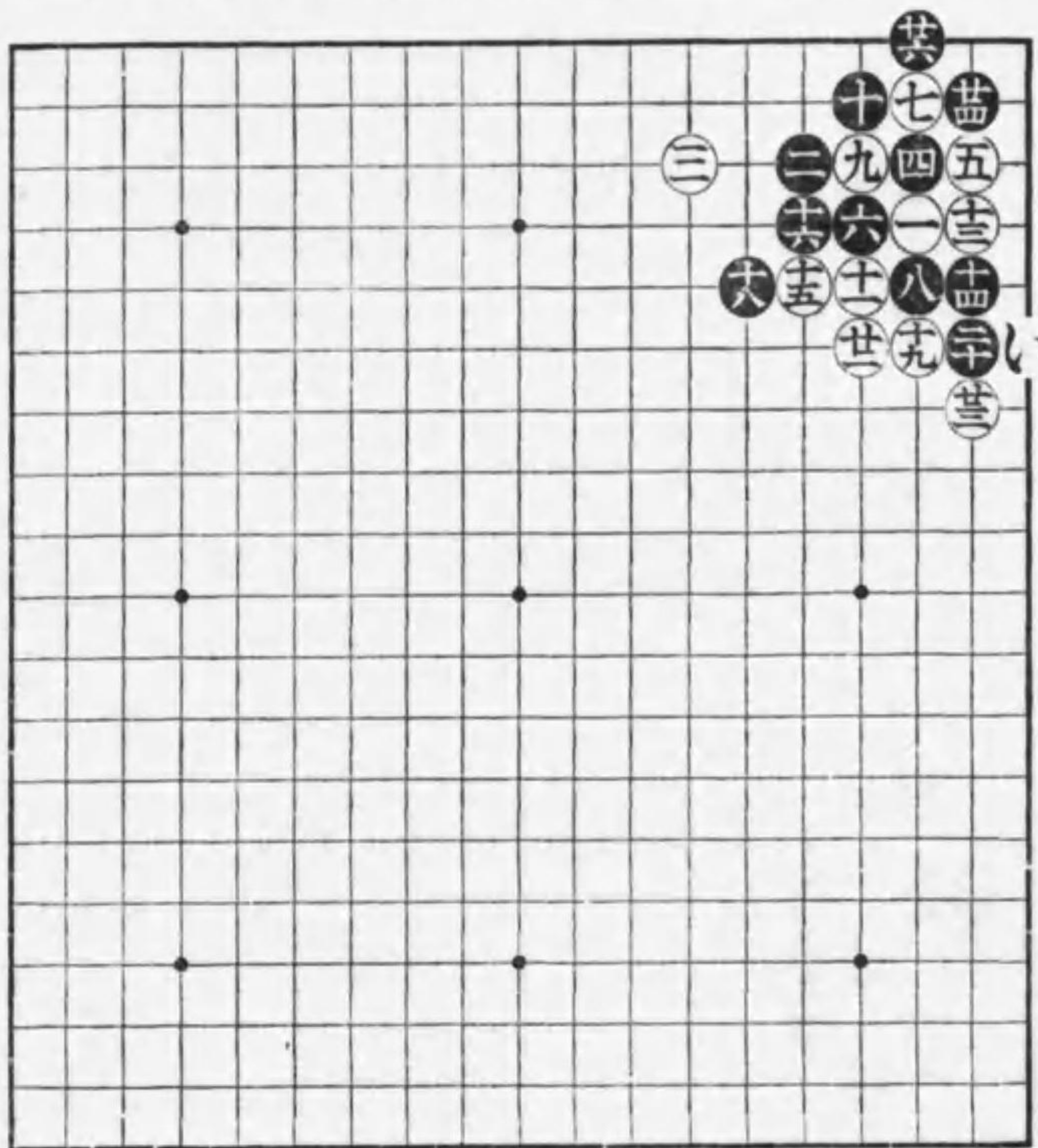
甲質問二

▲答。御説は一應御尤であるけれども、惜い哉未だ理論が徹底して居ない點がある。成程第三圖のやうになれば駄目が一手助かつて、劫を取込んで居るのであるから、御説の通り黒には色々打方がある。其點は儘に好いに相違ない。併し第三圖のやうに一と劫を取込まずして第二圖のやうに一と二目を取られると黒が悪い。御説に依れば二と截つて四と亘つて了らば治まつて了ふから宜いと云ふ御意見であるが、其の治まり方が損である。して見ると、つまり第一圖黒十四と約えた手が悪手と斯う云ふ結論になるのであるから問題の的を外れて居る。ドウ云ふ譯で第二圖の如くなつては黒の不利であるかと云ふと、試みに参考圖と第二圖とを比較して貰ひたい。第二圖は結局白い、黒二目の劫取と見做すべきものである。夫から参考圖の方は白い、黒四の二目取と見るべきものである。からして参考圖の方は二十と曲つた一子だけ餘計取られて居る處が第二圖に比して悪い。けれども上部に於て白十五の駄目手と黒十八の綽手と交換した勘定になつて居る處は白が大變悪い。換言すれば黒が二十の一着を餘計に取られて居ると云ふことはエライはエライ。けれども



甲質問三 劫トル

黒の身に取つてはドウセ取られる所で、一つ餘計に取られて居るに過ぎぬ損害である。然るに上の白十五、黒十八の振變りに至つては、言はゞ全然駄目手一著と十八と云ふ立派な一著との交換になつて居るからして黒は得、失を償つて餘りある姿である。要するに是れは場合次第で必ずしも黒が悪いとは謂はれぬ。然るに第二圖に於ては参考圖に比して、白の方には更に無駄石がない。唯白の方の悪いのは第一圖三の一著が黒の堅い處に接近して居ると云ふのが一つ併し斯う云ふ石は棄石として利用することが出来るから左程の事はない。夫から第一圖白十五の一著が少々怪しい姿になつて居ると云ふ此二點に過ぎない。然るに黒の悪い所はと云へば第一圖八、十四の二目は前述の如く少しも無駄石なしで取切られて居る。是れが大損害である。斯く言へば或は謂はん。黒は劫を二目打取つて居るではないかと、然り二目を取つて居るけれども前に一目取られて居るから實は一目取つたに過ぎぬ。故に此損得は比較にならぬ。斯く解剖して見ると第二圖の如く白に味なしに二目を取切られては黒の不利たることは其他の説明を待たずして明かであらう。故に第一圖黒いに飛ぶ手でろに粘ぐ手は必ずしも宜いとは謂はれぬ。

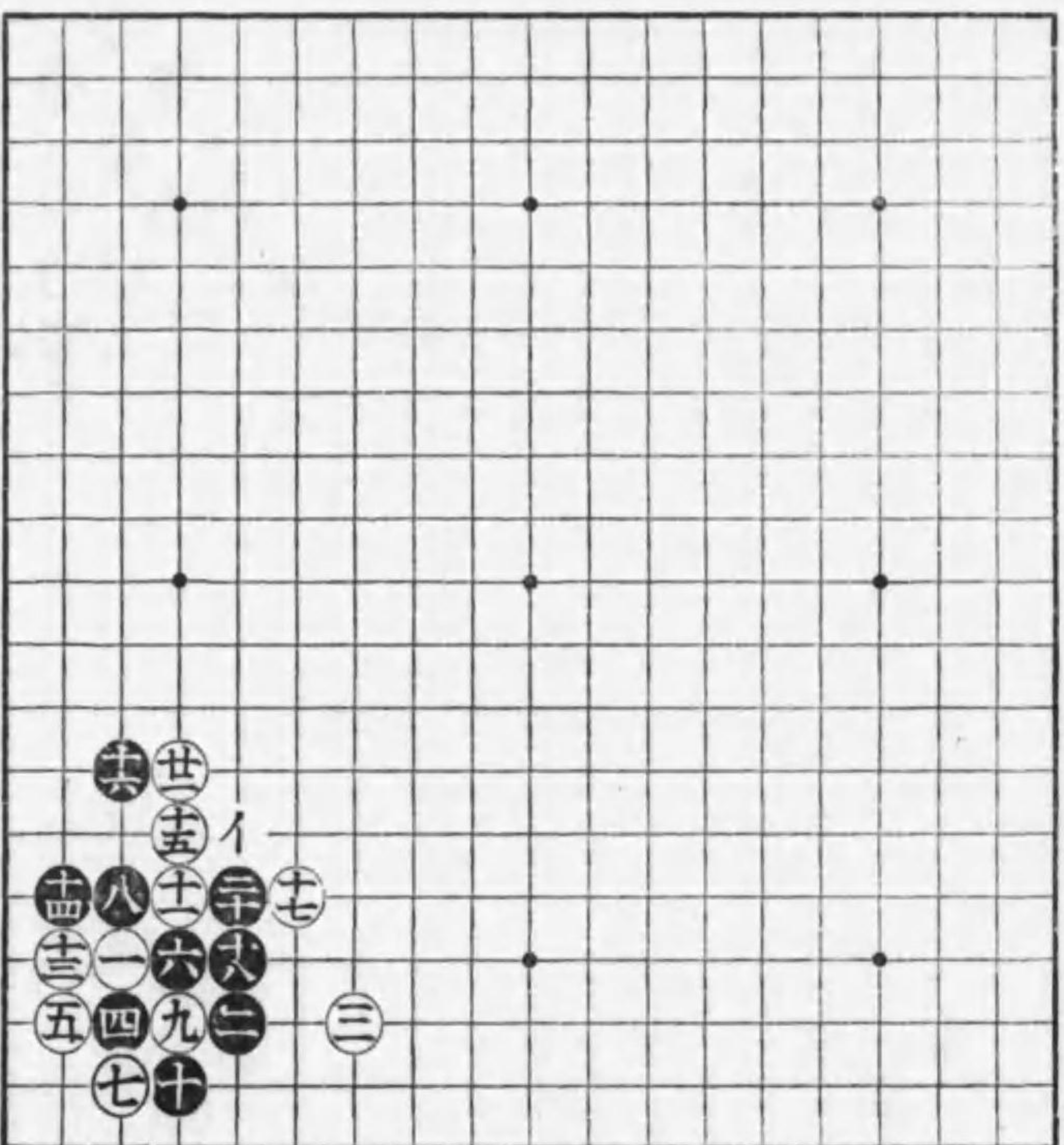


参考圖 劫トル(同)同(同)同

▲質問(乙)

此間自分が或人と打つた時圖のやうに二十と劫立をした。白は無論イに約ゆるだらうと思つた。所が豈に圖らんや二一と押されて甚だ應手に困つた。茲で黒はドウ打つのが宜いか。

乙質問 劫トル(夫)同



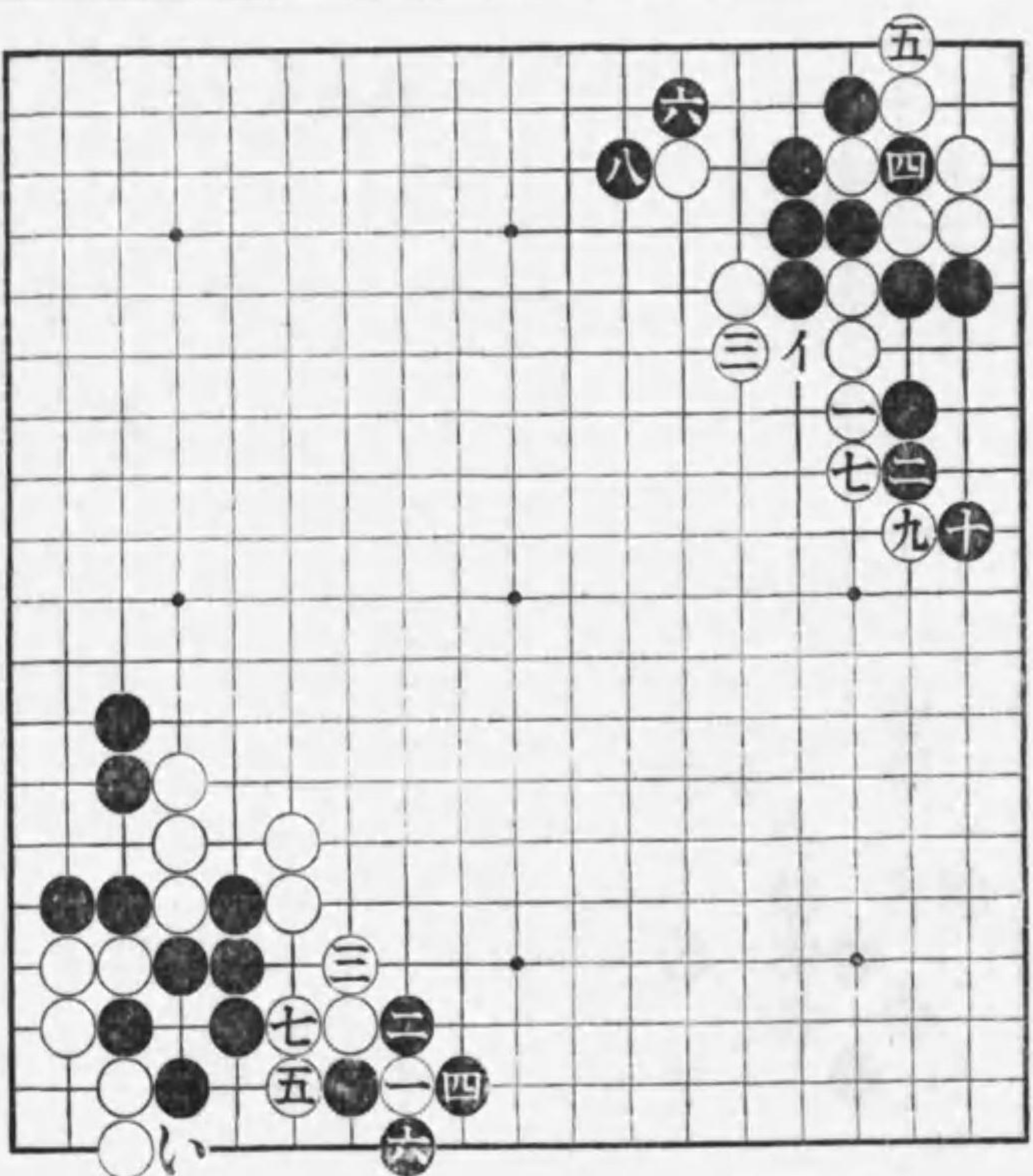
▲答圖(一)

白二一の押しは悪い。イに約ゆる方が宜いのである。さうすると前々より掲載した通り、ドウ變化しても黒が面白くないのである。圖のやうに一抔と變挺な手を打つて貰ふ方が却て黒は凌ぎ易いのである。此變化は一々圖を掲げて示しますが、答圖第一の如くなつては黒は白の術中に陥つたものと謂つて宜い。

▲答圖(二)

本圖の如くなつては、假令ひ黒の數子を取つても白が悪い。と云ふのは中の黒六目は包まれて居るとは云ふものゝ、未だ生々して居つて、種々の味がある。現にいに約えて互る手もあり、其他種々の手段があるからである。是れは無論黒が宜い。

乙答圖一



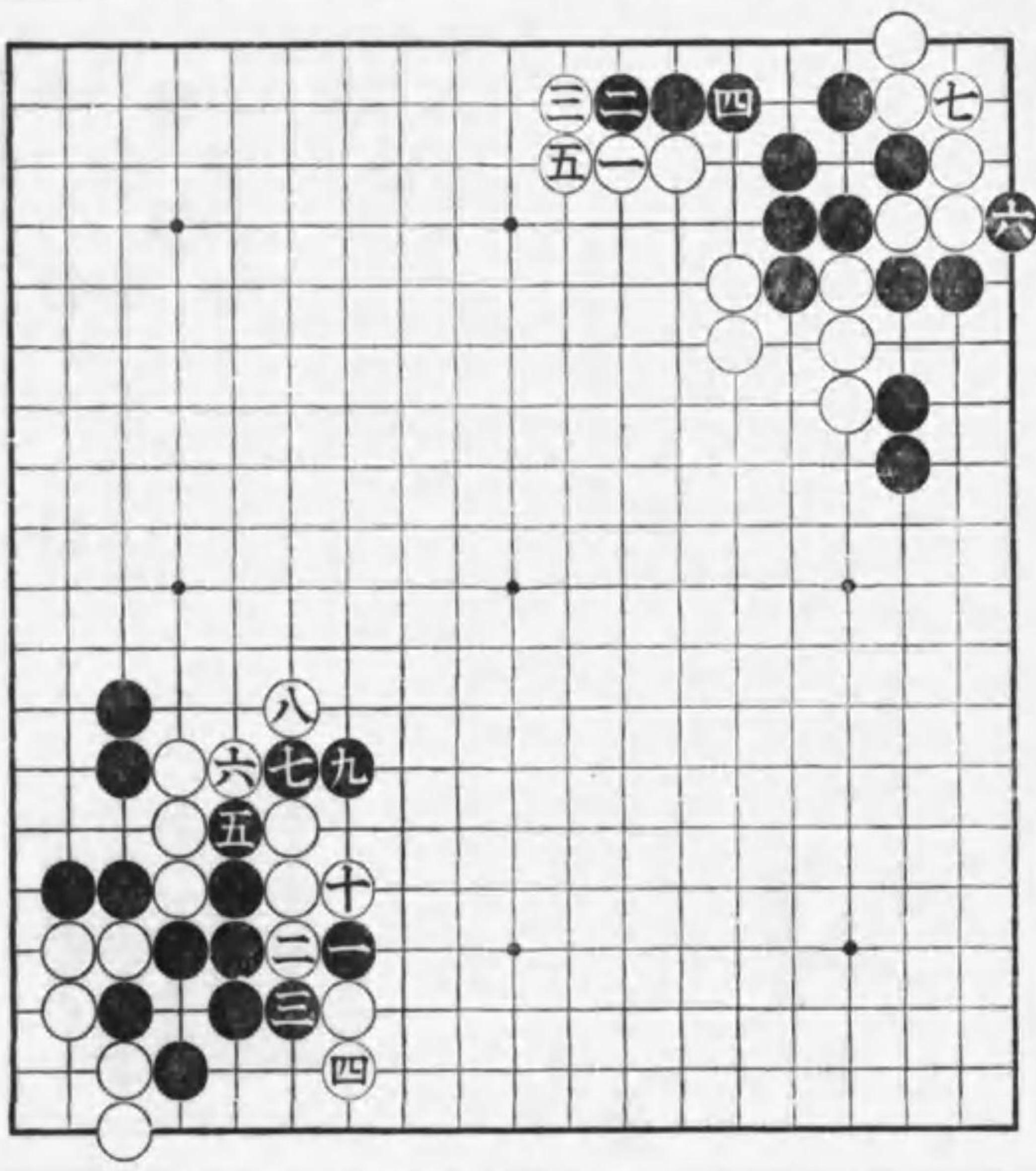
答圖二

▲答 圖(三)

本圖は劫争ひの六かしい碁である。斯う云ふ六かしい碁になつたのは、ツマリ白が一行びた結果である。是れは場合に依る手で、此一局部丈けで利害を断定することは出来ない。兎に角白としては第一圖のやうに七の處に押して振替はるのが一番宜いのである。

▲答 圖(四)

黒一と附越す手は一見手筋のやうであるけれども圖の如く打たれると自然に黒がダメ詰りになつて動きが取れぬやうになるからイカヌ。併し黒には白の悪手を咎むる手段がある。請ふ次圖を見よ。

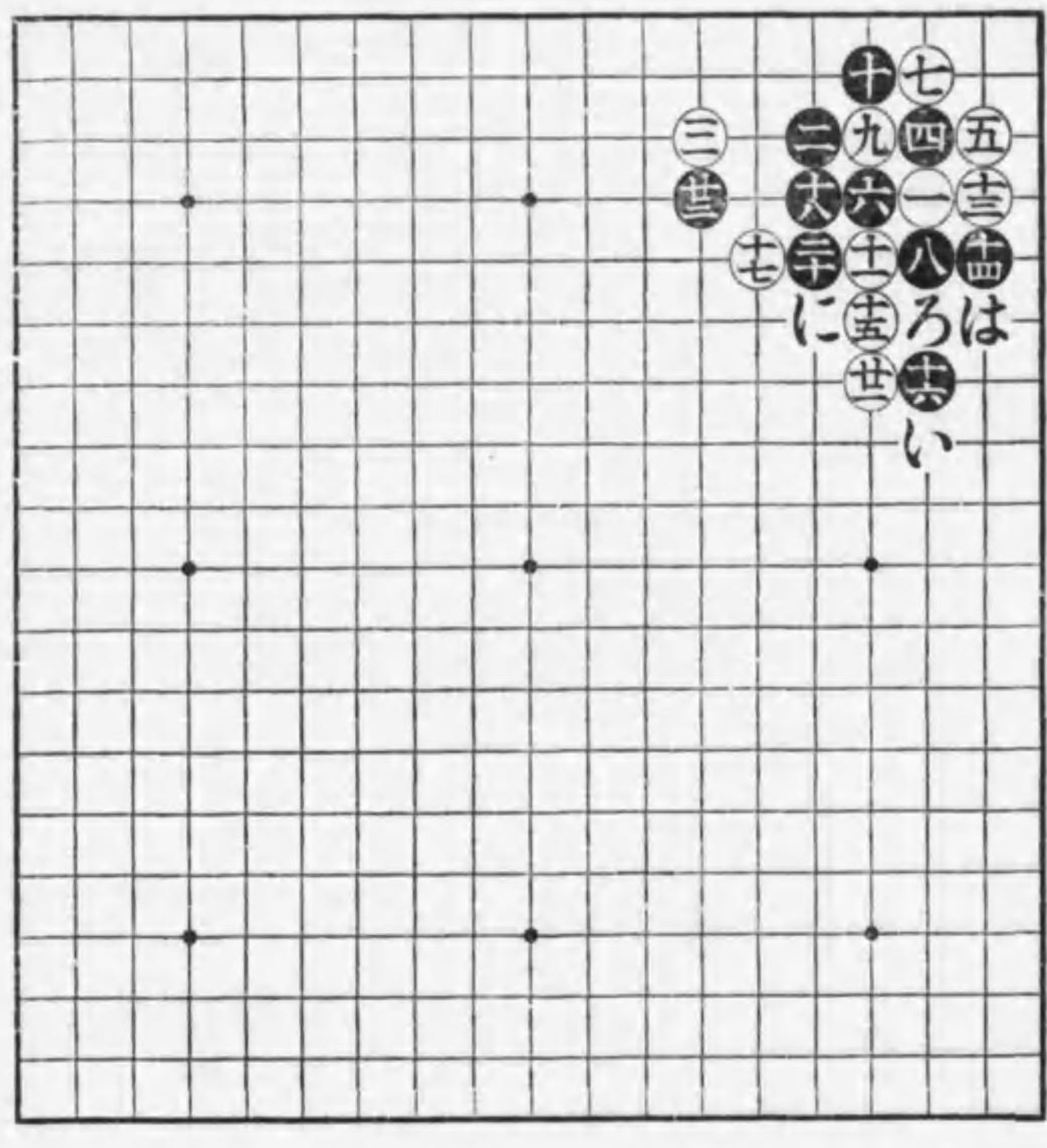


答 圖 三

▲答 圖(五)

白が二一と押した時に白の注文通り黒が二二の手でい印に行びて八、十四の黒を活きる手段に出たから悪いのである。本圖の如く二二と頂越して八以下の三目を棄てる方針を執られると却て白が困るのである。ナゼならば白は此時二一と押した著意上ろに突出して二目を取るより外に打つ手が無いからである。さすれば黒は先づはに約えて一目餘計にして、棄てる方針で、其味で打てば宜いのである。斯うなれば黒は八、十四、はの三目を取られるけれども、白の方には三、十七と云ふエライ無駄石が出来て居る。其上に先手で四の處に劫を取込まれるから、ツマリ黒が宜いのである。からして黒二十の劫立に對しては前述の通りに約ゆる方で宜いと云ふのである。又白二一の押しに對して黒いに行びるは白の術中に陥るもので、其損害も亦甚大であるから、圖の如く二と頂越すことゝ心得て置くが宜い。

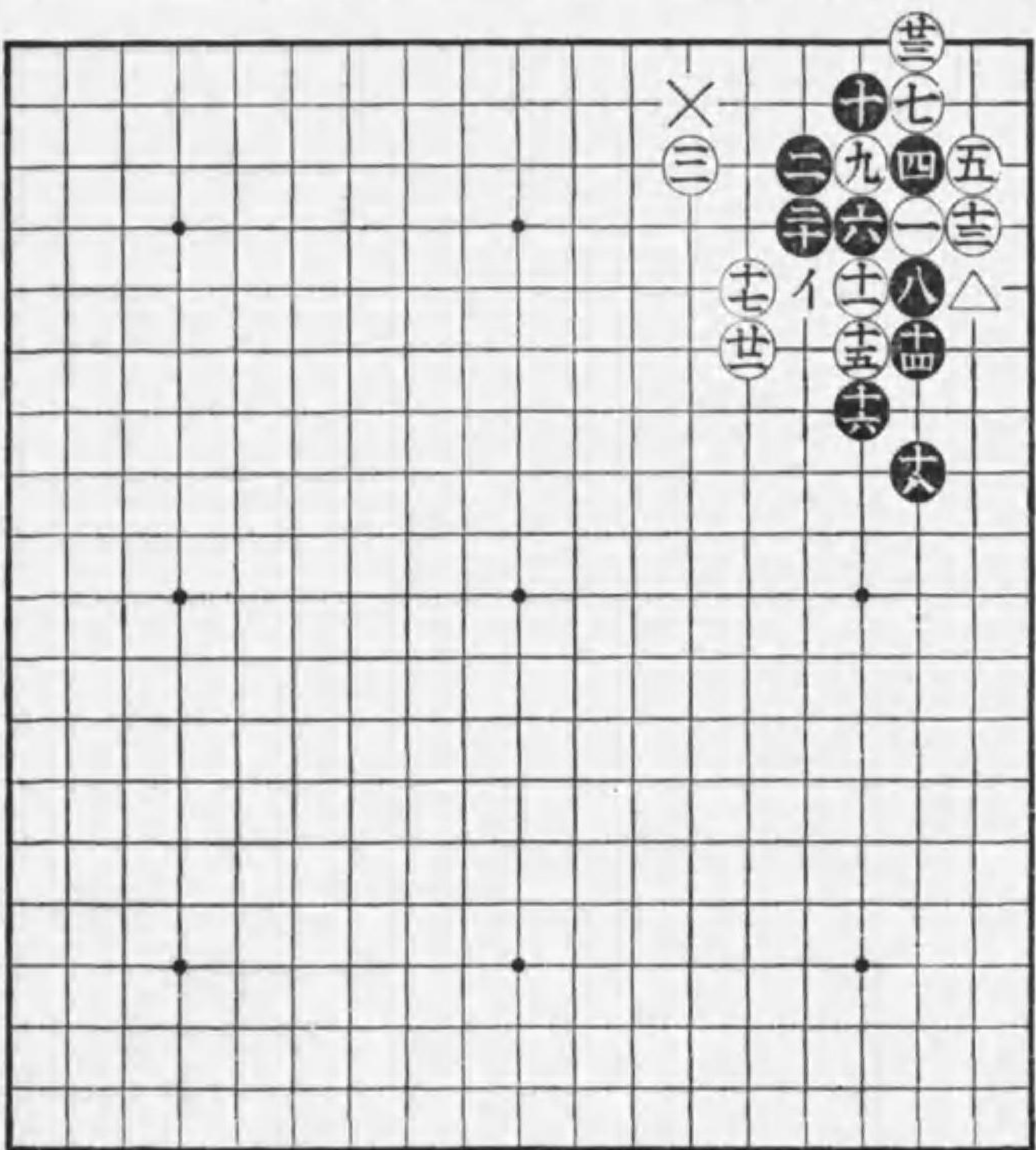
答 圖 五 劫トル(五)同



答 圖 四

▲丁 質 問(其一)

黒が△印に約ゆる手で十四と行びたならば白十五の手でイに伸びる手もあらうが、質問(其一)の如く十五と押す方が宜くはあるまいか。左すれば勢ひ二一までとなり黒が二二の手で劫を取込んだ時に二三に下る手順になると思ふ。斯うなれば白は完全の姿勢で黒を包圍して先づは俘にして居る形勢であるから白の方が宜いやうに思はれる。それに反して黒は一も獲る所がない。嘗て野澤先生の説明に曰く「凡ソ石ヲ捨テルト云フ場合ニハ他ニ夫レダケノ代償ヲ取ラナケレバ計算ガ立タヌ」と然り、併し本圖の如くなつては黒は何等の代償を得ることなくして隅の石を捨てたるに非ずして取られたのであるから黒の損害たるや言ふまでもなからうと思はれる。



丁 質 問 其 一

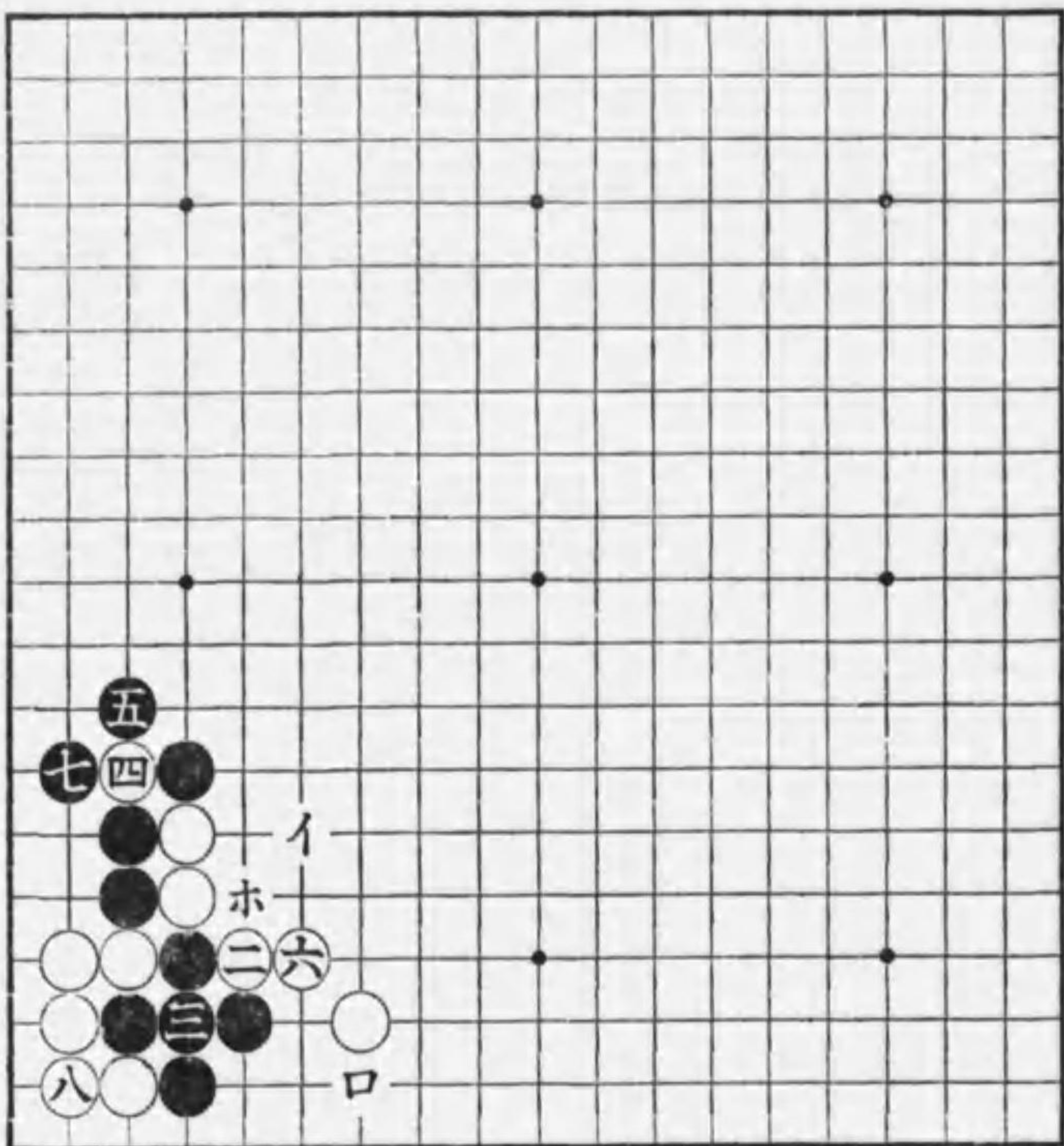
劫トル(△)同(○)

▲丁 質 問(其二及其三)

第一圖を或る碁家に示して其判断を請ふたら二以下の黒數子は取られ姿とは云ふもの、併し×印へつけて色々手段を運らす味が残つて居ると云ふ。果して白としてもドウやうな味が悪いと云ふならば質問(其二)の如く打つ手段もある。斯うやれば四の一目を四つ目に打抜かれる損害はあるけれども、白も亦完全に黒を取ることが出来る。是れでも悪くはあるまいと思はれる。併し四の一目を四つ目に打抜かれた上に一方にも尙ほ味が残つて居るから面白くないと云ふならば質問(其三)の如く打つことも出来る。此三圖何れにても白の方が宜くはないかと思はれる云々。

▲答。黒十四、白十五の變化は未だ示さないが序だからお答へして置く。第一はK T君の言はるゝ所は至極道理である。併し第二に至つては違ふ。ナゼかと云ふに既に四の一目を四つ目に打抜かれて居ることが非常の損害である。且つ第一圖に比して白は餘り外勢を得て居らぬ而已ならず。直接には黒から何時

丁 質 問 其 二



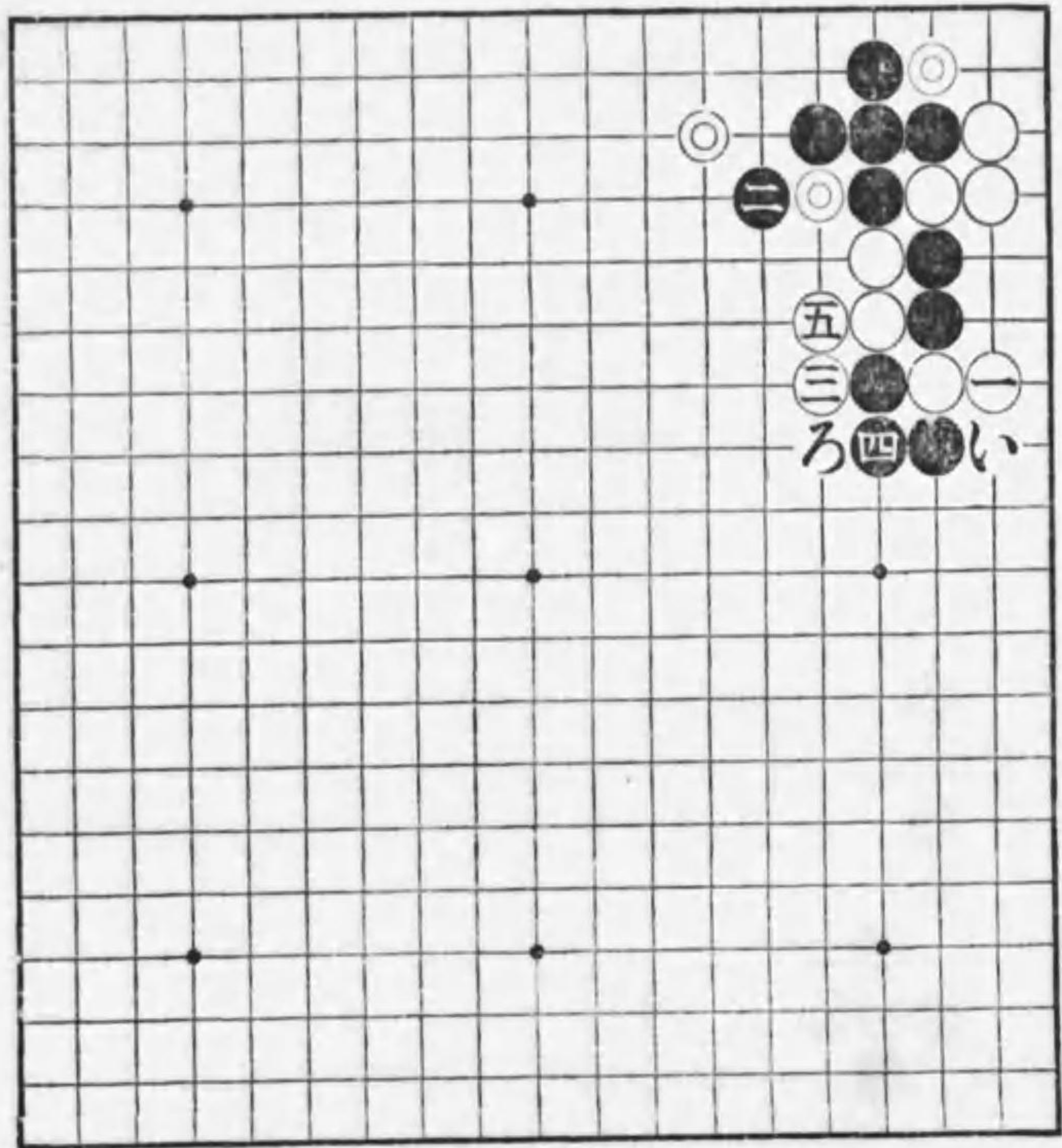
でもイ印に打たれるイタミを持ち、間接には
 □に頂けると云ふ手筋も狙はれる。黒木の截
 りを見てからして成程KT君の言ふ通り五目
 の黒は儘に取れては居るが、如何にも取り味
 が悪い。凡て石を取つても外部にアタリ、サ
 ハリ即ちキヅ、イタミ等の條件付の捕虜は餘
 程割引きして計算しなければならぬ。それに
 反して黒には四の白を四ツ目に打抜かれて居
 る上に後手で始まつた此隅の白兵戦に於て、
 反つて先手を取られて居るから是れはKT君
 の言ふ通り決して白の方が宜いとは云はれな
 い。

それから質問(其三)に於ては右邊の黒二目
 は取られて居るけれども、其代り白の◎三
 子が腐りし、變化して居るではないか、且つ
 取つて居る黒二子とても尙ほ多少の活力を存
 じ、即ち下にはイの先手約えを利かざるの
 みならず上にはろの曲りを利かされる不利が
 ある。故にドチラかと云へば白の方が感心せ
 ぬ。蓋しKT君は質問(其一)を主として二反
 三は豫備圖として寄越されたものと善意に解
 釋する。

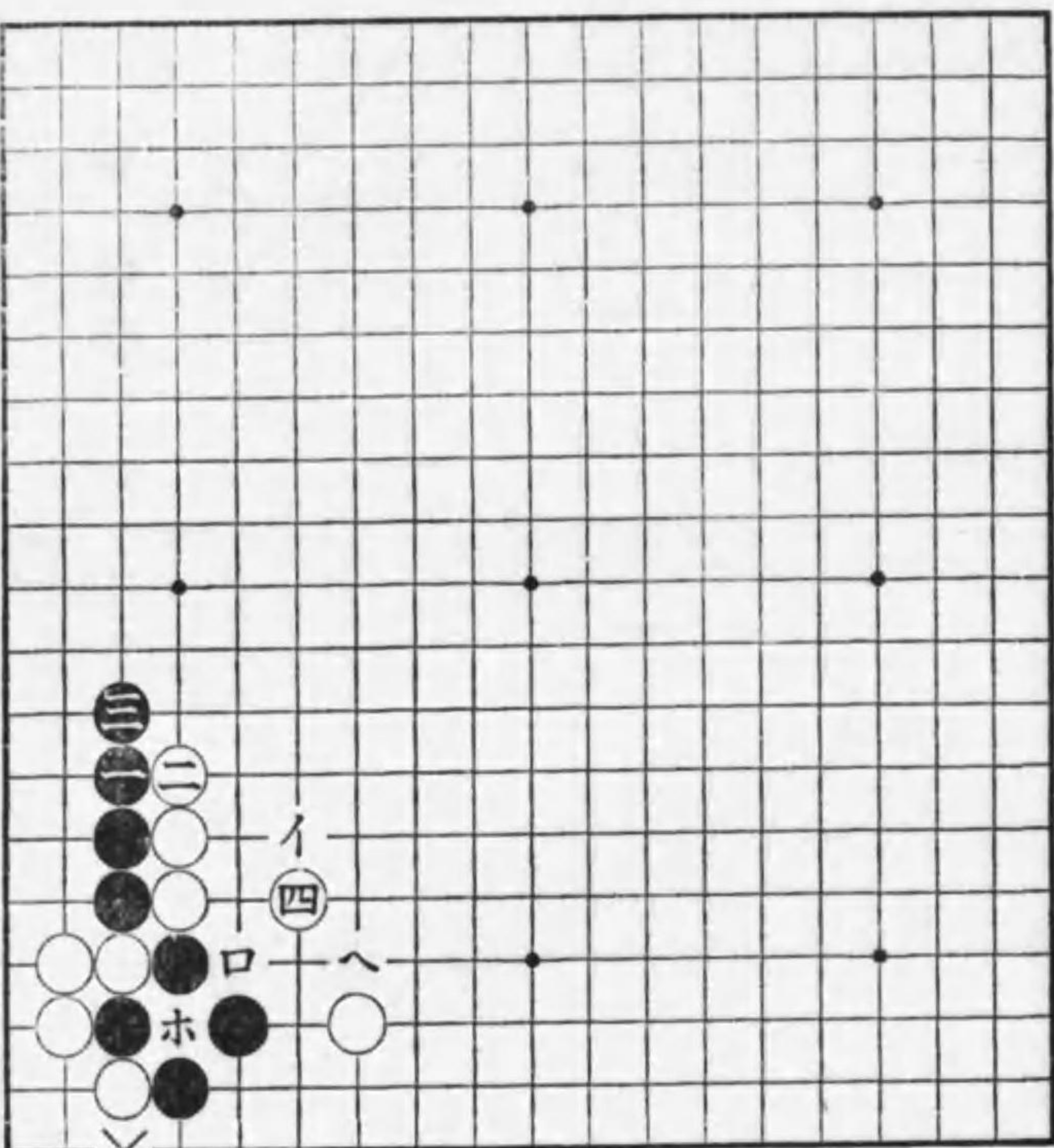
▲答譜(一)

要するに質問(其一)の如き成行になれば、
 前述の通り白の利なることは論を俟たぬけれ
 ども、併し其手順中に缺點がある。それは白
 から十五と押された時に十六とはねたから悪
 い。答譜一の如く黙つて一と引いて居れば、
 反つて白が應手に困るのである。白二の押し
 は實は宜しくない。單に四に打つ方が含蓋が
 ある。併しさうすると非常にむづかしい碁勢
 になるから假定圖として二と押し四と飛ぶ圖
 を掲げたのである。初學者或は謂はん本譜も
 質問譜(其一)も大同小異ではないかと、大に
 相違がある。質問(其二)圖では二の白が本譜
 イの處に双關に並んで居る。からして外の方
 が非常に手丈夫になつて居る。然るに本圖で
 は此處には四の一勢力しかない。故に黒は之
 れが實戦であるとすれば則ち其虚に乗じて口
 とグヅム。然らば白はホに劫を取らんなら
 ぬ。ココデ黒は飽くまで劫を争ひ、而して白
 が愈々劫に負けて×印にアヤマれば、黒は透
 さす敵の薄みに乗じてへに附越して行く。さ
 うすると此處の防禦としては四一着より外
 ないから、白の應手が漸く困難になつて質問
 (其二)の如き旨い結果を得られぬのである。
 此變化は次圖に就て見よ。

丁質問 其三

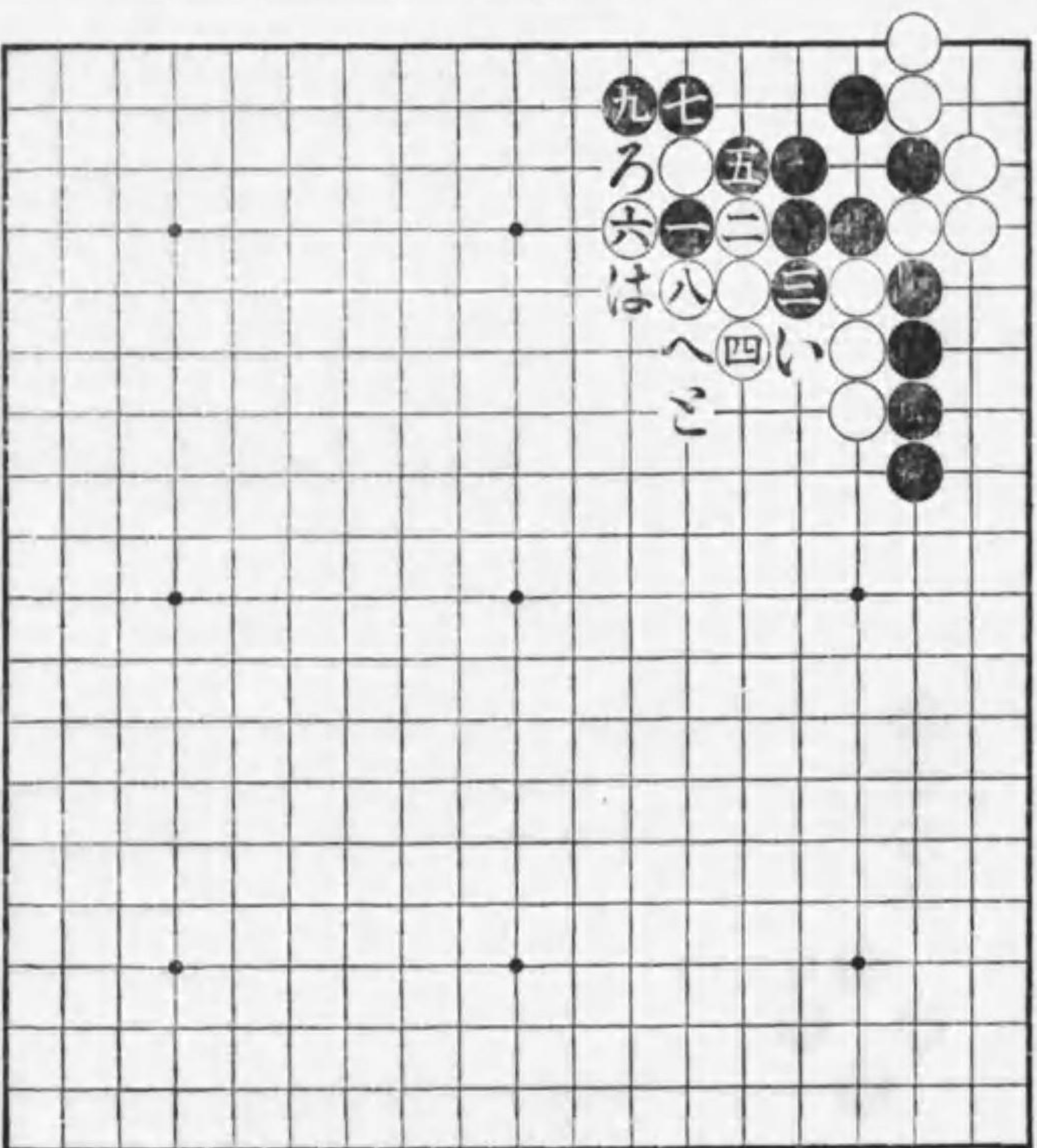


答譜 一



▲答譜(二)

黒から一と附越されたからは白は二と遮断する外はない。然らば黒五となるは必然の勢である。白六の手でイに塞ぐ手はある。左れば黒はろにハネルのであるが、是れは征の關係がある。即ち白七、黒九の時白六に切り黒八、白は、黒へ、白とと征に取られる時は黒の悪い事は論を待たぬ。随つて白いに約ふる手がある。併し白いに塞いで前述の如く黒一、八の二目を征に掛けることが出来ても、黒から征の當りを打たれる弱點あることは兼ねて覺悟しなければならぬ。所で黒一の一子を征に取ることが出来ぬ時は圖の如く單に六にハネて征の形にする外はない。然らば黒は七とはね白の動靜を窺ふべく、此時白ろに粘ぐといに突出す疵を狙はれるから白は八と取るより外ない。デ黒九と行びる。斯う云ふ成行になると白は隅には死があり、上にはいに突出して截られる疵があるから白の悪いことは論を俟たぬのである。



答譜二

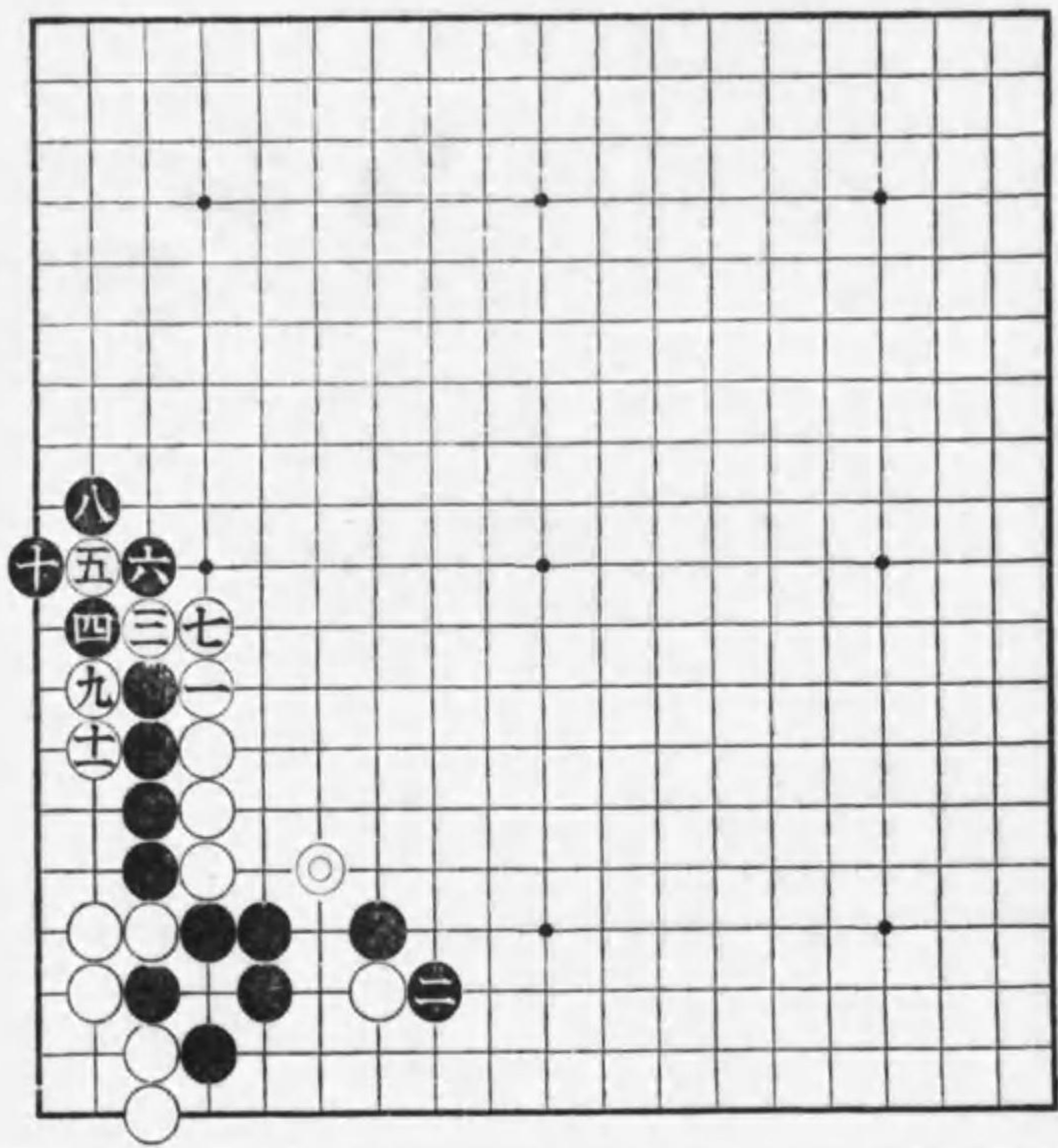
▲答譜(三)

本圖の如く白一と押付ける變化もある。左すれば黒は二と打つ、其結果白十一となる。白は四目を取つたとは云ふものの、右方に於ては一目を抱え込まれた上に、敵の穴を覗いた◎印の白が半價値しかないものとなり、加ふるに上の方では五の一子を打抜かれて勢力を張られて居るではないか。之れが實戦であるとするれば黒は最初ドコかの明隅に一着先手を下し、今又先手で一着要所を占めることが出来る勘定だから四目を取られても決して不利でない。

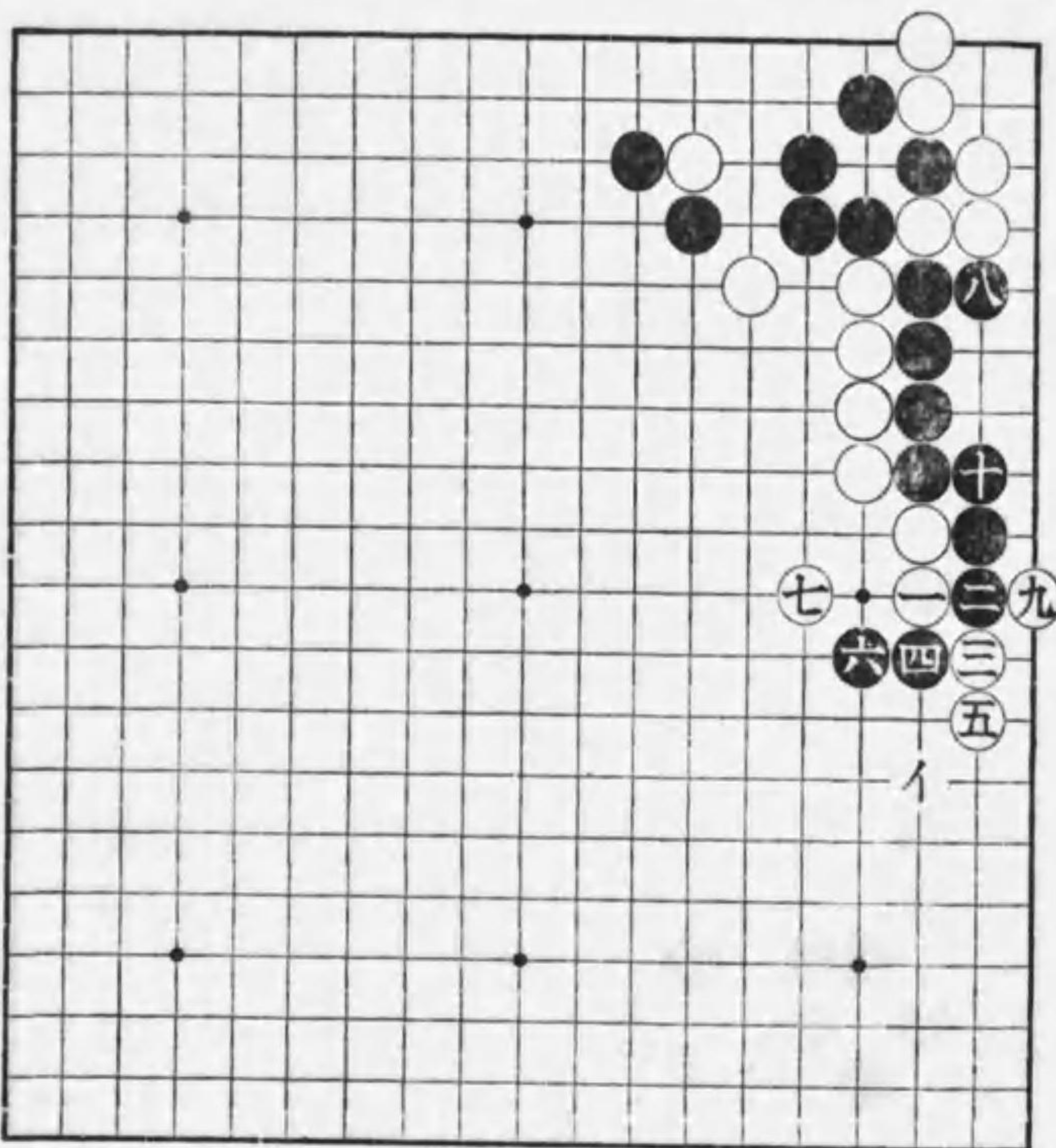
右の手順中白五の二段バネを見合せて六に伸びる結果は甲圖の如くなる。斯うなると中の黒には活はないが、隅の白にも活きがない。其上に白の方にはいに掛けられるといふ弱點があるから白の悪いことは論を俟たぬ。

要するに答譜(一)に於て述べた如く白が二と三平押したのが宜くない。只四に打つに限るのである。左すれば非常に變化は多いが答

答譜三



譜(二、三)の如き不結果を来たさぬのである。扱て本質問に對しては答譜(一)に於ける本の劫争は結局黒が勝てるものと見做し、又答譜(二)に於ては一、八の黒は征の當りがあると云ふ頗る有利な條件附の戦圖を掲げて、お答としたのであるから之れに比較してRT君の質問圖を劣れりとするは聊か穩當を缺く嫌ひがないでもない。併し質問(其一)の如くなるは餘りに白が十分すぎる。而して答譜の如く打たれると白イの一勢力が缺けて居る其虚に乗じて。前に述べた通り、黒からへに附越される疵があるといふことは争はれぬ事實だから質問(其一)の如く十五と押す方が宜いと云ふ論據は破壊される譯でもあり、又より以上に非常なる紛亂を來たす基勢となるを免かれぬのである。之れに就ては追つて詳細に説明する機會がある。序でながら一言して置く。



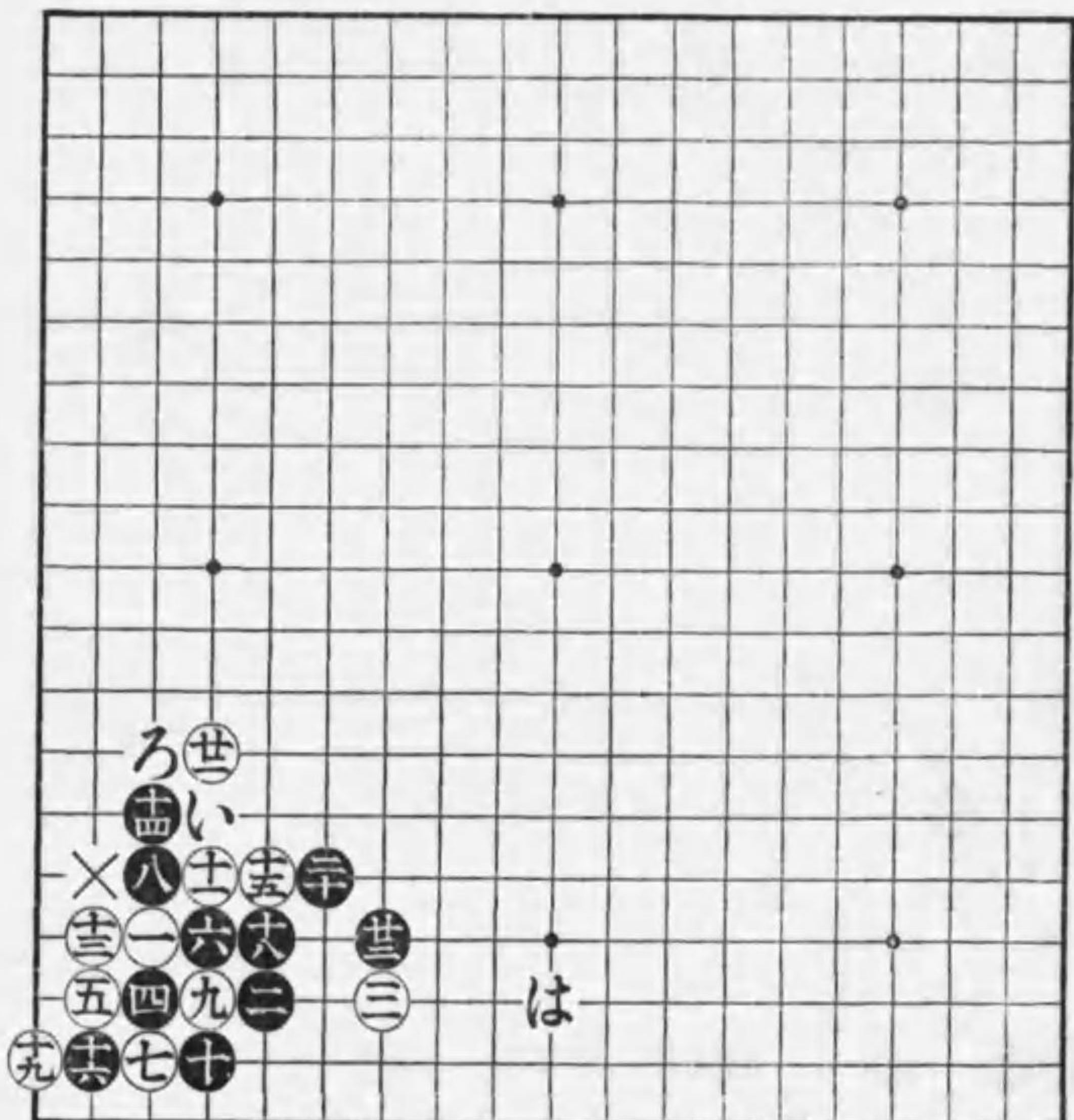
甲圖

● 黒十四變化の部

▲ 第一圖

今迄は黒十四の手でX印に約ゆる手を示したが本圖の如く一步を譲つて十四と伸びる手もある。白十五の手は質問にもあつた通りに押す手と圖のやうに十五と伸びる手とある。其結果、黒二二となつたものとすれば詰り白ろ、黒はとなる位のものゝ假定する。此利害如何と云ふに、黒十六の一目は八、十四の二目が取られて居る以上は所謂地入れハマ入れ、只味の悪い交換をした丈で利害關係はない。黒の悪い所は十四と伸びてると約えられた所では餘程悪い。其代り白三、黒二二の交換は黒は只一着打つたやうなもので非常に得であるから斯うなれば黒の悪からう筈はない。

第一圖 劫トルル同



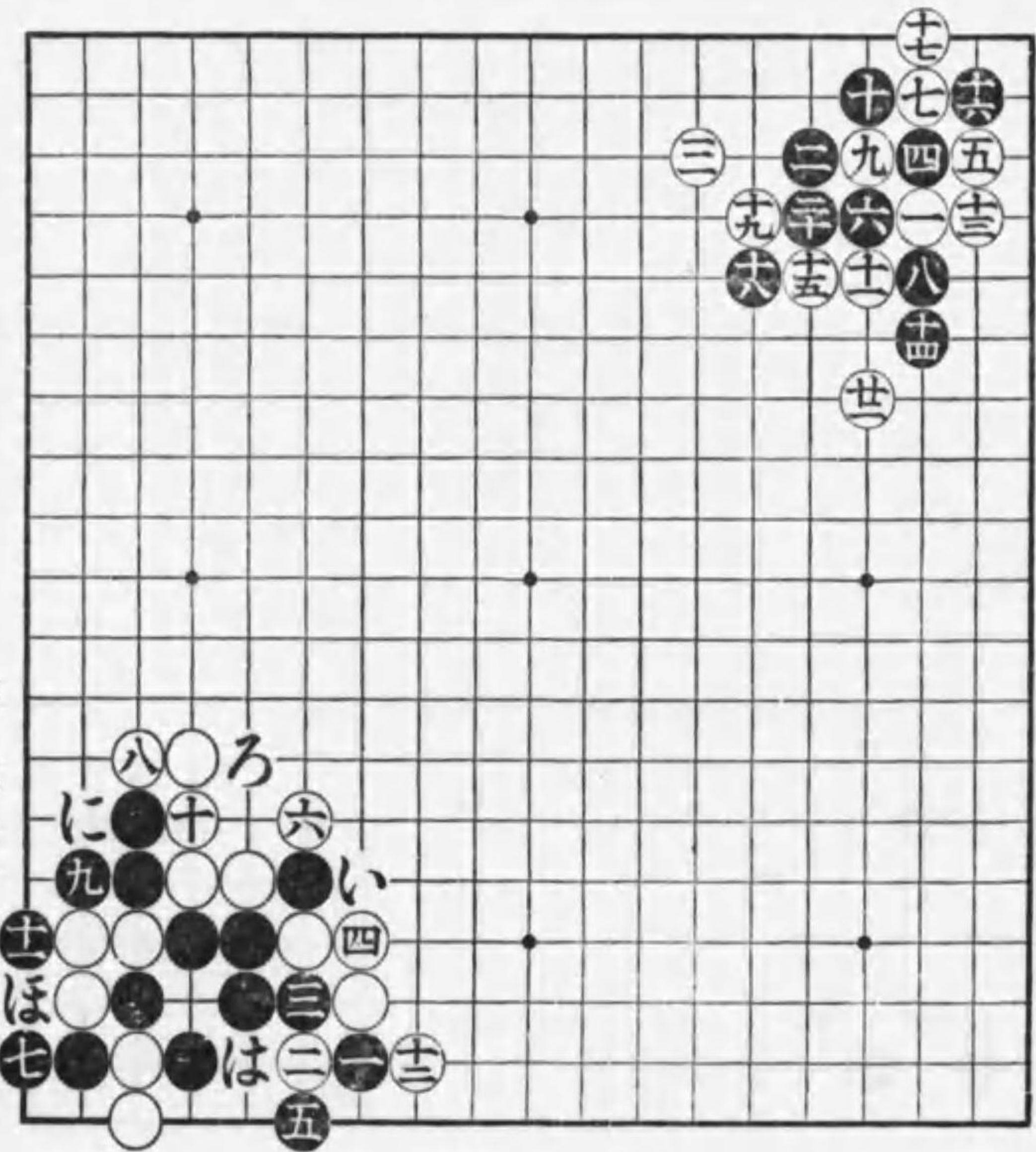
▲第二圖

黒十八手筋。本圖は前圖に於ける白十七の變化である。此手で九の處に劫を取れば前圖と同じ事になるから、白は強情に十七と下つたのである。扱て黒は如何に之を切抜くべきか、此場合黒二十のツギを含んで十八とツケルのが手筋である。然らば十九以下二一と打つ外はない、此變化はドウなるか、分りよいやうに一々圖で示す。

▲第三圖

黒一、三悪し。黒には茲で色々打方がある順次に示して行く。先づ黒一と下へつける結果はドウカと云ふと、夫れは白にいにハネられ黒六、白ろと並ばれても既に面白くない。併し圖のやうに二とハネ出されても黒は甚だ困る。黒三の截りは悪い(他の手段は次圖に示す)斯くて六と一目を征に抱えられては黒が甚だ悪い。但し圖のやうに七と伸びれば隅の白は取れるけれども、以下十二までスツカリ塗付けられて了ふ。此時黒若しはに一目を取れば又左方に於てもに印に利かされて、黒ほと取つた時分に他の大場を占領される。此の如く黒は一隅に愚集を蒙つた上に肝腎なる外部の一目を征に取られて居るから黒の悪いことは言語同断である。

第二圖 劫トル



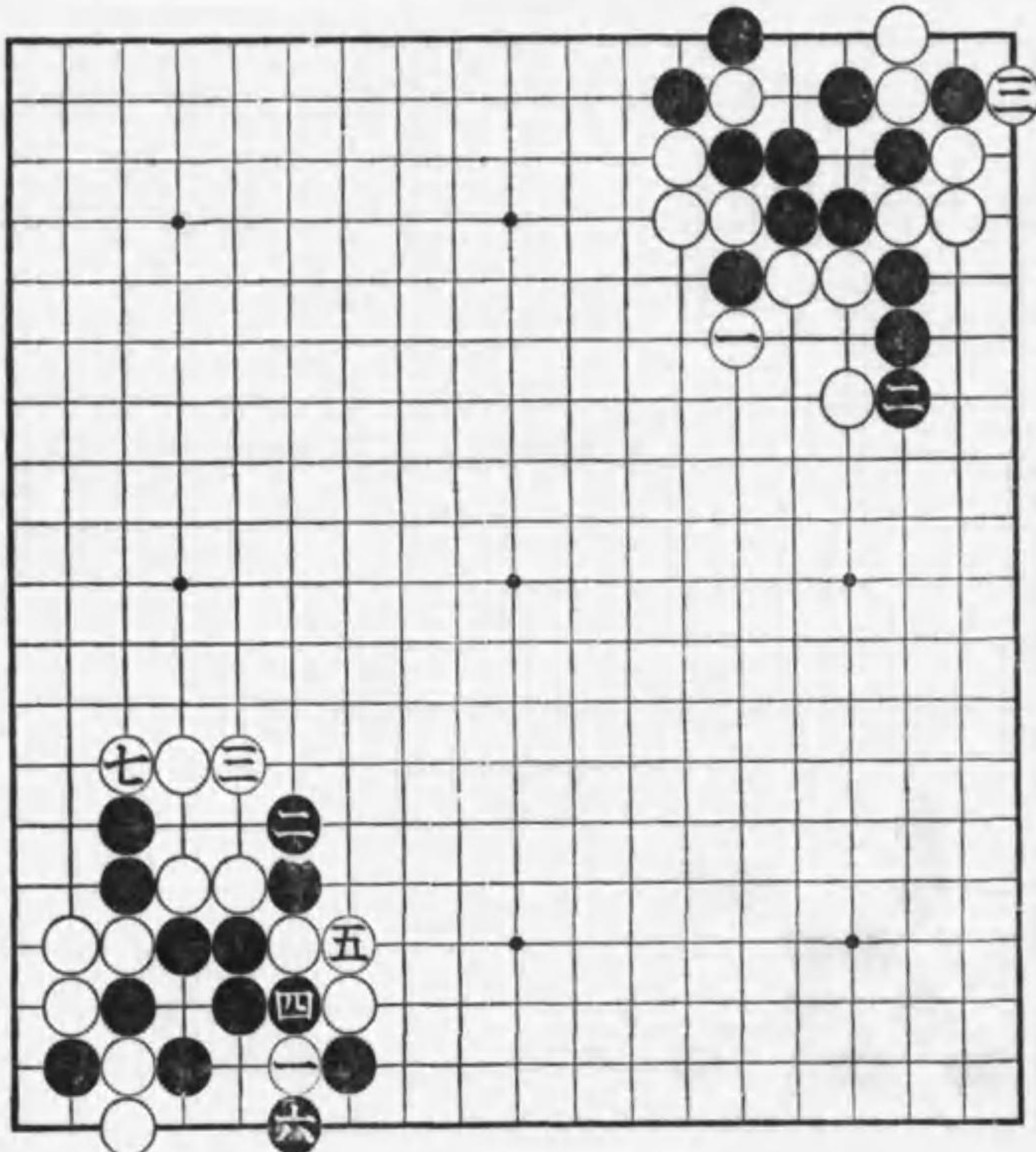
▲第四圖

黒不利。扱て本圖のやうに白が一と征に掛けた時分に黒二と打てば三とハネられて隅の白を活きられて了ふから是れも黒がイカヌ。

▲第五圖

黒良からず。白一とハネ出した時に黒が征に取られぬやうに、二と伸び、白三の時四と切る結果は白七となつて二目を取られて了ふから是れも矢張り黒がイカヌ。尤も前圖に比較すれば外の二目が白を遮断して居る丈け大變宜いけれども、全體から言ふと黒の悪いことは一見明白である。

第四圖



第五圖

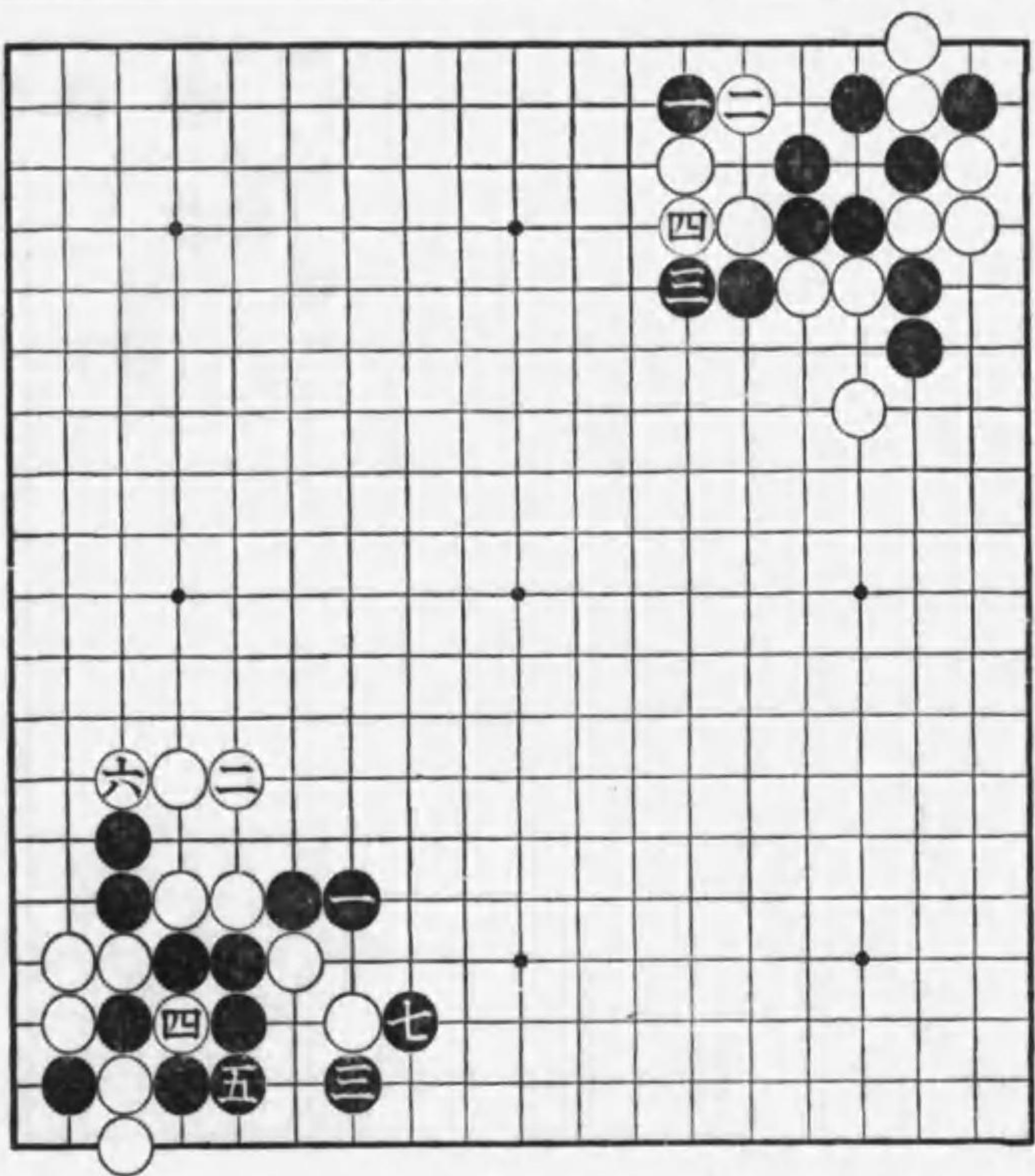
▲第六圖

黒一不結果。然らば圖の如く白二の時三と伸びたらドウカと云ふにさうすると強情に四と打たれる一見白が無理の様であるけれども、併し黒の方には劫立がない。劫立がないにも係らず強ひて劫争を企つると劫立の爲に非常の損をしなければならぬから是又黒が悪い。

▲第七圖

黒悪し。前來各圖の如く黒一の手で先きへ三の處へツケルのはドウ變化を試みてもイカヌ。因つて一と引いたらばドウカと云ふに、其結果黒七となる。斯の如き振變りになれば、前のよりは優つて居る。併し白には二と堅實に用心をされて居るのみならず、黒は二目を取込んで居るとは謂ふものゝ、其の包容も狭く、亦其處には種々の味があるからして是れ又黒が面白くない。

第六圖

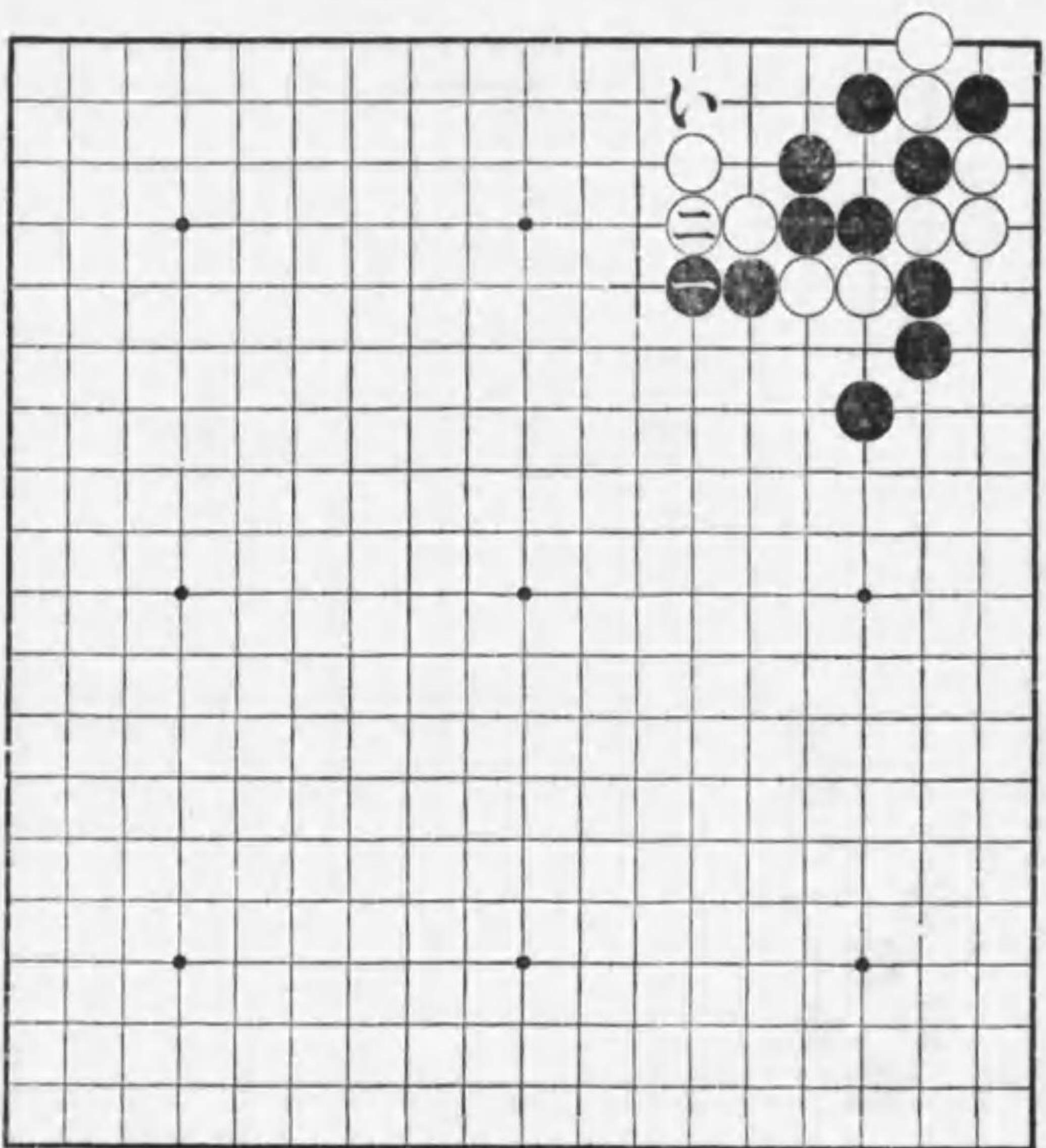


第七圖

第八圖

黒ヤハリ悪し。然らば黒いにツケル前に一と伸びたらドウカと云ふに、是れ又強情に二と打たれて第六圖一樣黒は如何とも打ちやうがない。以上説明せる通りドウ變化しても黒がイカヌとすれば溯つて第二圖黒十四の手で何とか他に工夫をする外はない。

第八圖

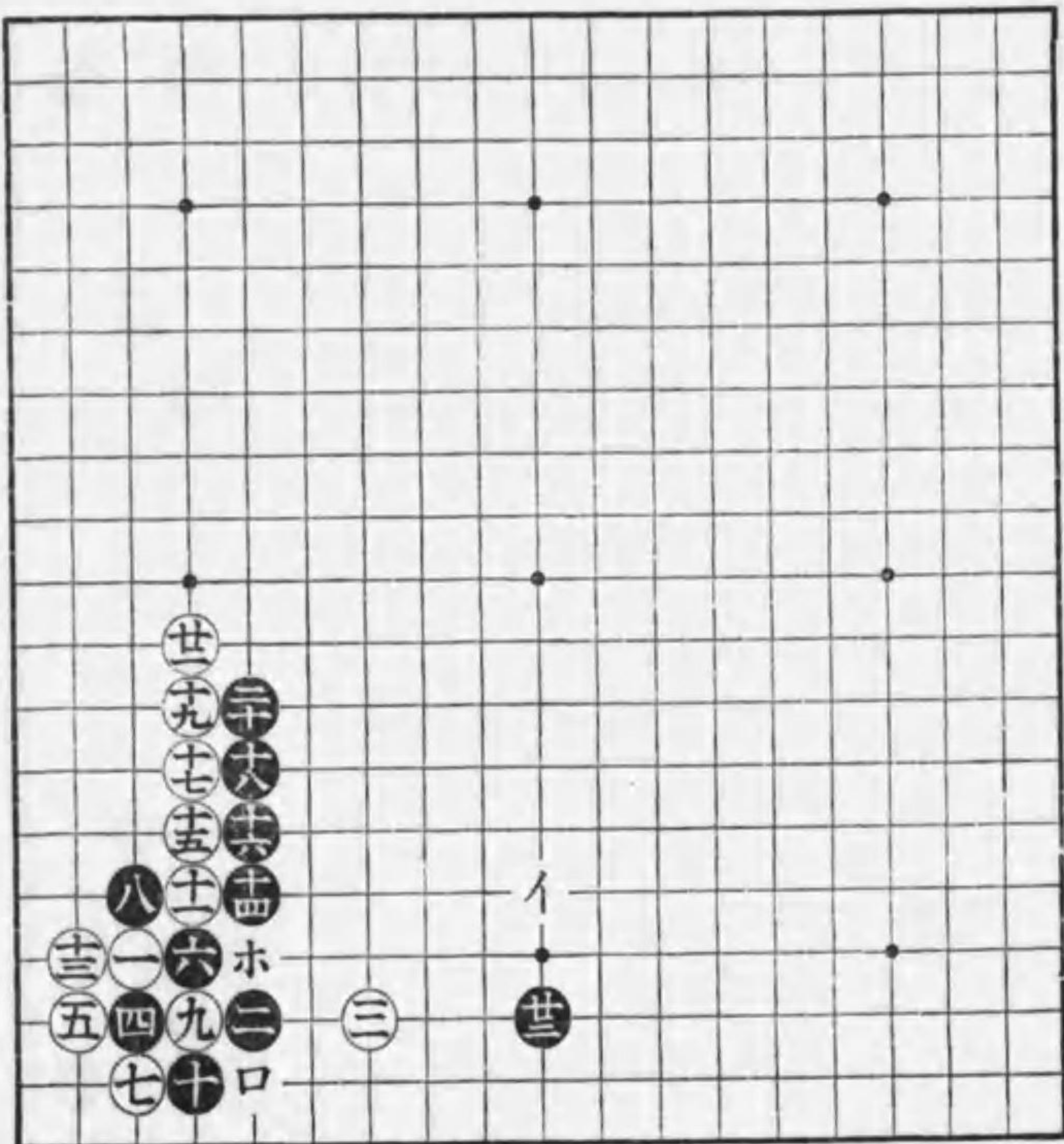


●黒十四の外綽

▲第一圖

棄石の要訣。本圖の如く十四とハネル手もある。是れは弱い人が能く打つ手である。十八まで押してさうして二二と攻めるもあるが、夫れはイカヌ。モウ一着二十と押すのが秘訣である。夫れから二二と打つが宜い。此得失如何と云ふに、黒は實質に於て既に損をして居る(八の一子が自然消滅の形だから)其代り十四以下二十まで茲に堅壁を築いて此の勢力を利用して、三の一着を攻立つる立場を得て居るから、之れに因つて左邊に失ふたる損失を取還さなければならぬ譯である。三子も布いて居れば是れで充分であるが、或は二子の碁でも遣れぬことはない。併しながら互先の碁では何分にも今言つた通り、損から先にして居るからして、是れは黒が面白くない。理論上ドウカと云へば、元來黒が八と押えて行つた著意と云ふものは白七の無理を咎めるに在る。然るに十一と切られるに及んで、白の無理を咎むべく、折角ハネル石を棄

第一圖

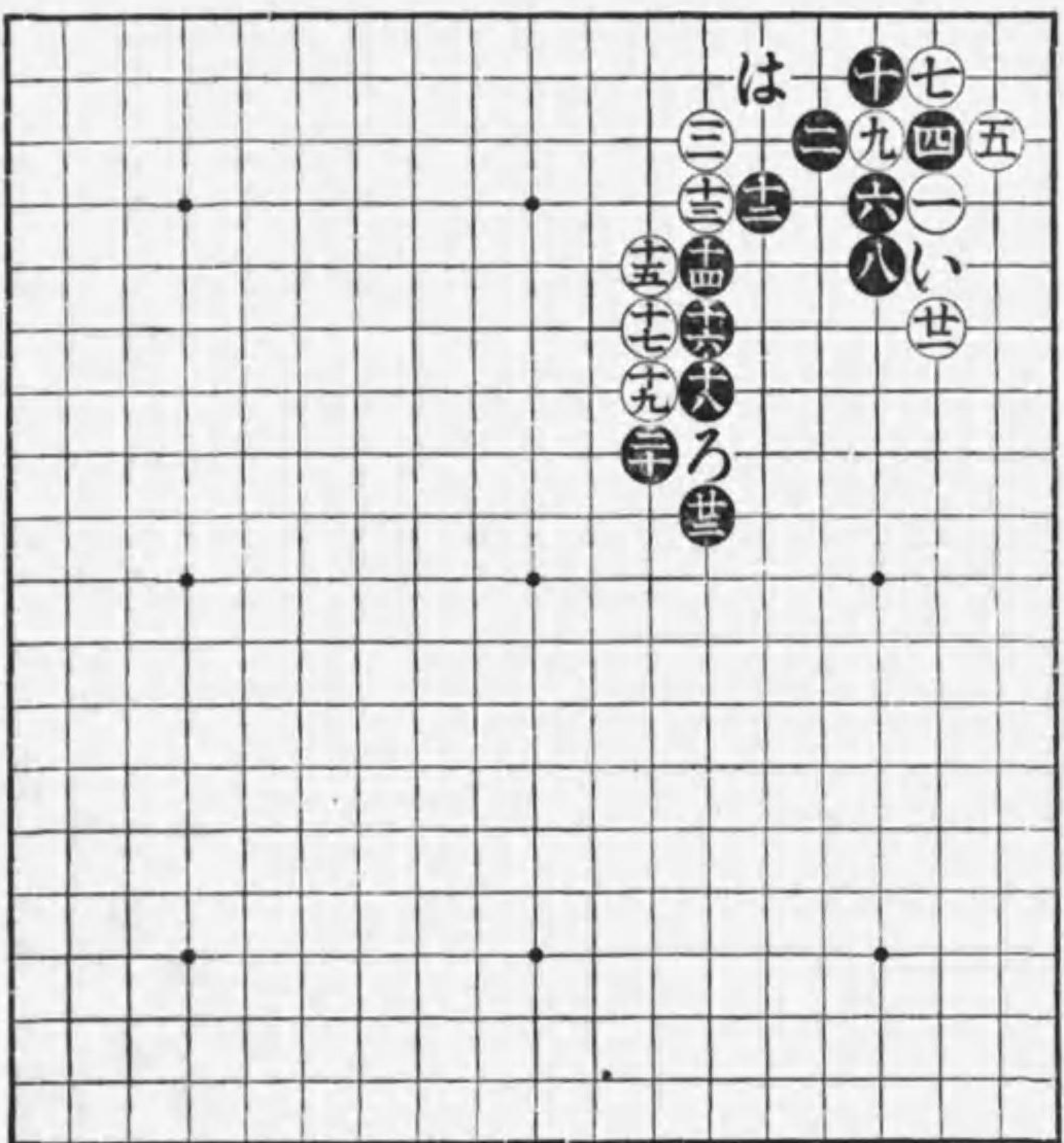


打つのは此筆鋒で打つのであるから、此理を心得て居れば碁は強くなるのである。但し是れは初學者の心得までに大體方針を述べたに過ぎぬので、此場合必ずしもイに打つとは限らぬのである。

てると云ふ譯では、定石の趣意を没却して了ふ譯になる。からして道理から言つても黒の矛盾たるを免かれぬ。扱て黒に二二と夾撃された以上、白の心得として肝要なるは、強ひて此三の一子を逃げ出さぬに在る。否な逃げ出さぬに在るのではない。之を無理に取らせるに在る。夫れが大體著眼の要旨である。ナゼならば之を逃げ出すと云ふことになると、十四以下二十と連続した勢力が物を言ふことになつて、サント苦められるからである。からして此處には黒をして成べく小さな地を作らせるやうに、外から色々工夫をするのが肝要である。元來勢力なるものは一種の「コリ」である。「コリ」であるから戦ふ場合には非常の勢力を發揮するけれども、其勢力が單に實質と化する場合には夫れは實にミジメなもので、言はゞ勢力の死滅である。からして白は其意味に於てイ印へボウシに掛けて、成べく狭く、成べく小さく三の一子を取込ませるやうに仕掛け、而して最後に九に劫を取込んでホに粘がせ、尙ほ口の切りを含んで寄せつけると云ふ風に打てば、黒は棒壁の勢力を利用することが出来ずして、唯僅かの地を圍ふ爲めにムヤミに押捲くつて、損を先にしたと云ふ結果に終るのである。元來上手が置碁を

▲第二圖

黒八の變化。今迄は黒八の手でいに約えた
 是は屢々繰返す如く、七とハネタ無理手を咎
 めやうと云ふ定石の趣意に従つて遣つたので
 あるが、是迄順次示した通りドウモ古來無理
 としてある七のハネが動もすれば成功し、而
 して必然成功しなければならぬ筈の黒いの手
 が反つて非運に陥つて居る。果して白七のハ
 ネ手が無理であるとすれば黒いの手が定石の
 教へ通り成功しなければならぬ道理である
 が、必ずしも然らざる次第は前掲各圖に於て
 既に了解されただらうと思ふ。其議論は暫く
 措いて、茲では假に白七のハネを正着と是認
 して、打つとすれば、ドウ打つが宜いか。ド
 ウモいに押えて行く手は皆くイカヌ。からし
 て喧嘩にならぬやう旨く凌いで行く手はない
 かと、斯う云ふ方針の下に打つ手としては、
 八と引く手が殊に宜いのである。斯う打たれ
 ては如何に白が一着優勢の處であるからと云
 つて、前の通り暴力を振つても、ドウモ相手
 のない喧嘩は出来ない。故にいに押えて行く

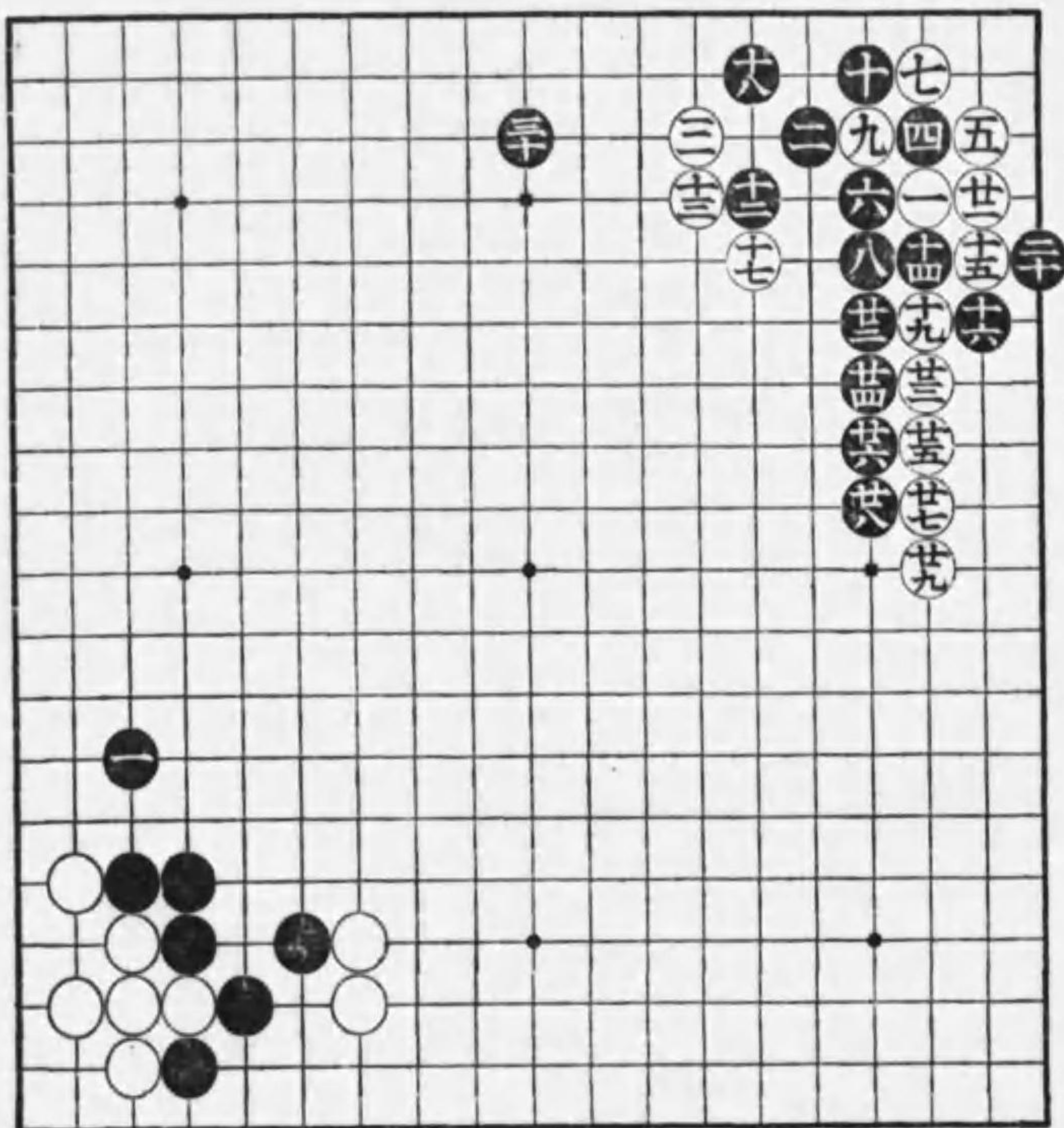


第二圖

手は必ずしも悪いとは言はれぬけれども、戦ひを好ま
 ん人に向つては圖の如く八と引く手を推奨する。是れ
 は普通の場合に於ても良手である。白は九と取る外な
 く、黒十とアテ十二と掛粘ぐのである。此十二の掛粘
 は白の互りを止めるに在るは勿論であるが、尙ほ他の
 目的は白若し三の一子を保護すれば黒いに約えて壓迫
 を加ふべく、又白二一の方面に先着すれば三の白に攻
 撃を加へやうと云ふに在る。黒十四はドンナものか理
 窟から言へば、今言つた通りいに壓迫を加ふべきであ
 る。然るに圖の如くなつては隅も中も白の思ふ儘に打
 たれた勘定で、實質に於ては黒の方が損であるが、併
 し黒は中腹から中原へ掛けて頗る厚壯な勢力を張つて
 居るから、決して悪いとは謂はれぬ。右の手順中白二
 一の手でろに切つて來たらば黒ははに掛粘ぐのであ
 る。本圖は参考として掲げたので、黒には尙ほ他の打
 方がある。

▲第三圖 第四圖

黒軍優勢。本圖の如く白十三と約ゆる手段もある。然らば黒は必ず十四と約えなくてはイカヌ。斯うなれば黒が宜い。ソコで白十五に縛ぬれば黒十六に約え、白十七に縛ぬれば黒十八に掛粘ぎ而して白十九と切つた時に十六の一子を捨てる了筋で、圖の如く二八まで壓迫を加へて夫れから三十と攻撃するが宜い。但し黒十六と約ゆる手は考へものである。局面の形勢を見て打たにやあいかぬ。普通は第四圖の如く一と飛ぶのである。扱て第三圖に於て黒が十四に約ゆるやうになれば宜いと云つたのはドウ云ふ理由かと云ふと、之を解剖的に説明すれば、黒が十と中てた時分に、今迄掲載した圖のやうに白が八の處を切らずして四の處に劫を粘いで閉口した意味合になつて、折角白七とハネた著意を失つて了ふからである。抑も白が七とハネたのは八の處を切つて戦ふに在る。然るに今更らへコタレて劫を粘ぐ譯では始めは脱兎の如く終りは處女の如く戦法の矛盾を來たすから理窟から言つてもイカヌ譯である。此理由からして黒が十四と約ゆる手順になれば宜いと謂つたのである。

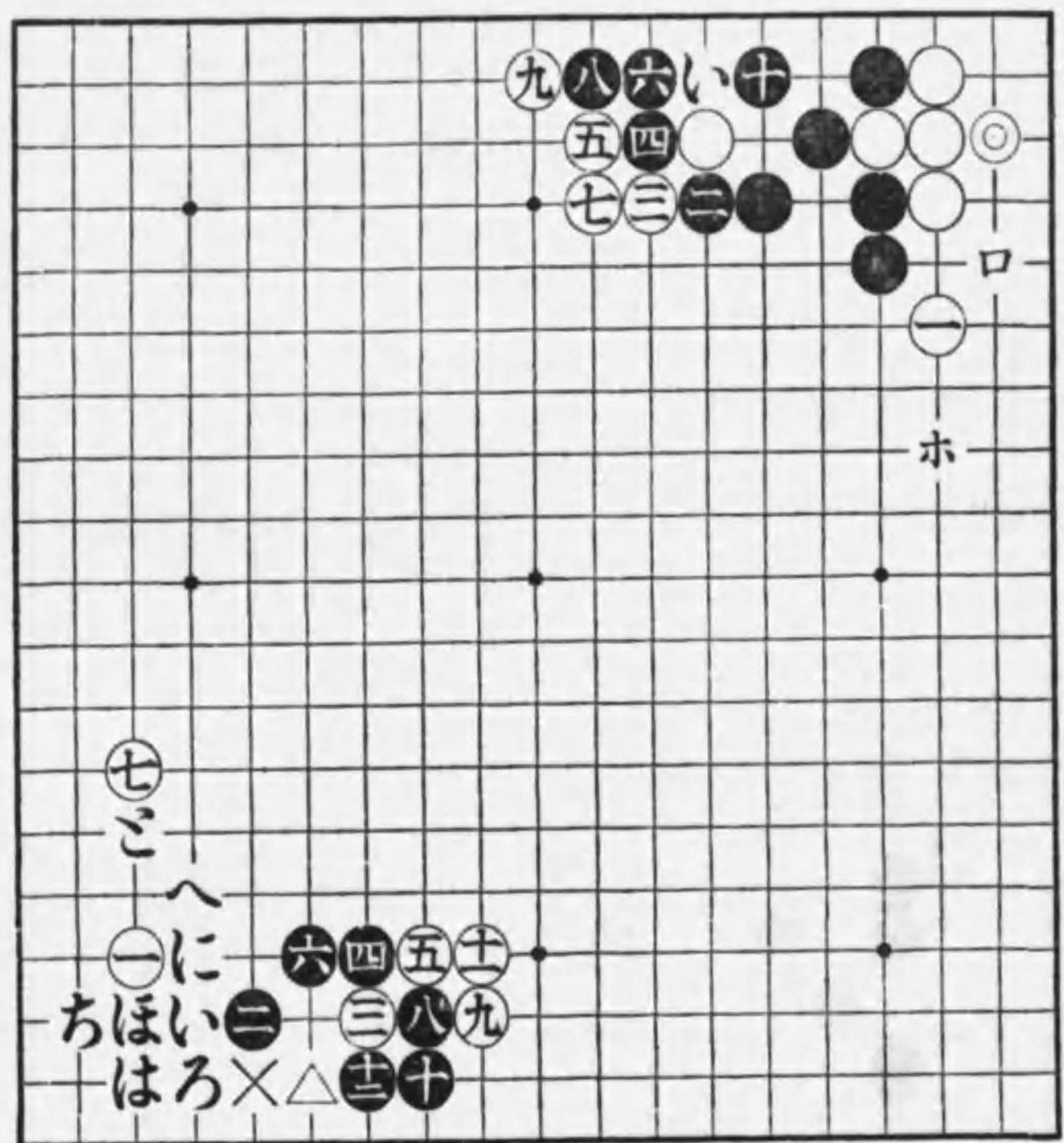


第三圖 ①ツグ

第四圖

▲第五圖
白一の變化。第三圖のやうに、黒から十四と約え込まれてはタマラスから白は一と飛ばぬならぬ。然らば黒は二と押して始め一間に夾んだ弱石を攻めなくてはならぬ。白七の手で八に約えたらば黒は曲るべく又圖のやうに七と粘いだらば八と曲つてから十と掛粘ぐが宜い。此の利害如何は参考圖に就て見よ。

▲参考圖
第五圖に於ける黒二以下十までの型は本圖と略々同様である。此の場合に於て假に白がいに尖みつけたとせよ。で黒へまでとなつたものとすれば第五圖と参考圖と異なる所は白七の一着がとの處に在り、加ふるにちの處に一勢力が加はつて居る點である。此處が大變に違つて居る。又黒の側に就て言へば参考圖に於ては黒の一子は×印に切取られる姿になつて居るが、第五圖に於ては十と掛粘ぎになつて一目の切取りを防ぐと同時に白一目を擒にして居るから次に黒は口の置きを狙つてホの邊から攻めて行くことが出来る姿である。故に参考圖に就いて言へば白にちの處(第五圖の○印)に一着只劫を取られて一勢力を加へられたと云ふことは損は損であるけれども、其の代り△印に掛粘いで一目を助けて居る姿だから斯うなつては黒は損でもないのであるが、左りとて餘り善いとも謂はれぬ。



第五圖

参考圖

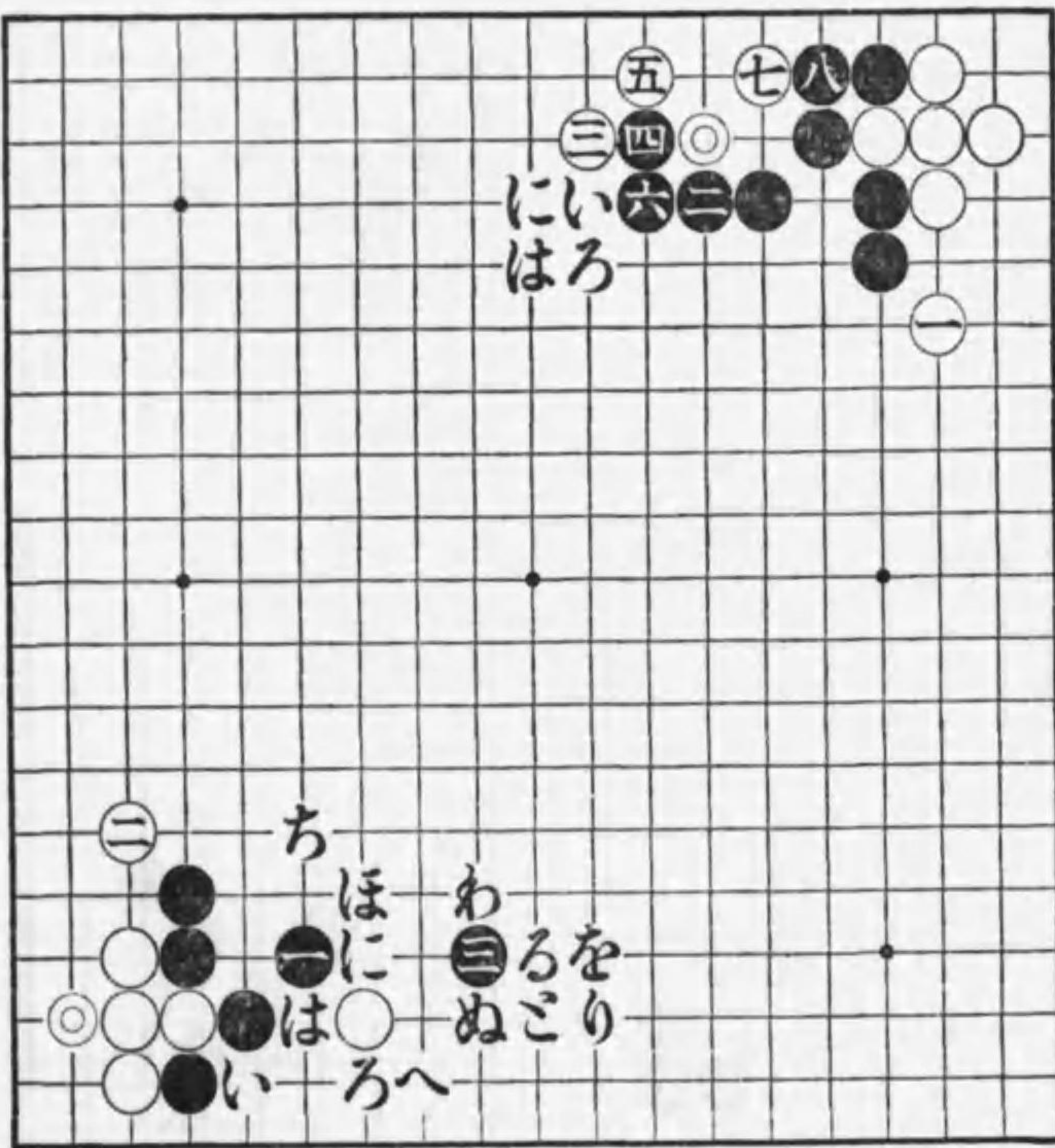
▲第六圖

白三悪し。本圖の如く白が◎印の一子を惜みて三と逃げ出すのは大變損である。ナゼカト云ふに自分は低所に活を求むる姿なるに反し黒に外勢を張られるからである。白若し九の手でいに押せば黒ろにハネ、白はにハネなば黒に切つて宜い。斯う云ふ形勢になれば黒の優勢たることは論を俟たぬ。

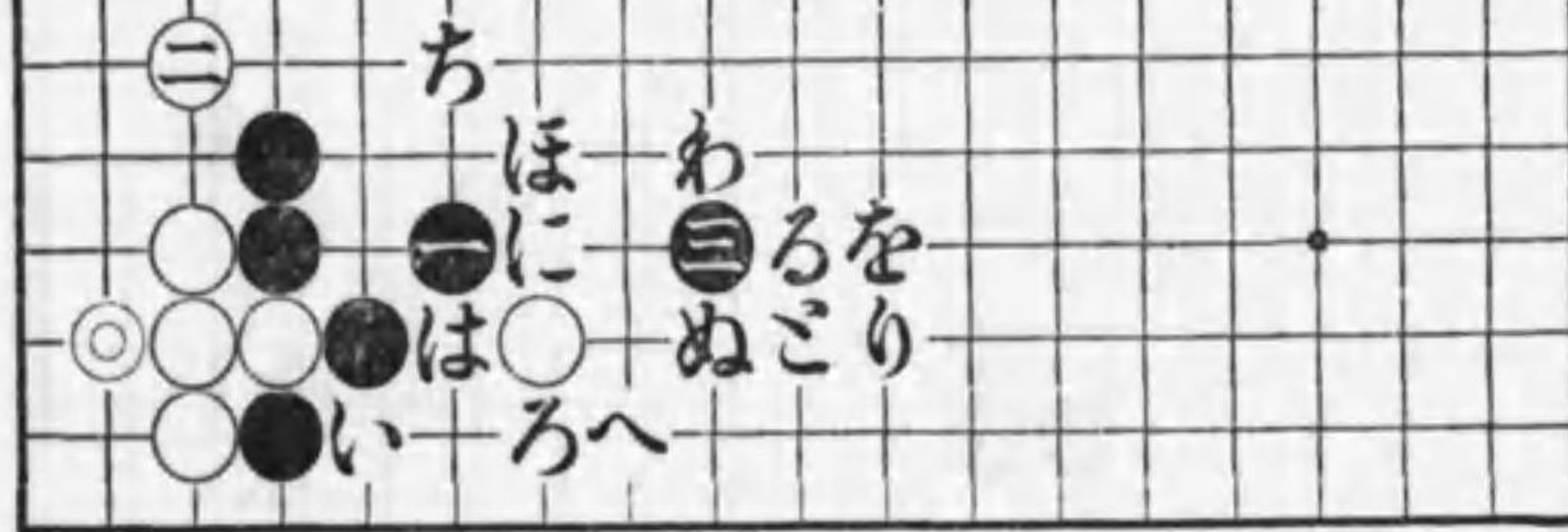
▲第七圖

黒三對白の策戰。第五圖は敢て黒が損と云ふでもないが、左りとて善いとも謂はれぬと言つたのは如何にも其形が重複の嫌ひがあるからであつた。扱て黒一の掛粘ぎは此の際已むを得ないが、併し此の部分丈けに就いての缺點を擧ぐれば(1)いに先手で一目を切取られる疵(2)白ろに下つて一方にはいの切取を睨み、一方には廣く右邊に進路を開かれる味(3)白はに突張り黒いは粘いだ時白にに曲る杯、種々の缺點があるのみならず、黒一の掛粘ぎは自分の疵を補つたと云ふ丈けで一向白に響かぬ手であるから、攻守の權衡を得たとは謂

第六圖



第七圖



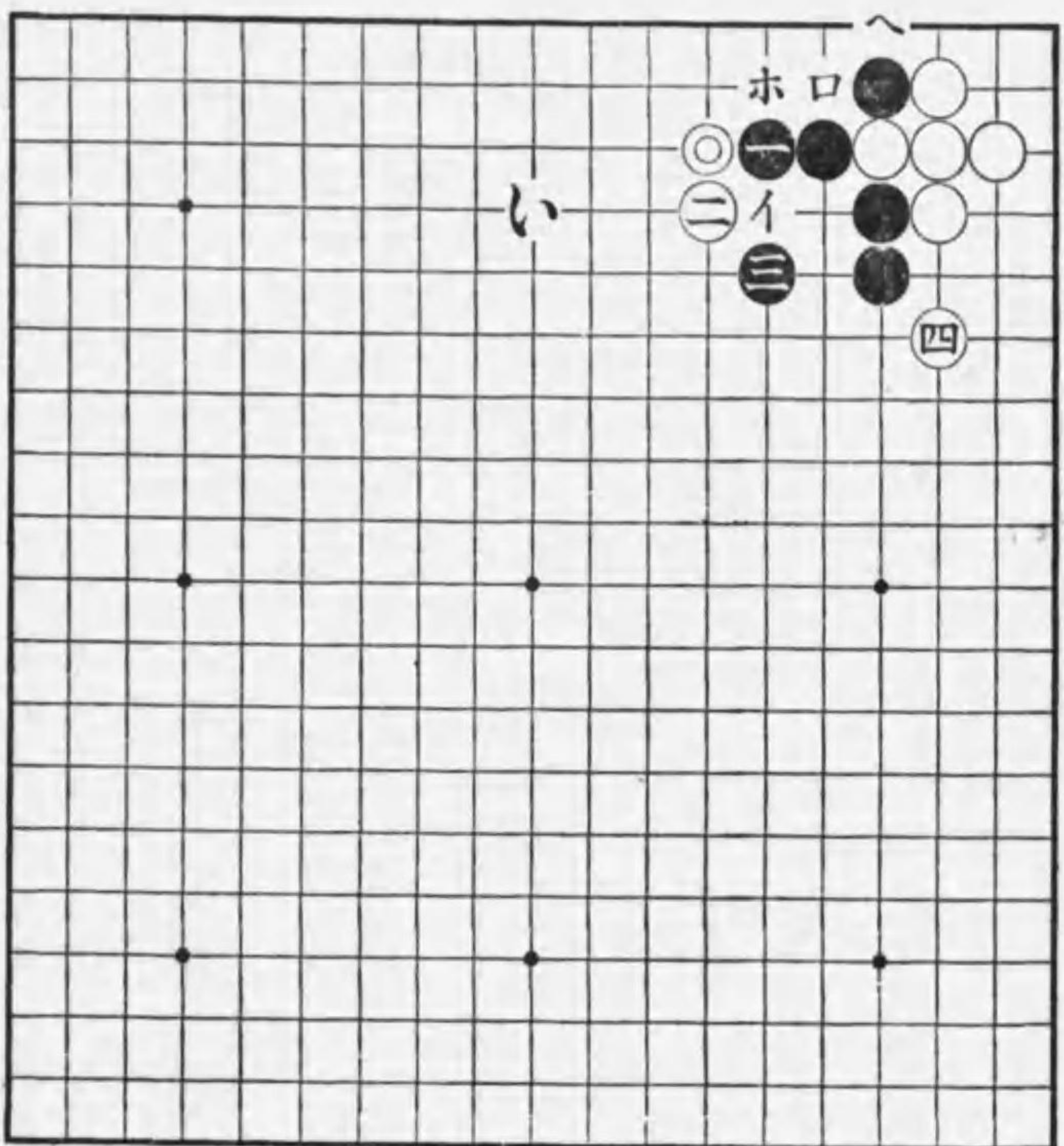
はれぬ。夫から白に◎印に一目を打抜かれて居ると云ふエライ損害(黒はコミを一目を出して、ソノ十七)即ち◎印に一勢力を加へさせた損害を謂ふ)もある。是れは部分的に就いての缺點やら損失を擧げたのであるが、全體から見ても隅と中との代りは黒が損失である、斯う云ふと黒が大變悪いやうであるけれども、白の方にも亦悪い處がある。夫れは右側面に於ける白一子は黒の砲臺下にすぐんで居る姿に悪化して居る。是れが大變に悪い。因つて黒としては圖の如く三と攻勢を取つて隅に失つた損害を取還へす手段に出るのが適宜の策戰である。けれども今述べたやうに黒の方には種々の缺點あることを承知して居なければならぬ。早い話が假に此處で白がに印に出るとすれば黒はほに約えなければならぬ。其時白へに尖み黒と邊に應ずるとすれば白はにアテ、外に出るか亘るか、黒はちに掛粘ぐ外ない左すればいに亘られて了ふ。又白はへに尖む手でろに下る手もある。併し黒から三と攻掛られた此の場合如何に黒の方に缺點があるからと云つて、圍中に活を求むるは所謂兵を弄ぶもので、ソナ事をやるのは却て不利であるから、局面の形勢に由つてはりの邊から打つて圍中の白一子を棄て、大勢を制する手段もあり、

又白ぬにつけ黒と、白ると切つて戰ふ手段もある。要するに大勢から論ずると白りに掛かり黒と、白を、黒わとなるものと假定しても白いの先手切取りが殘つて居るから白は充分圍中の白一子を利用することが出来るに反し、黒は凝形になるから黒は假令三と掛ける手があつても其結果は餘り面白くない。

▲第八圖

黒一の戦略。前圖のやうに黒一の手で、イ印に掛粘ぐは取りも直さず◎印の白をして、捨石とするには誠に恰好な軽い石と化せしむる虞れがある。因つて一と突張つて◎印の白に對し、直接に刺激を與へて二と起しためたるは即ち二様の意味がある。其一は白口の先手取り(此場合白口に切ると黒ホ、白へと取らぬならぬから後手になる)を防ぎ、其二は◎印の白をして二と立つことを餘儀なくせしめて、其の責任を重くし、而して最早や之を捨てられぬやうにするに在る。斯くて三と補ひ白四と飛んだ時に黒い印邊から白を攻めると云ふ手順を運ぶ方が理窟としては宜い。

以上掲載したる圖中に於て、實戦に臨んで打つとすれば黒は第五圖か本圖に據るべきである。但し第五圖は黒から戦ひを挑む手であるから好んで打つべきでない。戦ひを爲すに適當なる局勢に於て始めて決行すべきものと承知して貰ひたい。



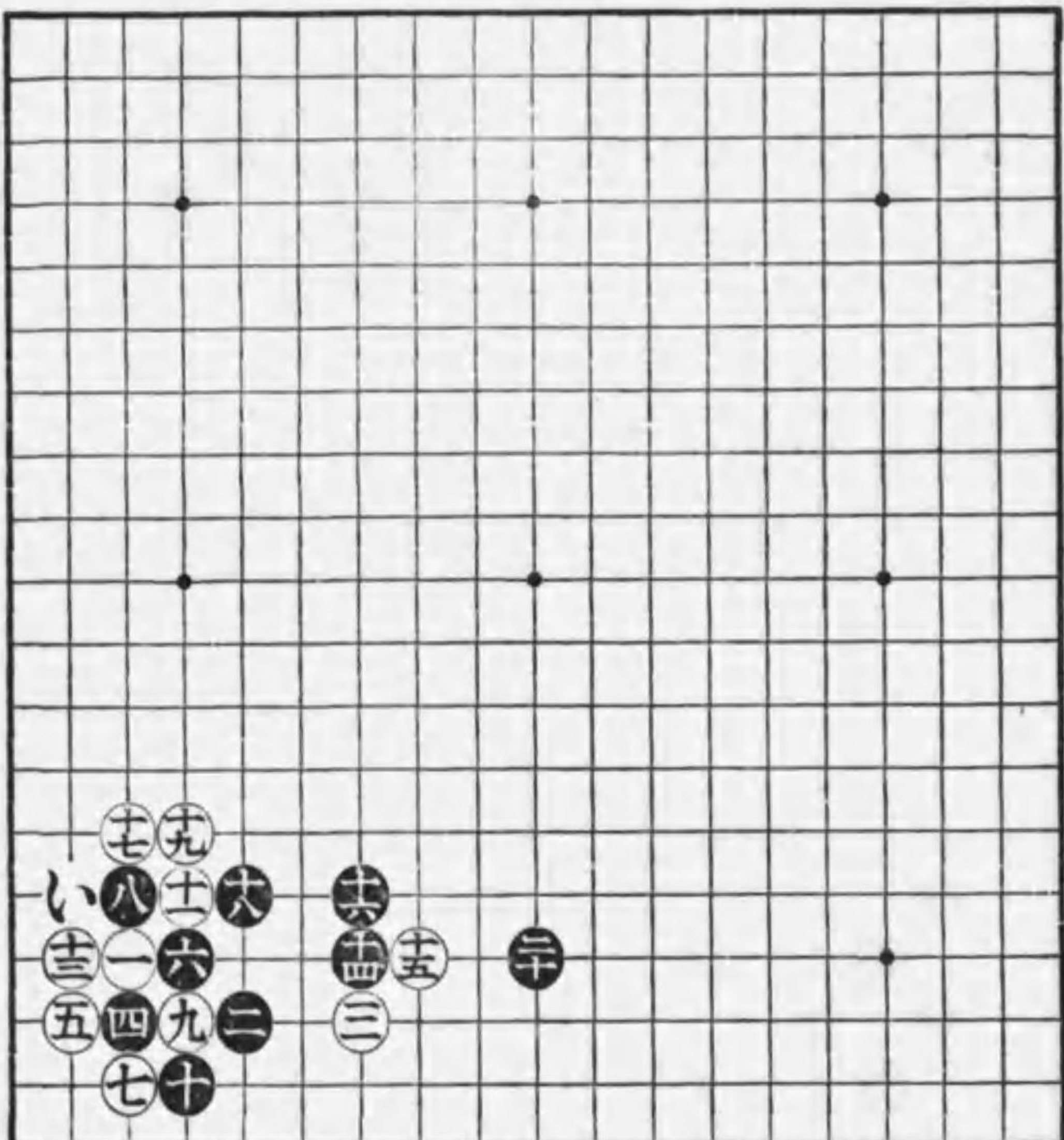
第八圖

●黒十四の變化

▲第一圖

白十七は退嬰手段。黒十四の手でい約ゆるとか、十七に伸びるとか、直ぐに戦端を啓く手段は既に前來掲載圖の通り、其の成績が甚だ宜しくない。ソコデ古來無理と稱せられて居る七のハネを是認して十四とツケ而して分れ々々の手段に出たのである。白十五の手は黒に十六と伸びられる結果、左右の白に對して二重に働かれる姿勢になるから、普通は悪い手である。即ち白が十七と一方の防ぎをしなければならぬ事になり、而して一方の三、十五の弱石は黒から二十と攻撃されることになつたのは其の結果である。斯うなつては三、十五の二子は大いから捨てるには捨てられず、逃げるとすれば重い石を引出すこととなるから宜しくない。但し此の場合に於ては白十五のハネは已むを得ない。次に十七と退守した手が大變に悪い。夫れが爲めに十五の手までが全く悪化して了つたのである。故に十七の手で積極的に十八に伸びなければイカス。其の變化は後に示す。

第一圖 劫トル



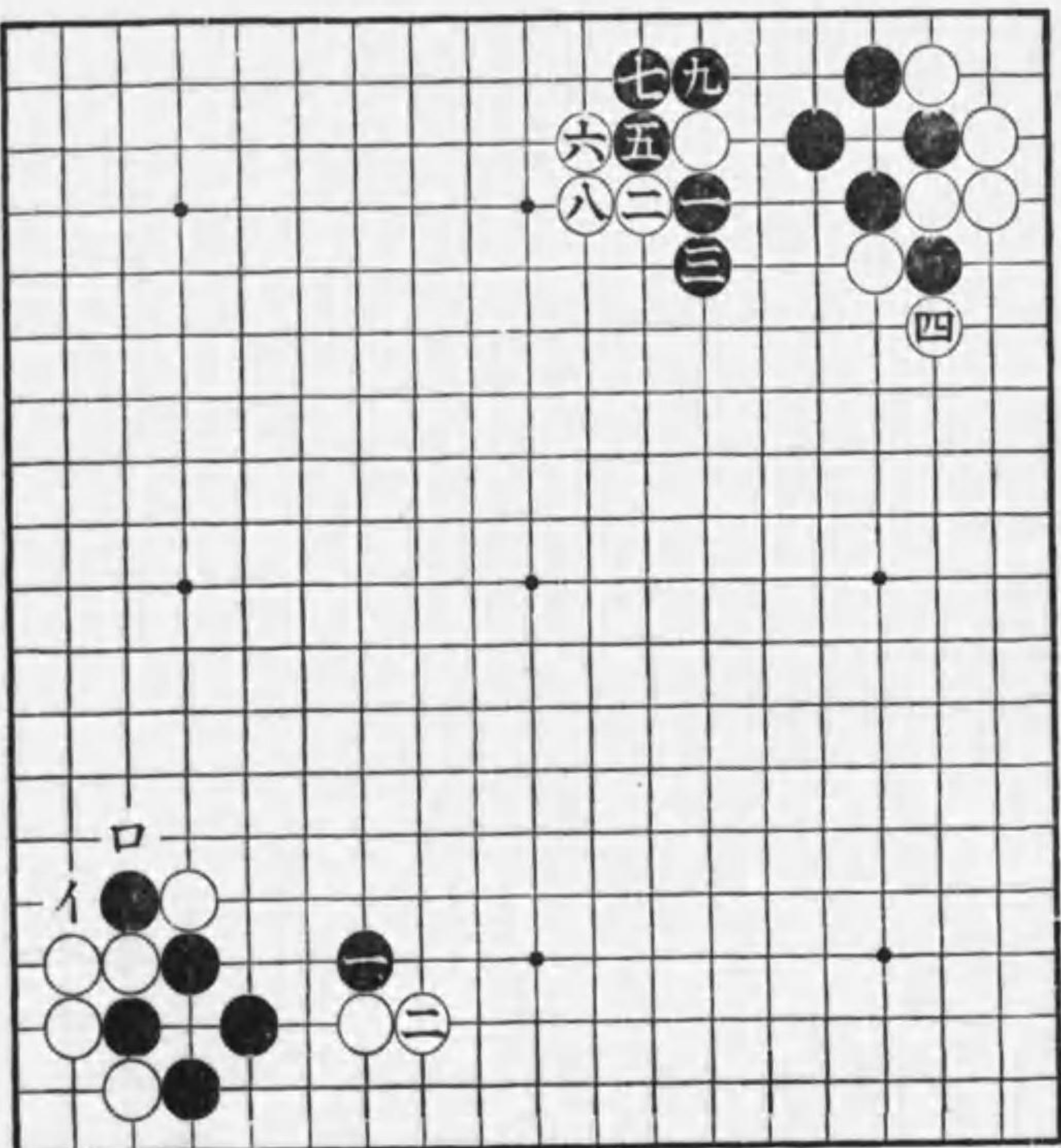
▲第二圖

黒五場合に由る。本圖の如く五と切つて打つ手段もある。是れも悪くはないけれども、要するに此れは第一圖の如く黒二十と攻撃して行くことの其の局面に適しない時分、即ち四圖の形勢が黒の振はぬ場合に早く收まらうと云ふ意味の下に於ての外は不利益である。普通の場合には當然隅の勢力を利用して第一圖の如く二十と攻勢を取つて打たにやイカヌ。

▲第三圖

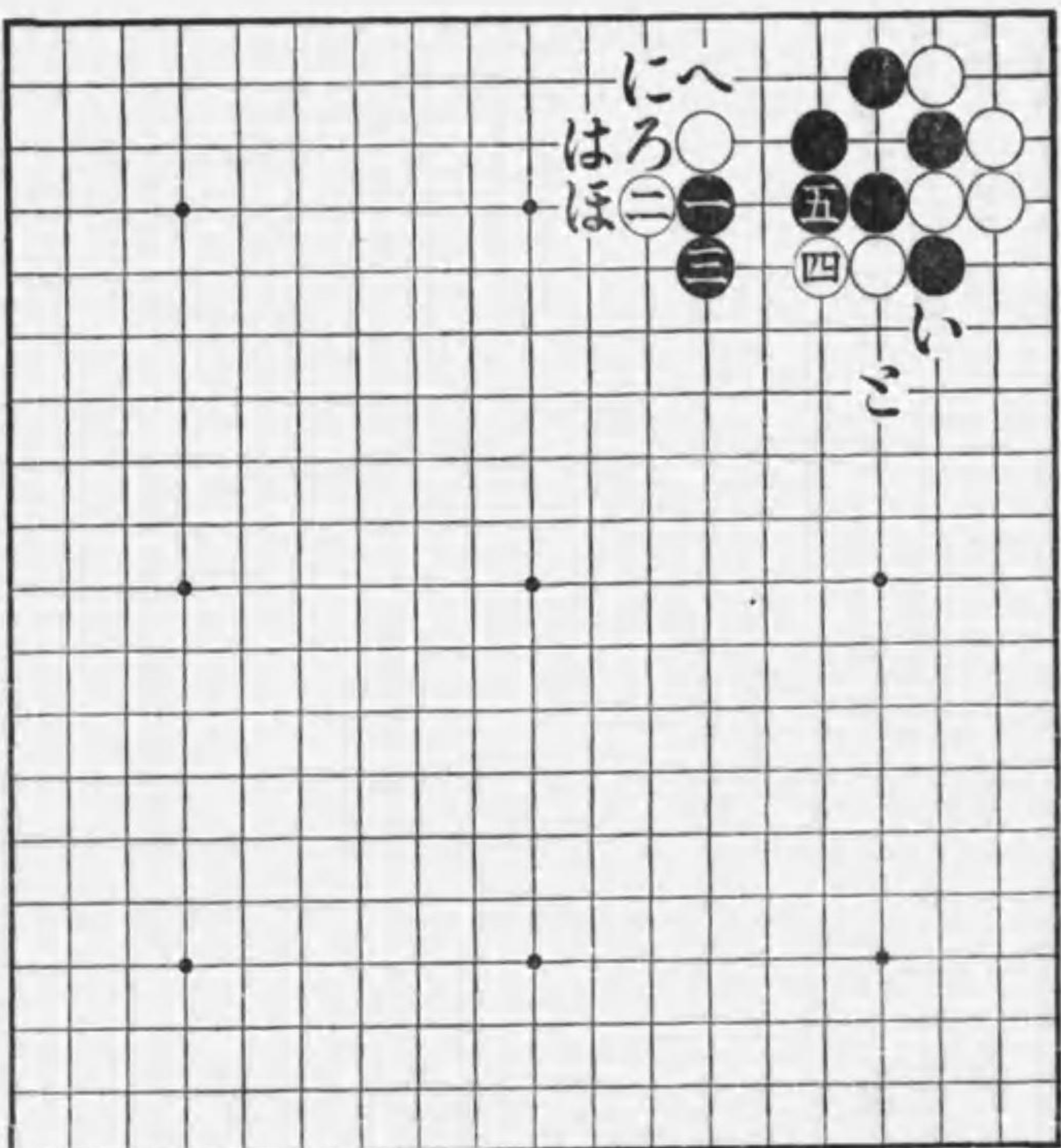
白二は逃手。本圖の如く白二と引くは第一圖に於ける白十五のハネよりは更に悪い。全然受手逃手であつて、少しも黒に利かぬ。十四と玆に黒に一勢力を殖やされては例へば十六の手でイに約えられても□に伸びられても此の一の勢力があるに由つて以下如何に變化を盡しても白の不利に終るのである。更に詳言すれば黒は此際イ、□孰れに打つとしても前來掲載し來たつた手順通りにやつて行けば白は此の一の一手に妨げられるから自然形勢は黒に歸するのである。此圖の變化は從來掲げ來たつた各圖に就いて参照して貰ひたい。

第二圖



▲第三圖

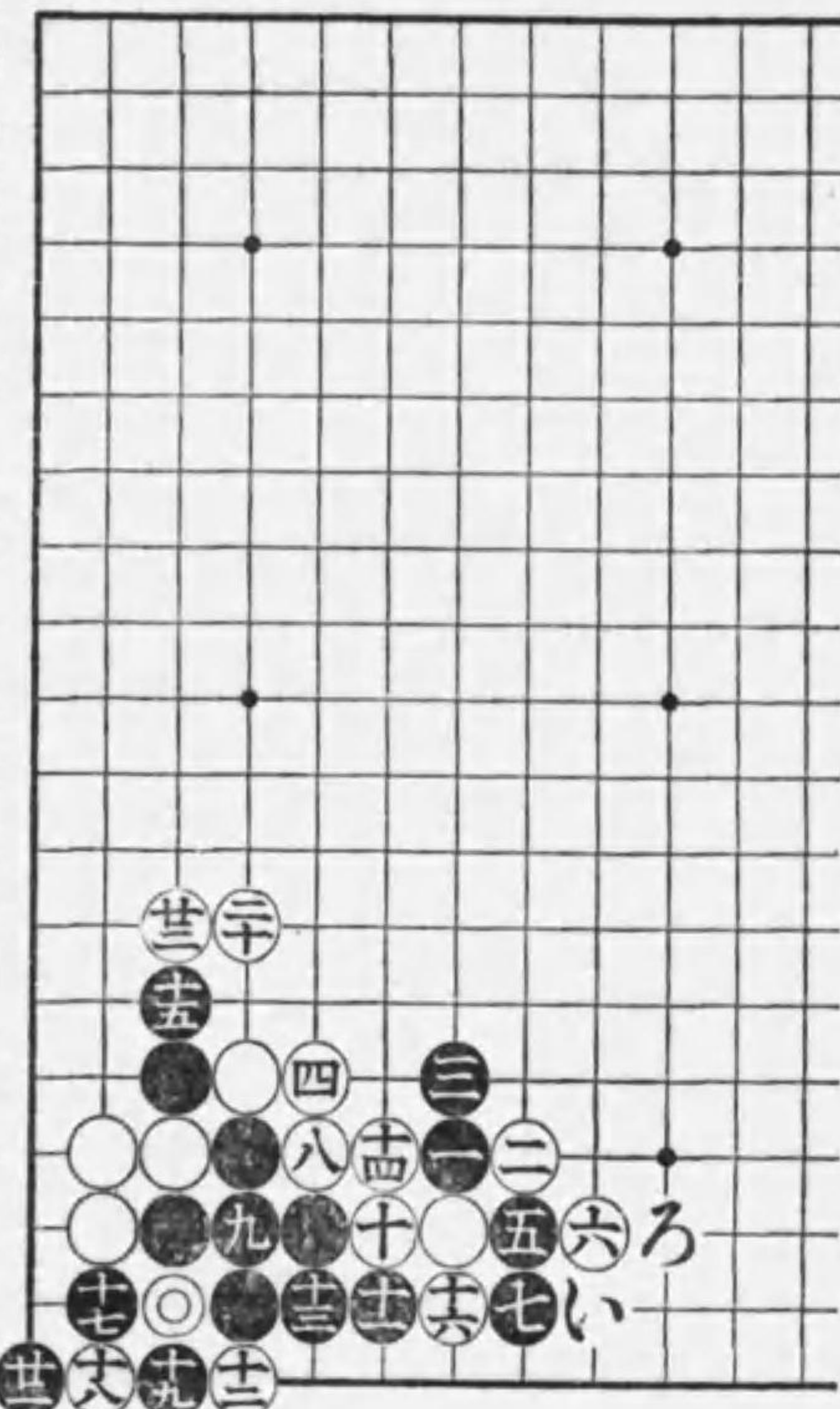
▲第四圖



黒五悪し。第一圖に於ては本圖白四の手でいに一目を取ると云ふ退守手段に出たから悪い。圖のやうに四と伸びるのが本手である。斯くの如く黒に向つて攻勢を取らなければイカヌ。黒五、是れは第一圖に於ける白十七と一般の受手防手で一、三のツケノビの手と相聯關して居らぬから悪い。斯うなると假に白にいに取られ黒ろ、白は、黒に、白ほ、黒へととなつた時分に黒五と粘いだ手は丸でダメを打つた手になる。尙ほ白にはいに一子を抱ゆる手でろに粘いで、黒がいに伸びた時白とに掛けて打つ手段もある。要するに黒五の突張りは先きに述べた通りで既に發點に於て方針を誤つた手であるから次圖の如く打たねばイカヌ。

▲第五圖

黒五善し。黒五の切りは一、三のツケノビの著意を繼いだのである。前にも言ふた通り黒一のツケは白◎のハネを強ち無理でないとは認して振變らうと云ふ手段である。からして白の優勢なる左側方面の戦ひを避けて而して白の薄弱なる方面即ち自家の優勢なる方面に於て所謂西楡に於て失ふたる損失を東隅に於て恢復しやうと云ふ穩當の手段に出たのである。扱て白六の手で七にハネ、黒六の時、白十に突當る手段があるやうにも見えるけれども夫れはイカヌ。ナゼかと云ふに黒に十四に約えられると白は八に突込むで切る譯にはイカヌ。二目は取れるけれども黒に十一にハネられて下の三目を取られて了ふから、白はハネに出るより外はない。ソコで黒十一にハネ、白十六、黒八と粘られて、十五のノビとろのノビとを兩睨みにされて白が潰れ形になるからして、白六の手で七にハネて十に突當る手はないのである。因つて白六と「三ノ筋」から中て、「二ノ筋」の不利なる點に下らし



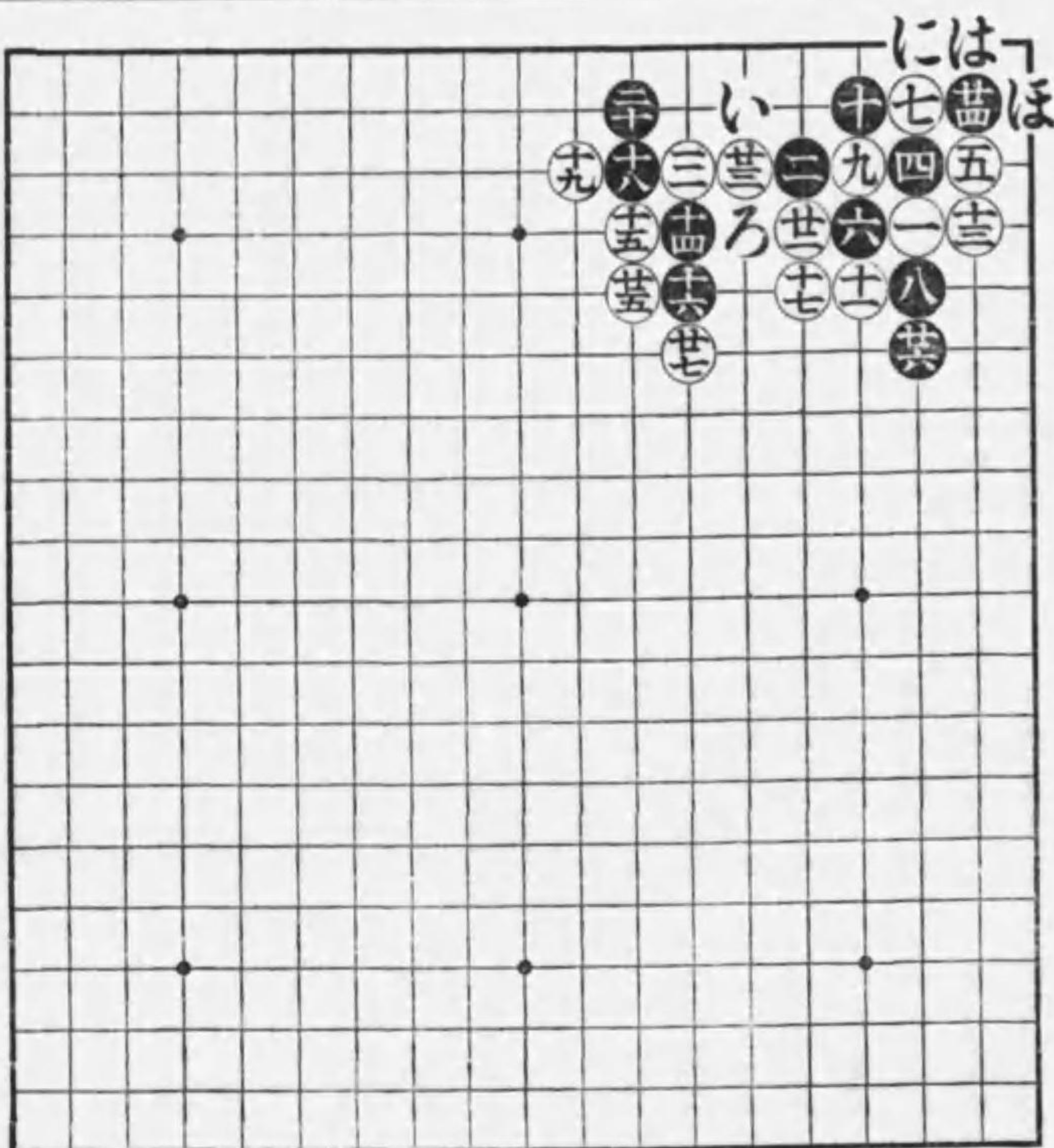
第五圖

め而して白八と中てたのである。黒九の粘ぎは重い。ナゼならば黒一、三のツケノビ及び五、七の切延びの著意と何等の交渉もない別手になるからである。換言すれば黒一、三、五、七は中で戦ふと云ふ手段であるのに、事此に至つて敵勢の多い方向つて行くのは悪い。黒十一是れ又極悪手である。此れは參考までに掲げたのであるが、白二二までの結果となつては黒がさつぱりイカヌ。但し此れは十一のハネが悪いから斯うなつたのであるが、黒としては尙ほ次圖の如く打つ手段がある。

◎白七ハネ返しの斷案

▲第六圖

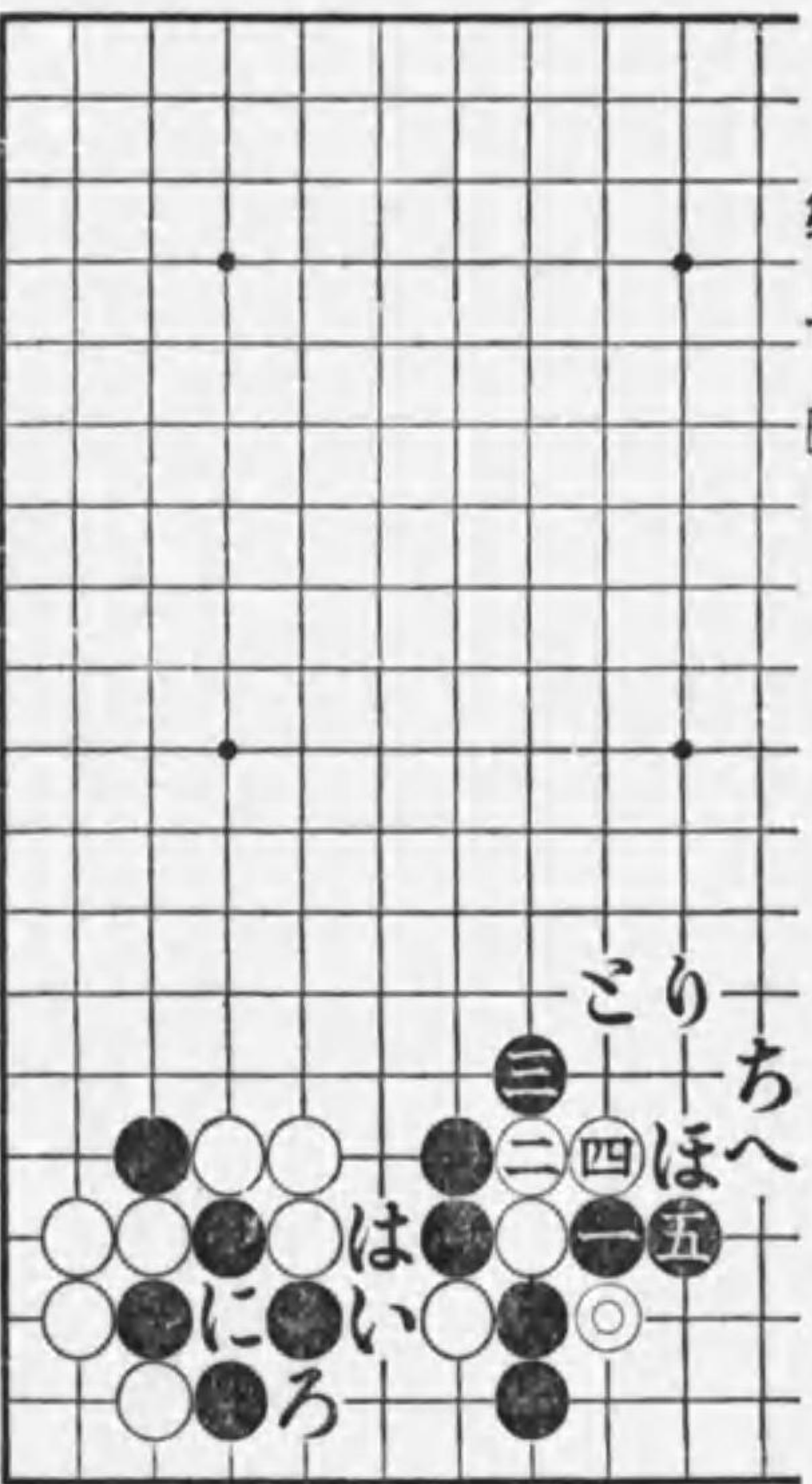
黒二惡手。前圖に於ては黒二四の手でハネタのであるが、此場合二四と截る外ない。左すれば白二七となるのが順當である。尤も茲で白が先手を取る積りならば二五の手で黙つてろに粘いで居る手もある。夫れは機を見て白は、黒に、白七と劫に打つ手を狙ふのだ。併し白ろに粘ぐのは如何にも重い手だから、圖の如く二五、二七にハネるに如くはない。さうすると隅には今言つた通り劫になる手が残つて居るから黒はモウ一手隅に手を掛けて居なければならぬ。其得失如何と云ふに、黒は一以下の白四目を取つて大變利を得て居るやうであるけれども、其實白四着の死石に對して黒も亦四手費やして居る勘定だから割得をしたとは謂れない。況んや一、五、十三の三着は取られて居るとは云ふもの、尙多少の活力を存して居るに反し、外部に於ける十四、十六の黒は何の味もなく取切られて居るのみならず、下の方の十八、二十の二着の如き、有つても無くても同じやうな悪手になつて居るからして、是れも亦黒が悪い。其原因はと云へば黒二二と粘いだるのが悪いのである。



第六圖

▲第七圖

前圖黒二二の變化。だからして本圖に於ては黒は第六圖に於ける十四、十六、十八、二十の著意を襲いで一と截つたのである。其時白若しに突當るとすれば黒は無論二に打抜いて了ふ。其の結果隅の方にはろに粘いではの截りとにの粘ぎとを睨む手が残る。其利害如何と云へば隅の方では黒は非常の損害を蒙ることになるけれども、其代り黒が二に一目を打抜いて◎印の白一子を腐らし、而して中央に向つて非常の外勢を占めることが出来る上に、今述べたやうに黒ろに粘ぐ手が残るから得、失を償つて餘りある形勢になる。又之を白の側から觀れば大變地が多いやうにあるけれども、黒にろに粘がれて逃げられる手が残るからサツパリ地はありはせぬ。さりとして今更ら白ろに取つて居るやうな事では大勢に遅れて了ふ。要するに此局部戦は白が先手の處であるから無論勢力と實質とを得なければならぬのに勢力としては少しも見るに足るものなく、只實質丈けの争ひに歸着して了ふと

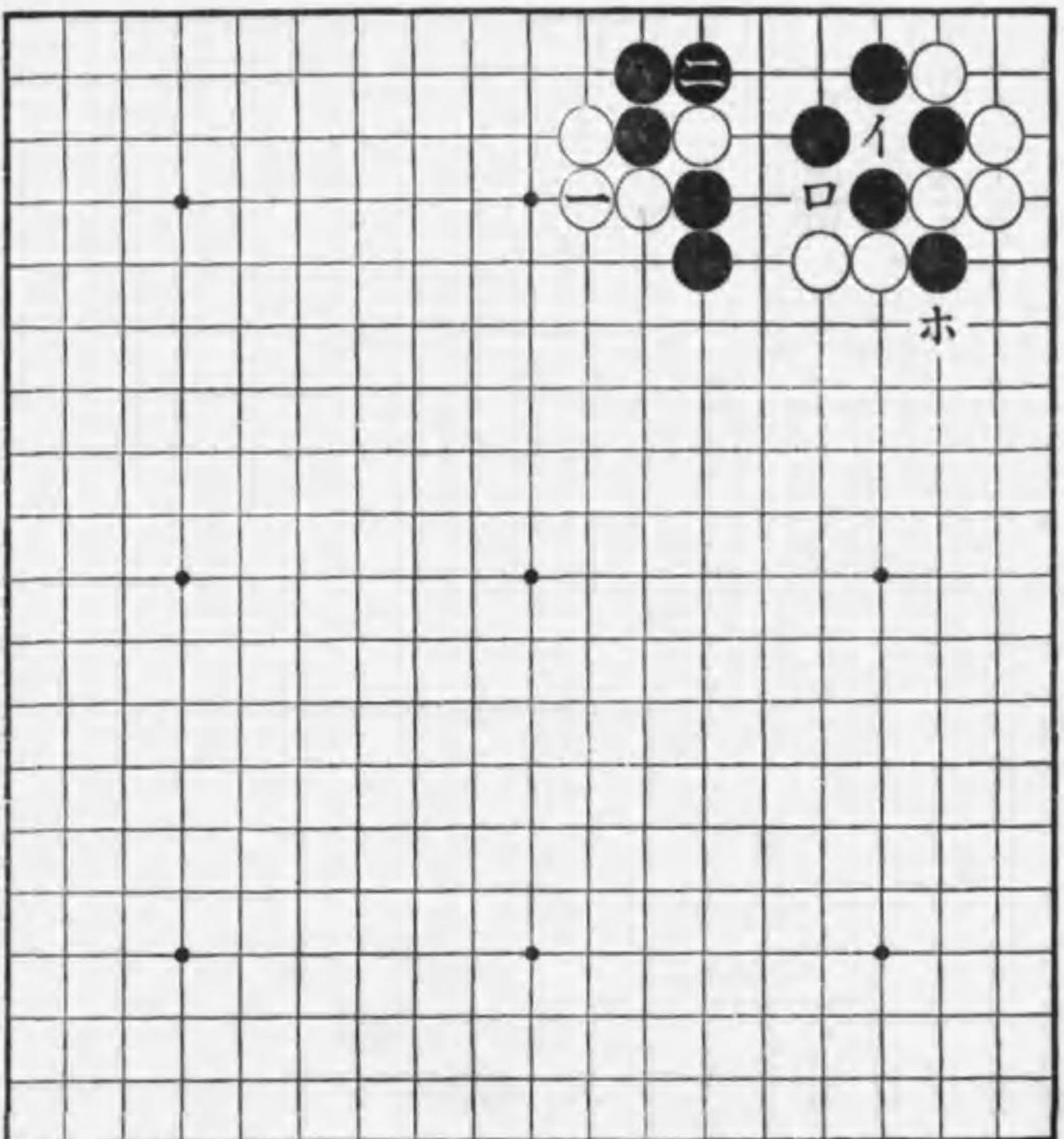


第七圖

あつては白のイカヌ事は論ずるまでもない。故に白はいに突當らずして二と伸びたのである。抑も此一目は黒を三方に隔て、居る要石で、之を打抜かれると三方の黒が一時に繋つて了ふから、何は措いても二と伸びなければならぬ。其結果黒五となる。以下白の方にも色々打つ手はあらうが、斯うなつては黒の方が有利の形勢である。ナゼならば二、四の白は黒の勢力の多い處で戦ふことになるから理勢に於て黒が悪からう筈はない。白尙ほほに押すとすれば黒へにハネ、白と、黒ち、白り、黒いに取つて居れば宜い。

▲第八圖

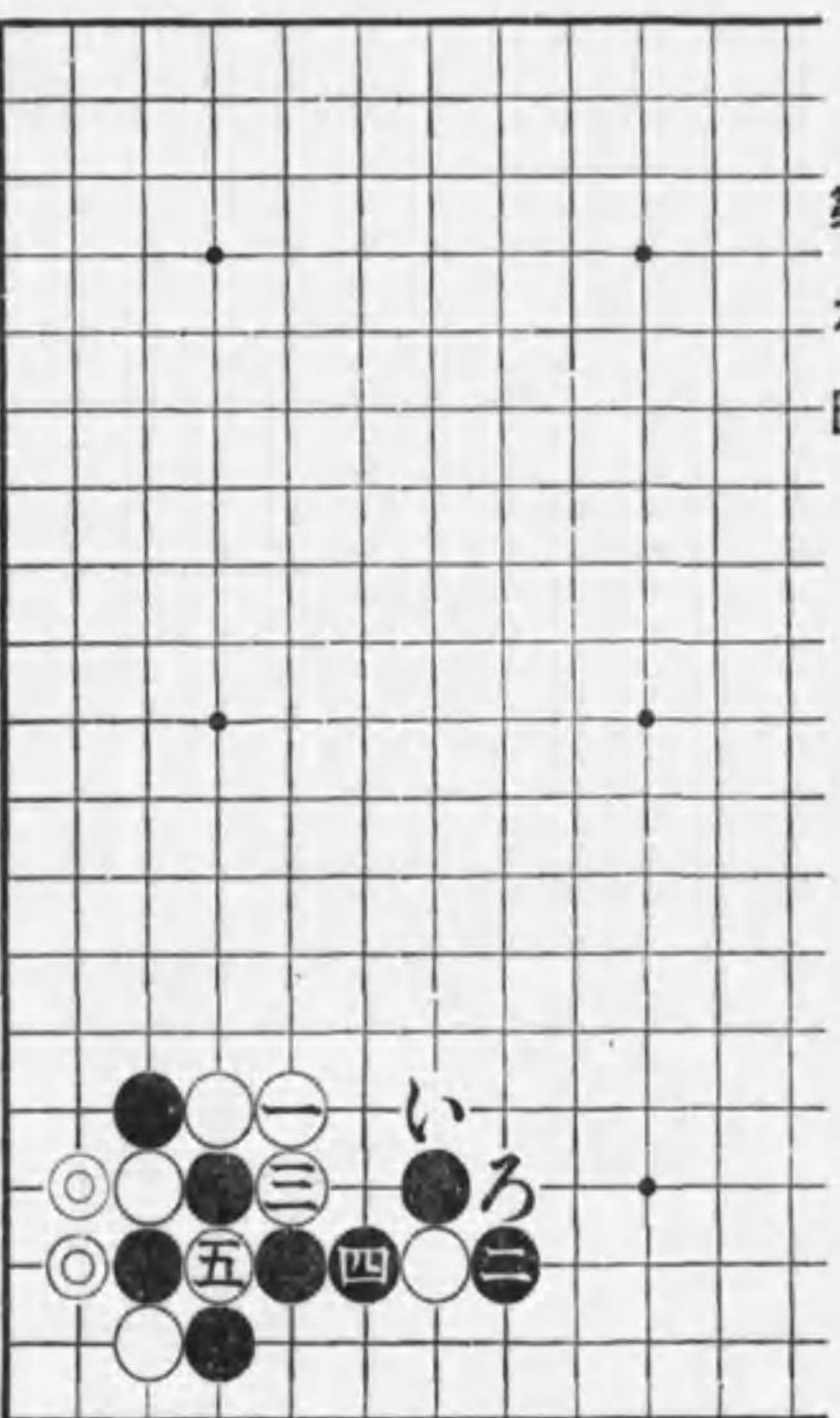
黒の形勢善し。第七圖の如く黒に一の處を截られては苦い。因つて圖の如く一と粘ぐとすれば黒は二と曲らんらぬ。其結果白イ、黒ロ、白ホとはなるけれども、黒は先手に治つて先手を取つたことになる。勿論白がホに一目を抱えた利益は莫大であるけれども、黒に二と一目を取られて居る損害も亦莫大であるから差引き何にもならぬ。白が折角攻めに行つた石を先手で活きられて了つては攻め甲斐がない譯である。故に黒の方には少しも不利のない姿である。



第八圖

▲第九圖

白一の變化。本圖の如く白は只一と伸びる手もある。斯の如く一と伸びるが宜いか、第六圖以下の如く本圖ろの處にハネルが宜いか、一寸分らぬ。ドウ云ふ譯かと云ふと白一の手でろの處へハネて、黒に印へ伸びられると云ふことは、前にも述べたことがあるが、黒に勢力を二重即ち左右兩面に使はれると云ふ意味がある。所が黒一着に對し白二着の勢力を以て黒に一つろにハネて一打撃を喰はしたと云ふことになれば白ろ、黒いの交換は白の方が有利であると云ふ意味になる。だからして議論の歸着點は黒の方が只勢力を二重に使ふと云ふことになれば黒が善くなり、又只黒が利かされたと云ふ意味になれば白の方が働いたと云ふことになる。其の理論の衝突の是非の判断が一寸苦しい。併し白ろに一撃を加へずして、圖の如く單に一と伸びる結果は極めて簡單である。即ち黒四、白五となる。此の手割はドウカと云ふと、黒は二目を打抜かれて一目腐つて居る。其代り白の方に



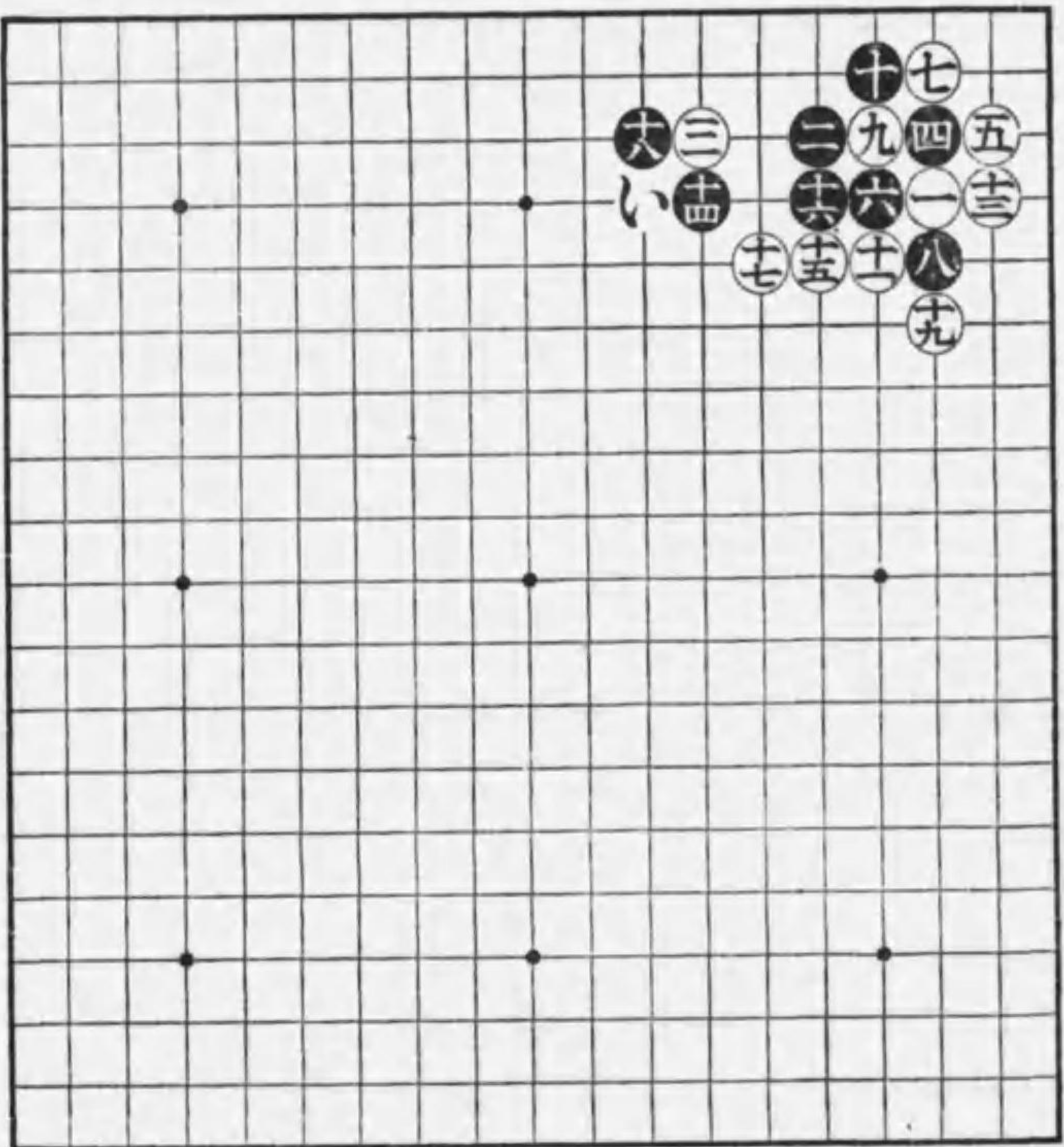
第九圖

も◎◎二着と一の一着都合三着の無駄石がある。但しソノ十七の白◎一着は何分かに付て居る。無いよりは優つて居るからして、隅に於ける黒の損害は言ふまでもないけれども、黒が四の一着で一目を取切つて居る利益は莫大のもので、白の損害は大變のものである。此白一着は黒の眼を取る上に於ては寧ろ無い方が宜いのである。其の意味から言へば黒は一目のコミを貰つて二手打つた勘定である。さうすると白は一手休んで居る譯だから、是れも黒が大して悪い事はない。

▲第十圖

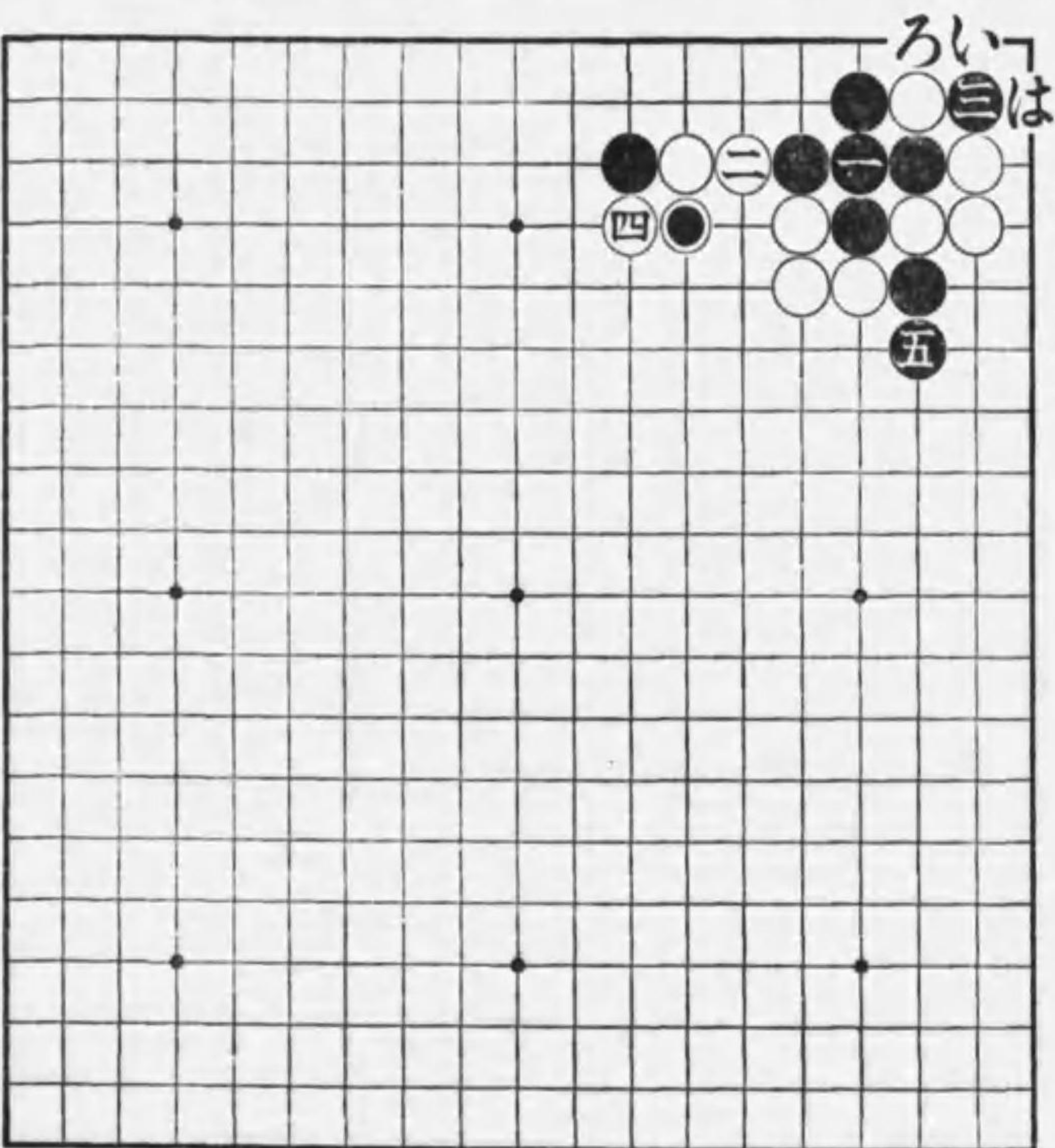
黒十六の變化。前圖のやうに二目を打抜かせまいと思へば、圖の如く十六とグヅム手がある。其結果は白十九となる。是れは白三の一子は未だ活動の餘地がある。例へば印に切違ふ如き其他種々雑多の激しい手がある。味が悪くて仕様がな。前圖の如く遣る方が宜い。隅の二目を取られると云ふことは大變エライけれども、元來白の堅い處を更に堅くさせるに過ぎぬから、二目を打抜かれても差支ない。白の勢力の優つて居る所に於て、争ひになつた時は、いくら敵の方を堅めさせても宜い。其代り自分も亦堅くすると云ふことが必要である。

第十圖 劫トル



▲第十一圖

黒一悪手。黒一、初心の中は棄てるに妙あることを知らずして、兎角圖の如く一と粘ぎたがる弊がある。二の處へ突張らずに、けれども是れは極悪い。圖の如く黒五までの結果になると白から直ぐにいハネられ黒ろ、白はと劫を仕掛けられるからである。要するに一と粘ぐのは最初●印へツケた精神に戻るかから宜くないのである。

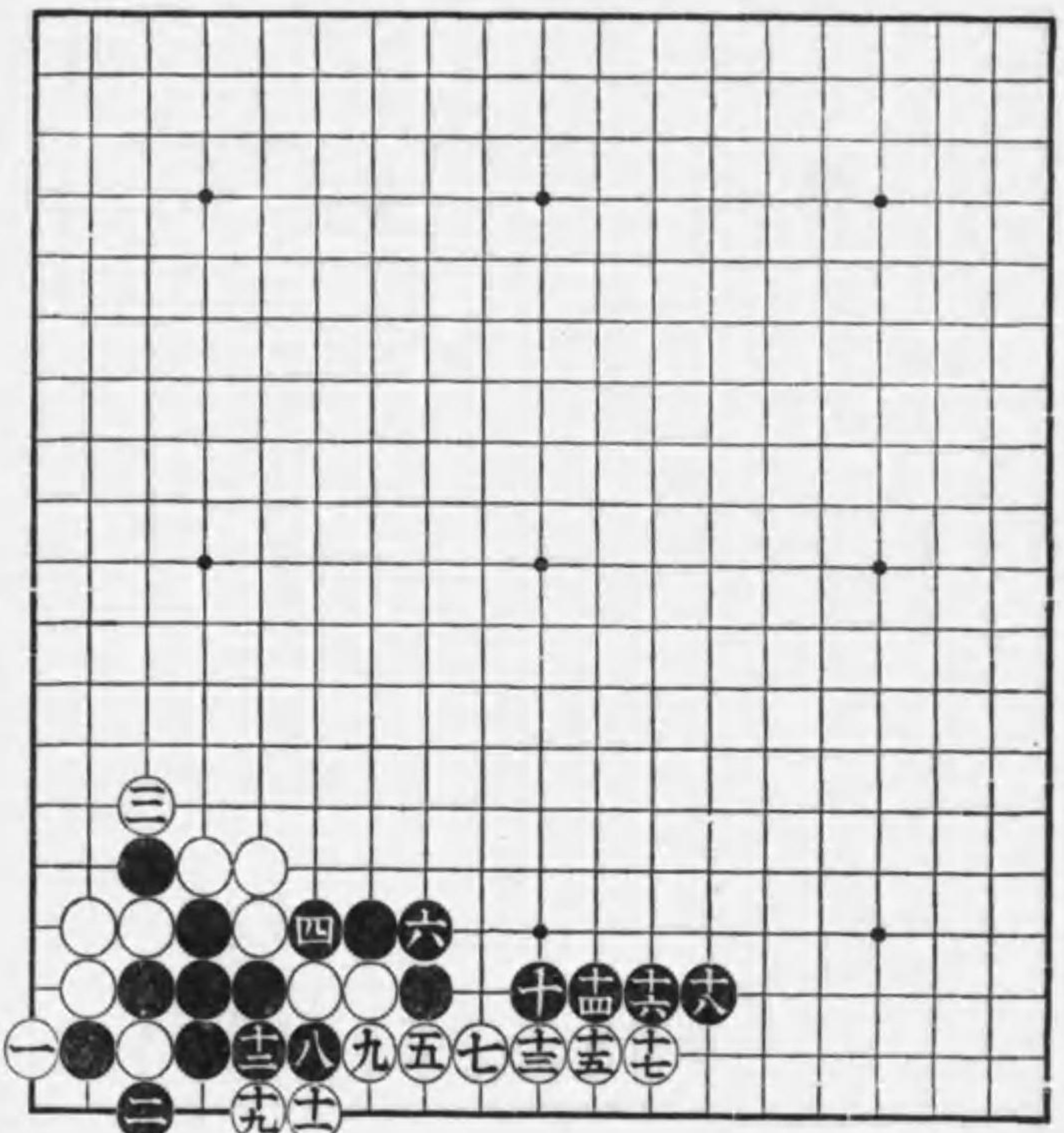


第十一圖

▲第十二圖

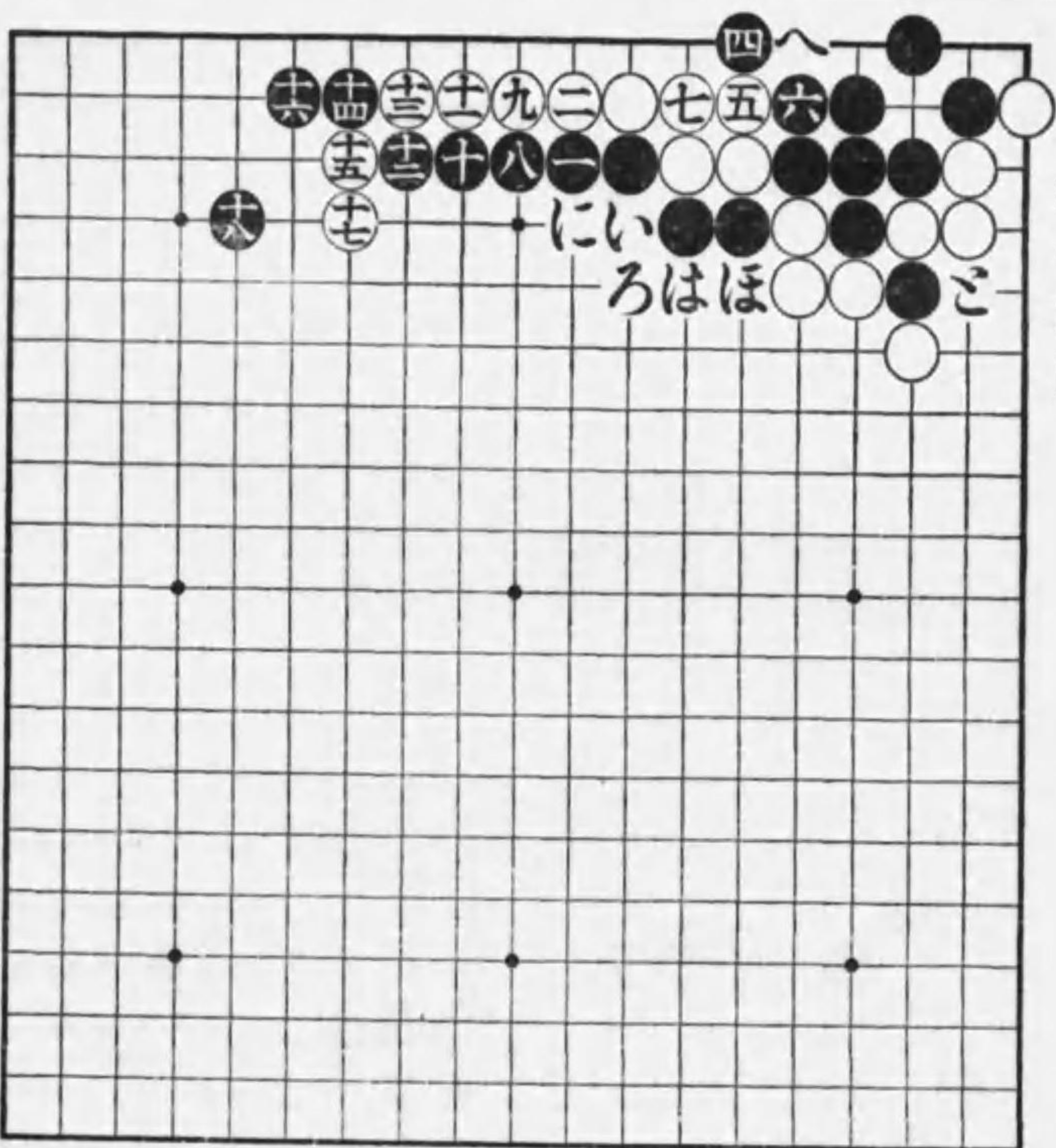
白一の變化。前圖に於ては白一の手で六の處を截つた。けれども圖の如く一とハネて三と取る手もある。其結果圖のやうに十九となつては黒がイカヌ。白としては尙ほ手段を盡せば盡しやうもあらうが、見渡した所が此位で宜い。黒十八の手で十九に打つて活きる事もあるが、夫でも隅に劫が残つて居る。白から十八へハネられる事になつてはイカヌ。もう一つ詰めて言へば白が十七に押さずして十九に詰めて行く手もあるのだ。要するに斯うなつては黒がイカヌ。但し黒八の手で十一に打つ手がある。白八、黒十、白十二のアテとなる。此方が黒は幾分か宜いけれども、大同小異で論ずるに足らぬ。尙ほ黒六と上を粘ぐ手で他に打方がある。

第十二圖



▲第十三圖

黒一の變化。本圖の如く打つ手もあるが、此結果は黒十八となる。前圖よりは宜いやうであるけれども何分にもいの疵が氣になる。若し白からい印を截られて夫れが征で取れぬやうなことになるは大變だ。縦んば黒ろに掛けて征に取れるにしても、白は、黒に、白ほと絞られる手があつて味が悪い。又隅の方は黒が手を抜けば白へに打缺いて次にとに打抜かれることになる。隅の黒は無條件で取られて了ふ。だから是れも矢張り黒がイカヌ。要するに第十一圖に於て言つた通り一と粘いだのが悪いので、ドノ道結果の好からう筈はない。

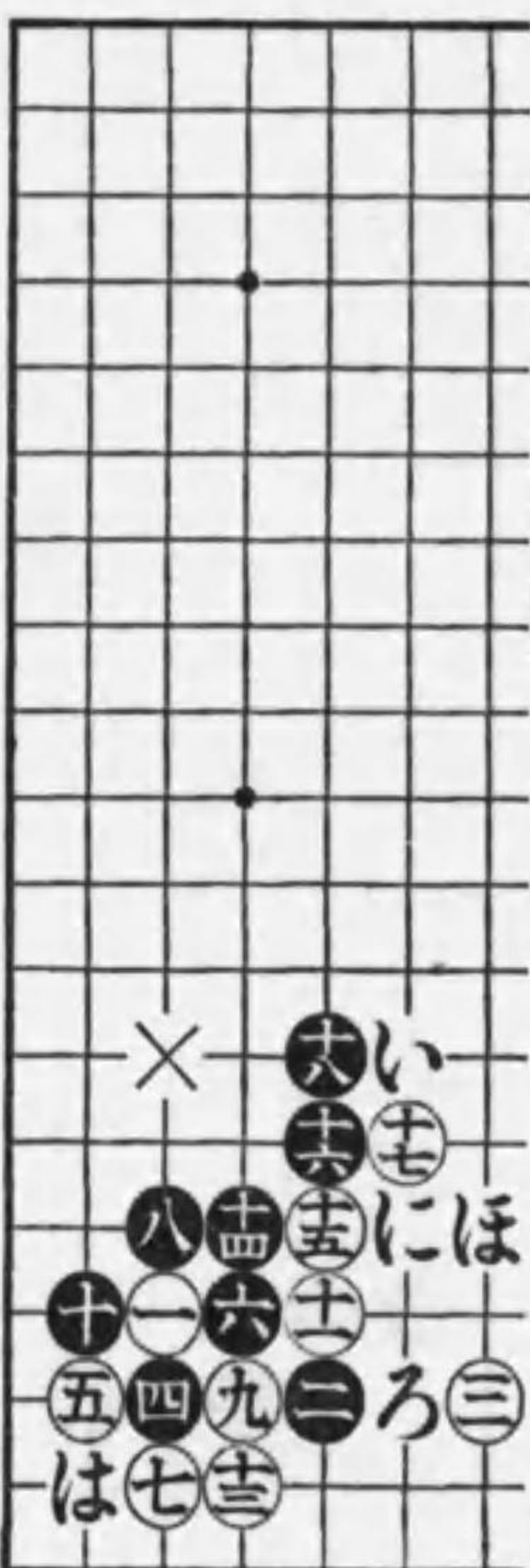


第十三圖

▲第十四圖

黒十四の新案。本圖は自分が鈴木氏と打つた時に出た型である。自分が白で七とハネて九と取つた。其時は無論十の手で十三の方にアテられる積りで居た。所が圖の如く外の方から十とアテられた。さうして圖の如き變化になつた。是れは鈴木氏が自分で工夫されたか、或は由つて来る何物かであつたか、夫れは知らぬけれども是れは簡單明瞭、何の紛れもない手段で、優に一箇の通形とすべきである。自分は此時他の關係もあつたので十九の手で×印邊に打つたと記憶する。鈴木氏は後にいの方面から押して來られて、さうして次にろに並び向はに截つて劫争をしやうと云ふ手を睨んで來られた。い印に押されるのは辛いとは知つて居たけれども併し白が「六ノ筋」を押すと云ふのも非常に不利な事でもあり、又に印を截られる疵も残るからドウも押し切れなかつた。勿論此型と雖も場合に由るとは論を俟たぬけれども、今云つた通り黒の方には紛れはなし、白の方には味が残るし、

第十四圖 ●劫トル



誠に良い手段であつて、此の鈴木氏の型に由つて殆ど一間挟み繰返しの解決が着いたかの如き氣持がした。併しながら自分が是れ迄研究して、掲げて來た所に由つても、白七の繰返しを無理として之を答めて結局黒が不利に陥つた所を見ると、此型丈で七の手が無理であると云ふ斷定は出來ない。否な自分の調には杜撰もあらん、誤謬もあらん、けれども七の手が古來無理であると云ふ説には斷然反對する者である。七とハネル手段は正にある。是れ又定石の一とせねばならぬ。要するに定石の革命側に屬する方の勝利に歸したと論結して本定石を終る。

▲追白。前段陳述の通り白七のハネを是認して分れ々々に打つと云ふことが一番の最上策である。ソコで實戦に臨んで遣るには、勿論場合にも由るけれども、鈴木氏の打出された此の型及び第九圖を標準とするを可とすべく、而して萬一夫れも場合に適せぬと云ふ時は、第九十五頁第三圖の如く(第十三圖に就て言へば黒八の手で十四に伸る手段)喧嘩をせぬと云ふ方針を取れば紛れはない。

●白二の高がかり之部

▲第一圖

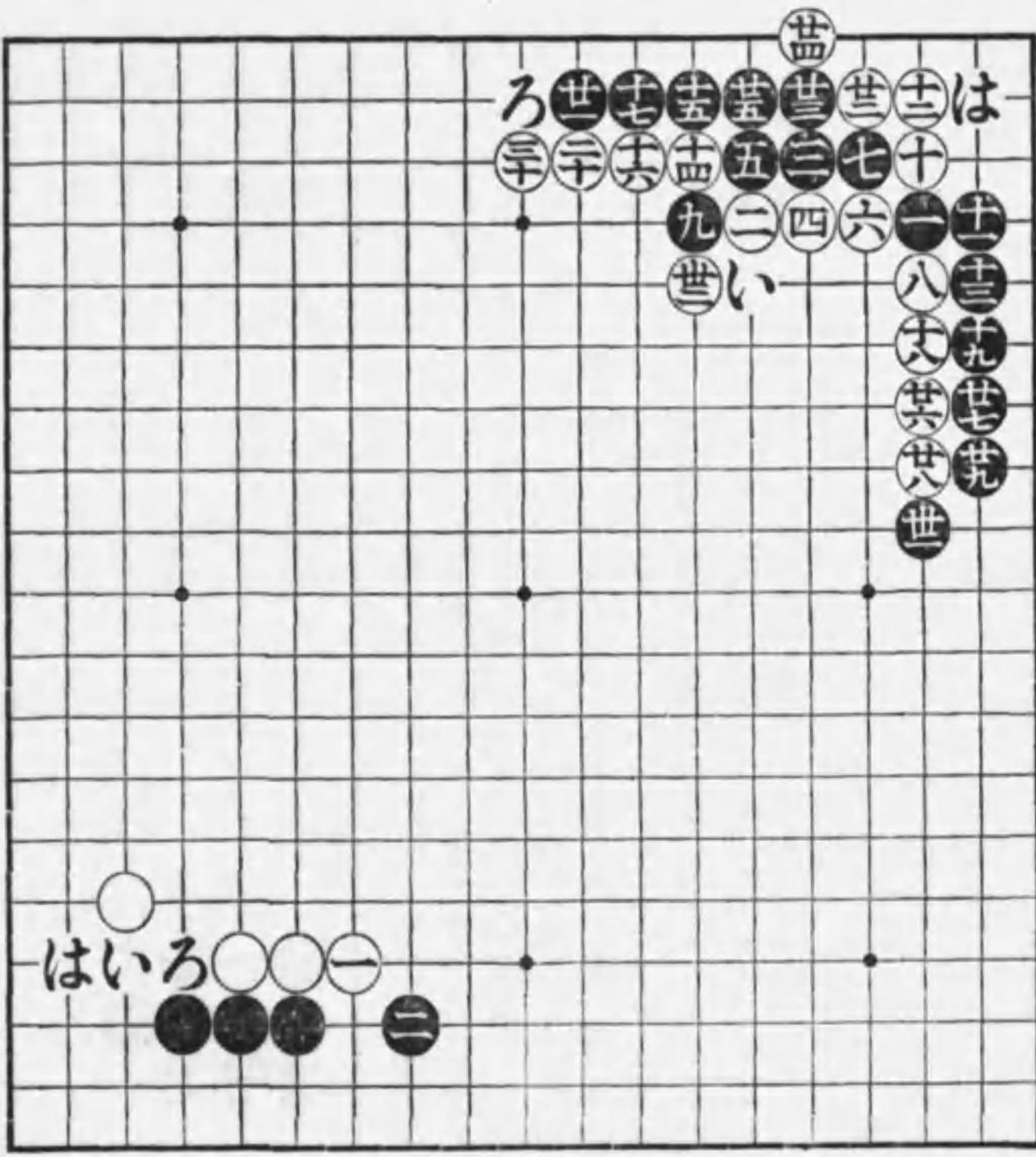
黒三の趣向。黒三の手は白に五に約えさせ、黒四と行びて此隅の利を占め而して白の時、他に轉じやうと云ふ計畫である。因つて白は敵の謀の裏を掻いて圖の如く四と約えて打つ手がある。一見無理姿のやうであるが、扱て實際やツて見ると案外其の無理を咎めることが出来ぬ。自分が嘗て岩佐六段と對局した時に斯う打つた碁がある。其時は自分が白番であつたが下隅に黒の備えがあつたから白は大して成功しなかつたけれども併し失敗とも認めなかつた。妙に變つた碁が出来たことがある。併し四と押す形が元來無理だから結局は旨く行くまいと思ふが、兎に角斯う遣る手筋もあつて中々六かしいから研究して置く必要がある。

○黒五戦ひに應ず
 白は四の手で當然五に約えねばならぬ筈であるに、圖の如く四と壓迫を加へて來た以上は勢ひ五と白の打つべき處に打つて戦はざるを得ない。若し黒五の手で六に突當るとすれば白五、黒二三となる。之を解剖して見ると最初黒三と打ち、白四の手で五に約えた時黒は當然四に打たぬならぬのに二三に下つた姿は確に黒が悪い。併し其時白が四に曲つて六に突張られた姿は黒の方が利益であるから、此處だけの利害を言へば五と威張らずして一步を譲つて六に突張つても宜いやうであるが、併しながら前述の如く黒は此處で先手を取つて他に轉じやうと云ふ目的であつたのに六と突張つて後手に甘んずることは到底實戦に於ては忍び難い事である。故に圖の如く強硬に五と押して戦ふ外はない。

○黒九好し

白八のハネに對して十一とアヤマル者あるは、往々見受ける所である。抑も黒が五と押したるは飽くまで戦はんとするに在る。然るに今に至つて十一と退く譯では五と押した趣意が立たない。試に甲圖に就て説明せんか、白が一と伸びた時は黒二と飛ぶのが普通である。然るに憶病にも之に應戦せずして、狐鼠裏手へ廻つて黒いにコスミ付け、白ろの時黒はに凹垂れたと同様の姿ではないか。故に圖の如く強硬に九とハネて戦ふのが五と押した精神を全ふる所以である。

第一圖



甲圖

○白十、十二の策戦
 白が十と截り十二と行びたのは此二子を犠牲にして外部を塗付けて勢力を占めやうと云ふのが本意で、それが適はぬければ一、十一の二子か、三、五、七の三子かを取つて満足しやうと云ふ作戰計畫である。

○黒十九は悪い
 此變化は次圖に示す。夫から黒二九の手で三十にハネル手もあり、黒三一で三二に行びる手もある。種々の變化は順を追うて掲げる。

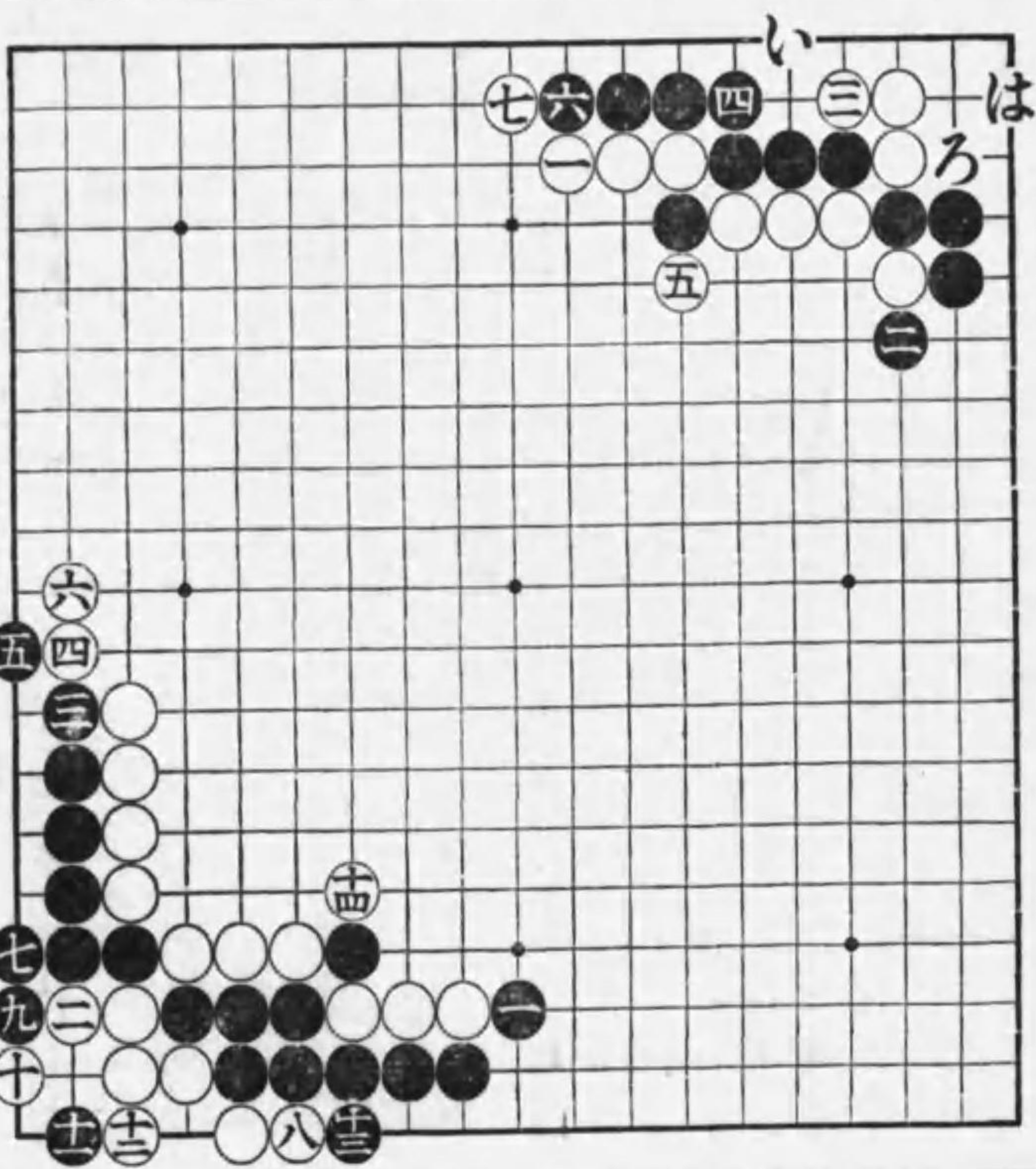
○白三二の變化
 三二の手でろに約ゆることも出来る。其結果黒は白三二となるものと假定し。黒は十以下の四目を取ることは出来るが、其地は十八九目に過ぎざるに反し、白の外勢は頗る厚いから得、失を償はぬ事はない。併し圖の如く單に三二と九の一子を取切るのが本手である。要するに本圖は白の理想通り外勢を張りたるに反し、黒は縦合隅の白を取ることが出来るにせよ。左右共に二筋を五本も匂つて居る姿だから斯うなつては黒がイカヌ。

▲第二圖

黒いは肝要。本圖は前圖白十八の變化であるが、白一行びると二とハネられるは必然で、隅の白を取られて了ふ。此白を取るには黒いに尖むのが一番分り易い。デ白ろの時、黒はに置くことを忘れてはならぬ。斯うなれば黒が悪くない。

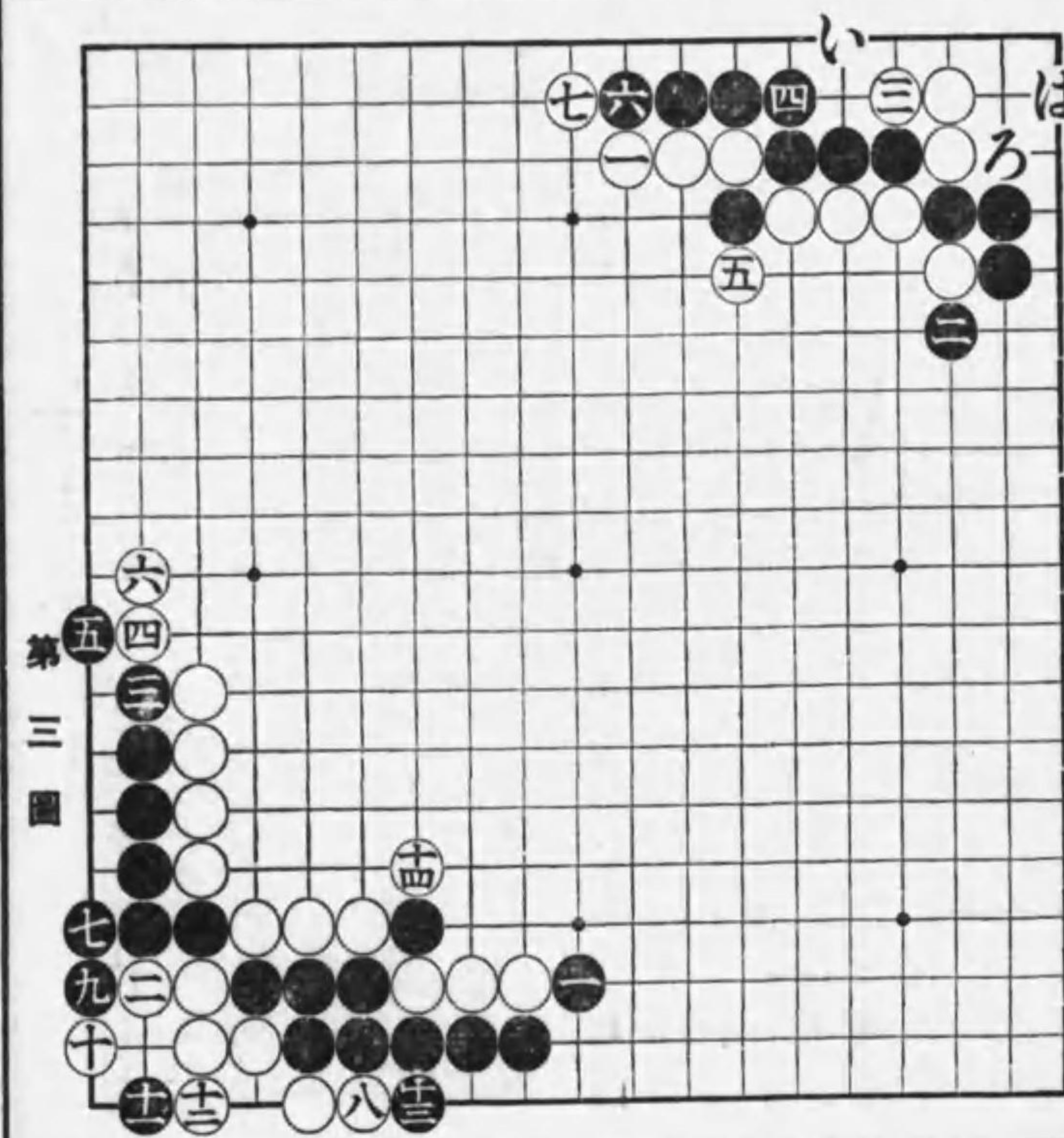
▲第三圖

白八妙。本圖の如く黒一とハネル結果は當然黒七までになる。ソコデ白八と行びて黒の活力を一つ殺ぐ手が肝要であるさうして十四と抱えて隅は劫である結局黒は隅の白を取る爲めに二三手無駄の手を打たぬならぬから是れ又黒が悪い。



第二圖

▲第三圖



▲第四圖

黒一妙ならず。前圖に於ては黒一の手で、二ハネたのであるが、圖の如く一と夾む手もある。幸に外部の白をグル／＼廻はしにして絞ることが出来れば黒が宜いけれども、白から十六とツケられては所謂アマリ姿で始末にイカヌ。或は黒十一の手で十六に打つ筋もあるが夫れは白にハネコム筋を見て印に打たれるから是れは黒がイカヌ。

▲第五圖

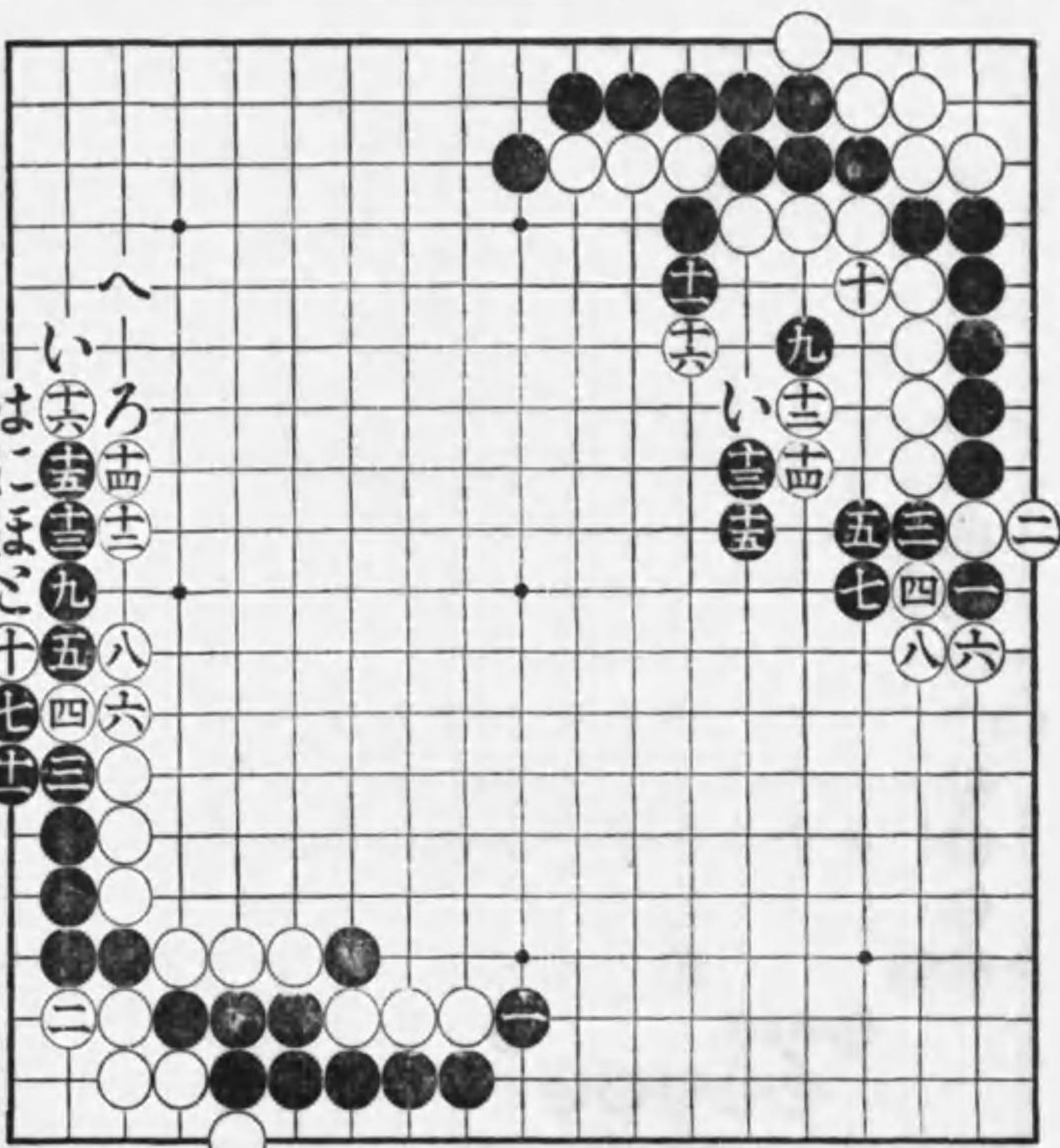
黒一のハネ悪し。本圖は第一圖黒二七の變化で、一とハネル結果はドウなるかと云へば二と約えらるは必然で、以下十六までにならぬ。この筋を八本も匂つては假令隅の白を取つてもイカヌ。黒は尙ほいにツケて互へる手がないではないが、さうすると白ろ以下へまでの符合順にやられて益々外部を壓迫されるのみならず、追落しの意味があつて、隅の白に活を生じて來るから尙更ら黒が悪い。

○白十。

此れは黙つて十二以下の手順を運んで行く手段もある。

○黒十一の變化。

十一の手でとに取り白十二の時十六に飛ぶ手もあるけれども、さうすると追落しの意味で、先手で隅の白を生きられるのみならず、黒の方が全部取られるは危険である。



▲第五圖

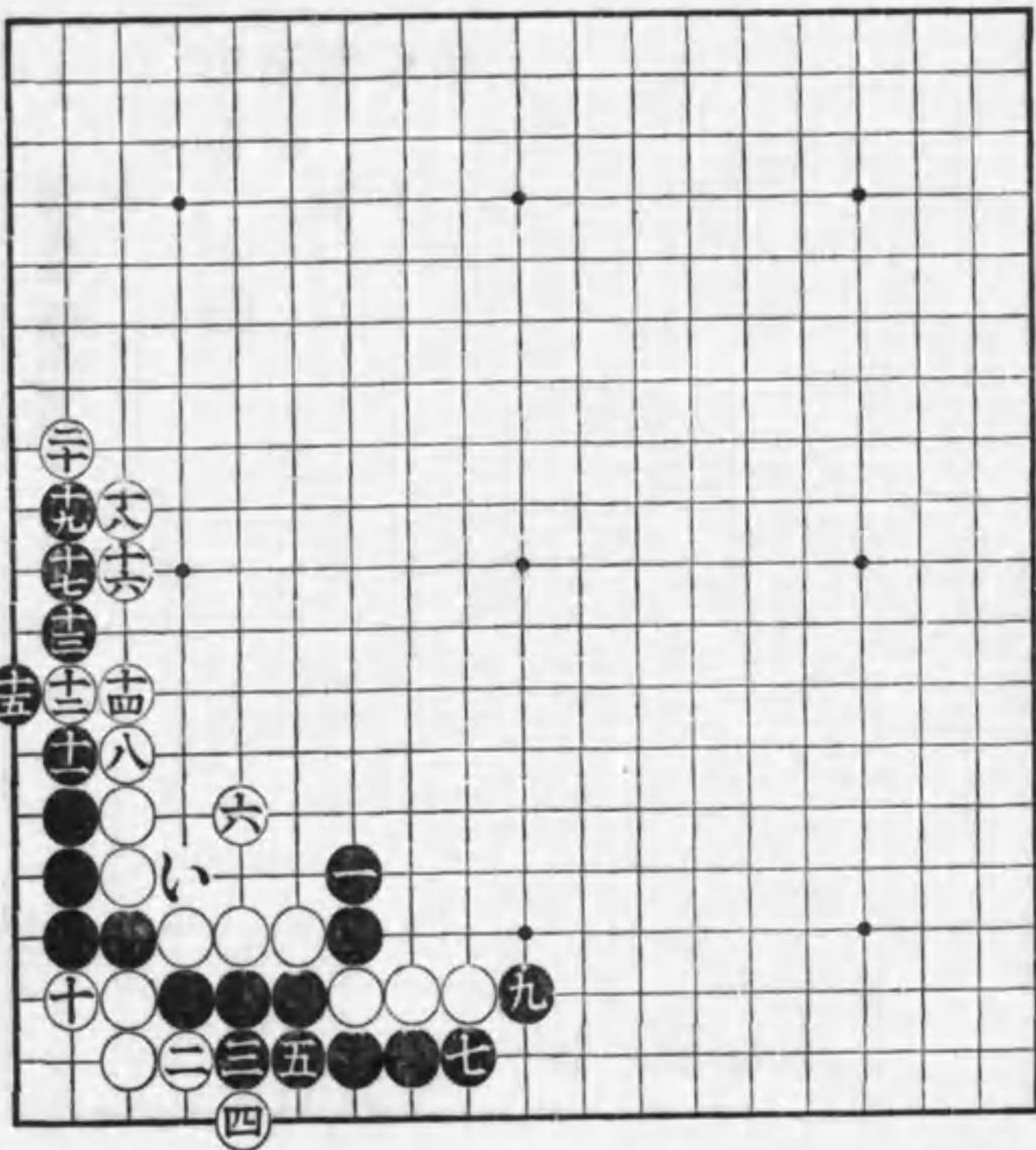
▲第六圖

黒九無理。前述の如く黒一と行びて打つ手もある。白は之に對して八に行びたいけれども、此れは黒にモウ一本十一に押されても直に十二に約ゆることが出來ず、又黒から六に打たれるといに粘ぐより外なく詰り、黒に一手餘分の手を打たれる結果になり、而して十に曲つて居られても工合が悪いから、白は此場合二、四と利かしてから六の急處に備ふるのが形である。

○黒九悪し

九の手で十に曲つて隅の白を取るのが本手である。然るに九と貪つた爲めに結局二十に約えらるゝことになつては黒がイカス。

第六圖

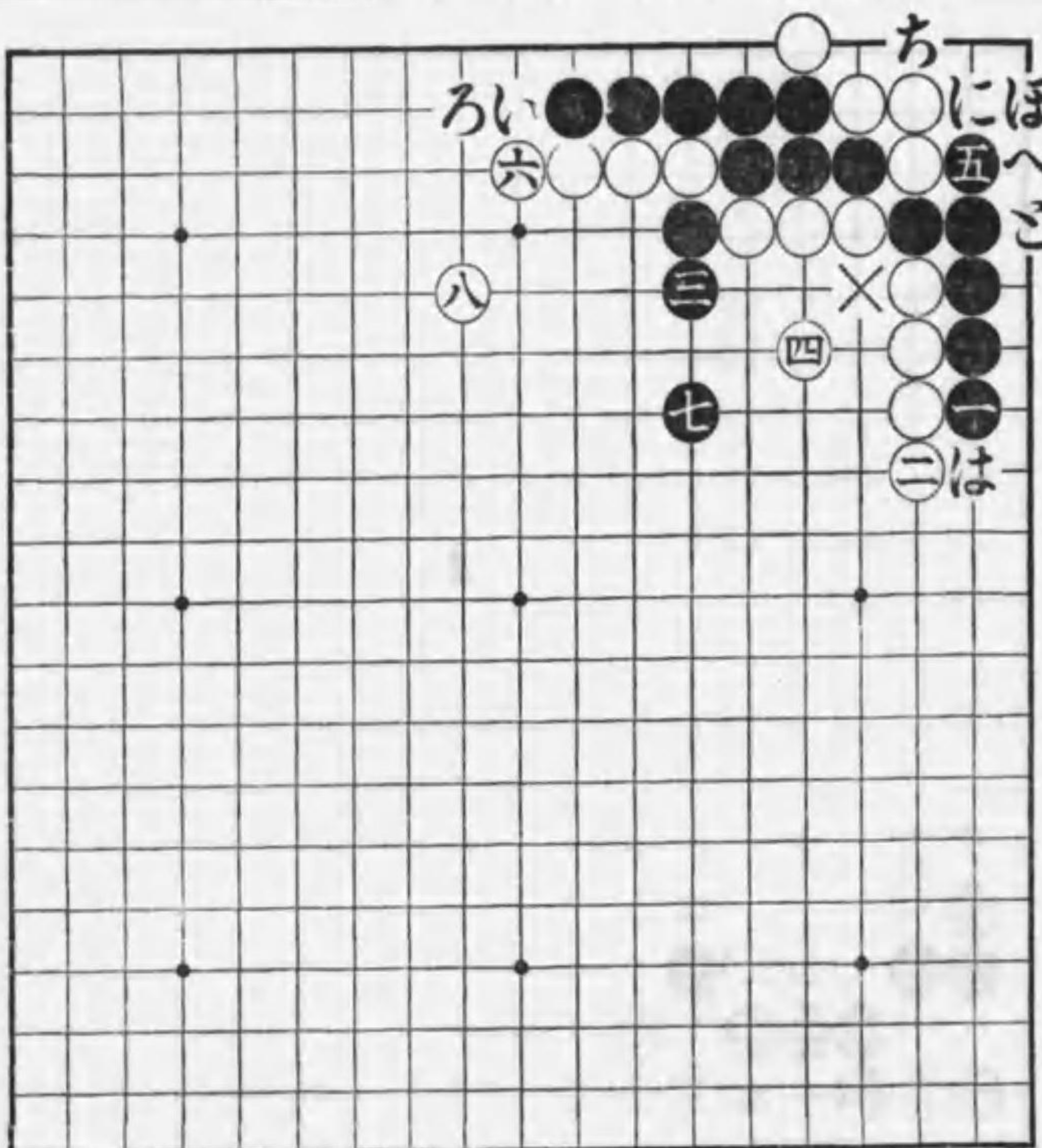


▲第七圖

黒三面白し。本圖は第五圖に於ける黒一の變化で、圖の如く一と押してから三と弱石を活用したのは良手である。白四は既に述べた如く黒から此急處を衝かれて×印に粘ぐ譯では形が崩れて了ふから止むを得ない。

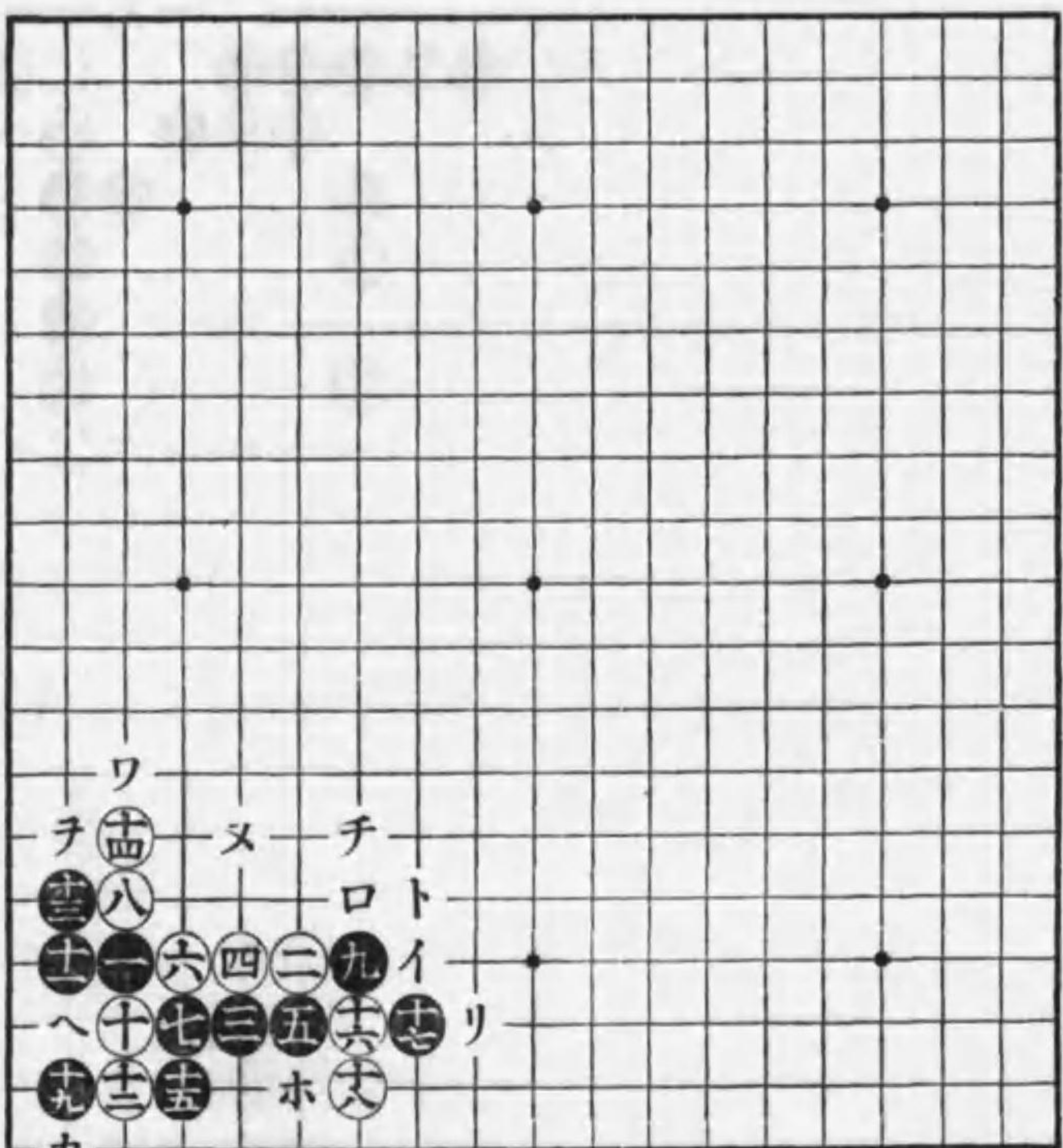
黒七此れはモウ一本いに押し、白ろに約えた時七に飛ばなくてはイカス。乃ち圖の如く八と打たれることになると黒いの押しが利かなくなり従つてはの先手約えを喰ふことにならるからである。夫れは白先づにへ曲り黒は、白へ、黒と、白ちとヨセ劫の形にするか、或は兩劫を製造される虞れもあるからである。どんなヨセ劫になつても白は元手入らずで黒が負けは一逼に潰おれて了ふ。扱て本圖白八までの形勢如何と云ふに隅の白四目は取られるけれども之に對して白も亦四着を費やして居るから、白の方には一目も無駄はない。然るに黒は正味二筋を七本匂つて居る姿だから黒の損たるや明白である。

第七圖



▲第八圖

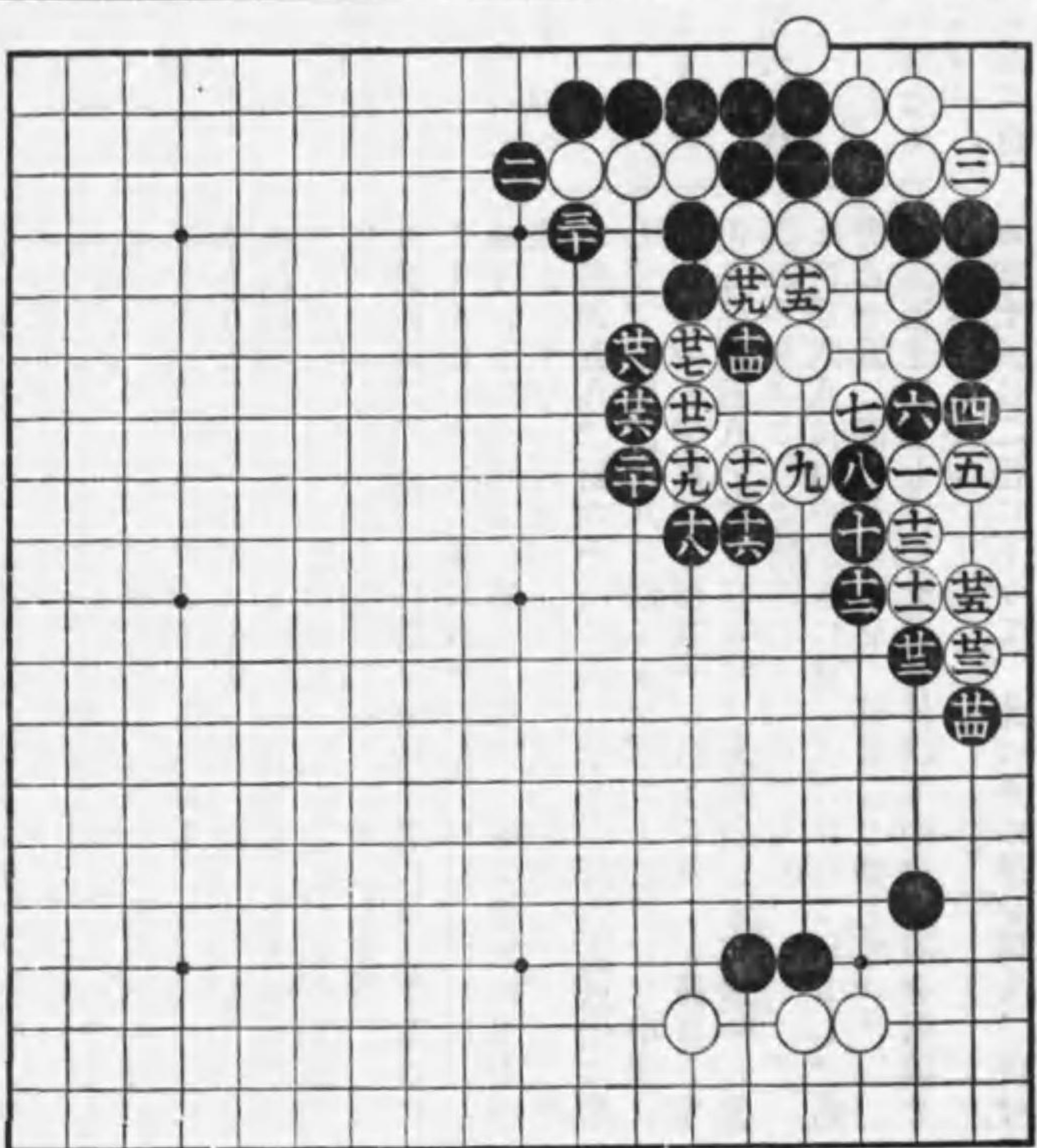
白十四の變化。第一圖より第七圖までは十四の手で十六の處を截つた變化を示したのであるが、圖の如く單に十四に行びる結果はドウカと云ふに、左すれば黒に十五と約えられる。此手に困る。ココで白が假に十六に截るとすれば圖の如く十九と取られる。斯うなると白は先づイに截り黒口、白ホ、黒へ、白ト、黒チ、白リ、黒又となる。白の最初の作戦計畫は隅の白を捨て、上を塗付けやうと云ふに在つたものが、黒に外部に發展されては白の計畫が根底から崩れて了ふ。本圖の手順中白十八の手でへに約ゆると黒ヲに押し、白ワの時力に置かれて取られて了ふ。孰れにしても白の方が面白くないから前の如く十四と先きに截らなくてはイカヌ。



第八圖

▲第九圖

白一悪し。本圖は第六圖に於ける白八の變化で、一と飛びたいやうな所であるが、圖の如く下邊に黒の備えが三着あつては勿論の事、之れが無くてもイカヌ。理論から云つても單に六の所へ行びて居る方が堅固で、黒を厳しく壓迫して居る丈け宜い。併し此變化は中々六かしい。



第九圖

附録 著者實戰第一局

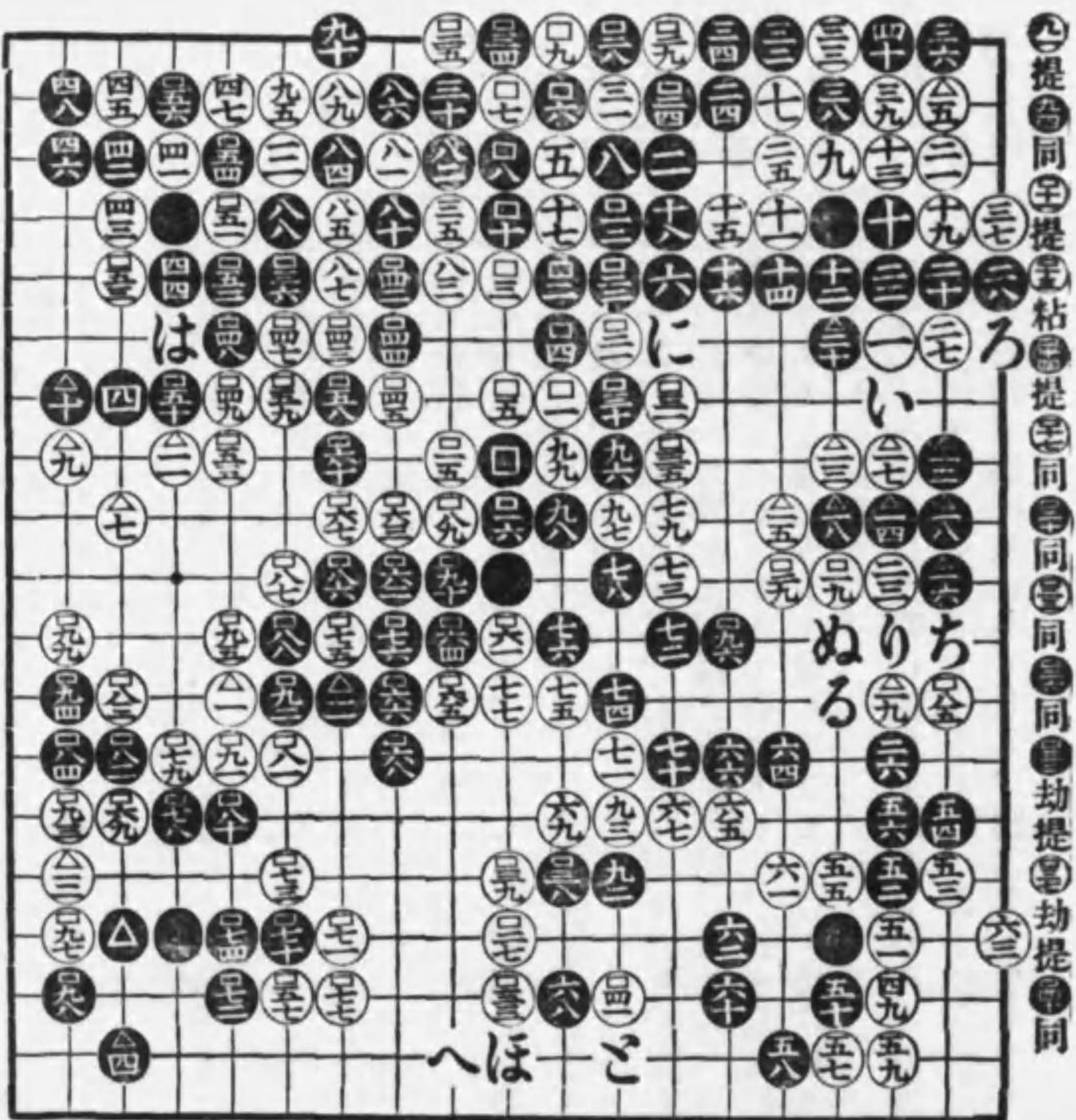
七段 野澤 竹朝述

五子九日勝 野澤 石 買

▲黒六は先づ十に締り、第一位點たる隅を固むるを普通にして可とす。
 ▲黒八は二五に尖み附け、白十三ならば二四に押へ込み、白十の時八一に打込む可とす。
 ▲十二如何、二百二十に頂ける方姿なり。
 ▲黒十八、同じくは二四の尖み頂けを先きにするべし
 ▲黒二二はいに頂け、白二七にせば二百二十に押へ込むを姿とす。
 ▲黒二八緩し、ろに勿ねざるべからず。
 ▲黒三十は事を好むもの、中腹百三五に備ふる等、普通ならん。
 ▲白六一如何、上隅二百五に劫を迫り、黒三八の時六一に伸びて劫を争ふべき機會ならん。
 ▲黒八十の著面白し。
 ▲黒八八悪し、直に百六に載る手段を施すべきなり
 ▲白百三悪し、百十に粘いで忍ばざるべからず。
 ▲黒百六佳著なり、只惜むらくは前著百四に於て直に爰に出なば、更に面白かりしに百四、百五の交換

に、百十五の先手勿ねを啖ふ損害を招きたる後なりしは憾しかりし。
 ▲白百二十七緩し、はに打つて他迄劫を争ふべきなりし、但し白百二十七は圖の如く百三三に約へ込んで、尙此黒に活あるを見損じたるに依る。
 ▲黒百三三は一旦に打抜きたる後にすべし。
 ▲黒百三八は駄目詰りにて、自から活を失ふもの、劫に係はる事なくほに勿ね、白へ黒と打つて活を保つべきもの、然らば勝敗爰に決せしなり。
 ▲黒百四二、百四四は累を中側の黒に及ばすものにして面白からず、單に八一に粘ぐべし。
 ▲黒百五六、善悪は姑らく措いて味を皆無にする心地よき手なりし。
 ▲黒百五八、百六十は打過ぎなり。白の百五七に應じて、一應百七八に備ふるを穩かとし、若し中側に就くものとすれば、百六一に活きに就くを確實とす但し黒百五八と載りたるは、此際白より百六一に當込む手筋あるに心附かざりし失ならん。
 ▲黒百六八は白の堅きに就くものにして危ふし、此際百七五に眼形を作すを、確實なる姿とす。
 ▲黒百七十二悪し、百七三に伸びて中央大石を保護せざるべからず。
 ▲百七八は二百に下りて、先づ隅の活を保ち、併せて累を大石に及ばさる方針に出づるを可とす。

△白百八五は百九三に押へ込み、黒百九一ならば百九二に出で、黒百八五白ち黒り白ぬ黒るとなる時、二百十九に劫を争ふ可とす。
 △白二百一十一は二百十二に備ふべし
 ▲黒二百十二は白の不備を衝いて、一著其地域を粉碎し、依りて大勝を收めたるもの敬服の外無し。
 【總評】 本局は之を要するに、終始齊力の争ひにて一貫したるもの、置碁として大體黒の不利とする局面なりしが而も黒奮闘宜く努め、就中八十、百六、百五六等に佳著を出し最後に白二百一十一の虚を衝いて、二百十二に妙著を下し、依りて確實に九目の勝を得たるもの、又以て佳觀とすべきなり。



●粘会劫提会粘

二百廿手下略

第二局

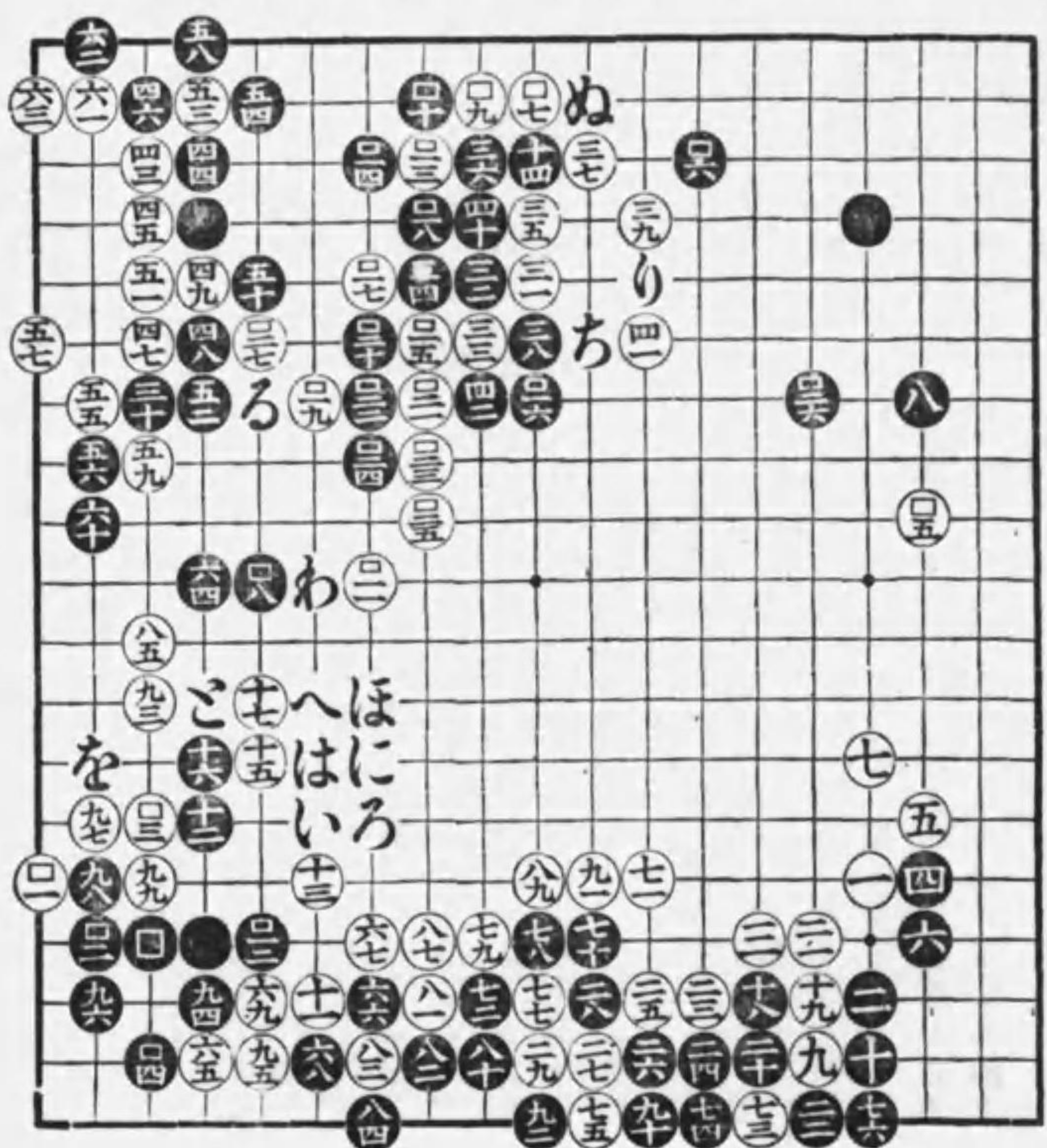
中押勝 野澤竹朝
三子 芳川寛治

▲十四は關係はづれなり、いに頂け白ならはばに伸び、以下白に黒は白へ黒と打つて戦ふべきなり。
 ▲十六は九三に應じ置くを穩かとす、中腹の形勢を重厚ならしめざればなり。
 ▲十八、着眼悪し、爰は種々の味ある所なれば姑く見合せ、八五に應じ置くを普通とす。
 ▲三十は、尙ほ八五に應すべく、爰を手抜するとならば、上側三一に構へるを普通とせん。
 ▲三五、面白からず直に三七に頂け打つべきなり。
 ▲黒四十は三四の一著を悪化するもの、手強くちに伸び打ば白應手に苦しみしなり。即ち白四二に出んか、黒はりに尖み附けて打つべく、又白四十に突出して百十三に截らば、ぬに綽ねて打てばなり。
 △五三以下五七輕卒なり尋常に六一に打つて活に就かざる可らず。
 ▲五八は外部の截り手を慮りての著なるも、若し之を斷然六一の伸びに換へなば、白百二七に截るもるに押打ちて此白に凌ぎ無く、勝敗夙く爰に決せしに

黒此の好機を逸し、白をして五九に截りを入るゝ志を得せしめたるは遺憾なりし。
 ▲六四、味残りにて悪し、八五に構ふべし。
 ▲六六、六八は、手筋なれども時機にあらず、白の六五に應じて一旦とに固め居る處なり。
 △七九、粗忽も亦甚し、八十に曲るべきや論なきなり。
 ▲八十佳著なり。
 △八九、九一、時機にあらず、八三の劫提りを含むで直に九三に竝ふべし。
 ▲九六面白からず、をに打つて凌ぐべし。
 △九七悪し、一步を進めて、九八に打てば黒之を凌ぐに困難を覺へしならん。
 ▲百八緩し、わに飛ぶべし。
 ▲百十二、岐路を辿りて、忽然敗を招きたり、若し之を白百十一に應じて、百十五に打抜き居らんか黒の勝勢動かすべからざるものありしに、百十五と行出す手あるを思はずして遂に挫折せしは、黒に取りて残念なる局面なりし。

〔總評〕 本局は黒十四に碁機を逸し、十八に失著を出し、三十に當を得ざるものあり、四十に退嬰の著を下したる等の失はありしも、四二迄となりて未

だ三子の優勢は之を失わざりしに、五八に勝機を逸し、六六、六八に事を早まり、黒の形勢危ふからんとせしが、此時に當り白七九に失し次いで八九、九一に未だ機にあらざるの著を下し、續いて黒九六の失に乗せざりし等、頻々たる白の失策は忽ちにして黒に勢を復せしめ、白百十一と打たるに際しては、黒十分の形勢たりしに、黒爰に於いて百十二の失著を下し、遂に勝敗を顛倒を見る事とはなりたり。



第三局

中押勝 六千 野澤竹朝
鶴飼有聲

▲黒十二、此場合にては仔細なけれど、直に十四に押へ込むを定石とす。黒十四は十六に尖み頂け、白十八に伸びなば其時十四に押へ込むべし、七の白を重からしむる利あり。黒二四は此際二五に押ふるを穩かすとす、黒二六は二七に伸び、白二六黒三三白三二となる時、右上隅に勿ねるを確實とす。

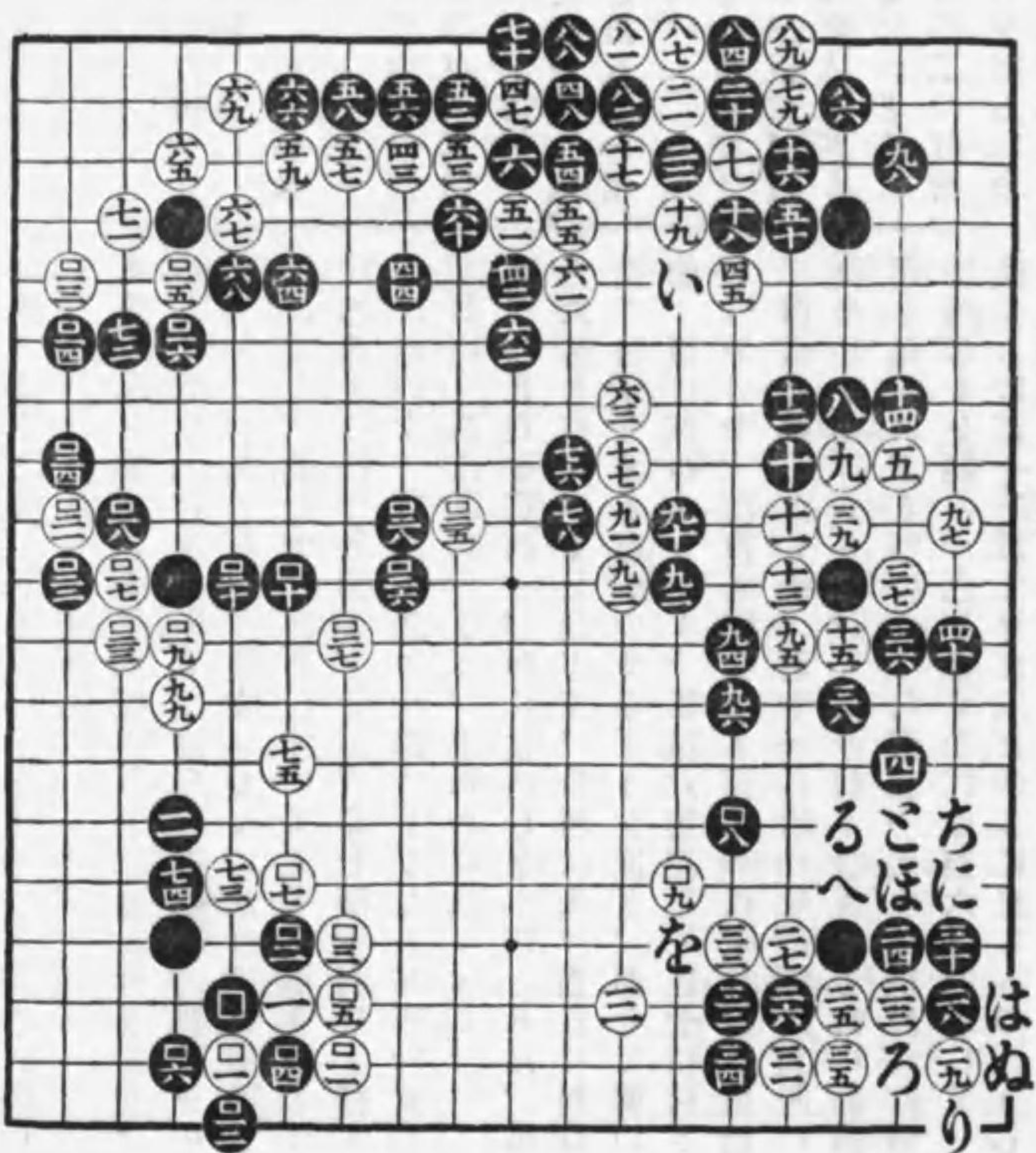
▲黒二八、三十の趣向悪し、一旦二六と押へ込みたる上は、之を三一に下つて戦はざるべからず。然らば白三十黒二八、白一九、黒ろ白は黒三五白二八の粘ぎとなる時、にに押へ白ほに截らばへに出で、白と黒ちと打つて闘ふべし。黒一見危ふきが如くなれど、隅に於いてりに勿ね、ぬに劫を打つ手段残り居れば、此役黒の大勝に歸すべきなり、但し黒ちの手にてるに押へ、白ちの時三八に頂けて打つもあり、然るに圖の如く戦端を開きし二六の味方をミス／＼敵手に

委したるは無慘なりし。

▲黒三六の意匠緩し、爰に於いても尙ほいに勿ねるを可とす、此處の勿ねは白の急所たればなり、黒四八は七の劫を粘ぐを堅固とす。黒五二の手段重し。六十に當て、白五四黒五五白五二となる時に截るべきなり、黒六六悪し、六七に引くべきなり、黒七十堅固の手なれど本來は八十に當込むを嚴しとす。

▲黒七六、七八は、九十に打つを姿とすれども三二に劫を提り居りて充分なり。黒八四は見損ならん、右下隅をに劫立すれば白窮せん、黒九十より九六迄如何、單に九八に守るを可とせん、黒百以下百十迄「但し百八を除く」の運び大いに宜しく、之にて黒の勝勢動かすべからざるものとなりたり。

▲黒百二六、百二八は良著なりし、曩に百より百十迄の好手順に出られたる白は、今は待む處、繋つて中原の成敗如何にありしに、黒應答を誤らずして圖の如く、百二六、百二八の佳手に出でたるより、以下白如何に奮戦するも、五目以上の敗は免かれざる形勢となり、爰に一局を放了せしめたるは御手柄と云ふべきなり。



劫トル 同穴同穴

第四局

三子 野澤竹朝
城田精之

▲黒十はいに據るを更に優れりとす、敵に迫り兼ねて陣地を固むる二様の働きあればなり。

▲黒十八、普通なれど他にも策あり、此際六十に頂け白十八黒ろ白は黒百三三白に黒六四と運び、其時白ほならばへに當て、白とに粘ば二十に掛けるべく又白二二に粘がばちに押して可なり、更に白ほに抱へる手を二二に伸びなばりに沿ひ、白と黒五五と頂けて打つ意匠に據るも亦可ならずとせず。

▲黒二二は重復なり、五六に伸び進まざる可らず。黒二六、二八手筋に似たれど尙ほ尋常に三五に練ねて打つを宜しとす。黒三十悪し、三五に當込まざる可らず、之を失して姿を損ふ、黒三八姿なれどぬに下つて敵に響きを與ふる方可ならん。黒四二の打捨は手筋なり。黒五八は一著百三三へ頂けを試むべき機会なり。黒六十は左右の味を失ふもの打ざるに如

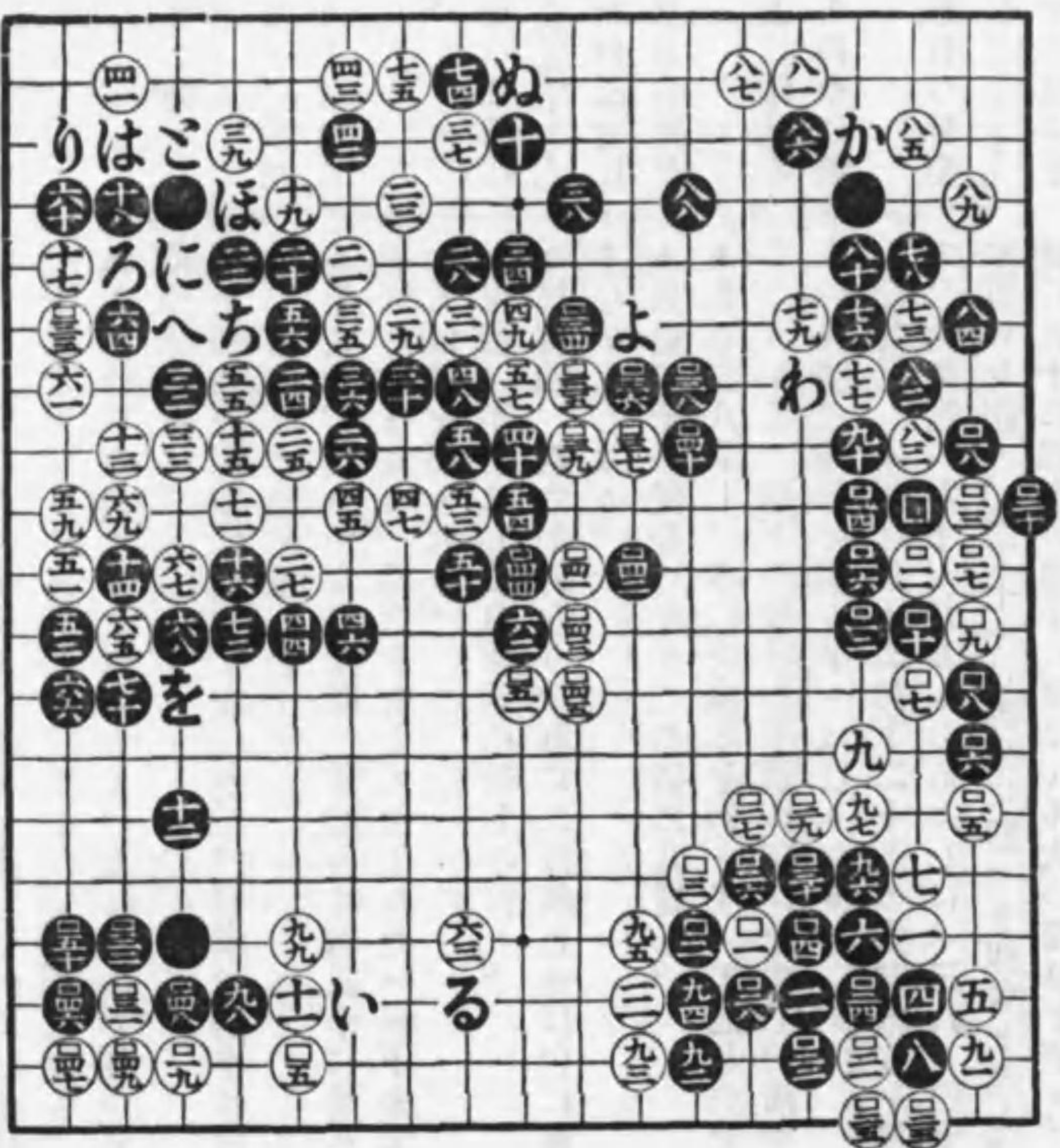
かず。黒六二緩し下側るに打込むべし。黒之を怠りて三子の効力漸やく減退せんとす。

▲黒六四、要なき手なり右側百十に迫るべきなり。然るに黒斯く枝葉に馳せ、結局して七二に後手を引き、白に七三と右側へ先鞭さるゝに及むで形勢殆ど黒に危し。黒七十如何をに伸びて先手を取り而して前述百十に打つを働きとせん。黒七四不利なり打ざるに如かず。白八一之を八四に下るもあり利害果して如何。黒八二志少なり、上部わに截るべし。

▲白八九利を貪れり、かに當込むを本来とせん。黒九六悪し打たざるを是とす、黒百は先づ百五に刎ね捨て白よりする百五の先手下りを凌ぎ、而して圖の如く百に打つべきなり。黒百六無理なり百七に詰さるべからず。白百九輕卒なり百二一に附け以下黒百二四迄交換したる後、百十一に附けなば勝敗立所に決せしなり。さりながら圖の如くなりても尙ほ黒損害を免がれざる姿にて、白百三一迄の結果黒の敗形歴然たるを觀る。之を要するに黒百六は敗著にて、換ふるに百七を以てせば未だ争ふに足るものありしならん。

追評 白百三三事少なりよに飛ぶべし、之を失して勝を減じたり。

〔總評〕 本局は黒勢頭に二二、三十に失して形を損じたるも、以下黒善戦して五八迄に稍々形勢を回復せしが、此時に當りて六二に緩着を下し、次いで六四に錯り、然して右側の戦にあつては八二に事を誤り、次いで九六、百に手順を失せしたため、此時既に局勢白に有利の觀を呈したり。されど若し百六に換ふるに百七を以てせば未だ三子の効力潜在するものあれば尙ほ勝敗を争ふに足るものありしに、黒之をしも失して破れたるは是非なかりし。



第五局

七子一目勝 野澤 新竹 朝

▲黒八、十は中の置石重復となれば如何なり。攻勢を取りていに打込み、白ろに尖まばは若しくばに迫り打つを厳しとす。

▲黒十二以下二十迄の手段機宜を得たり。

▲黒二二、不可なるにあらざれど本来を云へばほに掛け、白百二四黒へと運ぶを一層働きある措置とす。

▲黒三六緩し、とに押へて戦ふべし、其時白三七に刎ねなば三九に抑へ、白ち黒三八白三六黒り白ぬ黒る白を黒わと打つべきなり。

▲黒三八、四十俗調にして面白からず、とに當込み白百三四黒か白ち黒百三八と運び、而して四十に割込んでるに頂ける手を狙ふべし。

▲黒五十、重くして筋違ひなり、七三に飛打つを委とす。黒五六は單に五八に飛び置くを紛れなしとす。

▲黒五八は一旦六二に刎ね、白六五黒七一と運ぶを

委とす。黒六八佳著なり、黒七十悪し七一に粘ぎ白七十黒よと打てば白窮せん。黒七四、七六佳なり。▲黒八十は左邊の味を保留して、たに刎ねて打つを趣きありとす。

▲黒八二は定法に随つてたに刎ね、自家の圍中に向けて白を追込むを正しとす。

▲黒九十、面白からず此際一路控へて百三十に備へる固むべきなり。黒之を失して白より九一以下多大なる侵略を被りたり。

▲黒百、手筋にして白應手に苦しみたり。

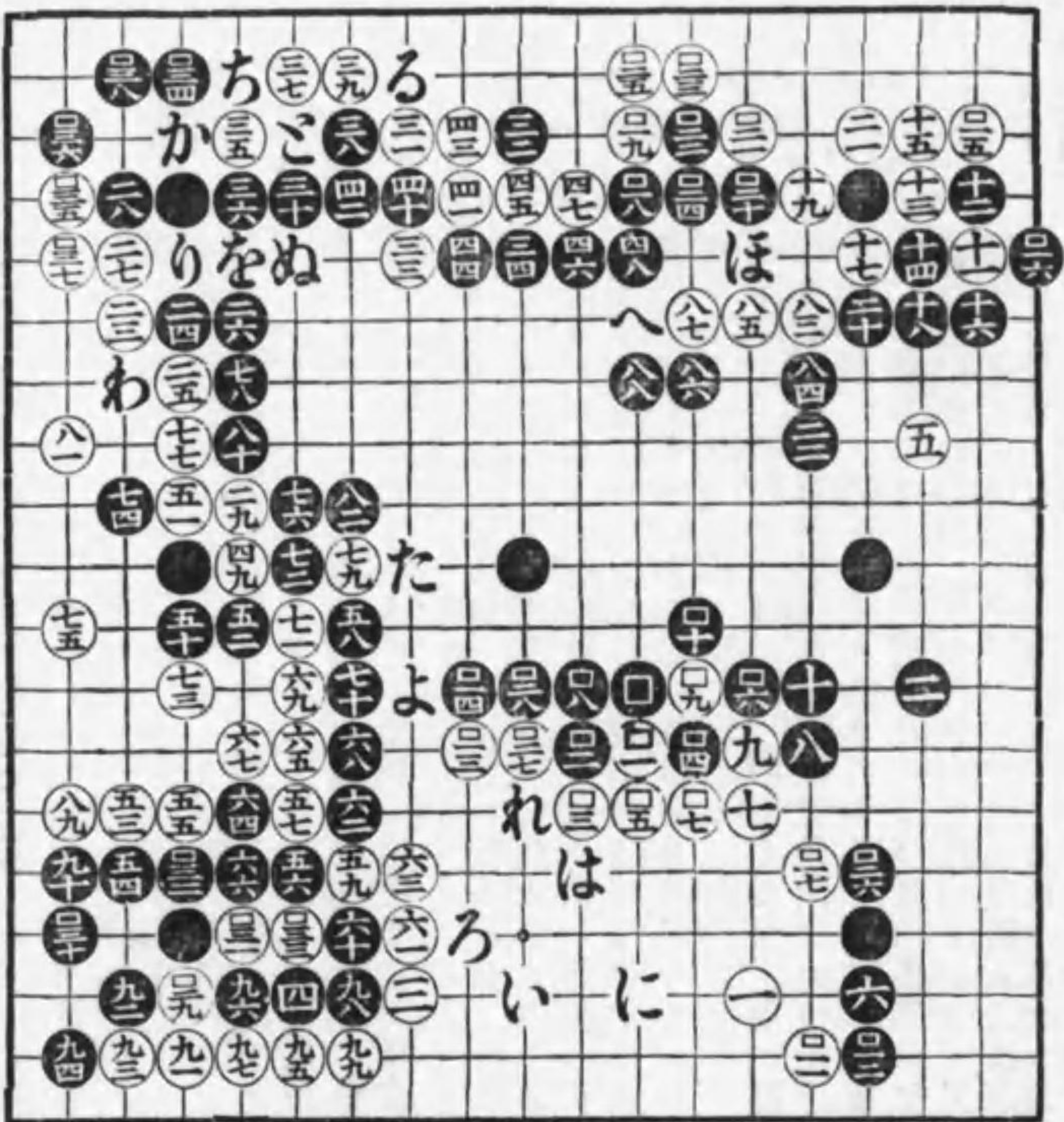
▲黒百四、百六如何なり、れに二段刎ねせば白に應手なかりしなり。

▲黒百二十の侵分可なり。黒百二八緩し。

▲黒百三八悪し、ちに突張るを利とす、黒之を失せしよりして、以下の侵分の手順に狂ひを生じ、漸やく一目勝の終局を観る事とはなりたり。

〔總評〕 本局は黒十二以下二十迄の策戦機宜を得て、大勢既に定まりたるものありしに、三八、四十に策戦を誤り、次で七十に即坐に勝べき機会を逸し。更に九十に輕卒の應手に出で、多大の侵略を被り。

百に好著を出せしも百四に誤りて効果を失ひ。更に最後の百三八に失して勝敗殆ど危かりしに、而も尙ほ一目の勝を保留したる事は、當初十二より二十迄の一戦にて殆ど大勢を確定せしめたる効果に因るもの與つて力あれど、更に仔細に之を觀れば、中盤黒苦戦に陥りし際七四、七六の英斷に出で、中腹の形勢を收め、次いで百に良著を下したる事、白の致命傷にして、依りて終局の勝を全うするの効を奏せしなり。



第六局

於府下中野芳川伯別邸

合評

先番 持碁 野澤源吉(五段)

互先 持碁 野澤竹朝(五段)

▲關曰く 黒七は右上隅二三に據り、白百三八黒いと打つべく十一は右下隅ろに懸るを普通とし、爰を打つとすれば三八に尖むのであつた。續いて黒十七は隅に百九二に尖み頂ける手があるから急がぬ、少々半間ではあるが、之は三十に拆いて居るのであつた。白に十八と打れて何んたか急に碁が廣くなつた様な感じがした。二五は打過ぎで矢張りには飛んで居るのであつた。實は二六は筋違ひだからマサカと思つて打つたのだが、實際二六に尖み出されて見ると打つ手に困つた。黒二七、白二八は意外であつた。斯うと知つたならば爰でも尙ほに飛んで居る方が宜かつたかも知れぬ。三一と打つたものだから、百十八に赶るれるのがイヤさに次に三三に斜走したが、白に三四と尖み込まれてドウも悪かつた。三一の時も三三も、矢張りには飛んで居るのであつた。三七は一旦四二に押す方が宜さそうであつた。三七は一旦四二に押す方が宜さそうであつた。三七は一旦四二に押す方が宜さそうであつた。

に縛ねて打のであつた。譜の如く四八の縛ね迄利かされた上に、五十に當られ、ソウして五三に補はねばならぬに至つては散々の譯であつた。▲野澤曰く五四は百十四に粘ぎ、黒百十五白百十六と遣つて居るのであつた。只斯うするよりも圖の五四に頂ける方、一層事が速からうと思つたのと、黒に八一と打つて來らるゝ手筋をウカワして居たので、此疵があつた。▲關曰く 七七、七九は時期でなかつた、斯うして七八、八十と白に勢を得せしめた結果後白七七、七九は打ないで直に八一に白を衝くのであつた。▲野澤曰く 百十は何とかモウ少し此黒のイヂメやうがあつたかも知れぬ。百四二は手拍子で大いに味を悪くした。百四四は少々打過ぎかも知れぬ、確かなことを言へば、にに縛ねるにあつたらう。

▲關曰く 百四七はほに打つのであつた。白に百四八と截つて大石を棄られる事に氣付かなかつた。

▲野澤曰く 百五二は大輕卒の手で一度に碁を負けにして仕舞つた、之を百七八に並び黒百五二にせば百五五を謂へば百七七に粘ぎ、黒へ白百五三黒百五實なるを謂へば百七七に粘ぎ、黒へ白百五三黒百五二白と黒ちとなる時、右に取截つて矢張り宜かつ

たのであつた。

▲關曰く 百六一はをに截り、白百六二黒百六四白百六八となる時、百七九に懸粘で居るのであつた。百六九は尙百七九に懸粘で居ねばならぬ處であつた。▲野澤曰く 百七四、又候輕卒であつた、斯う打つたのでは譜に於ける、持碁にもならないのであつたのは、吾れながら笑止の至りである。之を百七九に尖めば黒閉口したのであつた。▲關曰く 百八五は勝敗には關しないが、矢張り百八六に突張る方が宜かつた。百九五に輕卒であつた。之を百九六に出で白わと交換した後、百九五に粘で居れば、次にかに當て白若しよに粘かばたに截り、以下ら迄の符號順の手が残るから宜いのであつた。一體本局は黒の石立が悪く、白四四でモウおかしくなつた處へ、四九に惡手を打つたので、モウ碁は不可なかつたのであるが、白が百五二に見損じたのは、寧ろ僥倖であつた。

▲提、●提、●粘、●●、●●の所 百九十六手以下略



第七局

於鎌倉芳川伯別邸

合評

先番 中押勝 野澤源 朝吉(五段)

▲關曰く 白二は黒に三と縮られて、配置に幾分不利を來す事は萬更知らぬでは無いが、只趣向として試みたのである。白六は爰で左上隅に縮り、黒六白九と兩縮りで打うか、又は高く二二へ懸つて打うかとも考へたが、二と打つた時の腹案通りに六と懸つたのである。而し本來を云へば黒に七と懸られた時二、六の位置が共に低い爲めに黒より上下から懸け倒されるを防ぐべく、左側に一著を補はねばならぬから、手本にされては困る布石である、續いて八は型を避ける意味に於て試みた手であるが、同じく左上隅に補ふとすれば、矢張りろに尖む方が宜かつた。

▲野澤曰く 黒十一、手としては普通であるが、全體の配置上から謂つて、今直に爰に就いたのは等閑りと云はねばならぬ、一旦はに飛び、白にと交換して飽迄五、七の著意を繼いで白の左側一帯を低位ならしめ、而して十一に挟むのであつた。黒不注意にも見易き此打著を怠つた爲に、後白に二十に頂けら

るゝに及んで、頓に左側の形勢を善化せしめた。

▲關曰く 白十二以下十六迄、白として手堅きに失する型を採り、次いで十八に懸け棄てに出た意匠は面白く無かつた。單に二十に頂けるか、或は他の趣向を探るべきであつた。實は白二六の時黒が二七の手を、定石であるから二九に沿ふであらう、然らば逆に三十と刎ね、黒三四白は黒百二四白へ黒と白ち黒り白ぬと塗り附けて、黒を礙らせて打うと云ふ注文であつたが、黒に二七と當られて、當てが外れた續いて三十は未だ前述の夢が覺めないでやつた仕事で、之は無論直に三四に突當らねばならないのであつた。

▲野澤曰く 黒三三は輕率千萬である。三四に突當り、白はの時に截つて打てば白は殆ど應手に窮したのであつた。實は白三十の手を三四に突當つたならば、圖の如く三五に打たうかとも考へて居たので同じ手順と心得てウカと三三に下つたのは、申譯の無い失策であつた。

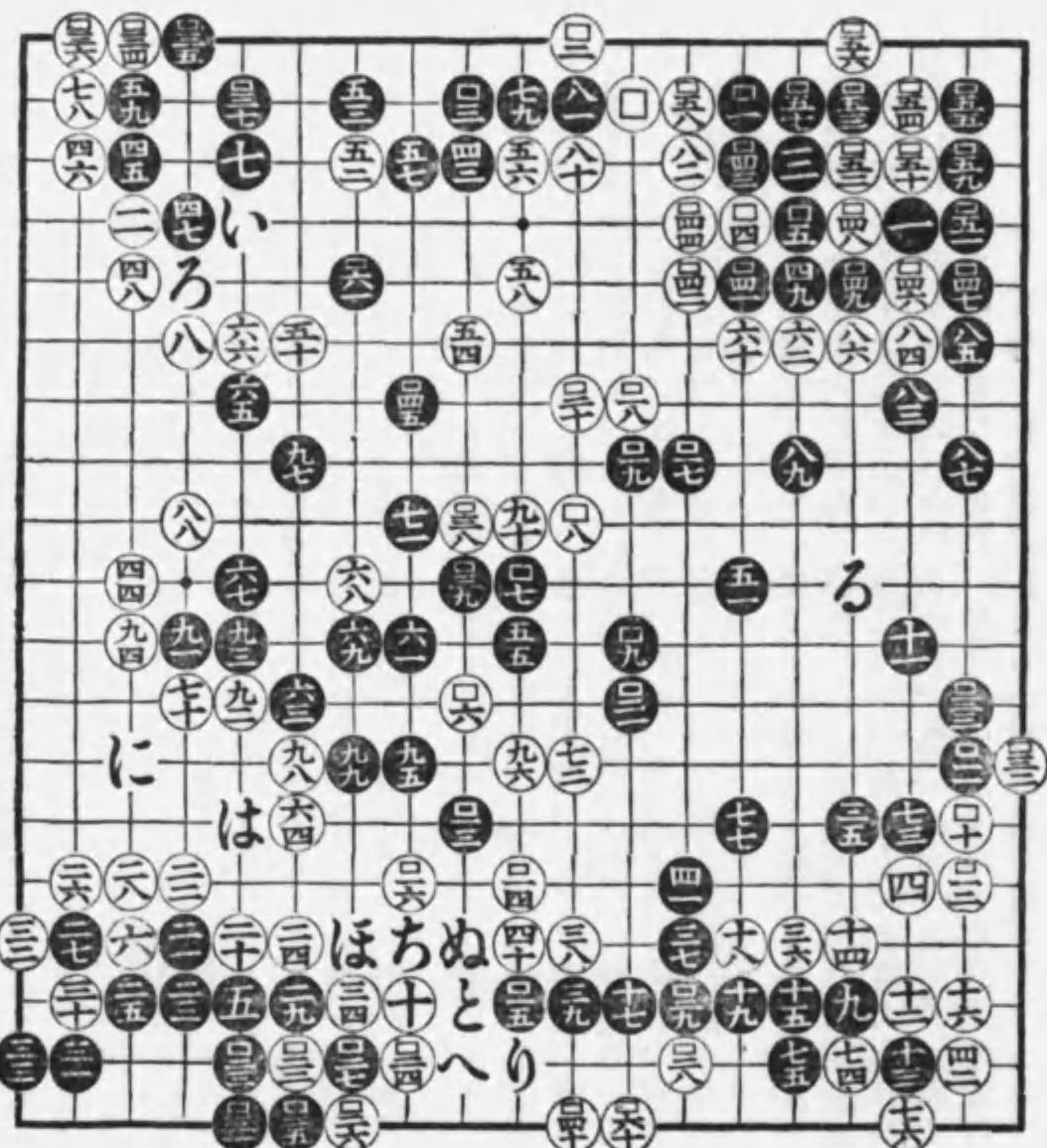
▲關曰く 白四二は此際緩著であつて、又本局の敗因であつた。無論左上隅五七邊に黒を攻て打つべきで之を失して黒に四三と、先鞭されたのでは、既に大勢に遅れを來したのであつた。續いて四四は低くもあれば、左下隅との釣合も重複の趣きで甚だ手緩い、爰を打とすれば高く八八に構へる事、圖に比し

て遙かに働きであつた。而も斯く備へる事は黒よりする四五、四七に頂け刎ねの利手も之を防ぎ得る意味も生づるのである。即ち此時黒尙四五四七と來たならば、白は四八と引く尋常に出でづ、五九に縛ねて振替る手段があるからである。白五十、次に五二の打込が黒に輕く五三と應せられて、白に良手段が無いとして見ると、五十の飛びは緩かつた。之を以ては兎も角右側肩を銜いて行くのであつた。黒に五一と圍せては大勢全く定まつた觀がある。

▲野澤曰く 黒五九は緩い、此石は何んでも無いのであるから、直に中央六一に飛んで居るべきである。

▲關曰く 白六十は一應六一に應じ黒九十に飛ぶ時、何とか手段を講ずべきである。然るに六十と打ち、黒に六一と手を抜かれては最早些の望み無く、尋常に勝を讓るの已む無きに終つたのである。

【總評】本局は之を要するに白四二に敗因を成し以下四四、五十四の緩手に因て大勢が定つたのである。



百六十一手終

第八局

於府下中野芳川伯別邸

合評

互先 先番 野關 澤源 竹朝 (五段)

野澤曰く 黒九は手堅い著ではあるが、矢張り右下隅三二に懸る方が働いて居た。

▲野澤曰く 白十二は趣向に出たものであつて、普通は之をいに四折すべきである。

▲關曰く 黒十三、斯う打つて白に十四と折かせるのは、後二二の頂けを利かされるから、斯著で餘程ろに詰やうかとも思つたが、さうすると白に十三、若しくはばいに折かれて十二の一著を働せる意味となるが嫌やさに、圖の如く打つたのである。

▲野澤曰く 白十六は虫の好い註文で不味かつた、直に二二に頂けて以下黒二九迄となる時、はに形勢を張るべきであつた。

▲關曰く 黒十九の受けは白の註文を行くものであり且つ甚だ緩かつた、此隅は棄て、置いて白に好手段の無い處であるから、に詰て斯隅の應答に換ふるか、又は全々應酬せずして右下隅様に飛んで居るのであつた。

▲關曰く 黒三一は六八に飛び、白百十八に飛ばば其時三一に打つ型に出づべきであつた、三五に突張つた時、白は事によると三九に粘ぐ型通りに來ないで、圖の如く三六に突張つて來はせぬかと心附いたが、案の條違つて來られて、始め三一と打た時の豫算に狂ひを生じた。

▲關曰く 黒四九は堅い處を飛ぶ手だから面白く無いと思はぬでは無かつたが矢張り悪かつた、兎に角六八に飛んで居ねばならなかつた、實は白が右側を其儘にして、圖の如く五十に打たうとは考へなかつた失である。

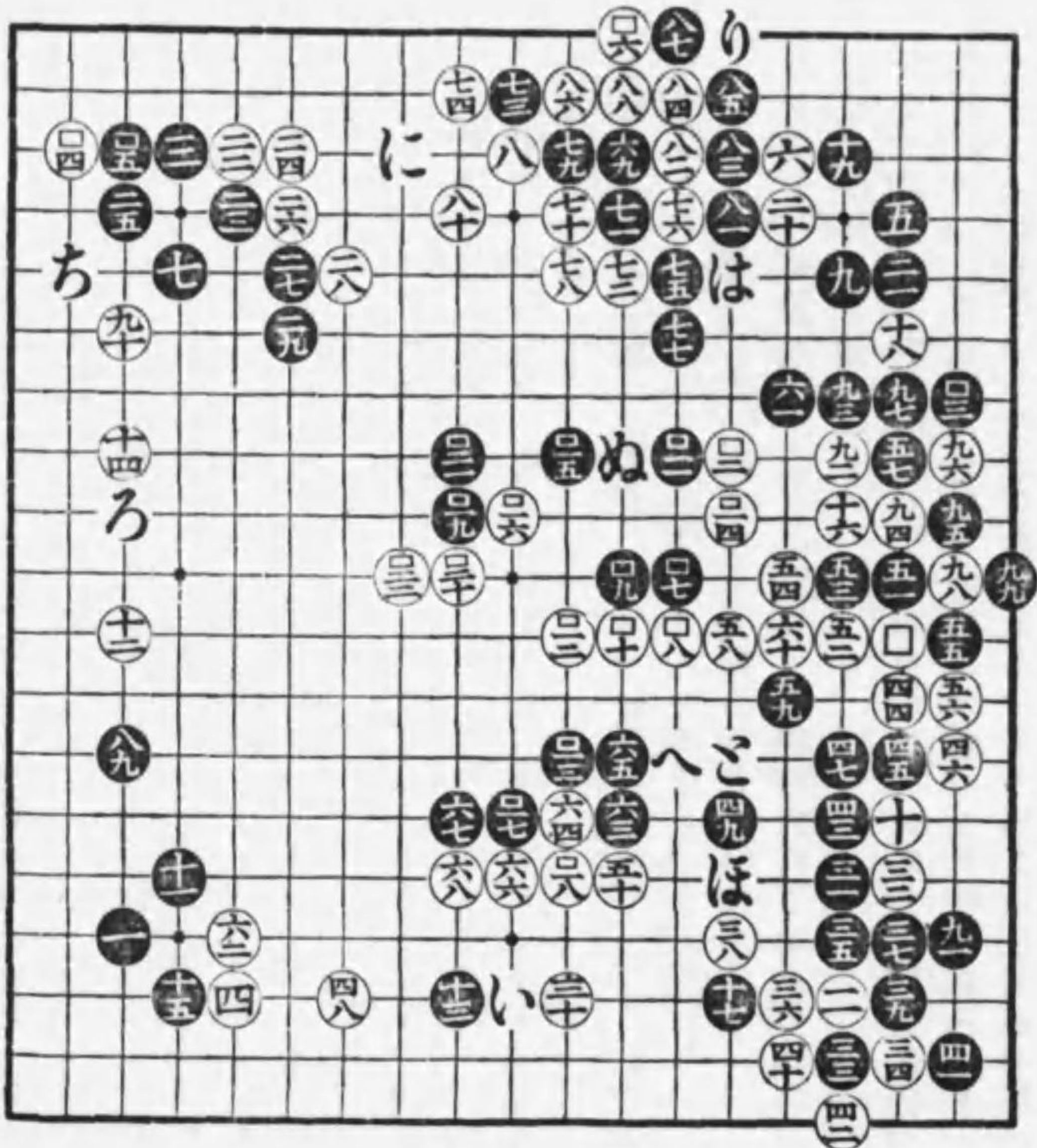
▲野澤曰く 白六二は甚だ等閑りであつた、一著へに攻を加へ、黒とに應じなば其時六二に伸びて白面白い局面である、然るに之を怠つて黒に六三、六五と頂け伸びせられ、爲に己むなく六六に補充の一著を費した隙に乗じて、六九と打込まれた結果、右上隅と右側との搦み姿を生じ、白頗る危険に陥つたのである。

▲關曰く 黒七一は工夫に過ぎて却つて悪かつた、之は七六に尖み、白はならば七二に尖んで徹頭徹尾上下の白を搦む含みに出で、而してに打ち込む機會を視らふべきであつた、然らば白大に所置に窮するるのであつたのに、黒之を失して以下八八迄の成行となつては、黒既に敗軍の形であつた。

▲關曰く 九一の下りは、白に九二以下百迄の手段あるに心付かない失である、斯著を以ては此際及ばぬ迄も、左上隅ちに辛抱して居るのであつた。

▲關曰く 黒百七、百九は急である兎に角りに粘いで棋壽を保つ方針を採るべきであつた、黒百十五は味の悪い手で不可なかつた、勝敗は兎に角として、ぬに並んで居ねばならぬのであつた。

【總評】 本局は黒勢頭十九に失して割を喰ひ、次いで三一に不用意の舉に出で、幾分形勢を損ひ、續いて四九に失したので、六一迄となつて黒已に香ばしからぬ形勢となつたのである、併しながら白六二の失に乗じて、六九に打込んだ際、七一を七六に尖むで居れば、まだ黒有望の局勢であつたが、黒此大事を誤つては、最早黒に見込み無き局面となつた、之に依つて觀ると黒七一は實に本局に於ける敗著であつたのである。



粘

百二十二手終

第九局

中押勝 三子 橋野 澤本 竹生朝

△白九は趣向に出でたる著なれど、黒に十と尖まれば面白からず、九を以てはいに覗き、黒ろ白九となる型に出づるか、或は單純はに飛んで、黒の勢ひを緩ふする意匠に出づべし。

▲黒二十強手、普通は之を二一に粘ぎ、白二十黒にと打つにあり、而も軽く捌く意味としては、白十九に對してほに頂けるを手筋とせり。然るに黒は敢然二十と約へ込み来る、白得たりと二一に突破し、二三に曲り迫れば、黒更に二四の強手を發して反撃し白をして全く展息せしむ。

▲黒二八の伸びは、隅三子を勢援して白に迫りたるもの、次で三十に押へ、以下三四迄に隅を棄て、振替りの舉に出で、而も尙ほ隅に味を残す、斯くて此役、白寸毫の隙を得ずして終る。爰に於て黒者の力量を觀るべし。

▲黒三八は此形勢に在りても手重き手段、單に四十に抑ふるを穩かとする。されど一氣に白の根據を奪ひて、攻立んづ氣魄は之を觀るべし。

▲續いて黒四八亦可なり、白四三、四五と運び、更に四七に當て、捌きに出んとすれば、黒は白の四三四五の持込みを睨んで、四八に兵を收め、兼て白五一の綽に備ふ、斯くして本隅亦白些の乗する處なくして終る。

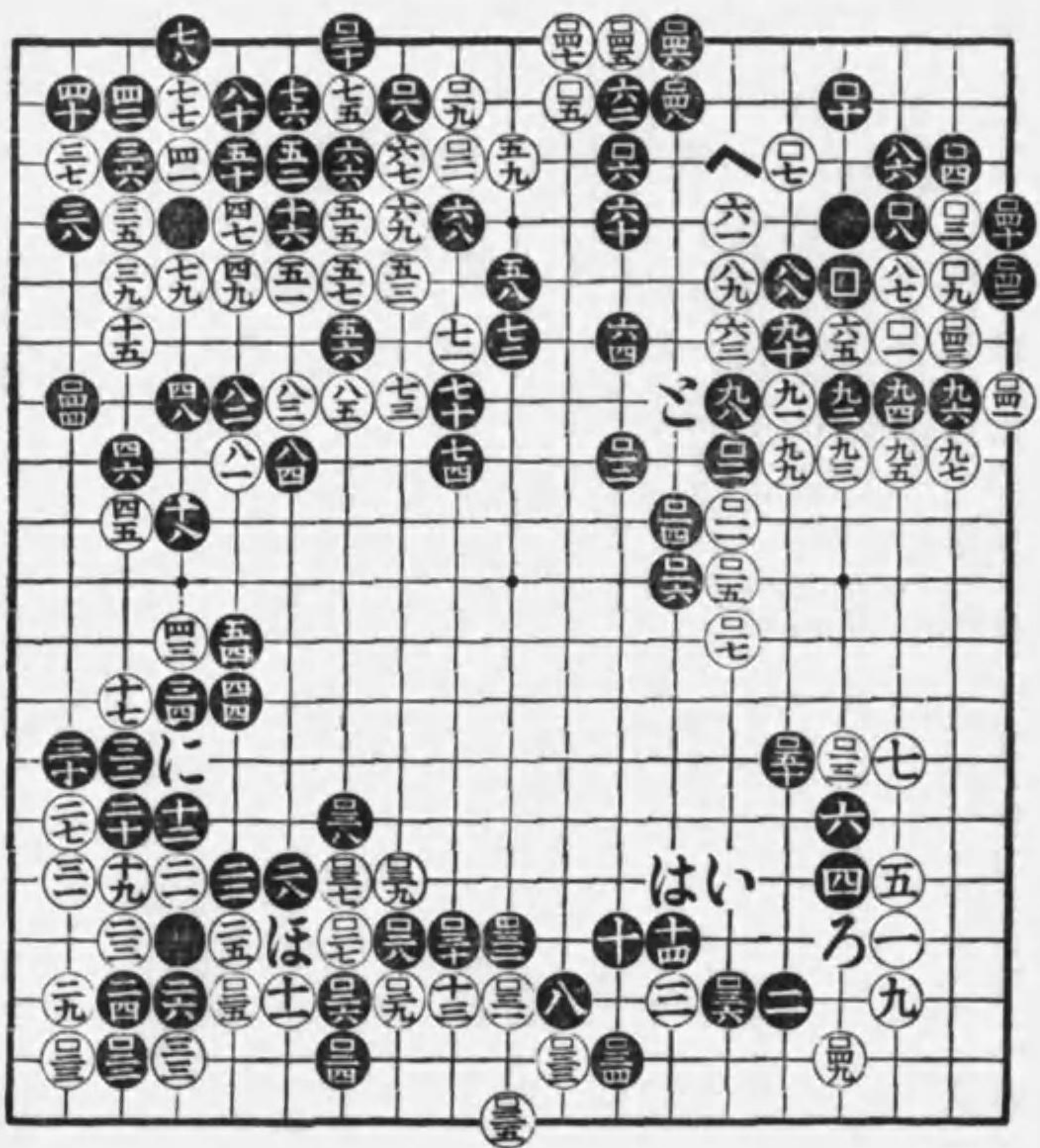
△白五一、五三は徒らに北ぐるものにあらず、機を見て五四に擡頭して死甲を還さんとするにあり、然るに黒夙くも之を察し五四に備へて白の謀を空しうせしむ。

▲黒五八は五九に打ち、白五八黒六十となるを普通とす。而も大上段に五八と掩撃し、白五九に打てば六十と横撃し来る、何等の意氣、何等の膽。

▲黒六二は形ちに急ぐ、單純百六に下切つてへの頂けを見るべし。

△白六五緩くして大事を誤る、此場合兎に角直接百に頂け黒八七ならば百八に截つて死戰を試みざるべからず、白之を緩ふせしより、黒に縦横の威を振は

しめ。期待する所を失ひて了れり。
〔追評〕白八一の際、唯一特みとする處は右上隅八六に先鞭するにあり而も黒夙に之を察し、八二に出で、八四に截り、白をして八五に屈するの已むなからしめ、而して一轉八六に備ふ、白又術、を施すに違まなきにあらずや。
△白八九は九十に粘ぐべき處、只及ばざるを知つて斯著に出でたる而已
▲黒九八は直ちに百に當るべし。
△白百一は之をとにすれば、敗數を減するの効はありたり。
▲黒百十二形ちに過ぐ、百十四に綽ねて可なり。
▲黒百三四惡し、ほに截るべし。



百五十手終

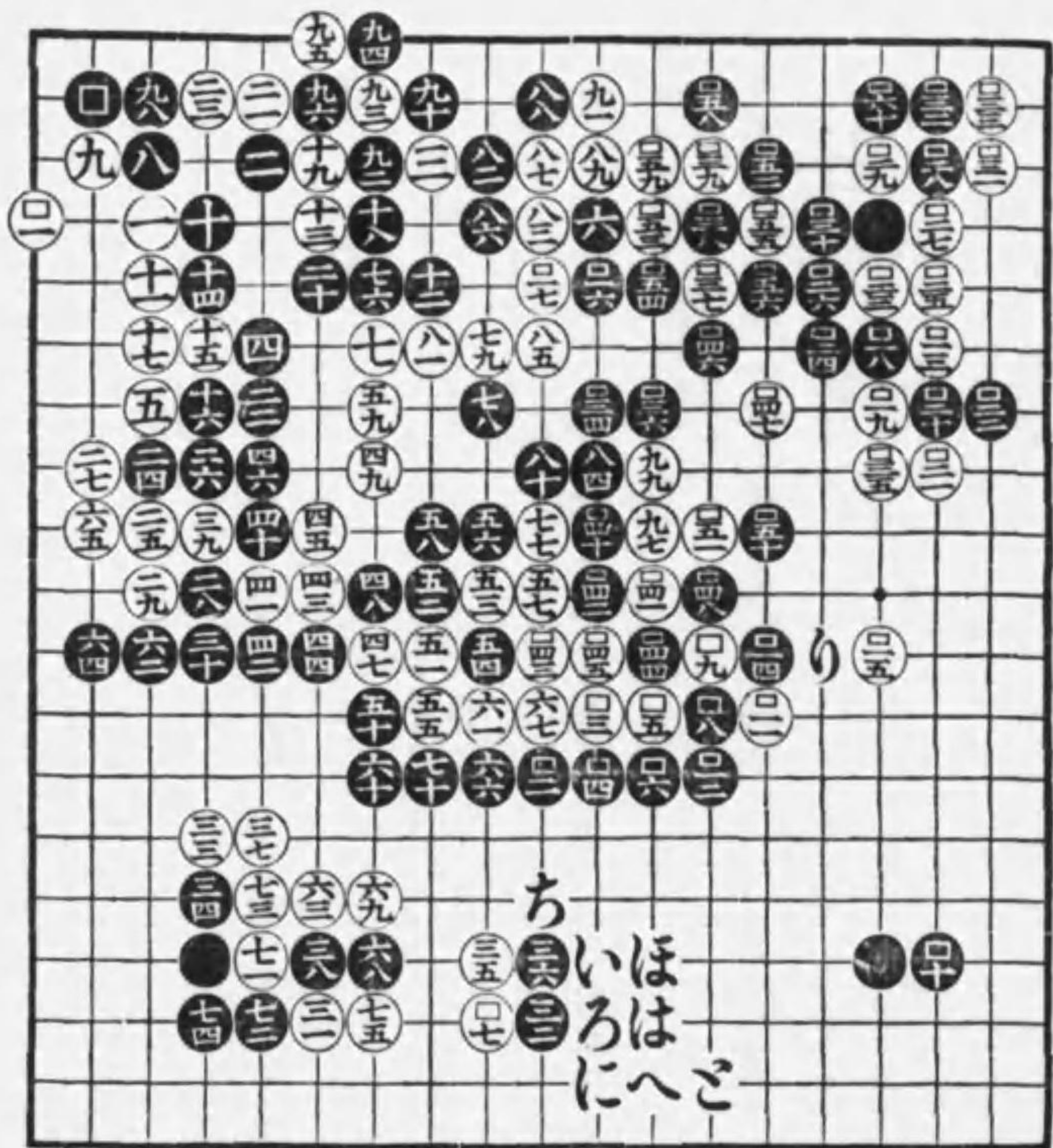
第十局

中押勝 三子 野 澤 本 竹 生 朝

▲黒六如何、八九若しくは八七と第三線の根據點より白に迫るを通過とす
 ▲黒十二は打過ぎなり、單純九八に下りて些の支障を見ず、此隅白二三迄の經過、黒失ふ所尠からず。
 ▲黒二四と約へ、白二五と頂けるや、二六に粘いで二八に掛け、白の先頭を壓して寸隙を與へざる處、其力量を見る。
 ▲黒三六は白の手段に陥りたる觀あり、之は左側六二に押へ込みて左側を固め、白三六黒い白ろ黒は白に黒ほ白へ黒と白百七となる時、三八に頂けて打つべし。然るに黒之を誤り、三九、四一の出截りを喫するに及んで、俄然混戦状態を呈せり。
 ▲黒四二は普通四五に伸び、白四二黒七二と打つべき處、然るに黒爰に出ずして、強硬四二、四四と連捺し來る其膽想ふ可し。
 ▲黒四八は強硬の佳著、或は尋常者の意量せざる處ならん。
 ▲黒六二、目下急忙の際に當つて悠々斯手に出づ、

沈着事に當つて動せざるを觀るべし。
 △白六三、策を枝葉に施して大事を錯る。若し之を百四三の打抜きに換へなば有望なる局面たりしに、之を失したるは遺憾千萬なり。
 ▲黒八二は虚形に捉はるゝもの甚だ悪し、此際八三に並ぶの應答に出でざる可らず、一局の興敗に關する重要な著なり。
 △白八三の頂けは淺慮に出でたるもの爲に絶好の機を逸す、之は黒の失に乗じて一著八四に勿ね、黒百三四白八五と運びて後にすべきもの、然らば黒立所に苦境に陥りしものを、反對にも黒に八四の良著に出でしめしたため、百四二の頂け如何にも嚴しきものとなり、白已むなく、直ちに九一、九三の劫に出づるに及んで、白の勢威頓に衰退せり。
 △白百七、之を敗著とす、斯著を以てはちに勿ねべき事論を俟たざる處、然らば此白結局して先手に活を保ち得れば、爰に一著の差を生じ、未だ争ふに足るものありしに、白輕卒にも百七と特に一著を補ふに及んで、最早挽回の餘地なし。
 △白百十三は、局勢非なるを見ての計らひ、りに備ふるを正著とす。
 ▲黒百十六と一著を利かせ、次で一轉百十八、百二十と頂け截りの舉に出でて爰に勢力を扶植し、而し

て百三四に中石の死兵を起し來る着眼、手法、共に敬服の外なし。
 ▲黒百四十妙著、爰を突出されては白凌ぐに道なし。
 前局所載の局面にては、懸瀑の棋風と部分の折衝に長せるを見るべく本局に在りては、大體戦に於ける經營と、其用兵の迅速なるを觀る。



●粘 ●粘

野澤竹朝全集目次

每冊凡百三十四頁
分賣定價各金壹圓貳拾錢

既成第一 科學的 實戰 互先布石正法

此の布石は其儘直ぐ實戦に使へる布石の正法にして初學者の爲めに新解されたるもの

既成第二 科學的 互先 一間夾正法

夾定石中の難、一間夾正法の特質、目的及び利害得失を懇切に詳解○附録著者實戦

近刊第三 科學的 實戰 置碁布石正法

九子、七子、五子、三子の各布石を實戦上より獲來れる活布石にして初學者の爲め科學的新解

近刊第四 科學的 互先 高目、目外、大斜正法

高目、目外、大斜各正法の特質、目的及び利害得失を懇切に科學的新解

續刊第五 科學的 死 活 正 法

死活の正法を科學的に新解されたるもの○附録實戦詳解

續刊第六 最新 碁戰評 の 評

著者が全力を傾注し碁界を驚倒せしめしものにて斯界に定評ある評の評

現代名大人家が全力を傾注せる模範碁書

本因坊秀榮 同 秀 哉 講評 版六	○ 現今 碁戰	本因坊方圍社瀧龍虎の對抗大棋戰にして現今の名家が心血を注ぎし模範	一、二各一百局 定價各金二圓
名人 本因坊秀哉講評	● 報知 爭霸名碁戰	二年有半に一度も五人抜きなき緊張戦附録には秀哉師の死活の妙手五十局	箱入 美 定價一圓八十錢
七段 雁金準一著	○ 秘傳 草薙の卷	置碁定石の奥義口傳を親切の叮嚀に講解せるもの實戦虎の卷の姉妹篇	美 定價一圓四十錢
七段 雁金準一著	● 新式圍碁秘傳改訂 實戰虎の卷	互先定石の奥義口傳を開放せるもの攻守の軍略攻防の定理ヲセテ等講解	箱入 美 定價一圓八十錢
名人 本因坊秀哉著	○ 口傳 手ぬきの卷	奇策縱横の裏を掻く手ぬきの口傳斯道革命の妙手説盡して餘蘊なし	美 定價一圓八十錢
八段 中川龜三郎著	● 圍碁 布石攻合法	布石の方法から攻防の手段及其變化更に進んでヨセの手順黑白の大勢迄六十餘局	全二冊 箱入 定價金二圓八十錢
八段 中川龜三郎著	○ 圍碁 布陣挑戰法	布石攻合法の續篇八十餘局ヨセの手順迄詳解法及び	全二冊 箱入 定價一圓八十錢
八段 中川龜三郎著	● 三子 新式布石講話	互先に亞いて廣地にして變化の多い二子局四十七局三子局三十二局	全二冊 箱入 定價一圓八十錢
七段 雁金準一著	○ 布石 置碁必勝法	置碁の本源四、五子局を陣立の方法攻防の手段及其變化ヨセの手順迄詳解法	全二冊 箱入 定價一圓八十錢
六段 小岸壯二著	● 自六子 上手の泣手	名人大家にも必勝容易なるやう六子局より九子局に至る各陣容法より接戦法詳解	定價一圓四十錢 送料六錢
七段 雁金準一著	○ 圍碁 虎之卷圖解	互先定石の圖解 行住座臥、一見明白 (願美本金一圓) (送料金四錢)	東斯文館發行

現代名人大家が全力を傾注せる模範棋書

七段 廣瀬平治郎著 版五 ○ 應用圍碁定石講義 著者多年の研究に成れる一 新界に定評ある實戦鬼手録 全二冊箱入 送料十八錢	七段 野澤竹朝著 版五 ● 定創大斜定石法 秀策師大斜秘傳を基礎とし 各著者の特質目的効用を明 快に説明せる新界唯一名著 全三冊箱入 送料十八錢	七段 瀨越憲作著 版二十 ○ 新圍碁はめ手 定石以外の奇計手段にて對 局せんとせば先づ本書にて依 りて其秘策を味ふべし 和製美本 送料十八錢	七段 鈴木爲次郎著 版和昭 ● 新圍碁全集 定石布石詰物便分打碁等圍 碁全般を網羅講解せる圍碁 百科全書 送料十八錢	中川准名人共著 版十 ○ 互先碁定石新法全 主要目次(置碁)大斜、頂挾、 外、互先、高懸、懸、目 外、小目、等 送料十八錢	七段 野澤竹朝著 版三十 ● 打碁と要領 圍碁一般の通則を圖解せし 加ふる打碁廿局も細解して 全二冊箱入 送料十八錢	七段 鈴木爲次郎著 版五 ○ 圍碁先手必勝法 先手必勝は名人なり、至難 創めて解決 全二冊箱入 送料十八錢	七段 瀨越憲作著 版六 ● 圍碁實力養成法 最近初學者の爲め實力養成 上缺く可らざる接戦の秘訣 を親切丁寧に講解 和製美本全一 送料十八錢	八段 雁金準一校著 版四 ○ 速成碁經衆妙 生死劫攻合盤追落夾續斷 至便なる死活速成法 送料十八錢	中川准名人共著 ● 秀甫全集 秀和、秀榮、秀策、松和、中川 岩崎、雄藏、小澤、正平、小林 奉策、服部、鶴岡、等三百局 全三冊箱入 送料十八錢
--	--	--	---	--	---	--	---	---	--

發行所 東京日本橋區吳服橋 大阪屋號 東京神田區南神保町九 振替東京二七七三番 (模範碁書) 斯文館

現代名人大家が全力を傾注せる模範棋書

七段 鈴木爲次郎著 版八 ○ 編創一週間速進法 碁の全然知らぬ人でも必ず 一週間内に圍碁が打てる法 並製碁石共一圓 送料十錢	七段 野澤竹朝著 版八 ● 圍碁獨習速成法 初學者又は方から碁を覚え やうとする方へ 送料十錢	七段 鈴木爲次郎著 版十 ○ 極意實典 互先碁定石 隅の定石にして置碁互先の 定石一般獨習早わかり 送料十錢	七段 鈴木爲次郎著 版三十 ● 碁中の定石 中央の置碁を保つのみなら ず隅の地をも活かす法 送料十錢	七段 鈴木爲次郎著 版七 ○ 極意實典 布碁 九目より四目に至る布石の 獨習早わかり 送料十錢	七段 鈴木爲次郎著 版七 ● 極意實典 布碁 九目局より先子局の著者實 戦を細解 送料十錢	七段 鈴木爲次郎著 版五 ○ 極意實典 打碁 至先子 送料十錢	名人 本因坊秀哉著 版五 ● 舊幕府御秘藏碁戰 新道の渴望せる御秘藏書を 初學者の爲に懇切に細解す 送料十錢	七段 瀨越憲作著 版十 ○ 圍碁襲撃戰法 敵陣を襲撃して之を突破す る戦法を創定 送料十錢	七段 廣瀬平治郎著 版十 ● 圍碁實戰講義 現代名士及現代花形碁客の 實戦に著者獨特の講解 箱入一圓六十錢 送料十八錢	七段 瀨越憲作著 版四 ○ 新圍碁爭覇戰 現代新圍碁客の血戦記に著 者精密に細解 送料十錢	四段 高橋清致著 版十 ● 圍碁勝敗此の一手 圍碁勝敗の魂たる極秘の一 手と其變化詳解 送料十錢	棋聖 村瀬秀甫著 ○ 圍碁方圓新法 自四目、至互先の布石及著 者の打碁 送料十八錢	七段 鈴木爲次郎著 版五 ● 圍碁戰術秘鍵 諸名士との對戦上に於ける 著者の戰術秘鍵を公開 送料十八錢	七段 鈴木爲次郎著 版五 ● 圍碁戰術秘鍵 諸名士との對戦上に於ける 著者の戰術秘鍵を公開 送料十八錢	昭和三十四年改訂四版 圍碁 死活研究 圍碁 死活研究 は隅の九目、中の八目、中、 六目の三つについて徹底的 解決 送料十八錢
---	---	--	--	---	---	--	--	---	--	---	--	---	---	---	---

發行所 東京日本橋區吳服橋 大阪屋號 東京神田區南神保町九 振替東京二七七三番 (模範碁書) 斯文館

七段野澤竹朝賞讃 四段増位九臯創作

忽ち 科學的 圍碁超ス。ピード上達法

五版 原理創定 置碁には從來の定石を全廢し、布石も戦争も一定不變の原理により頭腦を徒費せず簡単に處置し得て百戦百勝、一讀幾十倍の上達を期待し得らる、げに圍碁研究の維新革命と云ふべく、之により對局時間を短縮され更に大衆化せん、今や一讀三嘆の快報頻也

七段野澤竹朝賞讃 四段増位九臯創作

新刊 科學的 互先碁の合理化

時代は合理化を絶叫す、碁道もまた大悟して之に添はねばならぬ、著者は曩に圍碁の原理を創定して斯界を沸騰せしめ、今亦本書によりて變化極まりなき互先碁を簡明に合理化せしむ、其説やすべて前人未踏の創作に出で其理や一定不變の純道を極む、定石の疑問布石の混雜は豁然として開け、如何なる初學も一讀高段の着眼を習得せしむ、眞に碁壇悠久の貢獻である、苟にも本書を懷疑讀了せざる者は獨り碁道時流に取り殘さるを奈んせん。

七段鈴木爲次郎先生著

復興 極意 侵分。詰物

和裝美本全一冊 定價金壹圓貳拾錢

改訂版 寶典 卷三 侵分。詰物 侵分とは戦ひ終りて自己の地域を堅めると同時に敵の地域を侵して的確に其領域を區劃すべく勝敗に關する緊要なる手談を云ふ、本書は初學者の爲に平易に其の最善の手段を圖解せるもの、合卷せる詰物は實戰に現はれたる死活の妙手なれば何れも本書に據て最後の勝利を得られん事を(卷末著者無料直接教授券添付)

○寫碁 錄 美濃判和紙にして四十枚即ち八十頁 送料六錢 金壹圓 送料八錢
○碁 罫 紙 美濃判和紙百枚(即ち二百頁)

東京 斯文館發行

昭和六年六月十日印刷
昭和六年六月十六日發行

一間夾正法

定價金壹圓貳拾錢

著者 野澤竹朝

相續者 野澤慎一郎

發行者 武居勝治

東京府荏原郡入新井町新井宿千三百七十四番地

印刷者 高橋赤次郎

東京市京橋區新湊町五丁目一番地



發行所

東京市神田區南神保町九番地 振替東京二七七二三番

模範棋書 發行所 斯文館

發賣所

東京市日本橋區吳服橋二ノ一 振替東京一三七七五番

大阪屋號

終

